DB
2191
2005
HQ

筑波大学博士(文学)学位請求論文

江戸および明治期の洋語学における文法用語の比較研究

——和蘭語・英語・独逸語をめぐって——

岡田　和子

寄贈
岡田和子氏

06006704

謝辞

古いオランダ語の引用・和訳に関してご指導いただいた、明海大学の桜井隆先生と、Delft University の Maarten W. Gribnau 氏に、心から感謝申し上げます。

凡　　例

(1) 言語名の表記

和蘭語・独逸語・仏蘭西語のように漢字書きの場合は、江戸期から明治期にかけての各語学を指し、オランダ語・ドイツ語・フランス語のように片仮名表記の場合は現代における語学を意味する。同様の理由で、羅典(ラテン)語・希臘(ギリシヤ)語・欧羅巴(ヨーロッパ)語も漢字表記とする。しかし「サンスクリット語」は、「梵語」が馴染みが薄いので片仮名表記を使用した。

(2) 訳語の表記

術語として翻訳・著述文典の中に見出されるものは《　》で示し、原語があっても和訳されていないものは【　】を用いて区別した。これに対して、現代文法の用語は「　」で示した。

(3) 引用の表記

文献からの引用は＜＞で示した。本文で引用した蘭・英・独文典の原文に関しては、特に長い場合や参考に供したい場合は、巻末の APPENDIX にまとめた。和蘭語と独逸語には使用の便宜を考えて和訳を附した。和訳は、特に断りのない限りは筆者によるものである。

(4)引用文の下線・ルビ等も、原文・日本文を問わず、特に断りのない限りは筆者が附したものである。

目　次

謝辞　ii
凡例　iii
表およびグラフ一覧　viii
資料一覧　ix

序　章　文法用語研究の目的と問題点……　*2*
1．本論の目的　*2*
2．考察の留意点①：通史的視点　*3*
3．考察の留意点②：蘭訳および蘭語外国語文典　*4*
4．考察の留意点③：文法書の内容的変化　*5*
5．　先行研究について　*11*
5.1. 比較研究　*11*
5.2. 蘭語学　*12*
5.3. 英語学　*13*
5.4. 独語学　*14*
5.5. 専攻研究の問題点　*16*
6．本論で使用した用語について　*17*

第一章　《原形》と《不定法》……　*28*
序　節　何故英語の《原形》はドイツ語では《不定法》なのか　*28*
第一節　和蘭語における de onbepaalde wijs　*30*
1．和蘭語原典における動詞変化の基本形は何か　*30*
1.1. 規則動詞の過去分詞の場合　*30*
1.2. 現在分詞の場合　*33*
1.3. 規則動詞の過去形の場合　*33*
1.4. 動詞の三要形の筆頭は何か　*33*
1.4.1 .<te>+Inf.と<te>のない Inf.　*33*
1.4.2. 動詞活用一覧表中における Inf.と<grondvorm>　*35*
2．蘭語学における「基本形」の概念　*44*
2.1.名詞と冠詞の場合　*44*
2.2.動詞の場合　*46*
2.2.1.《複称》　*46*
2.2.2.《現在》　*47*

2.2.3.＜本詞＞ *48*
2.2.4. ＜単称ノ尤モ単ナルモノ＞ *50*
第二節 英語学における Root と Inf. *78*
1．英語動詞の三要形の筆頭は何か *78*
2．明治期の英語学における Inf.と＜Root＞ *92*
2.1. Inf.の Modus からの脱落 *92*
2.2.《定動詞》《不定動詞》《不定詞》 *94*
2.3.《根言》 *96*
2.3.1. 動詞の「原形」にならない＜Root＞ *96*
2.3.2. 形容詞の「原級」でもあった《根語》 *98*
2.4. 《根言》《不定法》から《原形》《不定詞》へ *100*
第三節 独逸語における Infinitiv と＜Grundform＞ *106*
1．《話法》でない《不定法》 *106*
2．Inf.と＜Grundform＞ *115*
3．Bauer とHeyse（ハイゼ）の＜Grundform＞ *116*
4．《三要形》としての＜Grundformen＞ *120*
第四節 まとめ——＜Root＞再考 *123*

第二章 《過去》と《半過去》…… *141*
——江戸～明治時代の日本人は Perfectum の理解を誤ったのか——
序 節 蘭語学の《過去》と《半過去》に関する疑問 *141*
1．《過去》と《半過去》の用法はなぜ混乱したか *141*
1.1. 明治時代における《過去》と《半過去》の逆転 *141*
1.2. 原典における時制構成と名称の変化 *143*
1.3. 19 世紀ヨーロッパに起こった言語学的変動 *145*
2．現代人の誤解 *150*
第一節 蘭語学における《過去ノ現在》 *153*
1．Perf.（ik heb gehad）に関する訳語 *153*
2．Imperf.（ik hadde）に関する訳語 *153*
3．和蘭語原典における Perf.（ik heb gehad）と Imperf.（ik hadde）の定義 *163*
4．《過去ノ現在》 *166*
5．《過去ノ不定》《不定過去》 *168*
6．《過去ノ現在》から《半過去》へ *172*
第二節 英語と独逸語における訳語の特徴 *192*
1．英・独における訳語の種類 *192*
2．明治期の訳語変動の時代的背景 *194*

3．訳語の特徴　*223*
3.1. 英文典の場合　*223*
3.2. 独逸語の場合　*224*
3.3.《半過去》と《過去》の全体的動向　*225*
4．英語と独逸語における訳語の問題点　*225*
第三節　蘭・英における Perf.と Imperf.の用法的逆転――問題点①の考察　*227*
1．訳語の逆転　*227*
2．原書に現れた逆転の指摘　*229*
3．『英文鑑』の《過了現在》　*230*
4．＜十分過ギ去リタル＞《半過去》と＜マダ十分過ギ去ラヌ＞《過去》　*233*
5．斎藤秀三郎による《過去》と《半過去》の逆転　*236*
6．チャムブレンの３つの英文典　*239*

第四節　英・独における Perf.と Imperf.の用法的逆転――問題点②③の考察　*250*
1．問題の所在　*250*
2．平塚定二郎の《過去》と「ハイゼ氏」の文法　*251*
3．三太郎の『獨逸文法教科書 全』（明治27）　*254*
4．嵜山元吉の『獨逸学捷径』（明治24）と『英語教授書』（明治26）　*257*
5．解答　*260*
第五節　まとめ　*263*

第三章　《分註法》と《疑問法》……　*290*
――《仮定法》以前の Conj./Subj.――
序　節　蘭・英・独語学における Conj./Subj.の問題点　*290*
問題点①：《文註法》と《疑問法》　*290*
問題点②：独逸語における Conditionalis の分離　*291*
問題点③：《未来過去》　*291*
第一節　蘭語学における《分註法》と《疑問法》　*295*
1．原語と訳語の特徴　*295*
2．《分註法》　*298*
2.1.中野柳圃の《分註法》　*298*
2.2.高野長英の《附説法》と《分註法》　*303*
3．《疑問法》　*304*
3.1.《疑問法》《疑示法》《疑説法》　*304*
3.1. 1.「疑問文を作る法」としての《疑問法》　*304*
3.1. 2. 《話法》Modus とは別の＜作文四法＞　*308*

3.1. 3. Subj.としての《疑問法》《疑示法》《疑説法》 *309*
3.2.《未定様》と《虚構様》 *310*
4．その他の創出術語のついて *310*
4.1.《死語法》 *310*
4.2.《承起法》 *311*
5．和漢文に基づいた創出術語 *311*
第二節 英語学における《仮定法》と《接続法》 *333*
1．英語における《仮定法》 *333*
2．Conditional tense と Conditional mood *338*
第三節 独語学における《接続法》と《約束法》 *341*
1．Konj.と Kond.に関する訳語 *341*
2・明治期の独文典における訳語 *345*
2.1.《疑問法》 *345*
2.2.《接続法》と《可能法》 *346*
2.3.《許可断法》《添句法》《事情法》 *247*
2.4.《綴話法》《期約法》 *348*
3．《約束法》について *348*
3.1.《約束法》の問題点 348
3.2.《未来過去》と《過去未来》 *350*
3.3.《約束法》の温存 *352*
第四節 まとめ *369*

終 章…… *386*

附録 『和蘭語法解(オランダごほうげ)』はオランダ語の文法書か…… *397*
1．問題の所在 *397*
2．４つの問題点 *398*
2.1. 《許可法》と《第二附説法》について *398*
2.1.1.《説話法》と「作文法」 *398*
2.1.2. Potential mood（英）・Vermogende wijze（蘭） *400*
2.2.《欽如言》について *403*
2.3. 品詞の配列について *404*
2.4. 原著者について *405*
3．若干の検証――Peyton の英文典について *406*
3.1.＜Potential Mood＞について *406*
3.2.＜Optative＞について *407*

3.3.＜作文四法＞について　*407*
3.4.＜defective verb＞について　*408*
3.5. 品詞の配列について　*408*
4．Sewel の辞書中蘭文典に現れる＜Heer PEYTON＞の引用箇所について *409*
5．結語　*413*
APPENDIX…… *437*
文法書及び参考文献…… *456*
Ⅰ．使用文法書　*456*
Ⅱ．参考文献　*485*

初出一覧…… *498*

○表およびグラフ一覧

表 1. 蘭語学における Modus の訳語　*31*
表 2. 和蘭語原典の動詞活用表中における Infinitivus の位置　*37*
表 3. 和蘭語原典に見られる動詞の基本形に関する表現　*39*
表 4. 和蘭語原典における動詞の三基本形　*40*
表 5. 江戸期の蘭文典に見られる動詞の基本形に関する表現　*42*
表 6. 英文典における ROOT の訳語　*79*
表 7. 英語原典における動詞の三基本形　*84*
表 8. 明治期の英文典における Mood の訳語　*86*
表 9. 和蘭語と英語原典における比較の階級　*99*
表 10. 幕末の蘭文典に見る比較の階級　*100*
表 11. 明治期の独文典における Modus の訳語　*107*
表 12. 独逸語原典における動詞の三基本形　*111*
表 13. 日本の英・独文典における《原形》　*112*
表 14. 明治期の独文典における三基本形の構成要素　*119*
表 15. 蘭・英・独・仏原典における時制の構成　*154*
表 16. 江戸期の蘭語学における時制の訳語　*161*
表 17. 明治期の英文典における時制の訳語　*195*
表 18. 英語原典における時制の構成　*202*
表 19. 明治期の独文典における時制の訳語　*208*
表 20. 独逸語原典における時制の構成　*212*
表 21. 明治期の英・独文典における Imperf.の訳語分類　*216*
表 22. 明治期の英・独文典における Perf.の訳語分類　*217*

表 23. 著者別に見た明治期の直訳文典の出版数　*218*
表 24. 蘭語学における Subjunctivus の訳語の分類　*296*
表 25. 洋語文典における Modus 以外の《法》の構成　*305*
表 26. 英語原典における Mood の構成　*334*
表 27. 独逸語原典における Modus の構成　*342*
表 28. ＜旧式＞と＜新式＞の対訳和語対照表　*354*
表 29. 江戸および明治期の蘭・英・独文典における Conj./Subj.の訳語変遷表　*356*
表 30. 明治期の三過去及び不定法の対訳和語　*376*

グラフ 1. 《過去》と《半過去》の用法的混乱期　*143*
グラフ 2. Perf.に関する用語の時制的動向　*219*
グラフ 3. 訳語《半過去》の動向　*220*
グラフ 4. 訳語《過去》の動向　*221*
グラフ 5. Perf. に関する訳語の動向　*222*

○資料一覧

資料 1. 大槻文彦「和蘭字典文典の譯述起源」其三（部分）（明治31（1898））　*7*
資料 2. Maatschappij（マートシカッペイ）＜文社先生＞社版 *Grammatica*『和蘭文典』（1822（文政5））における「過去形」と「過去分詞」の作り方　*54*
資料 3. 同書　Deelwoord《分詞》と Wijze《話法》の説明　*55*
資料 4. 同書　wijze《話法》の説明　*56*
資料 5. 同書　zijn（＝sein ; be）の活用表(1)　*57*
資料 6. 同書　zijn（＝sein ; be）の活用表(2)　*58*
資料 7. 同書　zijn（＝sein ; be）の活用表(3)　*59*
資料 8. Maatschappij＜文社先生＞社版 *Rudimenta*（1846（弘化3））における Wijze《話法》の説明箇所　*60*
資料 9. 同書　Wijze《話法》の説明　*61*
資料 10. 1806（文化3）年版 Weiland 文典における Wijs《話法》の説明　*62*
資料 11. 同書　“zijn”の活用表冒頭の《不定法》の部分　*63*
資料 12. Marin の蘭語対訳仏文典（1790（寛政2））における Wyz《話法》の説明　*64*
資料 13. 同書　“zyn”の活用表　*65*
資料 14. Sewel の蘭語英文典（1708（宝永5））における“be”/“zyn”の活用表　*66*
資料 15. 同書　“be”/“zyn”の活用表（続）　*67*
資料 16. 同書　＜名詞の原形＞の説明　*68*
資料 17. Maatschappij（マートシカッペイ）＜文社先生＞社版 *Rudimenta*（1846（弘化3））における三要形　*69*

資料 18. Sewel の英語蘭文典（宝永5 1708）における四要形　*69*
資料 19. Murray 蘭訳本（嘉永5 1852）における Wijs《話法》の説明と“zijn”の活用表　*70*
資料 20. 同書　“zijn”の活用表（続）　*71*
資料 21. Brill の蘭文典（嘉永6 1853）における動詞の＜stam＞＜stamvorm＞　*72*
資料 22. 高野長英『繙巻得師草稿』（国会図書館本）の《不定法》の説明　*73*
資料 23. 同書の最終頁　*74*
資料 24. 藤林普山『和蘭語法解』巻之中（文化12 1815）における《治定性言》の活用表　*75*
資料 25. 同書　《分言》の活用表　*76*
資料 26. 同書　《分言》の活用表（続）　*77*
資料 27. 初版の Murray 文典（寛政5 1795）における不規則動詞表の三要形　*102*
資料 28. Murray 蘭訳本（嘉永5 1852）に不規則動詞表のおける三要形　*103*
資料 29. Murray『モルレイ氏著英吉利小文典』（慶応2～3年頃翻刻 1866-1867）における不規則動詞表の三要形　*103*
資料 30. チヤムブレン『英語変格一覧』（明治12 1879）における動詞活用表　*104*
資料 31. 同書　不規則動詞表の三要形　*105*
資料 32. チヤムブレン『英文典』（明治26 1893）における動詞活用表　*105*
資料 33. Kaderly（明治11 1878）の＜Grundform＞　*122*
資料 34. Maatschappij（マートシカッペイ）＜文社先生＞社版 *Grammatica*『和蘭文典』（文政5 1822）における時制の説明　*173*
資料 35. 同書　時制の説明（続）　*174*
資料 36. 同書　“hebben”の活用表　*175*
資料 37. Maatschappij（マートシカッペイ）＜文社先生＞社版 *Rudimenta*（弘化3 1846）における時制の説明　*176*
資料 38. 同書　“hebben”の活用表　*177*
資料 39. 同書　“hebben”の活用表（続）　*178*
資料 40. 1806（文化3）年版 Weiland 文典における時制の説明　*179*
資料 41. 同書　時制の説明（続）　*180*
資料 42. 同書　“zijn”の活用表　*181*
資料 43. 同書　“zijn”の活用表（続）　*182*
資料 44. 1846（弘化3）年版 Weiland 文典における時制の説明　*183*
資料 45. 同書　時制の説明（続）　*184*
資料 46. 同書　時制の説明（続）　*185*
資料 47. Wees の蘭文典（安政4 1857）における時制の説明　*186*
資料 48. 同書　“hebben”の活用表　*187*
資料 49. 1790（寛政2）年と1851（嘉永4）年の Marin 仏文典における過去時制
資料 50. 高野長英『繙巻得師草稿』（国会図書館本）における時制の説明　*189*
資料 51. 江戸版『英吉利文典』（慶応3年翻刻 1867）における“advise”の活用表　*190*

資料 52. 同書　“advise”の活用表（続）　*191*
資料 53. Sewel の蘭語英文典（1708）における Woordschikking（文論）の部分　*241*
資料 54. Valette の英語蘭文典（1913）における和蘭語の Perf. と英語の Past　*242*
資料 55. 澤田重遠義訳『ブラウン氏英文典釈義』（明治19）における時制の説明　*243*
資料 56. 訳者不明『通俗英文典』（明治5）における過去時制の説明　*244*
資料 57. 同書　過去時制の説明（続）　*245*
資料 58. 同書　過去時制の説明（続）　*246*
資料 59. 清水誠吾著『イングリッシ文法主眼』（明治20）における動詞の活用　*247*
資料 60. 同書　時制図　*248*
資料 61. 同書　“be”の活用表　*249*
資料 62. チャムブレン『英語変格一覧』（明治12）に寄せられた勝海舟の序文　*284*
資料 63. 島田奚疑著『和解纂註英文軌範』（明治20）の凡例と序文　*285*
資料 64. 同書　助動詞の説明　*286*
資料 65. 同書　“be”の活用表　*287*
資料 66. 同書　“be”の活用表（続）　*288*
資料 67. 同書　“be”の活用表（続）と三要形　*289*
資料 68. Sewel の蘭語英文典（1708）における“be”の活用表　*299～300*
資料 69. 同書　英語蘭文典における“hebben”の活用表　*313*
資料 70. 同書　英語蘭文典における“hebben”の活用表（続）　*314*
資料 71. 同書　英語蘭文典における“zyn または weezen”の活用表　*315*
資料 72. 同書　英語蘭文典における“zyn または weezen”の活用表（続）　*316*
資料 73. 同書　英語蘭文典における“leeren”の活用表　*317*
資料 74. 同書　英語蘭文典における“leeren”の活用表（続）　*318*
資料 75. 同書　英語蘭文典における“leeren”の活用表（続）　*319*
資料 76. 同書　蘭語英文典における“have”の活用表　*320*
資料 77. 同書　蘭語英文典における“love”の活用表　*321*
資料 78. 同書　蘭語英文典における“love”の活用表（続）　*322*
資料 79. 同書　蘭語英文典における“love”の活用表（続）　*323*
資料 80. 同書　蘭語英文典における“love”の活用表（続）　*324*
資料 81. Marin の蘭語対訳仏文典（1790）における“sortir”の活用表　*325*
資料 82. 同書　＜作文四法＞　*326*
資料 83. van der Pyl（1819）の英語蘭文典における“zijn”の活用表　*327*
資料 84. 同書　＜作文四法＞　*328*
資料 85. Lloyd の蘭語英文典（1885）における＜作文四法＞　*329*
資料 86. 高野長英『繙巻得師草稿』（国会図書館本）における《附説法》の説明　*330*
資料 87. 同書　《分註法》の説明　*331*

資料 88. 同書　《分註法》の説明（続）　*332*
資料 89. 嵜山元吉『英語教授書』（明治26）における《約束法》の説明　*336*
資料 90. Schäfer の独文典（1882）における Modus の説明　*360*
資料 91. 同書　Modus の説明（続）　*361*
資料 92. 同書　動詞活用表＜古式＞　*362*
資料 93. 同書　動詞活用表＜古式＞（続）　*363*
資料 94. 同書　動詞活用表＜新式＞　*363*
資料 95. 同書　動詞活用表＜新式＞（続）　*363*
資料 96. 嶋約翰訳『セェーフェル文典解釈』（明治27）における動詞活用表の和訳　*366*
資料 97. 平塚定次郎著『獨逸文法楷梯』「文章学」における「直訳体」の練習問題　*367*
資料 98. Gottsched の独文典（1762）における動詞活用表　*368*
資料 99. 中村順一郎訳『獨逸単語篇和解』（明治4）に使われた《白抜き点》　*393*
資料 100. 戸沢光徳著『洋学指針佛学部』（明治4）に使われた《白抜き点》　*394*
資料 101. 島田奚疑著『和解纂註英文軌範』（明治20）に書き込まれた《白抜き点》　*395*
資料 102. 藤林普山『和蘭語法解』（文化12）の句読点　*396*
資料 103. Sewel の英語蘭文典（宝永5 1708）における＜Defektive Verbs＞の説明　*419*
資料 104. 同書　＜Defektive Verbs＞の説明（続）　*419*
資料 105. Peyton の仏語対訳英文典（1776）表紙　*421*
資料 106. 同書　本文の始め＜De la Prononciation＞　*423*
資料 107. 同書　動詞の部＜Des Verbes＞の始め　*423*
資料 108. 同書　動詞の部＜Des Verbes＞（続）　*424*
資料 109. 同書　動詞＜love / aimer＞の活用表　*425*
資料 110. 同書　動詞＜love＞の活用表（続）　*426*
資料 111. 同書　動詞＜love＞の活用表（続）　*427*
資料 112. 同書　動詞＜love＞の活用表（続）　*428*
資料 113. 同書　動詞＜love＞の活用表（続）　*429*
資料 114. 同書　動詞＜love＞の活用表（続）　*430*
資料 115. 同書　動詞＜love＞の活用表（続）　*431*
資料 116. 同書　＜作文四法＞の説明　*432*
資料 117. 同書　＜作文四法＞の説明（続）　*433*
資料 118. 同書　＜作文四法＞の説明（続）　*434*
資料 119. 同書　目次［筆者が私的に作成］　*435*
資料 120. 同書　その他　*436*

江戸および明治期の洋語学における文法用語の比較研究

——和蘭語・英語・独逸語をめぐって——

序章　文法用語研究の目的と問題点

1. 本論の目的

本論は、江戸および明治期の洋語学習における文法用語の成立とその変遷過程を、年代的かつ比較文法的に考察し、日本の語学の術語翻訳の特徴と問題点を明らかにしようと試みたものである。その論点は、現代文法の視点から江戸期の蘭語学と明治の英・独語学を見て誤りと思われることが果たして本当に誤りか、という点にある。

種々の問題を抱えて実用面の行き詰まりに喘ぐ現代の外国語教育において、文法教育は有効かつ必要かという根本的な問いを問うことを余儀なくされている。今日言う「文法」は、最初＜文科＞とも＜文学＞とも呼ばれた。＜文科＞は中国の清における訳名である。＜文学＞は、たとえば馬場佐十郎貞由の『和蘭文学問答』（文化8）に現れ、これは、英語で言えばDutch literatureではなく、Dutch Grammarを意味している。＜文ノ法＞＜文法＞という言い方もまた、馬場は用いているが、日本で初めて和蘭語の＜文科ノ書＞を読んで＜文ノ法＞を研究し始めた人物は、馬場の師である長崎通詞・中野柳圃である。病弱だった彼は、18歳の時に通詞の職を退き、以後、生涯を通じて和蘭語の研究に没頭する。この時彼が考案し、行なったところの、まず文法の詳細を知るという外国語の学習方法は、結果的に現代にまで続くものとなったが、当時の和蘭語学習に対する影響力もまた決定的であった。即ち、柳圃のやり方は＜新法＞と呼ばれて、当時の、冠詞などの語形変化の知識もなく、＜…其ノ教ヲ受タル訓譯ノ全文ヲヒラキ塾中ニコモリテ幾編トモ無ク熟読暗誦スレバ自然ニ氷解シテ其義通ズルモノ＞[注1]という、『蘭学事始』の関係者が行っていたような学習方法を一変させ、＜旧法＞と呼ばれるものにしてしまったのである。そして、江戸末期の安政年間、即ち1850（嘉永3）年代半ばに、この和蘭文法学は大輪の花を咲かせ、この時和蘭語を学んだ若者の中から幕末・明治期という未曾有の困難な時代を切り開く人材が輩出されることになる。

文法用語は、このような時代の激動の中で育ったのである。国難を乗り切るために必死で和蘭語を学ぼうとする人々が、時制のような、文法の最も根本的な事項の理解を果たして誤るであろうか。誤ったまま、その用語を使い続けるであろうか。江戸期の和蘭語研究に淵源を持つ日本の洋語文法の術語がどのように成立し、どのように明治期の英語と独逸

語に引き継がれたのか、あるいは引き継がれなかったのか。引き継がれた場合はどのように現代にまでつながっているか。引き継がれずに廃れた場合、その理由は何か。文法用語の成立と変遷を知ることは、語学教育的意味を問うと同時に、当時の時代の軋みのなかで、日本人がどのように外国語と向き合い、取り組み、母国語と外国語の関わり方を見出してきたのか、その一端を知ることにもなり得よう。そこに、日本語と外国語を取り巻く現今の教育的環境に益となるべき何かがあるのではないか。未来は過去にある。過去は未来を語る。そのための本研究である。

本論で取り扱われる言語は、江戸期の和蘭語および明治期の英語と独逸語であり、取り扱われる内容は、和蘭語・英語・独逸語間で同一の言語現象を扱いながら文法用語的に食い違いを示すもの——即ち、《原形》と《不定法》、《過去》と《半過去》、《仮定法》と《接続法》である。

これらを考察する際、本論では文法用語の表化という方法を採った。即ち、江戸および明治期の文法書を、国会図書館所蔵のものを中心にできるだけ多く調査して当時の文法用語を収集し、それらを和蘭語、英語、独逸語ごとに一覧表にして提示することで、その変遷の様子を年代順に追えるようにしたのである。

ここには仏蘭西語が欠けているが、その理由は、国会図書館に明治期の仏文典がほとんど所蔵されておらず、表化できるほどのデータが収集できなかったからである。この仏蘭西語の劣勢には、フランスが徳川幕府最後の将軍慶喜と関係が深かったことや、また、1871(明治4)年の普仏戦争でフランスがプロシャに敗北したため、以後の日本で医学を始めとする諸分野が独逸に傾き、独逸語の隆盛をみたことなどが影響を与えているようである。が、P. Marin などの蘭語学草創期における重要な仏文典は和蘭語との関連から、国会図書館所蔵の明治期の仏文典数冊は英語と独逸語との関連から、和蘭語、英語、独逸語の表中に随時含まれている。

なお、今回の調査は文法書に限定し、リーダー、辞書の類には、《附属法》《約束法》の初出である村上英俊の『仏語明要』『明要附録』のような場合を除き、ほとんど手をつけなかった。語学学習の第一歩は、江戸期の蘭語学者がその情熱を傾けたことからも分かるとおり、まず良いテキストにあるからである。

2．考察の留意点①：通史的視点

漢学が日本人の教養から失われ、日本語が時に英語等の外国語習得の障碍とさえ見なされて外国語学習から切り離されるようになって久しい。しかし、例えば、英独双方の文典を著した寄山元吉の次の言葉は、現代日本人に何かを考えさせずにはおかない。

……然レトモ本邦ノ生徒ハ之ニ反シ小学校ニ於テ四年間「ナショナルリーダー」等ノ英書ヲ修学スルモ其風恰モ論孟ヲ素読スルニ異ナラズ　故ニ其意ヲ解スルニ苦ミ殆ト

文法ヲ知ラズ従テ語ノ応用ニ乏シク遂ニ倦テ復習セサルニ至ル　豈コレ不進歩ノ原因ニ非ズヤ　「ブリンクリ」氏モ亦其著書「語学獨案内」ノ序ニ曰ク外国語ヲ学フニハ自國ノ語ヲ以テスルヨリ善キハナシト　本邦ニ於テモ國語ヲ基礎トシタル英語教科書ヲ編述シ以テ生徒ノ修学ニ便セシメハ何ソ英語ノ活用ヲ知得セシメサランヤ……

（『英語教授書』「自序」、明治26）

この著者である寄山元吉は、幕末の紀州和歌山藩で和蘭語を学び、明治になって独逸に留学、帰朝後陸軍教授になった明治語学界の中心人物のひとりである[注2]。寄山のこの言に限らず、明治（特に前半期）の洋語文典からは、このような著・訳者の「肉声」が頻繁に聞かれるのであるが、こういう外国体験を積んだ人物が、外国の教科書を丸投げし、自国語を基準にしないような外国語教育をする国は日本以外にはない、と慨嘆しているのである。

日本語をヨーロッパ語理解の基準として重視するか、あるいは日本語をヨーロッパ語から完全に切り離すか。江戸期の和蘭語学習は前者の立場を採った。ところが、明治期に入って前者と後者が拮抗し、間もなくその趨勢は後者に傾いていく。文法用語を江戸期の和蘭語から明治期の英語と独逸語に至る一連の流れの中で取り扱った場合、我々は、この動きが文法用語の訳出方法にも反映されていることに気付く。即ち、明治（特に 20 年代後半以降）の用語が原語の直訳であるのに対し、蘭語学（特に中野柳圃を中心とする前期蘭語学）では、蘭語学者の独創的な術語がしばしば見られるのである。本論では、このような独創的な術語を「創出術語」と呼ぶことにするが、この創出術語というのは、当該文法事項の意味用法を咀嚼し、そこから名称を意訳したものであり、従って対応する和蘭語の術語を持たない。それが最も顕著に現れてくるのが、かつては Conjunctivus、現代では Subjunctivus と呼ばれる分野で、実にその半数が対応原語を持たない創出術語である。これらの術語には、その基礎として当時の和漢文法の用語と知識が活用されている。

3．考察の留意点②：蘭訳および蘭語外国語文典

このように、日本における洋語学習は江戸期の和蘭語研究に発し、幕末～明治初年の動乱の中、ほぼその原型ができあがった。英語と第二外国語で用いられている現行の文法用語も、幕末の蘭語学における用語が明治期の洋語学に引き継がれ、そこから分化発展して現代に至ったものである[注3]。よって、現代ではその難解性の故にかえって問題視される文法用語のその問題点は、江戸期の和蘭語から明治期の英語と独逸語に至る一連の流れの中で取り扱われなければ見えて来ない性質のものであろう。

ところが、その際ぜひとも留意しなければならいことがある。即ち、各言語間の文法的相違と、新文法と旧文法の間に存在する文法的相違というふたつの相違点を認識することである。前者を横の座標軸、後者を縦の座標軸とすると、日本の文法用語は、言わばこの

交差点上に位置する。

まず、江戸期の蘭語学に関してであるが、和蘭語で著された外国語文典の存在は十分に注意を払われて然るべきである。例えば表２（37 頁）を見れば分るとおり、輸入蘭書には何冊もの仏文典と英文典が含まれている。つまり、和蘭語で書かれているからと言って、それが和蘭語の文法を扱っているとは必ずしも限らないのである。『英文鑑（かがみ）』のように英文典であるとはっきりしており、和蘭語と英語の違いを訳者自身が自覚して言及している場合は良いが、江戸期の蘭語学者が参照したものの中に、そうと明確に断らないままこの種のものが混じっていた場合、知らぬうちに仏・英文法の要素が入りこんでいる可能性がある。

例えば、今回使用した国会図書館所蔵の P. Marin は和蘭語の対訳が付された仏文典である。蘭文法の創始者・中野柳圃はこの P. Marin の文典を自らの和蘭語研究の糧としたが、柳圃の著書『三種諸格』と『四法諸時対訳』の時制には、和蘭語にはないはずの時制の用法――即ち、佛蘭西語の《定過去》《半過去》《複合過去》のニュアンスが漂っている。和蘭語と仏蘭西語の文法、和蘭語と英語の文法、英語と独逸語の文法は、全く同じではない。特に動詞の時制と話法（Modus）においてそうである。もし和蘭語対訳仏文典のようなものがあり、その中の和蘭語の部分が蘭文典として活用されれば、和蘭語を研究しているつもりが、実は仏文法を説いているということになる。

まさにこの事情から、英文典ではないかと考えられるのが、文化（1815）12年に藤林普山が著わした『和蘭語法解（オランダごほうげ）』（および文化 11 年に江馬元弘の筆写した『助字要訣』）である。この場合の問題点は話法（Modus）で、英文法にのみ存在し、和蘭文法には存在しない《許可法》Potential Mood が見られることから、当文典が英文典であることの可能性を筆者が初めて指摘したのは 1996 年であった。その後、その引用の例文の一部がある蘭訳英文典のものであることが、松田清により指摘されたが[注4]、この英文典の原著者等その他の問題点を加えて総合的に考察すると、『和蘭語法解』は、一部の例文にとどまらず、その骨格自体が英文法であって和蘭文法ではないのではないかと考えざるを得なくなるのである。本論においては『和蘭語法解』を英文典と見なす立場を採るが、その根拠についてまとめたものを附録として巻末に附しておく。

４．考察の留意点③：文法書の内容的変化

文法用語を江戸期の蘭語学から明治期の洋語学に至る一連の流れの中で取り扱う場合、その第二の留意点は、旧文法と新文法間に存在する文法的相違である。本論における旧文法（あるいは伝統文法）とは1830（天保1）年以前の文法、新文法とは 1830 年以後の文法を指す。

Rudolf von Raumer により、J.Grimm の *Deutsche Grammatik* 第一巻が出版された1819（文政2）年という年は、歴史的比較的言語研究が本格的に開始されたという理由で言語学史的な区切りとされるが、その後間もなく 1830 年代に入ると、動詞の時制に大きな変化が現

われてくる。まず時制の構成そのものが大きく変わる。旧文法の時制は、一千年の長きにわたる中世羅典文法の伝統に従って、ひとつの現在・三つの過去（Imperfectum；Perfectum；Plusquamperfectum）・ひとつの未来、から構成されていた。これを、「愛する」（蘭 beminnen；英 love；独 lieben）という動詞を用いて具体的に示すと（何故なら、19 世紀までの文法書では、「愛する」という動詞が Conjugation の代表であるのが普通なので）、たとえば独逸語では、ひとつの現在＝<ich liebe>、三つの過去＝<ich liebte>（Imperfectum）<ich habe geliebt>（Perfectum）<ich hatte geliebt>、ひとつの未来＝<ich werde lieben>のようになる[注5]。ところが、1830 年代中盤以降になると、実用的使命を終えた羅典語に代わり、今度は、その羅典文法に先行する古代希臘語とサンスクリット語の文法研究に多くを負って、現在・過去・未来をそれぞれ非完了時と完了時に二分する 6 時制が出現する[注6]。これにともない、特に注目されるべきは、<ik beminde><I loved><ich liebte>と<ik heb bemind><I have loved><ich habe geliebt>の 2 時制の名称と、時制構成中におけるその位置である。

旧文法で基本三時制という時、それは普通、<ich liebe>（現在）—<ich habe geliebt>（過去）—<ich werde lieben>（未来）の三つである。現代人の目から見ると、過去の基本時が現代の「現在完了」に相当する形式になっていて、<ich liebte>ではないことに奇異の感を抱かざるを得ないが、旧文法では、<ich habe geliebt>は特に Perfectum【完全過去】と呼ばれ、これが正真の過去だと理解されていた。一方 、現代の過去形であるところの<ich liebte>は「過去における現在」を表わすものであったため、その現在性を云々されて正真の過去とは見なされず、Imperfectum【未完成過去】とされていたのである[注7]。

ところが、1830 年代中盤以降の新文法では、【未完成過去】だった<ich liebte>が正真の過去の位置に入り込んで、<ich liebe>（現在）—<ich liebte>（過去）—<ich werde lieben>（未来）が基本三時制となり、<ich liebte>に取って代わられた<ich habe geliebt>は die vollendete Gegenwart（＝Present Perfect）と名前を変えて、現在時制に移行し始めるのである。

以後、19 世紀前半が終わる 1860 年くらいに至るまで、この新旧ふたつの時制は互いに交錯し、葛藤を演じる。和蘭語で新説を導入した文法書が現れるのは、**表 15**（154 頁）では嘉永（1853）6 年の Brill が最初であり、日本では蘭語学がすでに黄昏を迎えつつあった時期に当たっている。日本の和蘭語学習最盛期における蘭文典の王者Maatschappij（マートシカッペイ）社の文典も、1822（文政5）年の *Grammatica*、1846（弘化3）年の *Rudimenta* のふたつともが旧時制を採用しており、**表 16**（161 頁）では旧時制のまま、江戸期の蘭語学は幕を閉じている。

これに対して、英語で新説の時制が多くなるのは1834（天保5）年（**表 15** および**表 18** [202 頁]）、独逸語でのそれは1838（天保9）年（**表 20** [212 頁]）以後なので、和蘭語に比べてかなり早い。それ故日本では、時制をめぐる新文法と旧文法の葛藤は、<have+p.p.>の Perfect と単独の過去形である Imperfect の、どちらが《過去》でどちらが《半過去》なのかということをめぐり、和蘭語ではなく、明治期の英語と独逸語において現れることになった。明治（1884）17年

以後の約 10 年間が殊に甚だしく、とりわけ英語の各文典で、その定義内容を確認せずして《過去》という訳語を見た時、この《過去》が、旧文法の＜have+p.p.＞なのか、新文法における単独の過去形なのか、全く判断がつかない情況である。

本論で取り扱われる時代の日本の文法用語は、このように、同じひとつの名称を用いながら、その内容が、各言語間で、あるいは一言語内でも新旧文法間で、異なっていることがままあるのである。よって、その名称だけを考察することに留まっていては、用語の成立過程を知るには不充分であり、当時の個々の文法事項についていかなる定義がなされているか、にまで踏み込んで考察することが要求される。

要するに、当時の文法内容は、いくつかの分野で現代文法と異なっているのであり、とりわけ現代英文法の眼で当時の文法内容を判断すると、当時の日本人が洋語文法の理解を誤ったと即断ないしは誤解する恐れが多分にあるのである。しかも、和蘭語から英語に切り替った時期がちょうど、江戸時代から明治時代になるという維新の激変期と重なったため、文明開化の明治時代と旧弊な江戸時代という意識的、あるいは無意識的な思考が働いて、その思考が、文法は当時も現代も同じはずであるという無意識的前提と相俟って、や

	蘭語九品集	和蘭語法解	六格前編	蘭学凡	語学新書	今譯
Tot hoorer g. (vocative.)		呼格	聽格	聽格	呼召	
Derwer g. (ablative.)		奪格	失格	佚格	所奪	
Wijzen. (mood.)	法	活言法	法	法	法	
Aantonende w. (indicative.)	直説法	直説法	直説法	直説法	直説	直説法
Aanvoegende w. (subjunctive.)	分注法	附説法	接續法	附説	接續	接續法
Gebiedende w. (imperative.)	使令法	使令法	使令法	使令法	使令	命令法
On bepaald w. (infinitive.)	不限法	不定法	不嚴法	不定	不定	不定法
Vragende w. (interrogative.)		疑問法		諸問法	疑問	
Vermogende w. (potential.)						
Tijden. (tense.)	諸時			時		時
Tegen woordig tijd. (present.)	現在	現在		現在今在	現在	現在
On volmaakte voorleden t.	過去ノ現在	未成過去		往來		
Volmaakte voorleden t. (past.)	過去	過去		已往	過去	過去
Meer dan volmaakte voorleden t. (pluperfect.)	過去ノ過去	過去過去		既往		大過去
Toe komende t. (future.)	未來	未來		未來將來	未來	未來
On bepaalde t.	不限時			應料		
Ont kenning. (negative.)		不有		烏有	打消否定	
		不無			肯定	

此外森島中良が蠻語箋にも依頼名字(形容詞の事)代名字(代名詞)入品(入代名詞)指示(疑問、承接關係代名詞)添字(副詞)處前字(前置詞)動字(動詞)接續字(接續詞)嗟歎字(歎息詞)などの譯語見ゆ

右の六格前篇(後篇は傳はらず)の中には本居氏の詞玉緒の事などを引て論じてあれば當時の國語學家の説をも參考せし事知られ關學凡も處々我邦の語學書に引合

資料１．大槻文彦「和蘭字典文典の譯述起源」(明治 31)[1898]

はり江戸期の蘭語学者は、明治期前半の英語と独逸語の文典著・訳者は、Perf.が理解できなかったのだ、だからこの時制を《過去》と呼んだのだ、という＜誤解＞を生じさせてきたように思われる。

この他にも、江戸から明治期前半にかけて《不定法》は Modus に属し、動詞の原形を＜Root＞とする考えは、決して一般的ではなかった。《不定法》と《原形》の問題は**第一章**で、《過去》の問題は**第二章**で、それぞれ取り扱っている。特に《過去》、およびこれと並んで重要なもうひとつの訳語《半過去》との間の用法的混乱と逆転については、できるだけ多く原典から事例を挙げ、当時の時制用語に関する従来からの疑問と誤解を正していくつもりである。

ところで、この各言語間における文法的相違と、新文法と旧文法間における文法的相違が意識されていない例として、意外なことに、大槻文彦博士の「和蘭字典文典の譯述起源」（『史学雑誌』第九編第六号、明治31（1898））が挙げられる。この論文には、大槻家の家学とも言うべき和蘭語と日本語の動詞過去の用語が、**前頁**のような対比の形で収載されている。

この対照表で注目すべきは、和蘭語の三つの過去時制に附された英語と＜今譯＞の部分である。点線で囲んだこの問題の箇所だけを抜き出して整理すると、下のようになる。これは、大槻博士が対比させた和蘭語と英語の時制に、筆者がそれぞれ具体例を付し、それらを、本論とも関係の深い『訂正蘭語九品集』（文化11年（1814）、馬場佐十郎貞由の著作）の用語、『和蘭語法解（オランダごほうげ）』（文化 12 年、藤林普山注釈の訳書）の用語、および大槻博士の当時の＜今譯＞と対照させたものである。

	訂正蘭語九品集	和蘭語法解	今 譯
[ik beminde] Onvolmaakte voorleden t[yd]	**過去ノ現在**	**未成過去**……	[redacted]
[redacted]			
[ik heb bemind] Volmaakte voorleden t[yd] (past) [I loved]	**過　去**	**過　去**……	**過　去**
[ik hadde bemind] Meer dan volmaakte voorleden t[yd] (pluperfect) [I had loved]	**過去ノ過去**	**過去過去**……	**大過去**

これを見ると、和蘭語と英語の対応がずれていることがはっきりと分かる。しかも、Onvolmaakte voorleden tyd に対する英語と＜今譯＞が欠けている。何故こんなことになったのか。

この和蘭語―― ＜voor-＞の綴りから考えて蘭語学初期のものである――の意味は、上から順に Onvolmaakte voorleden＝【未完成過去】、Volmaakte voorleden＝【完成過去】、Meer dan volmaakte voorleden＝【超完成過去】である。これは、現代英語は勿論、大槻博士の時代の英語で考えてみても変な名前で、＜ik beminde＞に対応する＜I loved＞が

【未完成過去】、<ik heb bemind>に対応する<I have loved>が【完成過去】になることは、英語ではとても考えられない。ところが、江戸期の和蘭語ではこの2時制の用法が英語と逆になっていたため、<ik beminde>が《過去ノ現在》と《未成過去》、<ik heb bemind>が《過去》で正しかったのである**(第二章【141頁】参照)**。

よって、このような形式的な対応から考えれば、大槻博士がこの江戸期の和蘭語の時制形式に英文法を対応させようした場合、前二者は<英語ナシ>と<past>ではなくて、Past と Present Perfect ということになる。これを書いた明治31年(1898)という時代の英文典はすでに新文法の時代で、Perfect は《充分現在》《現在完成》の時代に入っており、しかも嶋文次郎による《現在完了》が現れる年であるから[注8]、これが最も自然な対応であろう。ところが、大槻文彦は新文法に従わず、Onvolmaakte voorleden tyd を<英語ナシ>、Volmaakte voorleden tyd を<past>とした。これは旧文法でもない。大槻は新文法にも旧文法にも従っていないのである。何故か。それは即ち、大槻が和蘭語の実際を知らず、日本語の訳語だけを見て英語を対応させたからではないだろうか。《過去ノ現在》は文字通りの【未完成過去】――すなわち「過去進行形」で、《過去》は「完全なる過去」だと受け取ってしまったのであろう。

大槻文彦は、これらが彼の先祖が学んだ和蘭語の時制と実は内容的に異なっているとは、全く思っていなかったに違いない。和蘭語の < p.p.+hebben / zijn> に対する訳語が偶然にも《過去》であったが故に、Volmaakte voorleden tyd を<past>としたが、しかしその一方で、【未完成過去】が当時の英文法では「過去進行形」を意味するようになり、しかも基本6時制に入っていなかったため、Onvolmaakte voorleden に対する<今譯>がなくなり、更に Pres.Perf.そのものが欠けてしまったのである。この関係を図示すると、以下のようになる。

和蘭語の3過去は、江戸期では羅典語の術語 Imperfectum、Perfectum、Plusquam - perfectum に合わせて、この表のような蘭訳名称で呼ばれるのが普通であった。これは独逸語と仏蘭西語も同様であったが、逆に、英語においてはこの羅典語の術語がそのまま使用され、殊更これらを英語に訳すようなことはなされなかった。Imperfectum と

Perfectum は、現代のように Aspect に関わる用語ではなく、前者は<I loved>、後者は<I have loved>のための、固有名詞も同然の用語であった。そして、旧文法下の英語の<I have loved>は《過去》であって、決して Present Perfect ではなかったのである。

また、進行形という形式は、大槻博士の時代に至るまでの英語においては、その扱いが確定していなかった。扱われている場合でも、単独の過去形と併置されて Imperfect に含まれるのが普通であったので、日本語の術語も、当時はまだ定まっていない。

例を挙げると、L. Murray と Pinneo では、進行形は、当時の Imperfect である単独の過去形と同じ扱いになっており、1795 年版の Murray では Preterimperfect の例文として、<I wrote yesterday, or last year.><I was travelling post when he met them.>のように、過去進行形が単独の過去形と並んで書き記されている。

この Murray の蘭訳英文典（1822年版）の翻訳である『英文鑑』の<助辞用法変格>(上編 巻之七)では、<To be ト現在分領辞ヲ以テ単辞時ヲ作ル>とある。《単辞時》とは、動詞自身の語尾変化だけで形成される語形——即ち《現在》(I love) と《過了現在》たる Imperfect (I loved) のことで、反対に Perfect (I have loved) 等の複合形は《畳辞時》と言う。和蘭語は、《単辞時》である現在形 (ik bemin) と過去形 (Imperf.= ik beminde) が本来「進行」の意味を持っているがゆえに、進行のための形式は特に持たない。ところが英語の進行形は《畳辞時》であるから、和蘭語の観点から見ると<英国ニテハ動辞助辞ヲ以テ亦単時辞ヲ作ルコトアリ>と、一見矛盾したことを『英文鑑』は言う。その実例が<I am dining><I was dining>と、英語独自の強調形<I do write><I did write>であり、この<be＋～ing>と<do＋Inf.>は、<助辞用法変格>[助動詞の活用法] として、各 Modus ごとに 6 時制の活用を一覧表示する《変換》(Conjugation) とは別扱いになっている。そして、この<To be ト現在分領辞>の《変格》の後に、肯定、否定、疑問、否定疑問、の「四法」(**表 25** [305 頁]) が続くので、Murray の『英文鑑』にあっては、進行形は Conjugation の活用とは異なる<form>のように考えられているように見える。

大学南校版『格賢勃斯英文典直譯』(明治3) では<Progressive Form>と呼ばれ《進ミ行キノ形造リ》と訳されているが、その扱いは6時制外である。Brown, Swinton にもあるが、時制というよりは、やはり<form>の一種とされている。《進行》が現れるのは明治22年の長崎版『和譯英小文典』で、該書巻末の「文法用語和英対譯分類一覧では<Progressive Form>が《進行組成》と訳されている。

明治29年『英文法教科書』(共益商社)になると、英語の術語が<Continuous>に替わり、これに対して《連続》——この用語自体は明治8年にブリンクリで用いられている——の語が当てられているものの、<The Imperfect Continuous>、<The Past Perfect Continuous>等、進行形に関する訳語はまだなく、翌30年の井上歌郎でやっと<The Imperfect Continuous>に対して《連続不十分》、<The Perfect Continuous> に対して《連続十分》が現われてくるような情況である (**表 17** [195 頁])。大槻文彦博士が過去進行形と考えた<Onvolmaakte voorleden>に<今譯>を付けられなかったのは、たとえ付けよ

うとしても付けられない当時の英文典界の、このような事情が影響しているからではないかと考えられる。

大槻博士の附した英語および<今譯>の時制用語と和蘭語の<Onvolmaakte voorleden><Volmaakte voorleden>との間には、実は、このような言語間の文法的相違と新説・旧説間の文法的相違が存在している。大槻は、自分の先祖が研究した和蘭語の時制を、恐らく彼が身に付けた英語の時制の視点から見ているために誤解している。江戸蘭語学の精華をもたらしたMaatschappij(マートシカッペイ)の訳書『和蘭文語凡例』の出版が安政2（1855）年、大槻がこの文章を書いたのが明治31（1898）年であるから、わずか50年も経ぬうちに、和蘭文法は最早理解されなくなっていたことになる。まさに時代の激流である。

この食い違いを、従来の研究はどのように理解したのか。あるいは大槻博士と同じく、副えられた英語と日本語から、字義に従えば文字通り【完成過去】となる和蘭語の<Volmaakte voorleden>を単独の過去形と思い込み、『訂正蘭語九品集』と『和蘭語法解(オランダごほうげ)』の《過去》という訳語に、何ほどの疑問も抱かなかったのであろうか。

5．先行研究について

5.1. 比較研究

文法用語を江戸期の蘭語学から明治期の英語と独逸語に至る一連の流れの中で取り扱おうとする場合に問題となるのは、第一に、独逸語の文法用語に関する先行研究がほとんどないこと、第二に、和蘭語と英語に関しても、社会的情勢、教育的事情、人物評伝、あるいは<編年史的・通史的には……すぐれた諸著作がある。しかしながら、また一方、ひとつひとつの語学的資料の内容に即して、これを比較語学・比較文法論の対象としてとりあげ、通時的・共時的に扱ったものは類が少ない>ということである。この引用の言は、井田好治「文化年間における長崎の西洋（蘭・仏・英）文法論」(『九州文化史研究所紀要』第十二号、九州大学文化史研究施設、昭和42）よりのものであるが、井田は同論文で、文化年間に成立した『払郎察辞範』および『和仏蘭対譯語林』(本木正栄等訳)、『諳厄利亜(アングリア)語林大成』(本木正栄訳)、そして前述の『訂正蘭語九品集』(馬場佐十郎編）における蘭・英・仏の品詞論を比較し、訳出された文法用語の対照表を作成している［この表は『日本の英学100年 明治編』(研究社、1968）に再録されている］。

このような比較研究は、しかし、明治期の洋風国文典との関連から、むしろ国語学の領域に見出されることがある[注9]。佐藤良雄は、「動詞過去の用語に関する研究」(『日本大学創立七十周年記念論文集』第一巻人文科学編、1960）と「文典用語の相互影響――特に動詞過去の用語について」(『日本大学人文科学研究所研究紀要』第四集、昭和37[1962]）という2論文において、《完了》という用語の成立・導入をキー概念として、<英文典の用語が国文典に与えた影響について論じ、……英語以外の他国語に関するもの、たとえば、独

逸語の文典は、どういう関係に立っていたか、ということ＞（「文典用語の相互影響」41頁）にまで説き及んでいる。同じテーマを扱ったものとして、佐藤には「明治百年の国文典における西洋文典の影響」(『国語講座』第一巻、白帝社、昭和44[1969] 所収)と「英文典と国文典」(『日本の英学100年』明治編、研究社、1968 所収)がある。ただし、翻訳・著述文典の用語考察が主で、原典に置けるもともとの術語の意味を調べているわけではないようなので［特に独逸語に関して］、《過去》と《半過去》の用法的混乱の原因に関する理解が不充分の恨みがある。

古田東朔の「大槻文彦伝」（七）～（九）（月刊『文法』明治書院、昭和45、に連載）でも、『和蘭語法解』や開成所版『英吉利文典』、Pinneo、Quackenbosの英文典における動詞の法や時制等に関する比較考察が行なわれている[注10]。

5.2. 蘭語学

蘭語学に関しても、当時の文典における動詞記述の具体的内容を知ることのできる研究論文は、『蘭学資料研究』（復刻版；龍溪書房、1963）を見てもさほど多くはない。

古くは、大槻文彦「和蘭字典文典の譯述起源」(『史学雑誌』第九編第六号、明治31) に、＜馬場佐十郎が訂正蘭語九品集、藤林泰介が和蘭語法解、羽栗東洋が六格前編、大槻玄幹が蘭学凡、鶴峯戊申が語学新書の五部の対照にて末に…現今行はるゝ譯語＞の対照表があり、その中に「法」と「時」に関する訳語が含まれているが、これに問題があることは上述の通りである。

現代の研究では、斎藤信「Sewelの『オランダ語文典』が柳圃の『四法諸時対譯』に与えた影響について」(『蘭学資料研究会研究報告』第311号、1976)がある。斎藤は他にも、「文法領域の開拓とその発達――『日本におけるオランダ語発達史』の或る章」(『人文社会研究』名古屋市立大学教養部紀要第5巻、1959)、「天保時代におけるオランダ語教授の一例について」(第9巻、1964)、「『柳圃中野先生文法』について」(第14巻、1970)、「中野柳圃の『四法諸時対譯』について」(第17巻、1973)、「江間家所蔵のオランダ語文法書について――特に中野柳圃の『三種諸格』と著者不明の『助字要訣』について」(第18巻、1974) 等の一連の蘭文法研究があり、これらは『日本におけるオランダ語研究の歴史』(大学書林、昭和60) という一冊にまとめられている。しかし、この斎藤氏でさえも、これらの諸論考の中で、現代の「現在完了」の意識で以て当時の蘭文法を見ている。

杉本つとむの大著『江戸時代蘭語学の成立とその展開』Ⅰ～Ⅴ（早稲田大学出版部、昭和51～57）［本論では、以下『蘭語学』と略称す］は、＜蘭語学＞に関する第一の基本文献である。第Ⅰ巻は長崎の、第Ⅱ巻は江戸の蘭語学者の文法的著作の内容が、その実際の記述を追う形で以て考察されている。そこで取り上げられた蘭文典の執筆者は、中野柳圃・野呂天然・馬場佐十郎・吉雄権之助・吉雄俊蔵・新井白石・青木昆陽・野呂元丈・山路之徽・前野蘭化(良沢)・大槻玄沢・村山三才・桂川国瑞(甫周)・桂川国寧・大槻玄幹・宇田川玄随・宇田川玄真・宇田川榕庵・藤林普山・辻 蘭室・小関三英・高野長英・高 良斎・緒方

洪庵・橋本左内・鶴峰戊申・島本大受、そして、江戸期蘭語学の精華である天保・安政期のMaatschappij 社版 *Grammatica* と *Syntaxis* 関係の翻訳文典各種（大庭雪斎・原 梅南・矢野秀和・小原竹堂・遠田天籟・竹内宗賢・小川玄竜・可野 亮・香処閑人・飯泉士譲・高橋重威・伊東朴斎・伊藤圭介・柳川春三・その他訳者未詳の書）に及び、まさに網羅的と言ってよい。社会情勢や人物評伝に終始するものが多い中、この書は、当時の日本における蘭文法の構成や文法術語等の実体を、具体的に、しかも網羅的に知ることのできるほとんど唯一の研究書である。

本論の蘭語学関係における翻訳・著述文典の原文引用は、本書に収載されている場合はほとんどそれに拠った。しかし、本書においてさえも、現代英文法の眼で以って当時の和蘭文典の内容を判断しているところがある。また、日本の蘭語学の文典研究が主であるから、和蘭語原典の文法用語にまではさほど考究の筆が及んでいない。

更に杉本は、『国語学と蘭語学』（武蔵野書院、平成３）でも、33 頁にわたって代表的な著述蘭文典の文法用語をまとめている。中野柳圃の著作６冊の翻刻と影印も収載され、かの蘭語学の偉人の墨痕をこの眼で見る事ができる。

また、『蘭語学とその周辺』（日本語講座５；桜楓社、昭和 56）には高野長英に関する論考と文法用語比較一覧がある。高野長英の蘭文法は、当時の常識を大きく逸脱して《不定法》が Modus に含まれていない。この点を杉本は『蘭語学』で大いに邪しんでいたが、ここでもこの《不定法》の欠落が問題視されている。（ところが、実は、長英の《不定法》は Modus とは無関係の箇所で、しかも《不定法》とも呼ばれることなく言及されており、これについては本論の**第一章**にて取り扱った。）

文法用語の比較研究という点では、例えば、内容的には本論とは直接関係しないが、古田東朔「洋文典における品詞譯語の変遷と固定」にも、宇田川槐園（＝玄随）『蘭譯弁髦』(寛政５)から中根淑『日本文典』(明治９）までの蘭・英・国文典 34 冊における品詞名を比較した一覧表が収載されている。国語学の領域におけるこのような文法用語の比較考察は、特に品詞分類に関して強い問題意識と興味を示しているようである。

5.3. 英語学

英学史関係では、まず、幕末以来の英語関係の書籍を紹介したものとして、荒木伊兵衛『日本英学書誌』(昭和６)が挙げられる。 続いて、竹内 覚『日本英学発達史』(研究社 昭和８)、勝俣銓吉郎『日本英学小史』(研究社 昭和 11)が出る。

昭和 38 年の豊田実『日本英学史の研究』(千城書房)は、「英文法紹介及び研究の歴史」と題して、『諳厄利亜語林大成』(文化 11)以後の英文典の歩みの記述に一章を割いている。152～3 ページには、この日本最初の英和辞書と当時の和蘭語において用いられた文法用語とを比較対照した表がある。次いで、幕末から明治初年にかけての英文典が、表紙ないしは第一ページの写真入りで紹介されているが、文典の構成や、文法の内容および文法術語

に関する踏み込んだ記述はなされていない。

幕末から明治初期にかけての語学書の集大成のひとつは、昭和 37 年に大阪女子大学から出版された『大阪女子大学所蔵 日本英学資料解題』であろう。『諳厄利亜興学小筌』(文化8(1811))から『洋学運筆』(刊年未詳)まで全 294 巻、独・仏語学書も若干含まれ、綴字書・辞書・単語書・会話書・文法書・文範書・教科書・翻訳書・雑書各種を網羅する。解題中には文法用語の解説も随所に見られる。

明治・大正・昭和の英学の歩みは、『日本の英学 100 年』(研究社 1968)でその概略を知ることができる。「明治編」(井田好治)・「大正編」(大塚高信)・「昭和編」(安井 稔)の三部構成で、「明治編」は、＜英文法――紹介と研究＞と題して、文法術語の訳出と変遷に関するまとまった記述を持つ。

茂住實男『洋語教授法史研究――文法＝訳読法の成立と展開を通して』(学文社 1989)は、和蘭語から英語へと引き継がれた、漢文の句読法を応用しての洋語学習法の実体を、江戸時代からの一連の流れの中に立って解明している好著であり、江戸および明治期の和蘭語及び英語学習で用いられたテキストと文法用語への言及が各所にちりばめられている。

英文典の本邦初訳とされる『英文鑑(かがみ)』に関しては、杉本つとむ『英文鑑――資料と研究』(ひつじ書房、1993) に、本文の全影印とともに、著者による文法用語の詳しい論考がある。ただし、Modus の考察では《疑問法》と《許可様》に関して問題がある。

しかし、これ以外の『英文鑑』書に関する文献のほとんどは書誌の域を出ていない。例えば、勝俣銓吉郎『英文法事始』(上) [『英語青年』第 49 巻第 23 号 51-52 頁] がそうで、「内容」「Lindley Murray」「渋川之義」「書名の選定」「翻譯の動機」「術語の譯例」「＜英文鑑＞と＜英文範＞」をすべて含めても僅か 2 頁に過ぎない。その中の「術語の譯例」には主な文法用語が列挙されており、＜大体に於て今日慣用されてゐるものに大分接近して来ている＞とのコメントが加えられている。しかし、＜indefinite pronoun＞《寛指辞》・＜indicative mood＞《明説様》・＜imperative mood＞《分付様》・＜subjunctive mood＞《虚構様》などの、同時代のものの間に類似例を持たない特異な呼称を見ると、現行のものとかけ離れているというのが実感である。当時の蘭文典で使用されていた用語の方がよほど現代に近い[注11]。

《完了》という用語に関しては、及川 賢「英文法用語<完了>の変遷」(『英語教授学の視点』三省堂、1991、所収) という小論があり、明治の英文典における＜Perfect＞の訳語の種類を知ることができる。本論は、上述の佐藤良雄と同様、《完了》という用語の普及を嶋・畔柳(くろやなぎ)の Nesfield 文典翻訳に帰しているが、嶋が＜perfect＞に《完了》の字を充てたのは誤訳であったとしている。

5.4.独語学

日本における独逸語研究の流れを、ドイツ語学文学国際学会 (IVG) 東京大会記念展覧

会のためのカタログとして作成された『日本におけるドイツ語文化回顧展』(郁文堂、1990)にて追ってみると、文献・研究に関する記載が著しく文学のそれに偏る感があり、教科書、辞書およびドイツ語教育への言及はごくわずかであった。実際、文法用語の成立とその展開についての史的考察に関するまとまった研究報告を見出すのはなかなか困難で、実際に手にしたのはわずかに2冊である。しかも、それらで取り扱われた年代は昭和期後半という新しい時代のもので、明治期の情報は残念ながら得られないのが実情である。

そのひとつは、1955(昭和30)年、日本独文学会文法用語委員会から出された『ドイツ語文法用語』という14ページのパンフレットである。「あとがき」によると、<本委員会が目標としたのは、現在極度に混乱している用語をできるだけ整理し、学校文法の用語として適当と思われるものの推奨順位をきめることであった>。そして<1953年度大学教科書用図書目録(高等教科書協会編)「ドイツ語文法の部」に掲載されている教科書58冊について用語使用の実態調査を行なった。その結果、文法用語と見られる原語の項目280について813種の日本語の用語が行なわれていることが判明した>。この小冊子は、A,A',B,Cの4欄を設け、<A欄は推奨語、A'欄はこれに準ずるもの …B欄は、推奨はしないが、使用もまたやむを得ないと思われるもの、C欄は、用語整理の必要上、なるべく使用をさけたいもの、となっている>。そこで、例えば "Infinitiv" の項目を見ると、《不定詞》はA、《不定法》はB、《不定形》はCであるが、《不定法》も《不定形》も健在である。また "Perfectives Tempus" のA欄は《完了時称》であるが、C欄に追いやられた《完了形》のほうが、英語との関連から言ってもむしろ普通なのではなかったか。「あとがき」には<他の外国語、特に英語との関係を重視し、…時にはこの観点から、ドイツ語文法の慣用を大胆に無視>して、<補足語は英語の補語と紛らわしいから英語流に目的語とした>[下線は原文]とあり、英語との関連を全く無視していたわけではないことが知られる。しかし、この心使いも現在では無に帰している。

もうひとつは、昭和46(1971)年『ドイツ語教育の基本的諸問題』(ドイツ語教育研究会、南江堂)の第五編「新ドイツ語時代の教育・学習に対応する文法用語の改定」である。ただし、これは、それまでドイツ語教育において用いられてきた文法用語に関する調査分析とかではなく、このドイツ語にはこの日本語訳を充てるということを記述したに過ぎず、その日本語訳を充てる理由も定かではない。しかも<歯><歯茎><舌>のような言葉までもが含まれている。また、ここでは "Superlativ" の訳語が英語と同じ《最上級》となっているが、現行の教科書では実際《最高級》が多く用いられているなど、この "改定" は不徹底だったらしく(理由はわからない)、これらの改定用語と現行の文法用語との間には必ずしも一致しないものが見受けられる。

これ以外では、鈴木重貞『ドイツ語の伝来——日本獨逸学史研究』(教育出版センター、昭和51)の「独和辞書の嚆矢」「獨逸語学書の発達」や、宮永孝『日独文化人物交流史——ドイツ語事始め』(三修社 1993)等において、断片的に文法用語を垣間見ることができるに留まる。前者には当時の文法用語が若干収録されているが、しかし、後者の解題ではそ

れすらもなくなる。

(32)　多賀貫一郎直譯
獨逸国　文法書
セーフエル
明治十三年
十月出版　競英堂発行

同書は活版刷り、洋装本である。本の大きさは縦十八・三センチ、横十二・五センチ、厚さ一・七センチである。背は焦げ茶。総ページ三十八。奥付によれば、訳者は東京大学医学部の多賀貫一郎(山口縣士族)、発行人は、池之端仲町二十番地に住む蓮沼善兵衛である。

日本の独語学における文法用語はこの書を以てその歩みを始めたと言っても過言ではないにもかかわらず、これが、『日独文化人物交流史』における、独語学の草創期を形作ったSchäfer 文典の初訳に関する解題のすべてなのである。そして、本書に限らず、また、これは独逸語のみならず英語においても同様なのであるが、その内容的考察——即ち、その文法書がいかなる文法内容を持ち、いかなる文法術語が用いられているかという考察に筆が及ぶことは、決して頻繁ではないのである[注12]。

5.5. 先行研究の問題点

以上のことを鑑みるに、文法用語研究においては、蘭・英別々の用語考察はあっても、用語そのものに焦点を絞り、蘭・英・独語を一緒に扱っての比較考察はほとんど行なわれていないようである。これに対し本論が寄与できることがあるとすれば、それは、第一に、今回収集した原語と日本語による文法用語のデータであり、第二に、それを一覧表にすることにより、各年代間および各言語間における比較を行いやすくしたことではないかと思う。

日本の独語学は勿論、膨大な書誌的・人的研究を持つ英語においてさえも、文法用語そのもののデータ収集は必ずしも多くはない。よって、英語と独逸語に関しては、日本における翻訳・著述文典を自ら調査せざるを得なかった。それと同時に、できるだけ多くの和蘭語・英語・独逸語の原典にもあたって、動詞の法や時制等に関する術語とその定義および使用法を調査し、データを収集した。その際の調査対象は、基本的に国会図書館所蔵の蘭・英・独、および若干の仏文典に限った。これらはすべて文法書であり、リーダー、辞書類のデータはほとんど含まれていない。冊数は、和蘭語原典 40、同翻訳・著述文典 55(杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』所収の 42 種とそれ以外のもの 13 種)、英語原典 71、同翻訳・著述文典 182 [仏文典等 5 冊を含む]、独逸語原典 21、同翻訳・著述文典 86 である。書名等の詳細については巻末の「使用文法書」の項目にまとめてある。

この点、杉本つとむの『江戸時代蘭語学の成立とその展開』は例外的で、本書は第２巻は文法用語の考察に主眼を置き、しかもその第Ｖ巻には、総合的な文法用語一覧表が添えられている。和蘭語の同翻訳・著述文典の用語は専らこれを利用することができ、また本論における文法用語一覧表も、もとはこの表に触発されたものである。

ヨーロッパ語の文法史に関しては、本論中にての随時の引用箇所と、巻末の「資料および参考文献」を参照されたい。日本の文法用語だけでなく、原典における術語をまでも調査して表化したのは、例えば時制に関して、先行研究が皆一様に＜have＋p.p.＞（Perfect）と 単独の過去形（Imperfect）に対する訳語に疑念を表明するのみで、当時のこの２時制の意味用法が、原典の段階ですでに現代のものと違うのではないか、とは考えていないように思えたからである。

幕末から明治期にかけての洋語文法は大きな変動期を迎え、旧来の伝統文法と現代に通ずる新文法とが混在するカオス的状態を呈した。この新・旧文法の交替が、特に**第二章**のテーマに掲げた文法術語《過去》と《半過去》の用法を混乱させた主要な原因であり、同時に、後世の研究をして、この混乱の原因を当時の人たちの誤解と時代的限界に求めさせた原因でもあった。明治期における《過去》と《半過去》の用法的混乱は原典における定義用法の変化のためであり、この原典の変化に、日本の文法術語の動向は基本的に規定されている。それ故、日本の文法用語が変化する背景としてヨーロッパ本国の文法の動向を押さえておく必要性を感じたのである。これは、しかし飽くまでも背景なのであって、ヨーロッパ語の各品詞に関する、あるいは時制や話法に関する詳細な専門的分析のようなものは本論とは無縁であるし、もとより筆者の手に余ることである。ここではそのアウトラインを理解できればそれで十分である。

そして、和蘭語と英語、英語と独逸語を同時に比較考察する姿勢の少なさが、英語と和蘭語、および英語と独逸語の間で、Imperf.（ik hadde/ I had/ ich habe）と Perf.（ik heb gehad/ I have had/ ich habe gehabt）の用法が逆転的になるという現象への理解をなおざりにさせ、＜獨逸文典の多くが古風な用語を用いただけでなく、時には用語とその内容を反対に考えたり、容易なため誤解をしていた＞[注13] かのように考えさせたのであろうし、更には『和蘭語法解』は実は和蘭文典ではないのではないかとの疑いを、これまでの関係者各位に持たせなかった原因でもあるように思う。

このような理由から、和蘭語・英語・独逸語における文法用語の通時的・共時的比較研究は未開拓の分野であったと考えられ、この点において、本論文をまとめることに何がしかの意義もあろうかと思われるのである。

６．本論で使用した用語について

(1) 言語名の日本語表記：――凡例を参照。

(2) 医学、兵学、天文学等を総合した「蘭学」の中でも、外国語として和蘭語を学習し、

研究するものを、杉本つとむは特に「蘭語学」と規定している。本論は、杉本に倣って「蘭語学」の用語を使用する。「洋学」と「洋語学」、「英学」と「英語学」等の用法もこれに準ずる。

(3) 江戸期の蘭語学における動詞時制の用語は、文政(1828～29)11～12年の『繙巻(はんかん)得師草稿』を境に大きく二分される（**表 16**、161 頁）。よって本論では、『繙巻(はんかん)得師草稿』の前を「前期蘭語学」、『繙巻得師草稿』を含めた以後を「後期蘭語学」と称する。

「前期」は長崎通詞・中野柳圃の文法が馬場佐十郎・吉雄権之介・吉雄俊蔵らによって展開された時期で、化政文化期を中心に展開され、文法的には旧文法である。それに対し、「後期」は、Maatschappij(マートシカッペイ) の *Grammatica* を中心とした、主に安政から幕末期にかけての文法で、新文法の特徴を徐々に備えて来つつあるものである。高野長英『繙巻得師草稿』には、Perf.の時制と Inf.の扱い等に関してこの新文法の要素がすでに現れている。よって、これを「前期」「後期」の区切りとする。

(4) 本論で旧文法（あるいは伝統文法）と新文法と言う場合、**表 18**（202 頁）と**表 20**（212 頁）に鑑み、(天保1)1830年を境にして、それ以前を旧文法、これ以後の歴史比較言語学の洗礼を受けたものを新文法と呼ぶ[注14]。

旧文法の時制は、ひとつの現在(Praesens)・三つの過去(Imperfectum, Perfectum, Plusquamperfectum)・ひとつの未来（Futurum）によって構成される叉角的五分法 die begabelte Fünfzahl [フォーク型五分法]（**第二章注 3** [265-266 頁]）で、新文法のそれは完了・非完了による 6 時制である。前者では過去時の中心となる真の過去は Perfectum で、現在性を問題とされるのは「過去における現在」を表わす Imperfectum（単独の過去形）であるが、新文法においては逆に、Perfectum の方が「完成した現在時」と考えられるようになって現在時制に移動し、過去時制の中心は Imperfectum（単独の過去形）になる。

(5)原語の文法用語の表記

a) Modus 及び分詞

a)-1. 共通表記は羅典語名を使用する。例えば、Modus のことを、和蘭語では＜wijze＞または＜wijs＞、英語では＜Mode＞または＜Mood＞、独逸語では＜Weise＞と言うが、これらを本論中の表記においては＜Modus＞で以て代表させる。各 Modus 名に関しては次のようになる。

Indicativus (略記 Ind.)

Conjunctivus (Conj.) ; Konjunktivus (Konj.); Subjunctivus (Subj.)

Imperativus (Imp.) ;

Infinitivus (Inf.)

Participium (Part.)

a)-2. 和蘭語

【Modus】Wyze ; wijze ; wijs [第 3 形を話蘭語の Modus の術語の代表形とする]

【Ind.】 Onbepaalde wijs / wijze (Onbep.)

【Ind.】 Toonende Wyze

Aantoonende wijs (Aant.)

【Imp.】 Gebiedende wijs (Gebied.)

【Conj.】 Byvoegende Wyze 附説法

Bijvoegende wijs (Bijv.) 附説法

Aanvoegende wijs (Aanv.) 接続法

Wenschende Wyze 希望法

【Part.】 Deelwoord (Deelw.)

a)-3. 英語の術語はラテン語を使用するのが一般なので、a)-1.に準ずる。その他、次のものを英語の文法用語として使用する。

【Potential (Mood)】(Pot.)

【Conditional (Mood)】(Cond.)

a)-4. 独逸語

【Modus】Weise ; Art ; Redeform 表現形式 ; Redeweise 表現法 ; Aussageart 発言法 ; Aussageweise 発言法 ; Aussageform 発言形式

【Ind.】 Indikativ (Ind.)

Wirklichkeitsform 表真法、現実法

der Modus der Wirklichkeit 現実の話法

Anzeigungsweise 公示法

die anzeigende Weise / Redeweise / Aussageweise 公示法

die Anzeige=Aussage / Aussageweise 公示法

die bestimmte Aussage / Redeform 確実法

【Konj.】 Konjunktiv (Konj.)

Verbindungsweise 接続法

die verbindende Art / Redeform / Redeweise / Aussageweise 接続法

der Modus der Möglichkeit 可能法

Möglichkeitsform 可能法

die Abhängigkeitsweise 従属法

die unbedingte Aussage 不確実法

die ungewisse Redeweise 不確実法

die bedingungsform 不確実法

die Bedingweise 条件法

【Konditionalis】(Kond.)

Bedingform 条件法

Bedingungsform 条件法

eine bedingte Aussage　条件法
eine bedingende Aussage 条件法
die bedingende Form　条件法
Wunschform　希望法
Optativus (Opt.) 希望法

【Imp.】 Imperativ (Imp.)
Befehlsweise/ -form　命令法
Die befehlende Redeform / Aussageweise　命令法
der Modus der (subjectiven) Nothwendigkeit（主観的）必要を述べる法
Gebietungsweise　命令法
die gebiedende Art　命令法
Heischeform　命令法
Verbothweise　禁止法

【Inf.】 Infinitiv (Inf.)
Nennform　名称法
Dingform　名詞形
die unendige Weise　無限法
die unbestimmte Art　不確定法

【Part.】 Partizip (Part.)
Beiform　副形（形容詞形）
Eigenschaftsform　形容詞形
Mittelwort (Mittelw.)　[動詞と形容詞の]中間詞

b) 時制

b)-1. 各言語共通に用いる時は羅甸語名を使用する。

Praesens (Praes.)
Imperfectum (Imperf.)
Perfectum (Perf.)
Plusquamperfectum (Plusquamperf.)
Futurum (Fut.)
Futurum I (Fut. I)
Futurum II (Fut. II)
Futurum exactum (Fut. exactum)

b)-2. 和蘭語

【Praes.】 de tegenwoordige tijd (tegenw.) 現在
de tegenwoordige onbepaalde tijd (tegenw. onbep.)　現在不定

【Imperf.】 de onvolmaakt verleden(e) tijd (onvolm. verl.)　完成しない過去

de onvolmaakt voorledene tijd (onvolm. voorl.)　完成しない過去
de onvolkomen(e) verleden(e) tijd (onvolk. verl.)　完成しない過去
de 1e betrekkelijke verleden tijd (1e betrek. verl.)　第一関係過去
de voorledene onbepaalde tijd (voorl. onbep.)　過去不定
【Perf.】　de volmaakt(e) verleden(e) tijd (volm. verl.)　完成した過去
de volstrekte verleden tijd (vols. verl.)　孤立過去
de verleden(e) tijd (verl.)　過ぎ去った時
de volkomen(e) verleden(e) tijd (volk. verl.)　完成した過去
de volmaakte Tyd (volm.)　完成した時
de volmaakt voorleden tijd　完成した過去
de tegenwoordige volmaakt tijd (tegenw. volm.)　現在完成
de zamengestelde tegenwoordige tijd　複合現在
【Plusquamperf.】 de meer dan volmaakt verleden tijd (meer dan volm. verl.)
超完成過去
de 2e betrekkelijke verleden tijd (2e betrek. verl.)　第二関係過去
de meer als volkomen verleden tijd　超完成過去
de meer als volmaakte Tyd　超完成時
【Fut.】　de toekomende tijd (toek.)　未来
de 1e toekomende tijd (1e toek.)　第一未来
de toekomende onbepaalde tijd (toek. onbep.)　未来不定
【未来完了】 de 2e toekomende tijd (2e toek.)　第二未来
de betrekkelijke toekomende tijd (betrek. toek.)　関係未来
de zamengestelde toekomende tijd　複合未来
de volmaakt toekomende tijd (volm. toek.)　完成未来
【仮定法未来】de voorwaaldelijke tijd　仮定時
de 1e voorwaaldelijke tijd　第一仮定時
de onbepaalde tijd　不定時
de onderstellende toekomende tijd　推量未来
de onderstellende Tyd　推量時
de verledene tijd van den onvolmaakt toekomende tijd
完成しない未来時の過去
【仮定法未来・完了】de 2e voorwaaldelijke tijd　第二仮定時
de zamengestelde voorwaaldelijke tijd　複合仮定時
de 2e onderstellende toekomende tijd　第二推量未来
de verledene tijd van den volmaakt toekomende tijd 完成未来の過去時

b)-3. 独逸語

【Praes.】　Gegenwart (Gegenw.)　現在

die gegenwärtige Zeit (die gegenw.Z.)　現在
die währende Gegenwart　引き続きの現在
die unvollendete Gegenwart　完成しない現在
die unbegrenzte Gegenwart　非限定現在

【Imperf.】 Mitvergangenheit　共過去（または同時過去）
die fast vergangene Zeit　ほぼ過ぎ去った時
die unvollkommene Zeit　完成しない時
die kaumvergangene Zeit　ほぼ過ぎ去った時
die jüngst verflossene Zeit　過ぎ去ったばかりの時
Vorgegenwart　前の現在
Präsens der Vergangenheit　過去の現在
die währende Vergangenheit　継続過去
die unvollendete Vergangenheit　完成しない過去
die dauernde Vergangenheit　継続過去
die unbegrenzte Vergangenheit　非限定過去
die 2te Vergangenheit (die 2te Verg.)　第二過去
die 1ste Vergangenheit　第一過去

【Perf.】 Vergangenheit (Verg.)　過去
die vergangene Zeit　過ぎ去った時
die völlig vergangene Zeit　完全に過ぎ去った時
die 1ste Vergangenheit (die 1ste Verg.)　第一過去
die 2te Vergangenheit (die 2te Verg.)　第二過去
die Präteritum der Gegenwart　現在の過去
die vollendete Gegenwart 完成した現在

【Plusquamperf.】 Vorvergangenheit　前の過去
die längst vergangene Zeit　とっくに過ぎ去った時
Präteritum der Vergangenheit　過去の過去
die vollendete Vergangenheit　完成した過去
die völlig vergangene Zeit　完全に過ぎ去った時
die 3te Vergangenheit (die 3te Verg.)　第三過去

【Fut.】 Zukunft　未来
die zukünftige Zeit　未来
die gewiß zukünftige Zeit　確実未来
Nachgegenwart　後の現在
Präsens der Zukunft　未来の現在
Futurum der Gegenwart　現在の未来

die unvollendete Zukunft　完成しない未来
die dauernde Zukunft　引き続きの未来
das 1ste Futur[um] (das 1te Fut.)　第一未来
Futur[um]　第一未来
【未来完了】Vorzukunft　前の未来
Nachvergangenheit　後の過去
die vollendete Zukunft　完成した未来
die zukünftig verflossene Zeit　未来の過ぎ去った時
das 2te Futur[um] (das 2te Fut.)　第二未来
Futur[um] II　第二未来
Futurum exactum (Fut.exactum)　綿密未来
Präteritum der Zukunft (Prät. der Zukunft)　未来の過去
【仮定法未来】Nachzukunft　後の未来
die bedingte zukünftige Zeit　条件未来
die unvollendete 1ste Bedingungsform 完成しない第一未来
【仮定法未来・完了】die vollendete 2te Bedingungsform　完成した第二未来

注

1）大槻玄沢『蘭学階梯』巻下「譯章第十八」(天明8)

2）寄山は紀州和歌山の人で、Karl Käppen に従って幕末に独逸に留学している（丸山國雄『日獨交通資料』第三集「我が国における獨逸学の勃興」16 頁；鈴木重貞『ドイツ語の伝来』81 頁)。彼は当時の日本の外国語教育のあり方について自著の文法書等で批判しており、特に「直譯法」の弊害と母国語の軽視に関するその言は、現代の日本においても考慮すべき点を多々含んでいる。ここに引用されたブリンクリ氏の序は第三章注 33（379 頁）にある。

3）古田東朔「洋文典における品詞譯語の変遷と固定」(『香椎潟』第三号、福岡女子大学国文学会）によると、品詞名に関して言えば、＜現在使用してゐるやうな品詞の名称が刊本で大体一定してきたのは、安政二、三、四年頃からである。……それらの訳語は、…英文典の方にも採られていった＞(17 頁)ということである。

また、茂住實男も『洋語教授法史研究』(学文社、1989）の「はしがき」の中で、＜わが国が英語研究・教育において英文法を重視するようになった起源は、遠く蘭学の時代にまでさかのぼる。蘭学研究の過程で、文法を研究しその知識を駆使してオランダ語を翻訳するという文法＝訳読法が成立するのであるが、その教授・学習法は、わが国の洋学研究が蘭学（時代）から英学（時代）へと移り変わるとともに、英語教授・学習の方法としても引き継がれ、明治前期の英学の隆盛に多大な貢献をした＞と述べている。

4）松田清『洋学の書誌的研究』臨川書店、平成 10、296 頁。筆者が初めてこの疑問を抱いたのは、「明治時代の洋語文典における日本語――蘭訳英文典『和蘭語法解』と洋語文典の系譜」（『文学研究論集』筑波大学比較・理論文学会、1996）においてである。

5）H.Jellinek, *Geschichte der neuhochdeutschen Grammatik.* II. § 461.

6）K. W. L. Heyse, *System der Sprachwissenschaft.* Nach dessen Tode herausgegeben von DR. H. Steinthal. Berlin, 1856. 427 頁。

7）H.Jellinek, *Geschichte der neuhochdeutschen Grammatik.* II. § 550：――伝統的な羅典語文法では＜Die gewöhnliche Definition des Imperfekts lehrte, daß es eine angefangene, aber noch nicht vollendete Handlung bedeute. Man scheint dies auch so aufgefaßt zu haben, daß die Handlung in die Gegenwart hereinreiche, und dadurch zu der Meinung gekommen zu sein, daß die durch das Imperfekt ausgedrückte Vergangenheit der Gegenwart noch näher liege die Zeit des Perfekts.＞（Imperfekt は普通、開始されたがまだ完成されていない行為を表わすものである。その行為は「現在」の領域にまで到達していると考えられていたので、Imperfekt で以って表現される過去の方が Perfekt の時よりももっと「現在」に近い、ということのようである）

8）嶋文次郎の書は、「例言」（明治29年（1896）12 月）に＜此英文典ノ原本ハ J.C.Nesfield 氏ノ編述ニ係ル英文典＞ と言われているように、Nesfield の翻訳である。この Nesfield 文典が明治 30 年代の日本の英語学に与えた影響は決定的であった。その特徴ある時制システムは文法書の時制記述を一変させた。それは、原著を示さずともそれが Nesfield のものであることを知らしめるに充分であり、**表 17**（195 頁）で、明治29年（1896）『英文法教科書』（共益商社）に始まり、以下、明治30年（1897）6 月『英文法規範』（中村宗次郎）、翌31年（1898）の四つの邦語の英文典――4 月『新式実用英文法講義』（井上歌郎）、4 月 嶋文次郎『邦文英文典』、10 月『英語学大全』（松島剛・星野久成）、10 月『邦語英文典』（畔柳都太郎）へと続く流れを形作っている。そして、嶋文次郎訳の登場は、英文法における《半過去》＝Perf.という文法術語に終焉をもたらすことになる。嶋文次郎の《現在完了》については佐藤良雄の論文があるのでそちらに譲るが、これを以て英語界の Perf.は《完了》の時代に入ることになる。

しかし、Nesfield の場合問題なのは、三時（現在・過去・未来）と四体（不定・進行・完了・完了進行）を組み合わせるため、どちらを先にするかで名称が違ってくることである。**表 17**（195 頁）を見る限りでは、《体》が先で《時》が後になる場合のほうが多い。それ以前の Swinton 等の場合も同様で、原語が＜Present Perfect＞なのに、それを逆転させて《十分現在》のようにするのが明治の翻訳の主流である。しかし和蘭語と独逸語の原語はこの語順であり、英語の訳語が原典の語順と往々に逆転するのは、蘭語学以来の訳語の伝統に従っているからであろう。

今回調査した嶋文次郎の文典は 11 月出版の再版であるが、ここでは《現在完了》《過去完了》のような言い方は実は滅多に使われず（前者が 1 回のみである）[§ 177]、第五章「動詞」の部では＜不定体ノ現在、過去、未来＞[§ 174 及び § 185] のように《体》が先行し、

定まった文法術語の形を取っていない。しかもこの再版本は動詞の活用が扱われている 96 頁から 119 頁までが切り取られて脱落してしまっているので、この部分の用語の調査が不可能である。よって、従来の語順を逆転させた《現在完了》が明確にその姿を現すのは、**表 17**（195 頁）では嶋の再版より 1 か月早い畔柳からになっている。

この《現在完了》は、英語と全く同時期に国文典にも導入せられた。嶋文次郎(明治31.4.)と同年同月同書肆から出版された、三土忠造『中等国文典』がそれである。福井久蔵は『日本文法史』第三十八節を三土文典の解説に充て、＜三土氏の文典出でゝより、教科書の体裁一変し、毎学年重複法を用ひ、次第に疎より密に入る方針に随ひ、且練習問題を多く加ふる風大に行はれたり＞(315 頁)と絶賛している。福井氏の挙げている三土文典の長所はまさに当時の洋語文典の在り方であり、実際＜次第に疎より密に入る方針＞云々などは、明治の洋語文典の序文や凡例等の中にしばしば見出すことができる。

ところが、佐藤良雄によると、三土忠造の《完了》にはふたつの問題点があるらしい。ひとつには、同年同月同書肆出版かつ同用語使用にもかかわらず嶋と三土が互いに没交渉のように見えることであり、ふたつには、《現在完了》《過去完了》《未来完了》という文法用語を国文典において初めて用いたにもかかわらず、芳賀矢一が＜術語分類等の上に独創の見解を立てられたるふしいといと窄なり＞と評していることである（「文典用語の相互影響」日本大学人文科学研究所研究紀要第四号、昭和 37、42-44 頁)。

これはあるいは、嶋文次郎が＜不定体ノ現在、過去、未来＞[§174 及び§185] のように《体》を先行させた言い方をしたことにあるのかも知れない。「不定体ノ現在」「完了体ノ現在」ならば確かに＜独創の見解＞ではなく、Perfect に対する訳語のバリエーションに《完了》がひとつ加わっただけの従来の翻訳法だからである。

佐藤は《完了》の導入を＜画期的な事業＞と評価されているが、結局この二点について確かなところはわからないようである。岡澤鉦次郎に見るように、当時の国文典関係者は実際よく英語や独逸語の文典を研究していたから、新訳の術語を無視したとあっては、佐藤ならずといえども、確かに訝しく思わざるを得ないであろう。しかし、他にこの点を疑問に思う者はいないのか、例えば水野賢も、この芳賀の序文について＜文法学説としての新味はないけれども、教授方式としては、まことにすぐれたものであるということを、芳賀はまさしく認めた＞と評し、芳賀の無視を問題視していない（『文法研究史と文法教育』明治書院、1991、22 頁)。

9）西周（あまね）曰く、＜國語の法則研究には、國語に精通するばかりでは駄目で、日本で漢字を用ゐる以上漢字に精通する必要があり、又品詞分類等の點では、西洋のものを参考しなければならないから、西洋の語学に通じなければならない。それも一國語だけでは不充分で、英獨伊仏は勿論、拉丁ギリシャの語法にも通じ、更に歐州各國語の母語たるサンスクリットにも通じなければならない＞。この誠に壮大な気概を表明した言葉は、岩淵悦太郎の「明治初期における文法書編纂について」(『國語・國文』第十一巻第二号、昭和 16）の中で言及されているが、実際、明治34年（1901）に『帝国文学』に掲載された三論文――「動詞の

<とき>に就て」(佐々政一)、「文典の時の論」(岡澤鉦次郎)、「動詞の法につきて」(松平圓次郎)を読むと、当時日本で受容されていた英独文典の内容的ポイントが比較叙述され、洋語文典以上に洋語の文法的動向がわかりやすいほどである。

10) 古田氏には、明治初期洋風文典の原典を考える一連の論考がある。西周『百学連環』『知説』、中根淑『日本小学文典』、田中義廉『小学日本文典』、物集高見『日本文語』(以上『解釈』、昭和33〜35)、古川正雄『絵入り知慧の環』(『香椎潟』第4号、福岡女子大学国文学会、昭和37)、および「日本文典に及ぼした西洋文典の影響——特に明治前期における」(『文芸と思想』第16号、福岡女子大学文学部、昭和33)などである。これらは、ある特定の文法事項に関しての詳しい考察ではないのだが、Maatschappij から Pinneo, Quackenbos 等に至る文法書の全体的構成やそれぞれの特徴を知ることができる。

11) 本書の論考の冒頭で、<これまで、『英文鑑』に言及し、解説した論考は、勝俣銓吉郎先生の「英文法事始」/『日本英学小史』をはじめ、豊田実『日本英学史の研究』、竹村 覚『日本英学発達史』、重久篤太郎『日本近世英学史』など、まったくないわけではない。そのなかでも、『日本英学発達史』が史的考察を加えて、その存在意義を記述している点で特筆できる労作であろう。しかし通覧すると、成立の事情や訳者の渋川六蔵のことなどについての考察に留まって、内容への考察はほとんどおこなわれていない>(583頁)のように言い、文典の内容自体に関する研究の弱さを指摘している。

12) 大阪大学言語文化部からは、『日本におけるドイツ言語文化受容に関する書誌的総合研究』(平成6)が出されており、「データ・ベースの部 1.学習」で、明治初年の宮口高敬『獨逸初学必携』から昭和27年の相良守峯『新独和辞典』に至るまで、その著者、書名、発行年、発行者、所蔵機関を一覧することが可能である。ただしこれは一種の目録であって、その内容に関する記載は残念ながら全くない。

13) 佐藤良雄「文典用語の相互影響——特に動詞過去の用語について——」(日本大学人文科学研究所『研究紀要』第4号、昭和37、59頁)。ところが、江戸期の翻訳英文典である『英文鑑』(天保11)では、和蘭語と英語の Perfect と Imperfect の用法的な「ずれ」が正しく認識され、それへの言及がなされているのである(第二章第三節3. [230頁])。明治期では、嵜山元吉が英独双方の文典を著して、この2時制に関する英独間の相違を明示し、さらに日本語と比較考察する態度を見せている(第二章第四節4. [257頁])。

しかし、このような比較的言語学的態度が見られるのは、物集高見の言葉を借りれば(「国文叢話」;『国学院雑誌』第一巻所収、明治28)、<国語などのことはすこしも辨へざりし><語などハいかやうにてもあれ、その意にだに聞ゆれば、よしと思>う<洋文よみ>——即ち洋語学者ではなく、むしろ洋語文法との対峙を迫られた国文典関係者の方であるように思われる。<日本文法家の難渋する問題の一つ>である「時」の概念を扱った岡澤鉦次郎「文典の時の論」(『国学院雑誌』第七巻、明治34)では、英語と独逸語、更に仏蘭西語、伊太利語、羅典語、希臘語、サンスクリット語までが扱われ、洋語の時制の用法を詳しく分析している。また、同じ明治34年、岡澤に一歩先んじて論陣を張った佐々政一は、「動

詞の<とき>に就て」(『帝国文学』第七巻第四)で、英語の Perfect と Preterit は <今日の慣用より見れば彼と此と全く顛倒して用ゐられた…>云々と言っている(第二章注 61[279頁])。この2時制の用法的逆転に関するこのような言は、明治期の英文典からはついぞ聞かれないものである。

14) 語学史的には、J. Grimm の *Deutsche Grammatik* 第一巻が発行された1819(文政2)年が新時代の始まりとされるが、本論の表中では1830年代にならないと新傾向が明白に現れて来ない。1819 年(『蘭学事始』の 4 年後)というのは Rudolf von Raumer の時代区分で(*Geschichte der germanischen Philologie vorzugsweise in Deutschland.* München, 1870)、彼は[1]15 世紀末から 17 世紀後半、[2]1665-1797 (Codex argenteus からロマン主義まで)、[3]1798-1819(ロマン主義から Grimm の *Deutsche Grammatik* 第1巻まで)、[4]1819 以後、の 4 期分類を提唱している(W. Vesper, *Deutsche Schulgrammatik im 19. Jahrhunderts.* Tübingen, 1980. 94 頁、注 11)。Rudolf von Raumer については、H. Arens, *Sprachwissenschaft.* 1969. 238-242 頁参照。

第一章　《原形》と《不定法》

序節　何故英語の《原形》はドイツ語では《不定法》なのか

この、序章のタイトルとして提示した疑問の出発点は、ドイツ語履修学生からしばしば発せられる「なぜドイツ語では動詞変化のもとの形を原形ではなく不定法（または不定詞、不定形とも）と言うのか」という素朴な疑問である。現代のドイツ語文法の教本には《原形》という用語は基本的には存在しない。英語の《原形》に相当するものは、《不定法》・《不定形》・《不定詞》などと呼ばれるのである。フランス語も同様に《不定法》である。

この場合、不定法とか原形とかいうのは、「ひとつの動詞が持つ種種の変化形のもとの形」——すなわち「辞書の見出し語となる語形」という意味である。従って、不定法とは何か、原形とは何か、あるいは英語で言う原形不定詞はどうなるのか、というような語学的考究は本章とは全く無縁であり、飽くまで、江戸期および明治期の日本人は、和蘭語・英語・独逸語の動詞の持つ多彩な変化形の発するもともとの形を何だと考えたのか、という点に絞って、以下、論を展開する。

杉本つとむは「原形の概念は柳圃ですら無理だったのであろう」という一文を記している[注1]。これは、中野柳圃の『三種諸格』の考察中にある言であるが、杉本は、「現在完了」(Perf.) とこの「原形」の二点を、自ら蘭詩をものすほど和蘭語に習熟した柳圃の文法的弱点だと考えているようである。しかし、これは違うのではないか。文法はいつの時代も同じではない。当時の文法は現代文法とはその内容を異にする。その好例が本章のテーマの用語のひとつである《不定法》で、この時代の《不定**法**》は文字通り Modus（《**法**》《話**法**》《説話**法**》などと訳される）に属する（勿論、現代文法では属していない）。しかもこの《不定法》は、蘭語学の最初期に訳出された用語で、結局、独逸語・仏蘭西語等では現代までほぼ二世紀を生き残って使われ続けている。

《原形》に関しても同じことが言える。そもそも当時の文法に現代英文法と同じ「原形」という考え方があったかどうか。例えば、希臘語においては、辞書に収載される動詞の見出し語形は直説法能動態１人称単数現在であり、この語形は法・態・人称・数・時制の制

約を受けている。この制約から自由になった形が、いわば原形であり不定法であろう。では、動詞をこれらの制約から解き放った形で見出し語とするという考え方は、いったいいつ頃から生じたのか。蘭語学の時代にすでに存在していたのか。幕末の英語学ではどうか。明治の独語学には見られるのか。

実を言えば、江戸期の蘭文法関連の書物中に《原形》という術語は現れない。しかし、それは、動詞の諸変化のただひとつのもとの形を原形にするという考え方が「誤解」「錯覚」されたからではなく、原形というものが、当時の蘭文典になかったからではないか。日本の洋語学は、それが和蘭語であろうと、英・独・仏語であろうと、実に原典に忠実なのである。もし原形というものが原書の蘭文典に書かれていたなら、日本の蘭語学者がそれに言及しないはずはない。しかし、**表5**（42頁）を見る限り、原形という言葉は全く現れてこないのである。江戸時代の蘭語学者は、皆揃いも揃って、原形が理解できなかったのか。そんなことが果たしてあり得るだろうか。これはやはり、原形に相当する和蘭語が原書にはなかったからだと考えたほうが自然なのではないか。そして、**表3**（39頁）の調査結果は、原書において原形を意味する和蘭語そのものが欠落していることを裏付けるものである。

ところが、維新前夜の1867（慶応3）年という刊年を持つ Quackenbos の英文典に、この原形――すなわち<Root>の文字が、突然出現するのである[注2]。Quackenbos は、幕末から明治初年にかけて大学南校（現東大の前身）系列で主に使用された英文典である。和蘭文典には原形がなくて、英文典にはある。しかも**表12**（111頁）を見ると、独逸語にも見当たらない。これが、現代において、動詞変化のもとの形のことを英語では《原形》と言い、ドイツ語（仏語・西語等においても）では《不定法》と呼ぶ原因なのではないか。

本章では、《原形》と《不定法》という文法用語の成立事情を追いつつ、「ひとつの動詞が持つ種種の変化形のもとの形」に関する呼称が、英語と独逸語の間で何故相違しているのか、その原因を考察する。

第一節　和蘭語における de onbepaalde wijs

1. 和蘭語原典における動詞変化の基本形は何か

1.1. 規則動詞の過去分詞の場合

現代の英語教育では、過去形・現在分詞・過去分詞は、いずれも《原形》<Root>をもとにして作ると教えられる。**表7**（84 頁）において、<Root>という用語は慶応(1867)3年の Quackenbos に初めて現れ、それを《原形》と呼んだ最初の人物は、**表6**（79 頁）によると、明治(1884)17年にスイントン文典を翻訳した斉藤秀三郎である。

ところが、和蘭語の過去形・現在分詞・過去分詞の基本となるのは《原形》ではない。江戸期の蘭文典では、これらの変化形形成の際の基本部分として、動詞の根幹部、直説法能動態一人称単数現在、不定法、の３種が考えられている。

まず、分詞は何から作るかと言うことに関してであるが、現在分詞と過去分詞とではその基礎部分が異なっている。

Grammatica に拠ると、規則動詞の<het lijdende (または) of verledene deelwoord>［受動または過去分詞］は、

> ...het tweede door plaatsing van *d* of *t* achter <u>het zakelijk deel des werkwoords</u>, en voorvoeging van *ge* ....　（§137）
>
> 第二の［過去分詞］場合は、<u>動詞の根幹部</u>の後ろにｄかｔを置き、前に ge を接続する。

ことによって形成される。この場合の基本部分は<het zakelijk deel des werkwoords>「動詞の根幹部」であるが、これは、恐らく『和蘭文語凡例』(安政(1855)2)において大庭雪斎が《活体分》と訳したところの、現代で言う「語根」のことではないかと思われる。蘭語学が大輪の花を咲かせたこの幕末の安政期においては、蘭文典と言えば、それは Maatschappij（マートシカッペイ）<文社先生>社版の *Grammatica*（「ガランマーチカ」）(1822)（文政5）とほぼ決まっていた[注3]。『和蘭文語凡例』は、『挿譯俄蘭磨智科』等と同じくその翻訳文典である。「語根」に関しては、他の文典にも、それぞれ<een bloote vorm>[裸の形]、<de stamvorm>[幹の形]、<wortel>［根］という用語が見られ、Maatschappij のこの<het zakelijk deel des werkwoords>の意味するのと同じものを指していると考えられる[注4]。

表1. 蘭語学における Modus の訳語

年代	書名	Modus	Inf.	Ind.	Vragende wijs	Vermogende wijs (Potential mood)	Conj./ Subj.	Imp.	Inf.	Part.
1777(安永 6)以後（天明・寛政・享和期）	作文必要譯書須知 属文錦嚢	五法		1.直説法 直説様	2.問叩法 疑問法		3.分註法	4.使令法	5.不定法 普通法	
	九品詞名目	四法		1.直説			3.分註 分注	2.使令	4.普通	（以下Ⅰ品詞）動静詞
1805（文化 2）	四法諸時対譯	四法		1.直説法			3.死語法	2.使令法	4.不限法	不断法（四法之外）
1810（文化 7）	蘭語九品集	四法		1.直説			3.分註	2.使令	4.不限	動静詞
1811（文化 8）	和蘭文学問答	wijze		1.直説法			3.分註法 希説法	2.使令法	4.普通法 ★ 終説法	動静詞
1812（文化 9）	九品詞略	五法		1.直説法	4.叩問法		3.分註法	2.使令法	5.不定法	分析詞
1813（文化 10）	助字要訣（英？）	活語ノ法		1.顕法		2.威法	4.第一結法 5.第二結法	3.使令	6.不限法	
1814（文化 11）	和蘭文範摘要			1.直説法			3.分註法	2.使令法	4.不定法	同分詞 分動詞
	訂正蘭語九品集			1.直説法			3.死語法 分註法	2.使令法	4.不限法	動静詞
	六格前編			—‥			—‥	—‥	—‥	袴詞
1815（文化 12）	和蘭語法解（オランダごほうけ）（英？）	活言法 文法 五法		1.直説法	7.疑問法	2.許可法	3.附説法 4.第二附説法	5.使令法	6.不定法	分言
			8.不無法			9.不有法				
1816（文化 13）	蘭学梯航	続文四法 文法四体		1.Aantoonende wijze			2.Aanvoegende wijze	4.Gebiedende wijze	3.Onbepaalde wijze	Deelwoord
1815～27（文化 12～文政 5)の間？	和仏蘭対譯語林			1.直説法			2.分注法	3.使令法	4.普通法	動静詞
1824（文政 7）	蘭学凡	四法		1.直説法 直接法	（附）諮問法		2.接続法	3.使令法	4.不厳法	分領詞
（文政年間？）	和蘭属文錦嚢抄	属文五法		1.直説法	2.問切法		3.分註法	4.使令法	5.不定法	
1828～29？（文政 11～12？）	繙巻得師草稿（国会図書館本）	四法		1.直説法	4.疑問法		2.附説法	3.使令法	———	（以下品詞外）分言
（文政～天保？）	小関三英の断片 3 葉	四様		1.明説様			2.未定様	3.吩付様	4.寛説様	
1840（天保 11）	英文鑑（かがみ）（英）	五様		1.明説様		2.許可様	4.虚構様	3.分付様	5.寛説様	
（安政年間？）	四格十品弁解	動詞法	1.不定法	2.直説法			4.附説法 附接法	3.使令法		分詞
1855（安政 2）	和蘭文語凡例	法	1.不定法★	2.顕示法			4.疑示法	3.命令法		判辞
1856（安政 3）	挿訳俄蘭磨智科	法	不定法（フジャウ）	直説法						分詞
	蘭学獨案内	四法	1.不定 ★	2.直説			4.附説	3.使令		分字
1857（安政 4）	和蘭文典便蒙	法	1.寛用	2.直説			4.虚構	3.吩付		
	和蘭文典字類	法	1.不定法	2.直説法			4.疑問法	3.命令法		分詞

（表1－1）

年代	書名	Modus	Inf.	Ind.	Vragende wijs	Vermogende wijs (Potential mood)	Conj./ Subj.	Imp.	Inf.	Part.
1864（安政 1）	仏語明要（仏）			直説法			附属法	使令法		分詞
1866（慶応 2）	洋学須知	法	不定法	直説法			疑説法	命令法		分詞
1868（明治 1） ※[成立は安政 4 年]	洋学指針　蘭学部	四法	1.不定　★ （原形としても）	2.直説			3.附説	4.使令		分言
1870（明治 3）	明要附録（仏）						附属法 約束法 (Conditional)	使令法		

★印は原形としての用法を持つものを示す。数字は Modus の列挙順位を示す。
『和蘭語法解』と『助字要訣』を英文典とすることについては、附録「『和蘭語法解』はオランダ語の文法書か」を参照のこと。

（表１－２）

1.2. 現在分詞の場合

一方、<het bedrijbende of tegenwoordige deelwoord>［能動または現在分詞]の方は何を基に作られるかというと、*Grammatica* では、

> Het eerste wordt gevormd door achtervoeging van *de* achter de onbepaalde wijze.... (§137)
>
> 第一の［現在］分詞は、不定法の後ろに de を付けることによって造られる。

のように説明している。ここでの基本部分は《不定法》である。この現在分詞の形成法は現代のドイツ語教本でも普通に見られるもので、ドイツ語の場合は、《不定法》に<de>ならぬ<d>を接続することによって現在分詞を形成する。

1.3. 規則動詞の過去形の場合

では、規則動詞の過去形は何から作るかというと、*Grammatica* (文政5 1822)と、それから24年後の *Rudimenta* (弘化3 1846) とでは、その作り方が異なっている。前者では、規則動詞の過去分詞と同じく<het zakelijk deel des werkwoords>「動詞の根幹部」に<de>または <te> を付けて作られるが、後者では「動詞の単数現在形」を基にして形成されるのである。

> In het voorbeeld der vervoeging van het Gelijkvloeijend Werkwoord *antwoorden* heeft men gezien, dat *de eerste betrekkelijke verledene tijd* gemaakt wordt door bijvoeging van de..., bij het enkelvoud van den tegenwoordige tijd.... (*Rudimenta*. XLIV. 99 頁)
>
> "antwoorden" という動詞を見ればわかるように、第一関係過去時[現代文法における過去形]は、動詞の単数現在に<de>という接尾辞を附けることによって作られる。

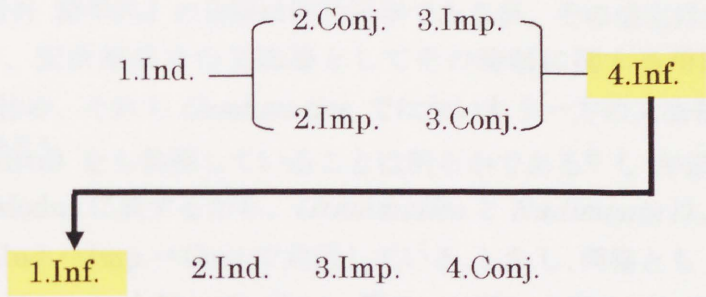
1.4. 動詞の三要形の筆頭は何か

1.4. 1. <te>+Inf.と <te>のない Inf.

では、現代英文法で原形・過去・過去分詞という所の、いわゆる動詞の三要形の筆頭は何になっているか。

表1（31頁）を見ると、天保期頃を境にして、ひとつの変化があることに気づく。それ

は、四法の配列順序の変化である。左肩に付した数字を見ると、中野柳圃以来 Ind.に始まり Inf.に終わっていたのが、『四格十品弁解』を境にして Inf.が筆頭に挙げられるようになる。即ち、次のように変化したのである。



この順序の変動は何を意味しているのか。蘭語学最期の著作『洋学指針 蘭学部』には、動詞の基本形に関して次のような記述がある[注5]。

		不　定	現　在	半　過	所　分
離合	近カヨル	aan te komen	hij komt aan	hij kwam aan	aangekomen
固着	用　フ	te gebrúiken	men gebrúikt	men gebrúikte	gebrúikt

《離合》《固着》とは、現代ドイツ文法で言うところの分離・非分離動詞である。《半過》は《半過去》[＝Imperf.]の略で現代の過去形、《所分》は正しくは《所分言》[＝受動分詞]と言い、過去分詞を意味する。問題は、ここで《不定》と呼ばれている＜aan te komen＞・＜te gebrúiken＞で、この<te>の付いた《不定法》の位置は、まさに英語の《原形》のそれに相当している。

Inf.を Modus と動詞の三要形の筆頭に置く――これは即ち、Inf.を「動詞変化のもとの形」と見なすという考えの表れではないだろうか。事実、**表 1** (31 頁) で Inf.の位置が第一位に変化したのと同時期のある英文典の著者は、＜動詞の意味の本質を含んでいる Inf.は、動詞のあらゆる屈折語尾が付加されるべき、字義通りの Root であるので、Modus の筆頭に置かれるべきだ＞と主張している。

> The substantive form, or, as it is commonly termed, *infinitive mood*, contains at the same time the essence of verbal meaning, and the literal ROOT on which all inflections of the verb are to be grafted. This character being common to the infinitive in all languages, it [this mood] ought to precede the [other] moods of

verbs, instead of being made to follow them, as is absurdly practiced in almost all grammatical systems.—*Enclytica*, p.14.

(G.Brown, *the Grammar of English Grammars.* 1851. 366 頁脚注)

この『洋学指針 蘭学部』の出版は明治元年[1868]であるが、その成立は安政4年[1857]と考えられる[注6]。そこで、安政期成立の文法書としてその時制に関する用語等を比較すると、Maatschappij 社の、それも *Grammatica* ではないもう一方の文法書である *Rudimenta* <留地棉多>(弘化3 1846) をも参照していることは明らかである[注7]。序節で触れたようにこの時代の Inf.は Modus に属するから、*Grammatica* と *Rudimenta* は、Modus に関してはともに 1.Inf.・2.Ind.・3.Imp.・4.Conj.で共通している。しかし、両書とも Inf.＝<Onbepaalde wijs>を示すのに <te> を付していない。**表3**（39 頁）と**表4**（40 頁）を見ても、蘭文典の場合、動詞そのものだけを Inf.とするのが普通であり、Kuijper（安政3 1856）などは、三要形の筆頭である不定法現在をわざわざ<de onbepaalde wijs zonder te>[te のない不定法]と断っている。『洋学指針 蘭学部』の著者・柳川春三は、この<te>の付いた《不定法》を三要形の筆頭とすることを、いずれの文典から知ったのであろうか。

1.4. 2. 動詞活用一覧表中における Inf.と<grondvorm>

この時代の体系的文法書は必ず、各法・時制・人称・態による動詞活用一覧表を持つが、*Grammatica* の直説法能動態の活用表は、次のような構成になっている［和訳は筆者。カッコ内は現代の文法用語。*Rud.*は *Rudimenta* の場合］。

“z i j n” [英 be ; 独 sein]

○ Onbepaalde wijze 不定法

Tegenwoordige tijd 現在　*zijn, of wezen*

Verledene tijd 過去　*geweest zijn*

Toekomende tijd 未来　*zullend zijn, of wezen*

○ Deelwoorden 分詞

Tegenwoordige tijd　*zijnde, of wezende*

[*Rud.* : Bedrijvend 能動　zijnde]

Verledene tijd　*geweest zijnde*

[*Rud.* : Lijdend 受動(過去)　geweest]

Toekomende tijd　*zullen zijn, of wezen*

[*Rud.* : なし]

○ Aantoonende wijze 直説法　　○ Bijvoegende wijze 附説法(接続法)

Tegenwoordige tijd 現在

Ik ben.（以下の人称変化省略）…　　*Dat ik zij.…*

Onvolmaakt verledene tijd 不完了過去(過去)

[*Rud.* ; Eerste betrekkelijke verledene tijd 第一関係過去]

Ik was.…　　*Dat ik ware.…*

Volmaakt verledene tijd 完了過去(現在完了)

[*Rud.* : Verledene tijd 過去]

Ik ben geweest.…　　*Dat ik zij geweest.…*

Meer dan volmaakt verledene tijd 超過去(過去完了)

[*Rud.* : Tweede betrekkelijke verledene tijd 第二関係過去]

Ik was geweest. …　　*Dat ik ware geweest.…*

Toekomende tijd 未来

Ik zal zijn. …　　*Dat ik zo de zijn.…*

Tweede toekomende tijd 第二未来(未来完了)

[*Rud.* : Betrekkelijke toekomende tijd 関係未来]

Ik zal geweest zijn. …　　*Dat ik Zo de geweest zijn.…*

○ Gebiedende wijze 命令法

Enkelvoud 単数　*Wees gij.*

Meervoud 複数　*Weest, of Zijt gij.*

(*Grammatica*, § 152 ; *Rudimenta*, XXXVII LES)

和蘭語の動詞活用<vervoeging>一覧表は、このように<Onbepaalde wijze>から始まっているのである。これは、羅典文法が動詞変化の基本形の最初に一人称単数現在を置き、活用表の最期に Inf.と Part.を持ってくるのと全く逆である。**表1**（31 頁）の安政期における Modus の順位の変動は、《原形》という言葉こそないが、Inf.を動詞活用の基本形と見做すという意識の現れではないだろうか。Maatschappij（マートシカッペイ）<文社先生>以外の文法書で Modus の順位及び動詞活用表の構成がどうなっているかを、国会図書館所蔵の江戸幕府旧藏洋書で調査したところ、**表2**（37 頁）のような結果が得られた。この表によると、1806（文化3）年の Weiland を境にして、蘭・英・仏語ともに Inf.の位置がきれいに移動している。一

表２．和蘭語原典の動詞活用表中における Infinitivus の位置

年　号	著者	不定法	分詞	直説法	命令法	接続法/仮定法	不定法	分詞	その他
1708（宝永５） 1746 1766	Sewel　（英） （蘭）			1. Toonende Wyze 1. Ind.	2. Gebiedende 2. Imp.	3. Wenschende 3. Opt.	4. Onbepaalde ★ 4. Inf.（★）	Deelwoord Part.	
1776（安永５）	Peyton （英仏対訳英文典）			1. Ind.	2. Imp.	4. Conj. or Optative	5. Inf.	Part. (and Gerund)	3. Pot.
1790（寛政２）	Marin （蘭語対訳仏文典）			1. Ind. Toonende wys	2. Imp. Gebiedende	3. Opt. Subjonctif	4. —— Onbepaalde	Part. Deelwoord	
1801（享和１）	Locke（蘭語英文典）			Aantoonende wyze	Gebiedende	Byvoegende	Onbepaalde	Deelwoord	Wenschande
1806（文化３）	Weiland （仏語対訳蘭文典）	1. Onbepaalde wijs Inf.	Deelwoord Part.	2. Aantoonende Ind.	3. Gebiedend^{e} Imp.	4. Aanvoegende Subj.			
1819（文政２）	van der Pyl （英語蘭文典）	1. Onbepaalde wijs Inf. mood	Deelwoord Part.	2. Aantoonende Ind.	3. Gebiedende Imp.	4. Aanvoegende Subj.			
1822（文政５）	Maatschappij （*Grammatica*）（蘭）	1. onbepaalde wijze	Deelwoord	2. Aantoonende	3. Gebiedende	4. Aanvoegende			
1826（文政９）	Bilderdijk（蘭）	分類Ⅰ：1) onbepaalde wijze (verbum infinitum)　2) bepaalde wijze(verbum finitum)							
		分類Ⅱ：		1. stellige (Ind.)	3. gebiedende (Imp.)	4. onderstellende wenschende toegevende (Subj.)			2. vragende
		分類Ⅲ：1)de rechtstreekende wijze (direct)　2)de ondergeschikte wijze (subordinate)							
1831（天保２）	Lulofs（蘭）			Aantoonende wijs Ind.	Gebiedende Imp.	Aanvoegende Subj.	Onbepaalde Inf.		
1836（天保７）	Wilde（蘭）	1. Onbepaalde wijs	Deelwoord	2. Aantoonende	3. Gebiedende	4. Aanvoegende			
1845（弘化２）	Hamelberg （蘭語英文典）	1. Inf. mood★ Onbepaalde wijs	Part. Deelwoord	2. Ind. Aantoonende	4. Imp. Gebiedende	6. Subj. Aanvoegende		3. Conditional Voorwaardelijke	5. Potential Mogelijkheid
1846（弘化３）	Weiland （仏語対訳蘭文典）	1. Onbepaalde wijs	Deelwoord	2. Aantoonende	3. Gebiedende	4. Aanvoegende			
	Maatschappij （*Rudimenta*）（蘭）	1. Onbepaalde wijs （★）	Deelwoord	2. Aantoonende	4. Gebiedende	3. Bijvoegende			
1851（嘉永４）	Marin （蘭語対訳仏文典）	1. Onbepaald^{e} wijs Onbepaalde wijs Inf.	Deelwoord Part.	2. Aantoonende Ind.	3. Gebiedende Imp.	4. Bijvoegende Subjonctif			
	Hagoort（蘭）	1. Onbepaalde wijs	Deelwoord	2. Aantoonende	3. Gebiedende	4. Aanvoegende			
1852（嘉永５）	Murray （蘭訳英文典）		Part. Deelwoord	1. Ind. mood Aantoonende wijze	2. Imp. Gebiedende	4. Subj. Aanvoegende	5. Inf. ★ Onbepaalde	(Part.) (Deelwoord)	3. Potential Vermogende
1853（嘉永６）	Beijer（蘭）	（活　用　表　な　し）							
	Backer（蘭）	1. Onbepaalde wijs	Deelwoord	2. Aantoonende	3. Gebiedende	4. Aan- of Bijvoegende			
	Brill（蘭）			1. Aantoonende wijze	2. Gebiedende	3. Aanvoegende	4. Naamwoordelijke vormen Onbepaalde werkwoord	Deelwoord	
1854（安政１）	van der Beek （蘭語英文典）	1. Onbepaalde wijs Inf. mood★	Deelwoord Part.	2. Aantoonende Ind.	4. Gebiedende Imp.	3. Byvoegende Subj.			
	Beijer（蘭）	1. Onbepaalde wijz	Deelwoord	2. Aantoonende	4. Gebiedende	3. Bijvoegende			

（表２－１）

年　号	著者	不定法	分詞	直説法	命令法	接続法/仮定法	不定法	分詞	その他
1854（安政 1）	Pijl/Schuld（蘭語対訳英文典）	1. Inf. mood Onbepaalde wijs	Part. Deelwoord	2. Ind. Aantoonende	3. Imp. Gebiedende	4. Subj. Aanvoegende			
1854（安政 1）	Weiland（蘭）	1. Onbepaalde wijs（★）	Deelwoord	2. Aantoonende	3. Gebiedende	4. Aanvoegende			
1855（安政 2）	Spijkerman（蘭）	1. Onbepaalde wijze	Deelwoord	2. Aantoonende Bepaalde	3. Gebiedende	4. Aanvoegende Bijvoegende			
1855（安政 2）	Gerdes（蘭語英文典）	1. Inf. mood Onbepaalde wijs	----	2. Ind. Aantoonende	3. Imp. Gebiedende	4. Subj. Conj. Aanvoegende			
	van der Maas Jr.（蘭）	1. Onbepaalde wijs		2. Aantoonende	4. Gebiedende	3. Aanvoegende			
		Onbepaalde	Deelwoord						
	Lloyd（蘭語英文典）	1. Inf. mood Onbepaalde wijs	Part. Deelwoord	2. Ind. Aantoonende	3. Imp. Gebiedende	4. Subj. Aanvoegende			
	Sandwijk（蘭）	1. Onbepaalde wijs ★	Deelwoord	2. Aantoonende	4. Gebiedende	3. Aanvoegende			
1856（安政 3）	Mulder（蘭）	1. Onbepaalde Wijze		2. Aantoonende	3. Gebiedende	4. Bijvoegende			
		Zelfstandige vorm	Bijvoegelijke vorm						
	Kuijper（蘭）	1. Onbepaalde wijs ★（algemeen）	(Deelwoord)	2. Aantoonende（bepaald, regtstreeks, onafhankelijk）	4. Gebiedende	3. Aanvoegende（voorwaardelijk, afhangend）			
1857（安政 4）	van Wees（蘭）	1. Onbepaalde wijs	Deelwoord	2. Aantoonende	3. Gebiedende	4. Bijvoegende			
1861（文久 1）	Murray（英）			1. Ind.	2. Imp.	4. Subj.	5. Inf.		3. Potential
							(to-Inf.)	Part.	
1862（文久 2）	Noel/ Chapsel（仏）			Ind.	Imp.	Subj.	Inf.	Part.	
1867（慶応 3）	Quackenbos（英）			1. Ind.	4. Imp.	3. Subj.	5. Inf.	Part.	2. Potential
	江戸版英吉利文典 第 6 版（木の葉文典）			1.Ind.	6.Imp.	3.Subj.	5.Inf.（the verb in its simple form）	4.Part.	2.Pot.
1869（明治 2）	Pinneo（英）			1. Ind.	3. Imp.	2. Subj.	4. Inf.	5. Participial Mode or Participle	
1876（明治 9）	Swinton（英）			1. Ind.	4. Imp.	3. Subj.	5. Inf.	Part.	2. Potential
1907（明治 40）	Valette（獨語蘭文典）	Onbepaalde wijs Inf.	Deelwoord Part.	Aantoonende Ind.	Gebiedende Imp.	Aanvoegende Konj.			Voorwaardelijke
1913（大正 2）	Valette（英語蘭文典）	1. Inf.	Part.	2. Ind.	4. Imp.	3. Subj.			Konditionalis

★印は原形としての用法を持つ《不定法》を示す。
数字は活用表中における Modus の列挙順位を示す。《分詞》に番号がないのは、これが Modus に含まれていないからである。しかるに活用表中ではこのように《不定法》の次に置かれるのが普通である。

（表２－２）

表３．和蘭語原典に見られる動詞の基本形に関する表現

年　号	著　者	原　　形	活　用　　形
1708 1746 1766	Sewel (英語蘭文典)	Present Tense	
1788	Coote (英)	the original verb	
1790	Marin (仏)		
1801(享和 1)	Locke (蘭語英文典)	het werkwoord (動詞) tegenwoordige tijd (現在)	
1806(文化 3)	Weiland		
1819(文政 2)	van der Pyl	the verb the infinitive mood	
1822(文政 5)	Maatschappij (*Grammatica*)		
1826(文政 9)	Bilderdijk	de onbepaalde wijze des werkwoords (動詞の不定法)	de bepaalde werkwoord (定動詞) Verbum finitum
1831(天保 2)	Lulofs		
1836(天保 7)	Wilde		
1845(弘化 2)	Hamelberg (蘭語英文典)	de onbepaalde wijs (to 付) Infinitive	het vervoegde werkwoord (活用形)
1846(弘化 3)	Maatschappij (*Rudimenta*)	(de onbepaalde wijs?) het enkelvoud van het werkwoord (動詞の単数)	het vervoegde werkwoord
	Weiland	(de onbepaalde wijs?)	
1852(嘉永 5)	Murray (蘭訳英文典)	onbepaalde wijs	
1853(嘉永 6)	Beijer	het werkwoord zelf (動詞自身) ※wortel des werkwoords 又は de wortel van het werkwoord (動詞の語根) 有	het vervoegde werkwoord
	Brill	grondvorm ※これは変化詞全体の原形 ※stam も有	
1854(安政 1)	Beek (蘭語英文典)	de onbepaalde wijs (to 付)	
	Pyl / Schuld (蘭語対訳英文典)		
	Weiland	(onbepaalde wijs ?)	
	Beijer	onbepaalde wijs	het vervoegde werkwoord
1855(安政 2)	Spijkerman	werkwoord ※wortel (語根) 有	
	Gerdes (蘭語英文典)	Infinitive mood (to 付)	
	van der Maas Jr.	onbepaalde wijs ※wortel (語根) 有	het vervoegde zegwoord (活用形)
	Lloyd (蘭語英文典)	Present	
	Sandwijk	de onbepaalde wijs eens werkwoords	
1856(安政 3)	Mulder	de onbepaalde wijs de grondvorm des werkwoords (動詞の原形)	het vervoegde werkwoord een betrekkingsvorm des werkwoords (動詞の関係形＝活用形)
	Kuijper	de onbepaalde wijs zonder te (te のない不定法)	een vervoegde werkwoord
1857 (安政 4)	van Wees	(onbepaalde wijs ?)	
1861(文久 1)	Murray (英)	the verb Present	
1867(慶応 3)	Quackenbos (英)	Root	
1876(明治 9)	Swinton (英)	Present	
1913(大正 2)	Valette (英語蘭文典)	Inf. 〔蘭　te なし 英　to 付き〕	

表４．和蘭語原典における動詞の三基本形

年　代	著　者	三(又は四)要形の筆頭 (及び他の「原形」に相当する表現)	語根	過去形	過去分詞	不定法	活用形
1708 1746 1766	Sewel (英語蘭文典)	1.Present *Ik bak*		2.Perfect *Ik bakte*	3.Preter-perfect Participle *gebakken*	4.Infinitive *bakken*	
1776(安永5)	Peyton (仏語対訳英文典)	Infinitif Infinitive *To wear*		Prétérit Simple Preter-perfekt *I wore*	Participe Passé Passive participle *Worn*		
1790(寛政2)	Marin (蘭語対訳仏文典)						
1801(享和1)	Locke (英)	1.tegenwoordige tyd (現在) (het werkwoord [動詞])		2.voorledene daadelyke tyd (過去能動時)	3.volmaakt deelwoord (完成分詞)		
1806(文化3)	Weiland (仏語対訳蘭文典)						
1819(文政2)	van der Pyl (英語蘭文典)	(the verb) (the infinitive mood)					
1822(文政5)	Maatschappij (*Grammatica*)						
1826(文政9)	Bilderdijk	(de onbepaalde wijs des werkwoords) (動詞の不定法)	wortel een bloote vorm (裸の形)				de bepaalde werkwoord Verbum finitum　(定動詞)
1831(天保2)	Lulofs						
1836(天保7)	Wilde						
1845(弘化2)	Hamelberg (蘭語英文典)	1.de onbepaalde wijs (to 付) Infinitive *To abode*		2. Imperfect *I abode*	3.Participle *abode*	4.onbepaalde wijs *blijven*	het vervoegde werkwoord (活用形)
1846(弘化3)	Maatschappij (*Rudimenta*)	1.名称なし (Onbepaalde wijs?) *spreken*	het enkelvoud van het woord (動詞の単数)	2. 1e betrekkelijke verledene tijd (第一関係過去時) *sprak*	3.lijdende deelwoord (受動分詞) *gesproken*		het vervoegde werkwoord
	Weiland	1.名称なし (Onbepaalde wijs?)		2.de onvolmaakt verledene tijd　(未完成過去時)	3.het lijdende deelwoord		
1851(嘉永4)	Hagoort		wortel het zakelijke deel eens werkwoords (動詞の根幹部)				
	Marin (蘭語対訳仏文典)						
1852(嘉永5)	Murray (蘭訳英文典)	1.Onbepaalde wijs *Abide,　wonen*		2.Onvolmaakt verleden tijd *abode,　woonde*	3.Verleden deelwoord *abode,　gewoond*		
1853(嘉永6)	Beijer	1.Onbepaalde wijs *leeren* *straffen* (het werkwoord zelf) [動詞自身]	2.wortel des werkwoords de wortel van het werkwoord (動詞の語根) *leer* *straf*	3. 1e betrekkelijk verledene tijd *leered* *strafte*	4.het verledene deelwoord *geleerd* *geftraft*		het vervoegde werkwoord
	Backer		wortel				
	Brill	1.名称なし (Onbep. wijs?) *brengen*		2. onvolmaakt verleden tijd *bracht*	3.lijdend deelwoord *gebracht*		

Grondvorm = de onverbogen vorm
※これはあらゆる変化詞の原形
※別に stam も有

(表４－１)

年　代	著　者	三(又は四)要形の筆頭 (及び他の「原形」に相当する表現)	語根	過去形	過去分詞	不定法	活用形
1854(安政1)	van der Beek (蘭語英文典)	1.Onbepaalde wijs (to 付) *To abode*		2.Verleden tijd *abode*	3.Verleden Deelwoord *abode*		
	Pijl / Schuld (蘭語対訳英文典)						
1854(安政1)	Weiland	1.名称なし (Onbepaalde wijs ?) *spreken*		2.de onvolmaakt verledene tijd *sprak*	3.het verledene deelwoord *gesproken*		
	Beijer	1.onbepaalde wijs	2.wortel	3. 1e betrekkelijk verledene tijd	4.het verledene deelwoord		het vervoegde werkwoord
1855(安政2)	Spijkerman	1. (werkwoord [動詞]) *lezen* *schrijven*	wortel	2. *las* *schreef*	3. *gelezen* *schreven*		
	Gerdes (蘭語英文典)	Infinitive mood (to 付)					
	van der Maas Jr.	1.Onbepaalde wijs *brengen* 2.Tegenwoordige tijd (現在) *ik breng*	wortel	3. 1e betrekkelijk verledene tijd *ik bragd*	4.Verleden Deelwoord *gebragt*		een vervoegde zegwoord
	Lloyd (蘭語英文典)	volledige lijst 1.Present *I abode ; ik blijf* *I am ; ik ben*		2. Imperfect *abode* *was*	3.Participle *abidden* *been*		
	Sandwijk	1.(de onbepaalde wijs eens werkwoords) *schrijven*		2.(onvolmaakt verleden tijd) *schreven* (pl.)	3.(verleden deelwoord) *geschreven*		
1856(安政3)	Mulder	de onbepaalde wijs de grondvorm des werkwoords (動詞の原形)					het vervoegde werkwoord een betrekkingsvorm des werkwoords (動詞の関係形＝活用形)
	Kuijper	Onbepaalde wijs 1.Tegenwoordige tijd = de onbepaalde wijs zonder te *doen* 2.Verleden deelwoord *gedaan*	(te のない不定法)	Aantoonende wijs 1.Tegenwoordige tijd *ik doe* 2. 1e betrekkelijk verleden tijd *ik deed*			een/ het vervoegde werkwoord
1857(安政4)	van Wees	1.名称なし (Onbepaalde wijs ?)		2. betrekkelijk tegenwoordige tijd	3.verleden deelwoord		
1861(文久1)	Murray (英)	1.Present *I begin ; love* (the verb)		2. Imperfect *I began ; loved*	3.Perfect Participle Passive Participle *begun ; loved*		
1867(慶応3)	Quackenbos (英)	the three Chief Parts of the verb 1.the root of the verb *rule*		2. the imperfect indicative *ruled*	3.the perfect participle *ruled*		
	江戸版英吉利文典 (The Elementary Catechisms)	Present Tense *Advise*		Past Tense *Advised*	Perfect Participl *Advised*		
1869(明治2)	Pinneo (英)	Present		1st Past Indicative	2nd Past Participle		
1876(明治9)	Swinton (英)	the principal parts Present *Break*		Past *broke*	Past Participle *broken*		
1913(大正2)	Valette (英語蘭文典)	Inf. (蘭　te なし) (英　to 付き)		Impef.Sg.—Imperf.Pl.	Past Part.		

（表４－２）

表５．江戸期の蘭文典に見られる動詞の基本形に関する表現

年　号	著　者	原　　形	語　　根	活　用　形
天明・寛政・享和期	三種諸格	複(称)		
	作文必要訳書須知属文錦嚢	複称　　現在		
	九品詞名目	復		
1805（文化２）	蘭語首尾接詞考	（本詞※複合動詞の基礎動詞の部分を指す）		
	和蘭冠履辞考	（本言・本語※複合動詞の基礎動詞の部分を指す）		
1810（文化７）	譯鍵	（本語※複合動詞の基礎動詞の部分を指す）	（原語?）	
1811（文化８）	和蘭文学問答	現在 本詞※形容詞の原形も兼ねる		
1812（文化９）	九品詞略	衆称（＝複数形のこと）		
1813（文化 10）頃	検蘿韻符	不定動詞 不定詞		
1814（文化 11）	和蘭文範摘要	現在		
1815（文化 12）	和蘭語法解（オウランダごほうげ）（英？）	複称ノ活言		
1824（文政７）	蘭学凡	（本語※名詞の原形のこと）		
1828～29？（文政 11～12）	繙巻得師（はんかんとくし）草稿（国会図書館本）		単称 単称ノ尤モ単ナルモノ	
1855(安政２)	和蘭文語凡例（前編）	不定法		
	和蘭文語凡例（後編）			変格活字
1856(安政３)	蘭学獨案内	本詞		
1868(明治 1)	洋学指針・蘭学部	不定 (te ＋Inf.)	根言※形容詞の原級も兼ねる	

（『蘭語学』Ⅰ－Ⅱに基づいて作成）

体、何の理由もなく、これ程そろって Inf. が動詞活用表の冒頭に移動するものであろうか。

表2（37頁）の★印は、Inf.が動詞の三基本形になっているものを示しているが、1850年代になると、不変化詞の基本形を＜grondvorm＞【原形】と呼ぶ2人の文法家が現れる。Brill (嘉永6 1853)と Mulder (安政3 1856)がそれで、まず Brill は、＜grondvorm＞を＜de unverbogen vorm＞[活用されない形] であると定義し、動詞の Inf.に限らず、すべての変化詞の【原形】としている[注8]。

一方、Mulder(安政3 1856)の＜grondvorm＞は、動詞の＜de onbepaalde wijs＞の説明箇所で、明確な「動詞の原形」として現れる。

> De onbepaalde wijs der werkwoorden heeft dus geen betrekkingsvormen, maar bestaat alleen in den grondvorm of de zelfstandige voorstelling des werkwoords. (§228)
>
> 動詞の不定法は、人称等の関係で変化する活用形である＜betrekkingsvorm＞【関係の形】を持たず、ただ動詞の「原形」＜grondvorm＞、言い替えると動詞の独立的表現としてのみ存在する。

「動詞の独立的表現」とは、活用することによって生じる法・態・時制・人称・数の束縛から動詞を解き放って独立させる――つまり、活用しないことを言うのであろう。この＜Onbepaalde wijs＞(Inf.) の定義は注目に値する。なぜなら、この＜grondvorm＞の機能は、詳しくは次の第三節で述べるが、独逸の Bauer (天保1 1830) が＜Grundform＞と言い、Karl Heyse(天保9 1838)が＜die reine Grundform＞[純粋基本形] または＜grammatische Grundform＞[文法上の原形] と呼ぶところのものと同じで、これは、1830 年以降の新文法の中で起こった Inf.の新解釈だからである。

表3（39頁）と**表4**（40頁）を見ると、Inf.を動詞の＜grondvorm＞【原形】であると明示した蘭文典は、現資料中では(安政3)1856年のこの Mulder のみで、彼の前後には見出せない。ほとんどの蘭文典が動詞の基本形を＜Onbepaalde wijs＞(Inf.) と呼ぶ中で、この Mulder ひとりが＜grondvorm＞の使用者である。ここでは、Inf.が、＜grondvorm＞という用語で以て「動詞変化のもとの形」として明確に意識されている。このように、和蘭語の Inf.の＜Onbepaalde wijze＞は、動詞の基本形の意味をかなり明確に示しているのである。江戸期の文典で、動詞の基本形を《原形》と呼ぶのは、これ以外には、上述の G. Brown (嘉永4 1851) と、Mulder の 11 年後に出現する Quackenbos の英文典 (慶応3 1867) における＜Root＞があるだけである。独逸語の＜Grundform＞(1830 ; 1838)――和蘭語の＜grondvorm＞(1853 ; 1856) ――英語の＜Root＞ (1851 ; 1867) という一連の動きは、19 世紀に動詞の基本形に関する新しい動きが起ったことを、はっきりと我々に告げている。

以上のように、和蘭語原典では、動詞の変化形の基礎部として、①動詞の根幹部(＝語根)、

②不定法、③直説法単数一人称現在の３種類が考えられている。つまり、何を基にして変化形を作るかが、原典においても一定していないのである。が、和蘭語では、この三者の中でも特に、《不定法》である＜Onbepaalde wijs＞が「動詞の変化形のもとの形」としての地位を獲得していく。

例えば、*Grammatica* の現在分詞に見られたような、《不定法》を動詞変化の基本形として用いる傾向は、*Rudimenta* においても同様に現れている。*Rudimenta* における動詞変化の三要形は、*Grammatica* と同じく《不定法》を「原形」の位置に置いたところの

de onbepaalde wijze	不定法	[現代の 原形]
de 1e betrekkelijke verledene tijd	第一関係過去	[過去形]
het lijdende deelwoord	受動分詞	[過去分詞]

の三者で構成されている。現在分詞の作り方においても、以下のごとく *Grammatica* と同趣旨の説明がなされている。

> Het Bedrijvend of Tegenwoordig Deelwoord eindigt altijd in den uitgang *de*, gevoegd achter de Onbepaalde wijze. (102 頁)
>
> 能動または現在分詞は、常に不定法の後ろに付けられる<de>という語尾で終わっている。

そしてこれは、Maatschappij 社の２文典のみならず、他の蘭文典にも共通して見られる説明の仕方なのである[注9]。

しかし、**表３**（39 頁）と**表５**（42 頁）を見ればわかるとおり、動詞に関して「ただひとつのもとの形」を示す用語は、Mulder の＜grondvorm＞を除けば、原典にも日本の著述・翻訳文典にもないのである。原典のそれは<te>のない Inf.であるのが普通で、一人称単数現在形、および動詞そのもの――これは結果的には Inf.と同じである――の場合がごく小数あるだけである。

2. 蘭語学における「基本形」の概念

2.1. 名詞と冠詞の場合

ところが、冠詞と名詞に関しては、当時の蘭語学は、それらの多様な変化形の「基になるただひとつの形」という概念を明確に把握しているのである。

馬場佐十郎『和蘭文学問答』(文化8(1811))は、静詞［＝名詞］の基本形を＜本詞＞と呼んでいる[注10]。また、ほぼ同時期成立の『和蘭語法解(オランダごほうげ)』(文化12(1815))では、次のような説明を読むことができる[注11]。

治定性言

本語「ベパールデ。ゲスラグト。ウヲルデン」ト云。…キツト限テ指ス所ニ冠スル「テニヲハ」ナリ。其言 de,het,按ニ de ハ deze,die ノ原語。dat, ノ二ツニシテ Den,der,des ニ dit ノ本言ナルヲ以テ。自ラ事物ヲ指斥スル意アリ モ亦転ス。…

(二・裏)

自立名言数

本語「ゲタル。デル。セルフスタンヂゲ。ナームウヲールデン」ト云。……其単称ナル者ハ。言ノ本質ニシテ。単称言ニ En 或ハ n ノ履ヲ接スルニ成ルナリ (廿二・表)

《治定性言》は定冠詞、《自立名言》は名詞、《単称》《複称》はそれぞれ単数と複数のことである。細字双行の文註に、六格に従って<変転>する冠詞のもとの形 <de>[独 der ; 英 the] は<原語><本言>、 単数形は<言ノ本質>であると、著者・藤林普山は言う。<按ニ…>とあるからには、これは普山自身の考えなのであるが、これらの言は、動詞活用の例でこそないが、冠詞と名詞の語形変化に関しては、「ただひとつのもとの形」という概念が理解されていたことの明確なる証しである。

ここには三種の用語が現れている。<原語>は『譯鍵』にも見られる訳語で、この蘭和辞典に載っているもとの和蘭語は<grondtaal> [(翻訳などにおける) もとの言語]・<grondwoord> [基本語]・<wortelwoord> [根語] の三つである[注12]。このうち、動詞変化の基本形としての《原語》になり得る可能性を持つのは後二者であるが、現段階では特定することができない。 しかし、当時の<原語>と<根語>は、上述の<grondvorm>同様、「動詞変化の基本形」以上の意味を持つのが普通なので、<grondwoord>の方が可能性が高いかもしれない[注13]。また、Sewel の<Primiteves or Original>という言い方も、名詞の《原語》に成り得る可能性を有している。

<本言>は、馬場の<本詞>に同じである (<詞>を用いず<言>を以て表現するのは普山の文法用語の特徴である)。<本質>とは他に類例を見ないまことに面白い訓み方で、「うぶ」という言葉の本来の意味が推察されて興味深い。普山は格変化のことを《転変》と呼んでいる。現代のドイツ語は 16 種の格変化を持つが、普山の時代の和蘭語はそれ以上に格変化の数が多く、単数の 3 性 6 格と複数 6 格の 24 通りに《転変》する。たとえば、<その愛する男>という《治定性言》[=定冠詞] (男性) と《分言》[=現在分詞] と《自立名言》[=名詞] (男性) の組み合わせは、

de beminnende man.	des beminnenden mans.	den beminnenden man.
(その愛する男は/が)	(その愛する男の)	(その愛する男に)
den beminnenden man.	o, beminnende man.	van den beminnenden man.
(その愛する男を)	(おお、その愛する男よ)	(その愛する男より)

のように《転変》する。男性の《自立名言》manの代わりに女性・中性名詞と複数形が使われれば、deとbeminnendは、これとは異なる《転変》をしなければならない。その場合、<de beminnende man>という男性単数1格形が24通りもある《転変》の原形になり、なるほど、まさしく<言ノ本質>に違いない。 このように、冠詞と名詞においては、「原形」の概念理解は極めて明確なのである。

2.2. 動詞の場合

では、この時期の原書において明確な用語を見出せなかった「動詞の原形」を、日本の蘭語学はどのように理解したのか。ここでは 1.《複称》、2.《現在》、3.<本詞>、4.<単称ノ尤モ単ナルモノ>（＝語根）の四種を見いだすことができる。

2.2. 1. 《複称》

表3（39頁）、**表4**（40頁）、**表5**（42頁）にて、江戸期の日本の蘭文典及び和蘭語の原書に見られる「動詞の変化形のもとの形」に相当する用語を列挙してみると、和蘭本国で<Onbepaalde wijs>が動詞のもとの形と見做されるようになるのは、1819年の Van der Pyl 以後、19世紀になってからである。これ以前の文法書には、Sewel にも Marin にも、Inf.を基本形と見做す表現は見出されない。ちょうどこの Sewel と Marin の文法を土台として、日本の蘭語学はその第一の隆盛期――**表4**（40頁）の『和蘭語法解』(1815)まで――を迎えるが、この時の蘭語学では、それは《複称》となっている。『和蘭語法解』ですらも<複称ノ活言>である。"Laat mij gaan." <吾ヲ行カシメ>という《使令法》の文で、"Laat" を<単称ノ活言>、《不定法》である "gaan" を<複称ノ活言>と呼んでいる（巻之中・三十一表）。

一方、3年しか違わない野呂天然『九品詞略』(文化9)は、同様の構文である<laat hem hier koomen.>［彼をここに来させよ］を、<特称>（＝単数）ないしは<衆称>（＝複数）の "Laat / Laaten" に「もうひとつの作業詞」（＝動詞）を組み合わせる、という言い方で説明しており、最後の "koomen" を《現在》とも《複称》とも規定していないことから[注14]、「動詞の原形」に関するこの時代の定説の無さが窺われる。

1人称複数形を動詞そのものととらえるこの考え方は、日本人蘭語学者の独創か、さもなければ誤解であろうか。例えば、年代は若干下るが、Beijer(1853) は、動詞の人称変化の箇所で<一人称現在は動詞の根であり、同複数は動詞それ自体に同じ>という説明の仕方をしている（§140）。<動詞それ自体に同じ>(gelijk het werkwoord)とは、すなわち《不定法》であるというに等しい。この説明の便利さは現代のドイツ語学習を考えればすぐわかる事で、英語とは異なる人称変化の多さにうんざりした学生に「複数形ではもとに戻る」と説明するのは、変化形の数を心理的に軽減するという点で、便宜的ではあるが、

実際まことに好都合なのである。当時においても Beijer のような説明がなされたかもしれないことは大いに有り得ることである。《複称》を動詞そのものと同じにとらえるというのは、江戸期の人の理解不足や間違いというわけでは必ずしもないのではなかろうか。

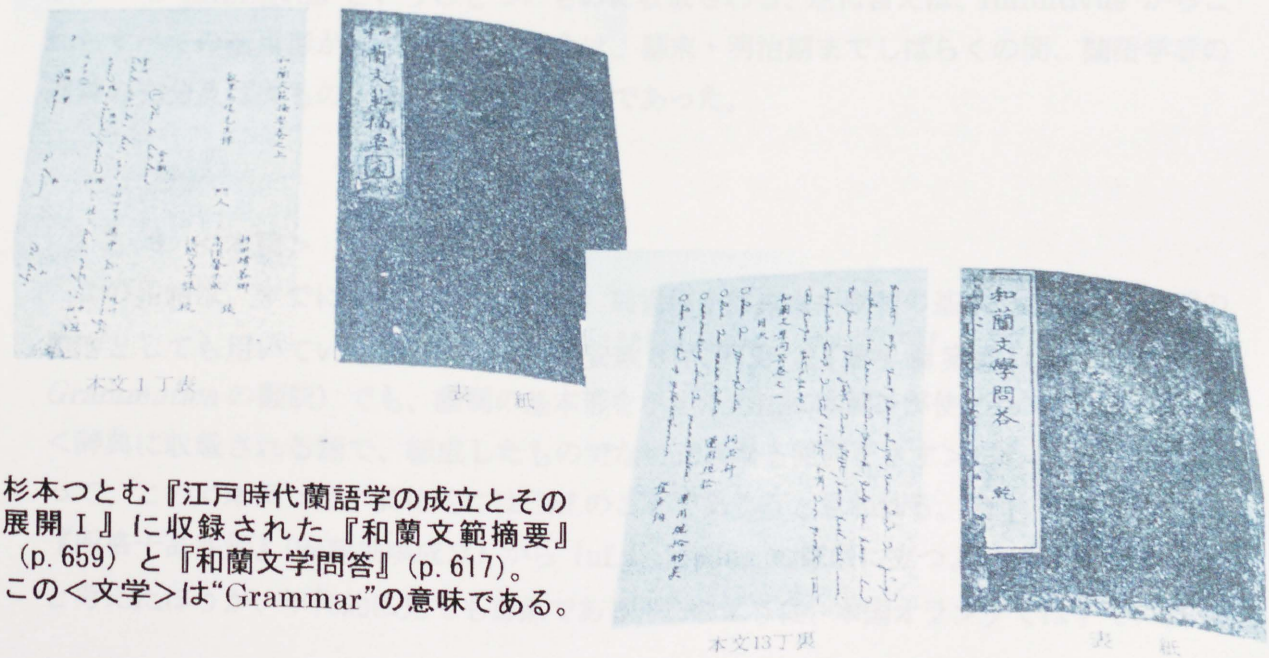
2.2. 2. 《現在》

原形に相当するもうひとつの表現は《現在》である。例えば数種の異本を持つ『属文錦曩』の一本には、辻蘭室が次のような註を書き入れている[注15]。

ik heb hem laaten koomen.　　ik zal gaan zeggen.
[過]　[現]　　[未]　[現]　[現]

“laaten” と “gaan” は話法の助動詞と同じに扱われるもので、このように助動詞を完了形にする場合、過去分詞には ge- が付かず、《不定法》と同形になる。いわゆる不定法過去分詞である。最初の例文では “laaten” がそれで、現代文法の用語で言えば “laaten” は “heb” とともに現在完了を形成する過去分詞である。ただし、<hebben+p.p.>は当時の文法では《過去》であるため、“heb”の下に[過]と書かれてある。“koomen”は “laaten” と結びつく Inf.である。よってこの［現］は、むしろ “koomen” の下に書かれてしかるべきなのであるが、過去分詞のはずの “laaten” がたまたま現在人称変化の複数形と同形であったために［現］とされたものであろう。

第二の文では、“zal” は “gaan” という Inf.と組んで未来形を形成し、更に “gaan” は “zeggen” という Inf.を従えて「言いに行く」という熟語を構成する。このふたつの Inf.が現在形としてとらえられている。



杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅰ』に収録された『和蘭文範摘要』(p. 659) と『和蘭文学問答』(p. 617)。この<文学>は“Grammar”の意味である。

『和蘭文学問答』で、変化詞の基本形を＜本詞＞と呼称した馬場佐十郎のもうひとつの著書『和蘭文範摘要』(文化11[1814]) は、《現在》を＜本詞＞と同じと考えて、＜動詞ヲヨク使ヒ覚ユルニハ其 onvolmaakte voorleeden tijd ナルモノト deel woord ノ voorleeden tijd ナルモノヲヨク心得ルヲ良トスル也＞と説く[注16]。＜onvolmaakte voorleeden tijd＞[未完成過去] は現代文法の過去形、＜deel woord ノ voorleeden tijd＞[分詞の過去] は過去分詞のことである。つまり馬場は、《現在》・【未完成過去】・【分詞の過去】という動詞の三要形を提示しているのである。『和蘭文範摘要』は、＜西正典…から、やっとの期限つきでこれを借り、日夜書写に没頭し＞た W. Sewel の『ガラマーチカ』を、馬場が訳解したものである[注17]。Sewel の辞書中蘭文典である *Dutch Grammar* (1708) には＜...[T]he adding of the termination [de] to the Present tense seems to be the most regular way of the Preter-imperfekt.... And the Present tense is formed from the Infinitive by omitting the termination **en** or **n**....＞(71 頁) とあり、Inf.ではなく《現在》が、確かに三要形の筆頭として、《原形》の位置を占めている[注18]。

しかし、洋語文法においては、「動詞の変化形のもとの形」を、不定法ではなく《現在》(正確には直説法能動態一人称単数現在) にすることのほうが、むしろ伝統的だったのである。確かに**表3** (39 頁) の和蘭語では、＜Onbepaalde wijs＞が《原形》の位置に置かれることのほうが多くなってはいるが、しかし、**表7** (84 頁) および**表12** (111 頁) を見ると、英語と独逸語では、《現在》を動詞変化の基本形とする伝統が保持されていることがわかる[注19]。

序節にて述べたとおり、杉本つとむは＜日本の蘭語学習者には原形の概念は難しかった＞という趣旨のことを言っているが、これは何も日本の蘭学者のせいばかりではない。ヨーロッパ本国の文法それ自体に、Inf.を動詞の基本形とする考えがなかったと言うべきであろう。そのために、蘭文法書を開くと眼に飛び込んでくる動詞活用表の夥しい語形変化がすべて Infinitivus というひとつのものに収斂される、逆に言えば、Infinitivus からこれらすべての活用形が生ずるという概念は、幕末・明治期までしばらくの間、蘭語学者の理解の充分及ばぬものとなってしまったのであった。

2. 2. 3. ＜本詞＞

この用語は、すでに取り上げたとおり、馬場佐十郎貞由が動詞の基本形としても名詞の原形としても用いていたが[注20]、幕末期の安政3[1856]年、可野 亮『蘭学獨(ひとり)案内』(Maatschappij, *Grammatica* の翻訳) でも、動詞の基本形を示すために＜本詞＞が使われている。これは＜辞典に収載される語で、転成したものでない正真なる語詞をさす＞形のことで[注21]、従って、この＜本詞＞は、具体的には Inf.のことであろうと思われる。**表1** (31 頁) では、『四格十品弁解』(安政期頃成立) から Inf.が Modus の筆頭に立つようになるので、Inf.と考えたほうが、年代的に見ても自然である。このように、本国オランダではすでに1806(文化3)

年の Weiland 文典に見られるところの、Inf.を Modus の最初に置くという新しい潮流の影響が日本の蘭語学に現れてくるのは、そのおよそ半世紀後、幕末直前の時期である安政期の蘭文典を待たなくてはならない。

安政期の蘭文典の原本である Maatschappij の *Grammatica* は、オランダでの出版年代が1822(文政5)年であるので、安政期と同年代のオランダで起こっていた最先端の動きである＜grondvorm＞はまだ現れてこない。＜Onbepaalde wijze＞は Modus の筆頭に立っているが、しかし、三要形の筆頭が＜Onbepaalde wijze＞であるとは明言されていない。その *Grammatica* の翻訳である大庭雪斎『和蘭文語凡例』で＜和蘭活辞変画局法＞[動詞の活用法] を見ると、《変韻活辞》[不規則動詞] と《同韻活辞》[規則動詞]の 基本形が次のように示されている（この図は本論文著者の作成によるもので、現代の用語も付してある）。

?	活体分（語根）	帯既往（過去）	受動判辞（過去分詞）
geven	×	gaf	gegeven
leven	leef	leefde	geleefd

これは、実質的には＜Onbepaalde wijze＞が「基本形」だと言っているのと同じである。が、ここには筆頭部分の名称は＜本詞＞とも何とも明記されず、ただ “geven”・“leven” があるのみである[注22]。原本に何の記載もないのであるから、訳名が無いのも仕方のないことであろう。

ところが、前述のように、この＜本詞＞という用語は、可野のおよそ 40 年前、馬場貞由によって（名詞・冠詞の「原形」としてならば藤林普山においても＜本言＞として）すでに使用されているのである。しかし、19 世紀の変動以前の伝統文法では、Inf.は、動詞の基本形では必ずしもあり得なかったはずである。**表 3**（39 頁）と**表 4**（40 頁）に**表 7**（84 頁）と**表 12**（111 頁）を加えて考えるに、伝統文法における動詞の基本形は、むしろ「現在形」だったと考えることができる。

これが、長崎で中野柳圃が和蘭語を研究し始めた頃の文法であり、事実、Sewel の動詞の四要形は Pres.—Preter-Imperf.（過去形）—Past Part.—Inf.である。その柳圃の高弟で、和蘭語の＜達人＞と称され、江戸幕府の旗本にまで取り立てられた馬場佐十郎貞由により根づき、寛政異学の禁で下火になった蘭語学第一の隆盛期もまた、動詞の基本形——すなわち「原形」の概念が明確化せず、よって、Modus の配列順序と動詞活用表の構成が**表 2**（37 頁）で示したような変動を経験する以前の、いわば旧文法の時代であった。

柳圃の拠った原書の蘭文典である**表 2**（37 頁）の最初のふたつ——Sewel と Marin では、どちらも Inf.が Modus の最後に来ている。その弟子である馬場は、また別の原書から**表 5**（42 頁）の『和蘭文学問答』を訳したが[注23]、1774 年という原書の出版年から考えて、やはり旧文法に属するものであったに違いない。それにもかかわらず、動詞の基本形

に関して馬場は＜本詞＞という用語を先取りして用いているのである。

この＜本詞＞は、それまでの《複称》とは違う新しさを感じさせるものである。これは訳語であろうか。それとも馬場の造語なのであろうか。訳語だとすれば、動詞の三要形の筆頭に「現在形」が置かれた時代に、一体、馬場はどのような和蘭語を見出したのであろうか。この＜本詞＞については、独逸語の考察を経た上で、本章の最後にて改めて考えてみたい。

2.2.4. ＜単称ノ尤モ単ナルモノ＞

次いで、動詞の基本形に関する新しい動きが出てくるのは、高野長英『繙巻得師(はんかんとくし)草稿』である。 大庭雪斎は＜het zakelijk deel des werkwoords＞［動詞の根幹部］を《活体分》と訳しているが、長英は、それを先取りしたような＜単称ノ尤モ単ナルモノ＞という表現を用いて動詞の語形変化を説明している。国会図書館本の最終ページには次のような記述がある。

> …確シテ本来活言ノ尾ニ en ヲ存スルモノハ単称ノトキハ en ヲ除キテ t ト略シテハ子ズ複称ニハ本来ノ en ヲ言尾ニ有ツト知ルベシ<u>然ルニ使令法ニハ単称ノ尤モ単ナルモノヲ用イテ</u>何某ヲ訪エト云エバ bezoeke ト更
>
> （…かくして、動詞＜活言＞に en の語尾が付いているものは、単数の時はこの en を取って t に変えるが、 複数の場合は en のままであると承知しなければならない。 然るに命令法では＜単称ノ尤モ単ナルモノ＞を用い、「誰々の所に行きなさい」と言う時は bezoeke と）

残念なことに、この《使令法》の説明の途中で、この文法書は突然切れて終わってしまうのであるが、長英がここで＜活言変易＞［＝動詞変化］のもとの形と見做した＜単称ノ尤モ単ナルモノ＞とは、現代で言う「語根」を指すのではないかと思われる。

和蘭語では、例えば“leeren” [英 learn ; 独 lernen] の直説法能動態現在単数は、ik leer、 gij leert、hij leert と活用し、規則動詞の語根は、Beijer の言うとおり一人称と同形の“leer”なので、それを＜単称ノ最モ単ナルモノ＞と表現したのであろう[注24]。それ故動詞の変化形の「原形」を、日本の蘭語学では、一方は《複称》、一方は《単称》で以てとらえるという相矛盾する現象が起こったのである。長英の説明で言えば、bezoek・en [英 visit ; 独 besuchen] の語根、即ち＜単称ノ尤モ単ナルモノ＞は<bezoek>であり、二人称単数に対する命令形はそれに ＜e＞ を付けるということである（この命令法の作り方は現代ドイツ語においても同様である）。

これは、結果的には《現在》というのと同じである。しかし、辻蘭室が《不定法》であるべきものを「複数の《現在》」と解したように、ただ《現在》というだけでは「一人称単数」とは限定できない場合があった。しかし＜単称ノ尤モ単ナルモノ＞とすれば、その語

形を限定することができる。

では、動詞の基本形ではない Inf.を長英がどう扱っているかというと、彼はそれを Modus の筆頭どころか、Modus そのものから外してしまっているのである。すでに**表 1**（31 頁）と**表 2**（37 頁）に示した如く、当時の Inf.は Modus であるのが普通である。ところが長英の＜四法＞の内容は、《直説法》・《附説法》・《使令法》・《疑問法》だけしか挙げられていない。《附説法》は現代の仮定法または接続法、《使令法》は命令法である。また《疑問法》は、幕末・明治初期に接続法の訳語として用いられた（**表 1**［31 頁］、**表 24**［296 頁］および**表 8**［86 頁］。詳細は**第三章第一節**参照）が、ここでは文字通り「疑問文を作る法」のことである。中野柳圃系列の蘭文法では、これが《問叩法》あるいは《叩問法》として＜四法＞に加えられているために五法となっているが、これは、当時の原書の洋語文法においては決して普通ではないのである[注25]。

２種類ある『繙巻得師草稿』のうち、形容詞を一品詞として独立させず、逆に分詞を一品詞として扱っているという点において、全集本の蘭文典は、明らかに旧文法の特徴を示している。しかし、Inf.に関しては、全集のほうも＜四法＞の“外”である。つまり、長英においては、最初から Inf.が＜四法＞より外されてしまっているのである。

この点については、杉本つとむも、

> 長英には＜不定法(不限法)＞が見えないのは、何としても不審である。『繙巻得師』は＜国会本・全集本＞ともに草稿であるからだろうが、しかしあるいは長英には＜不定法＞を説明することは全くなかったのだろうか。

と訝しんでいる[注26]。当然であろう。ところが実は、《不定法》ではないかと思われるものが、それと明記されることなく、この書の始めの方で ＜八品詞＞と＜性言＞[＝冠詞] の次に言及されているのである。

> …（略）以上八品ハ和漢共ニ存ス…（略）…然ニ西洋人ノ言中ニ別ニ一種和漢ニ充ツ可キノ字ナキ言アリ　之ヲ性言ト云フ此ハ名言ノ上ニ冠セ其三性（男女中ノ三性ヲ云フ）ヲ示スノ言ナレバナリ…（略）…友人予ニ確シテ曰ク和蘭ノ名言ハ其数幾何アリヤ　予答テ曰其数夥多亡慮之ヲ算定シ確シ　其理何ント云フニ活言モ轉シテ又名言トナル　假令ハ見ル聞ク等ハ本活言ナリ　之ヲ(見ルト聞トハ其時ヲ同フセズ見ルハ早クシテ聞クハ遅シ)ト云フハ活言ノ見聞ハ直ニ名言トナル　其他添言接言数言等ノ名言トナルモノ皆此ノ如シ（略）…　（ト　三六）
>
> （…以上の八品詞は日本語にも漢語にもある。……が、他にもうひとつ、西洋語の中には和漢に相当するもののない品詞があり、それを冠詞＜性言＞と言う。このように言う理由は、名詞＜名言＞の上に冠のようにかぶせてその男性・女性・中性の別を表わす言葉だからである。……友人が「和蘭語には名詞がどの位あるのか」ときいてきたので、私は「多すぎて数え切れないくらいだ」と答

えた。「何故かと言うと、動詞<活言>も名詞にすることができるからだ。例えば、日本語でも『見る』『聞く』と言うのは本当の動詞だが、これを『見ルト聞[ママ]トハ其時ヲ同フセズ　見ルハ早クシテ聞クハ遅シ』と言うと、『見る』『聞く』という動詞は、この場合は形も『見る』『聞く』そのままに、『見ること』『聞くこと』という意味の名詞になる。その他、副詞<添言>、接続詞<接言>、数詞<数言>とかが皆こんな具合に名詞になるのだが…」)　[ト　三六]

これが、高野長英『繙巻得師草稿』(国会図書館本)における《不定法》の説明箇所である。一言も《不定法》と断ってくれていないので、余程気をつけないと見逃してしまうが、これは明らかに「～すること」という意を表わす所の、動詞を名詞化する Inf.の用法の解説である。英語で「見ることは」という場合、まず Seeing という動名詞を、さもなければ To see という to-不定詞を用い、see という原形に the をかぶせて「見ることは」を表現することはあり得ないであろう。しかし、和蘭語の動詞活用表に現れる Inf.は、<zu + Inf.>ではなく、動詞そのものであることが普通なので、zien(= see) という Inf.は、中性定冠詞を付けるだけで「見ること」という名詞になることができる。Sewel も<The Infinitive of a Verb is often used as a Noun Substantive of the Neuter Gender...>と言い、<***Zulk werken*** valt moeijelyk.>(=Such working is hard.)や<***Dat drinken*** is zuur.>(=That drink is sour.) 等の例文を挙げているが、<zu+Inf.>の例は挙げていない (1708, p.84 ; 1749, p.74 ; 1766, p.80)。

何故、長英は Inf.を Modus (wijze) に入れなかったのであろうか。この Inf.の「四法外」化を除き、動詞の原形を従来の《複称》ではなく、<単称ノ尤モ単ナルモノ>に求める等、長英の文法の新要素はすべて、次に控える幕末・安政期の文法、即ちMaatschappij社版 *Grammatica* (1822) の文法の特徴となるものである。しかし、その *Grammatica* においてさえも、Inf.は<四法>の筆頭である。長英自身が<譯業必要之書籍目録>でその名を挙げた Weiland 文典 (1806) もまた然りである。Inf.が Modus から脱落し始めるのは新文法下の独逸語で、1830 年代に入ってからであって (**表 27**[342 頁])、Inf. に関しては、長英のみが同時代の蘭語学を超越し、時代から飛び抜けてしまうのである。これはどのように考えるべきか。このアポリアから抜け出るための論考は、しかし、ここで為すべきことではないであろう[注27]。

長英のこの<単称ノ尤モ単ナルモノ>は、大庭雪斎の《活体分》、柳川春三の《根言》を経て、明治の英語学につながっていく。この《根言》で興味深いのは**表 3** (39 頁) の Quackenbos (1867) である。**表 2** (37 頁) を見ると、動詞活用表の最後にあった Inf.と Part.が、この頃再び表の最後になってしまっている。何故か。

しかも、時を同じくして動詞の三要形にも異変が起こる。1845年の Hamelberg の英文典における動詞活用の三要形は、

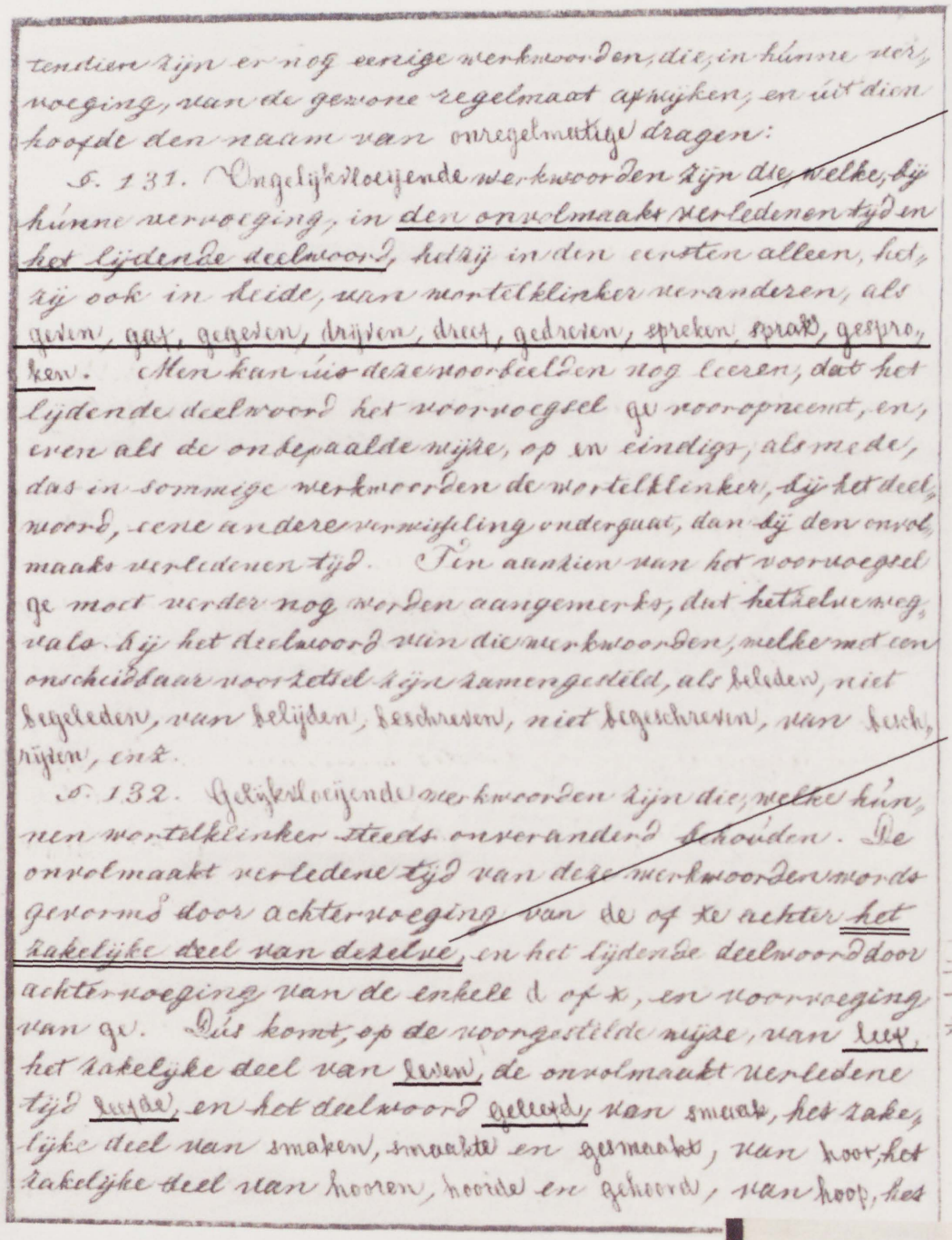
Infinitive	Imperfect	Part.	
To abide	*I abode*	*abode*	(102 頁)

であるが、1867(慶応3)年の Quackenbos はそうではない。

Root	Imperfect	Perfect Part.	
Abide	*abode*	*abode*	(75 頁)

明治期に《動詞ノ根》と訳されることになる<Root>が、ここに登場してくる。

和蘭語では、Inf.を Modus の順位及び動詞活用一覧表の冒頭に置くことにより、Infinitivus=<grondvorm>としての明確な意識を示したが、文法的にこの二者が分離するまでには至らなかった。しかし、動詞の人称語尾をほとんど喪失して語根がむきだしになった英語では、これ以後、Inf.が動詞の基本形の役割を<Root>に譲り、名詞としてのInf.と動詞の《原形》としての<Root>が 分離する方向を取ることになる。



tendien zijn er nog eenige werkwoorden, die, in hunne vervoeging, van de gewone regelmaat afwijken, en uit dien hoofde den naam van onregelmatige dragen:

§. 131. Ongelijkvloeijende werkwoorden zijn die, welke, bij hunne vervoeging, in den onvolmaakt verledenen tijd en het lijdende deelwoord, hetzij in den eersten alleen, hetzij ook in beide, van wortelklinker veranderen, als geven, gaf, gegeven, drijven, dreef, gedreven, spreken, sprak, gesproken. Men kan uit deze voorbeelden nog leeren, dat het lijdende deelwoord het voorvoegsel ge voorzetten, en, even als de onbepaalde wijze, op en eindigt, alsmede, dat in sommige werkwoorden de wortelklinker, bij het deelwoord, eene andere verwisseling onderguat, dan bij den onvolmaakt verledenen tijd. Ten aanzien van het voorvoegsel ge moet verder nog worden aangemerkt, dat hetzelve wegvalt bij het deelwoord van die werkwoorden, welke met een onscheidbaar voorzetsel zijn zamengesteld, als beleden, niet begeleden, van belijden; beschreven, niet begeschreven, van beschrijven, enz.

§. 132. Gelijkvloeijende werkwoorden zijn die, welke hun, een wortelklinker steeds onveranderd behouden. De onvolmaakt verledene tijd van deze werkwoorden wordt gevormd door achtervoeging van de of te achter het zakelijke deel van deselve, en het lijdende deelwoord door achtervoeging van de enkele d of t, en voorvoeging van ge. Dus komt, op de voorgestelde wijze, van leef, het zakelijke deel van leven, de onvolmaakt verledene tijd leefde, en het deelwoord geleefd; van smaak, het zakelijke deel van smaken, smaakte en gesmaakt, van hoor, het zakelijke deel van hooren, hoorde en gehoord, van hoop, het

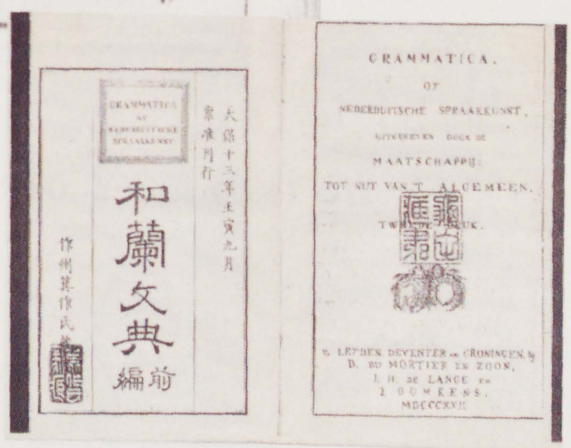
二十六

不規則動詞の過去形と過去分詞はWortelklinker（母音）を変じて作る

＜動詞の根幹部＞規則動詞の過去形と過去分詞は、これを基にして作る

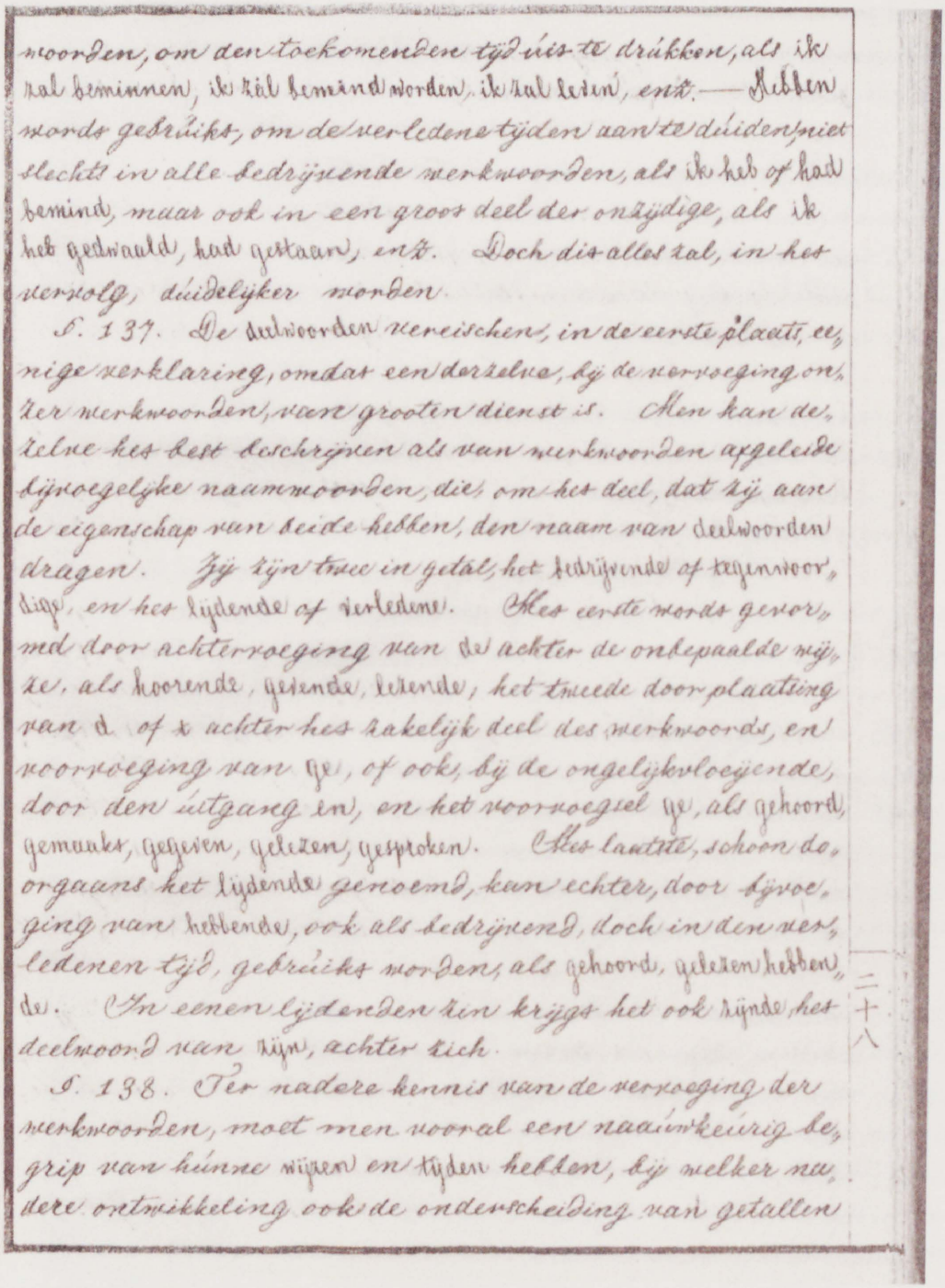
資料２．

国会図書館所蔵のMaatschappij（マートシカッペイ）＜文社先生＞社版 *Grammatica* 『和蘭文典』（文政5）（1822）における「過去形」と「過去分詞」の作り方



§ 131. 不規則動詞の場合。例は geven—gaf—gegeven；drijven—dreef—gedrven；spreken—sprak‥gesproken

§ 132. 規則動詞の場合。例は leef（根幹部）—leven—leefde—geleefd；smaak—smaken—smaakte—gesmaakt；hoor—hooren—hoorde—gehoord；hoop—hopen—hoopte—gehoopt。



woorden, om den toekomenden tijd uit te drukken, als ik zal beminnen, ik zal bemind worden, ik zal lezen, enz. — Hebben wordt gebruikt, om de verledene tijden aan te duiden, niet slechts in alle bedrijvende werkwoorden, als ik heb of had bemind, maar ook in een groot deel der onzijdige, als ik heb gedwaald, had gestaan, enz. Doch dit alles zal, in het vervolg, duidelijker worden.

§. 137. De deelwoorden vereischen, in de eerste plaats, eenige verklaring, omdat een derzelve, bij de vervoeging onzer werkwoorden, veel grooten dienst is. Men kan dezelve het best beschrijven als van werkwoorden afgeleide bijvoegelijke naamwoorden, die, om het deel, dat zij aan de eigenschap van beide hebben, den naam van deelwoorden dragen. Zij zijn twee in getal, het bedrijvende of tegenwoordige, en het lijdende of verledene. Het eerste wordt gevormd door achtervoeging van de achter de onbepaalde wijze, als hoorende, gezende, lezende; het tweede door plaatsing van d of t achter het zakelijk deel des werkwoords, en voorvoeging van ge, of ook, bij de ongelijkvloeijende, door den uitgang en, en het voorvoegsel ge, als gehoord, gemaakt, gegeven, gelezen, gesproken. Het laatste, schoon de organen het lijdende genoemd, kan echter, door bijvoeging van hebbende, ook als bedrijvend, doch in den verledenen tijd, gebruikt worden, als gehoord, gelezen hebbende. In eenen lijdenden zin krijgt het ook zijnde het deelwoord van zijn, achter zich.

§. 138. Ter nadere kennis van de vervoeging der werkwoorden, moet men vooral een naauwkeurig begrip van hunne wijzen en tijden hebben, bij welker nadere ontwikkeling ook de onderscheiding van getallen

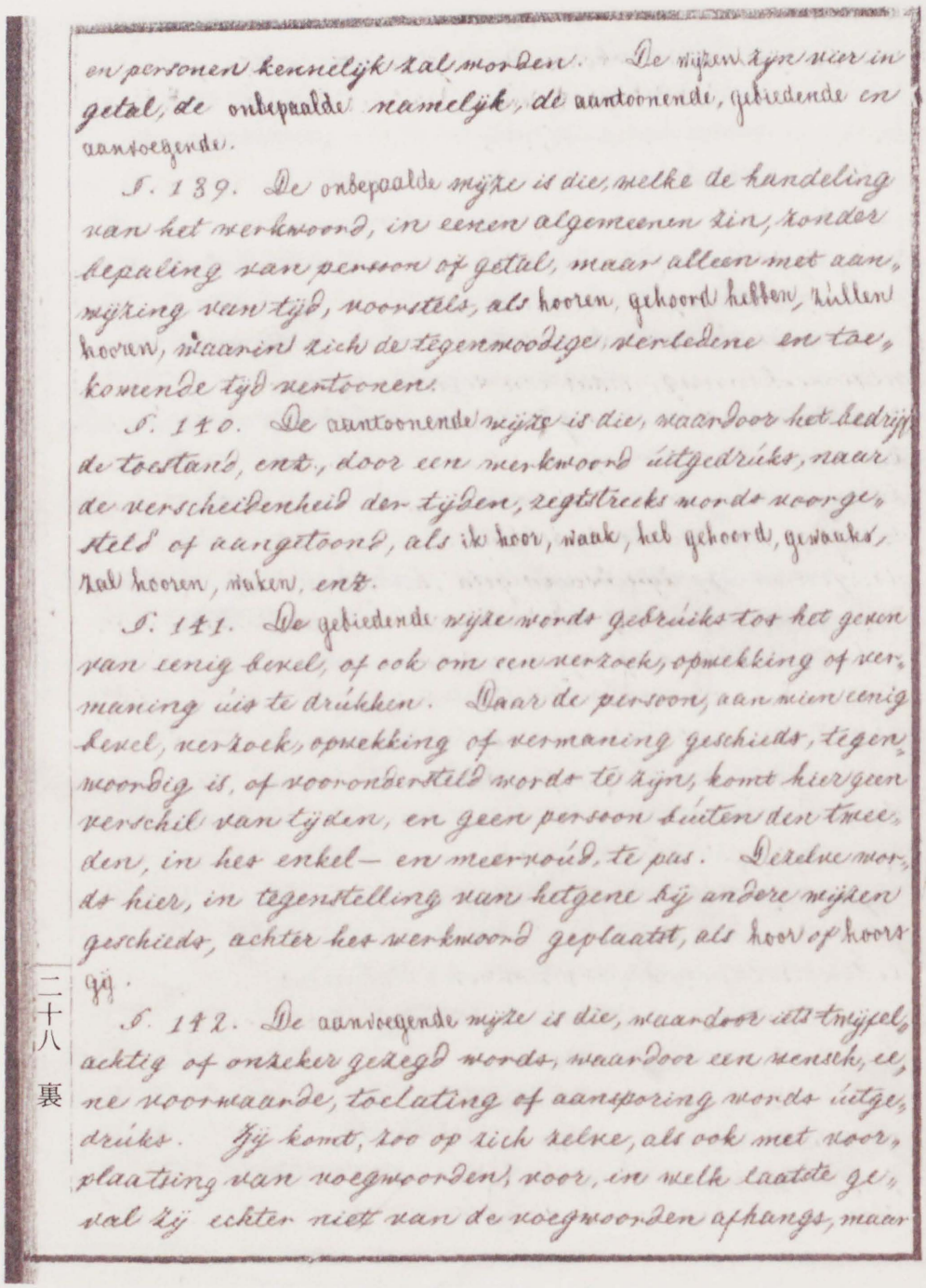
二十八

資料３．

Grammatica 『和蘭文典』（文政5 1822）における Deelwoord《分詞》と wijze《話法》の説明箇所。

§ 137. Deelwoord の種類と作り方。

§ 138. wijze と tijd（時制）の説明の始めの部分。



en personen kennelijk zal worden. De wijzen zijn vier in getal, de onbepaalde namelijk, de aantoonende, gebiedende en aanvoegende.

§. 139. De onbepaalde wijze is die, welke de handeling van het werkwoord, in eenen algemeenen zin, zonder bepaling van persoon of getal, maar alleen met aanwijzing van tijd, voorstels, als hooren, gehoord hebben, zullen hooren, waarin zich de tegenwoodige, verledene en toekomende tijd vertoonen.

§. 140. De aantoonende wijze is die, waardoor het bedrijf de toestand, enz., door een werkwoord uitgedrukt, naar de verscheidenheid der tijden, regtstreeks wordt voorgesteld of aangetoond, als ik hoor, wank, heb gehoord, gewanks, zal hooren, waken, enz.

§. 141. De gebiedende wijze wordt gebruikt tot het geven van eenig bevel, of ook om een verzoek, opwekking of vermaning uit te drukken. Daar de persoon, aan wien eenig bevel, verzoek, opwekking of vermaning geschiedt, tegenwoordig is, of vooronderstelt wordt te zijn, komt hier geen verschil van tijden, en geen persoon buiten den twee den, in het enkel- en meervoud, te pas. De ebe wordt hier, in tegenstelling van hetgene bij andere wijzen geschiedt, achter het werkwoord geplaatst, als hoor of hoors gij.

二十八裏

§. 142. De aanvoegende wijze is die, waardoor iets twijfelachtig of onzeker gezegd wordt, waardoor een wensch, eene voorwaarde, toelating of aansporing wordt uitgedrukt. Zij komt, zoo op zich zelve, als ook met voorplaatsing van voegwoorden, voor, in welk laatste geval zij echter niet van de voegwoorden afhangt, maar

資料４.

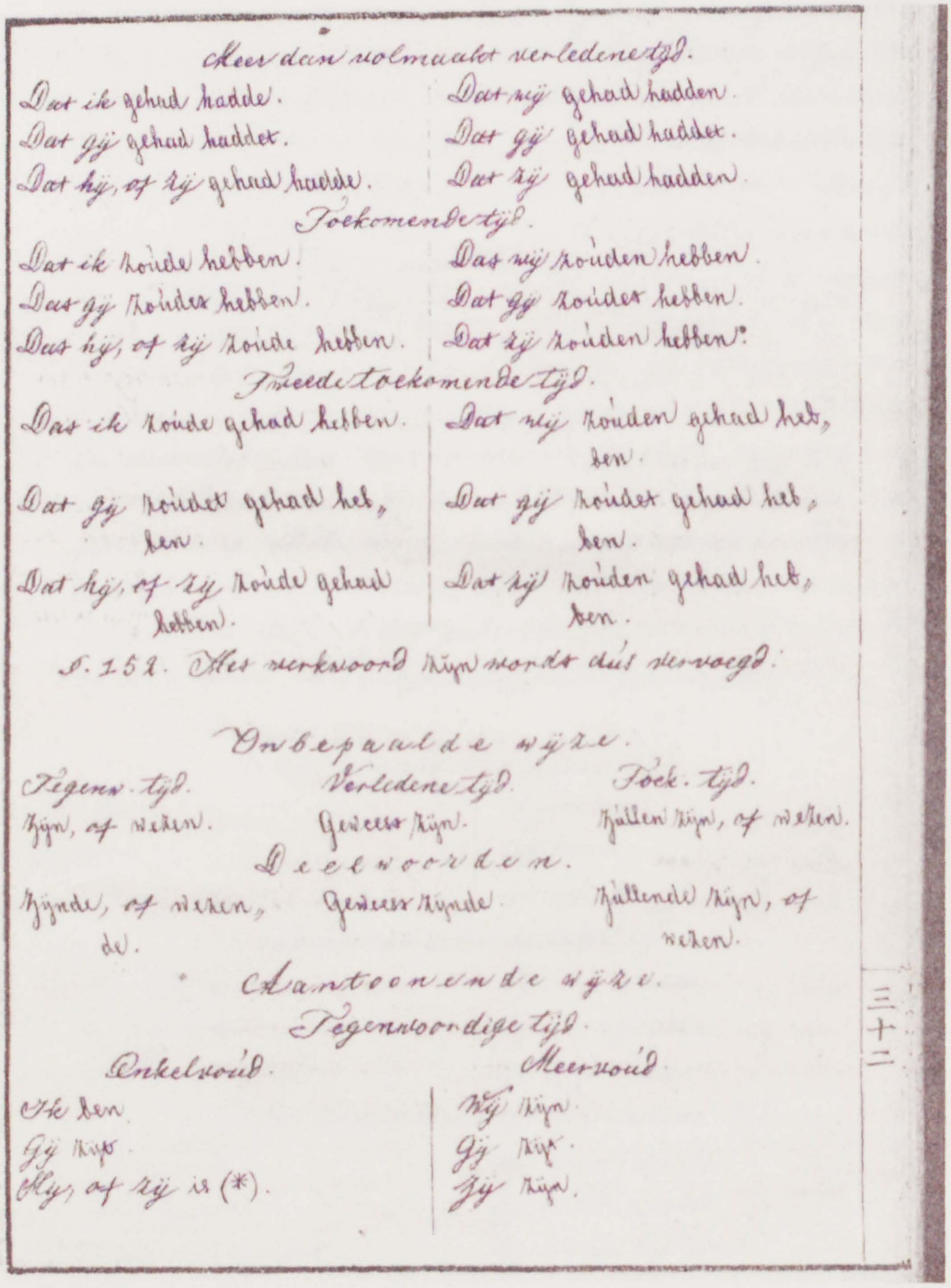
Grammatica『和蘭文典』における wijze《話法》の説明箇所。　前頁から§138. wijze《話法》と tijd《時制》の説明が続く。第一行目から三行目にかけて wijze の種類が列挙され、de onbepaalde wijze《不定法》がその最初に置かれている。以下は各 wijze の説明。

§ 139. De onbepaalde wijze《不定法》

§ 140. De aantoonende wijze《直説法》

§ 141. De gebiedende wijze《命令法》

§ 142. De aanvoegende wijze《接続法》(途中)



Meer dan volmaakt verledene tijd.

Dat ik gehad hadde.	Dat wij gehad hadden.
Dat gij gehad haddet.	Dat gij gehad haddet.
Dat hij, of zij gehad hadde.	Dat zij gehad hadden.

Toekomende tijd.

Dat ik zoude hebben.	Dat wij zouden hebben.
Dat gij zoudet hebben.	Dat gij zoudet hebben.
Dat hij, of zij zoude hebben.	Dat zij zouden hebben.

Tweede toekomende tijd.

Dat ik zoude gehad hebben.	Dat wij zouden gehad hebben.
Dat gij zoudet gehad hebben.	Dat gij zoudet gehad hebben.
Dat hij, of zij zoude gehad hebben.	Dat zij zouden gehad hebben.

§. 152. Het werkwoord zijn wordt dus vervoegd:

Onbepaalde wijze.

Tegenw. tijd.	Verledene tijd.	Toek. tijd.
zijn, of weezen.	geweest zijn.	zullen zijn, of weezen.

Deelwoorden.

zijnde, of weezende.	geweest zijnde.	zullende zijn, of weezen.

Aantoonende wijze.

Tegenwoordige tijd.

Enkelvoud.	Meervoud.
Ik ben.	Wij zijn.
Gij zijt.	Gij zijt.
Hij, of zij is (*).	Zij zijn.

三十二

資料５.

Grammatica『**和蘭文典**』§152　zijn（＝sein；be）**の活用表**(1)。　筆頭に現在・過去・未来の三つの《不定法》と三つの《分詞》が置かれている。

1.Onbepaalde wijze《不定法》

Deelwoorden《分詞》

Tegenw[oordige] tijd《現在》：Verledene tijd《過去》：Toek[omende] tijd《未来》

2.Aantoonende wijze　《直説法》

Tegenwoordige tijd《現在》：Enkelvoud《単数》と Meervoud《複数》

(*) Deze derde persoon heeft zijn oorsprong van het Mesogottische im, is, ist, waarvan de Engelschen nog i am, ik den, overig hebben. De onregelmatigheid van het werkwoord zijn ontstaat daaruit, dat in hetzelve onderscheidene werkwoorden zijn ineengesmolten. Gelijk de derde persoon is van im, zoo is de eerste persoon van het oude bennen afkomstig, in het Hoogduitsch binnen, van waar zij ich bin, du bist in gebruik hebben. De verdere gedeelten worden gevormd door vereeniging van de werkwoorden zijn, en wezen of weren, van welk laat, ste zich de sporen voordoen in gij waart, wij en zij waren. Het lijdende deelwoord van dit wezen luidt, volgens den aard der ongelijkvloeijende werkwoorden, ei, genlijk geweten, doch dit is enkel, als bijvoegelijk naamwoord in gebruik, terwijl het gebruikelijke deelwoord geweest naar den trant der gelijkvloeijende gevormd is.

Onvolmaakt verledene tijd.

Ik was.	Wij waren.
Gij waart.	Gij waart.
Hij, of zij was.	Zij waren.

Volmaakt verledene tijd.

Ik ben geweest.	Wij zijn geweest.
Gij zijt geweest.	Gij zijt geweest.
Hij, of zij is geweest.	Zij zijn geweest.

Meer dan volmaakt verledene tijd.

Ik was geweest.	Wij waren geweest.
Gij waart geweest.	Gij waart geweest.
Hij, of zij was geweest.	Zij waren geweest.

三十二 裏

資料６.

Grammatica『和蘭文典』§152. zijn（＝sein；be）の活用表（２）

2.Aantoonende wijze 《直説法》（続き）

Onvolmaakt verledene tijd(= Imperf.)【未完成過去】[現代の過去形]

Volmaakt verledene tijd(= Perf.)【完成過去】[現代の現在完了]

Meer dan volmaakt verledene tijd【超完成過去】[現代の過去完了]

Toekomende tijd.

Ik zal zijn.	Wij zullen zijn.
Gij zult zijn.	Gij zult zijn.
Hij, of zij zal zijn.	Zij zullen zijn.

Tweede toekomende tijd.

Ik zal geweest zijn.	Wij zullen geweest zijn.
Gij zult geweest zijn.	Gij zult geweest zijn.
Hij, of zij zal geweest zijn.	Zij zullen geweest zijn.

Gebiedende wijze.

Weest gij.	Weest, of zijt gij.

Aanvoegende wijze.

Tegenwoordige tijd.

Dat ik zij.	Dat wij zijn.
Dat gij zijt.	Dat gij zijt.
Dat hij, of zij zij.	Dat zij zijn.

Onvolmaakt verledene tijd.

Dat ik ware.	Dat wij waren.
Dat gij waret.	Dat gij waret.
Dat hij, of zij ware.	Dat zij waren.

Volmaakt verledene tijd.

Dat ik zij geweest.	Dat wij zijn geweest.
Dat gij zijt geweest.	Dat gij zijt geweest.
Dat hij, of zij zij geweest.	Dat zij zijn geweest.

Meer dan volmaakt verledene tijd.

Dat ik ware geweest.	Dat wij waren geweest.
Dat gij waret geweest.	Dat gij waret geweest.
Dat hij, of zij ware geweest.	Dat zij waren geweest.

Toekomende tijd.

三十三

資料７． *Grammatica*『和蘭文典』§152. zijn の活用表（３）

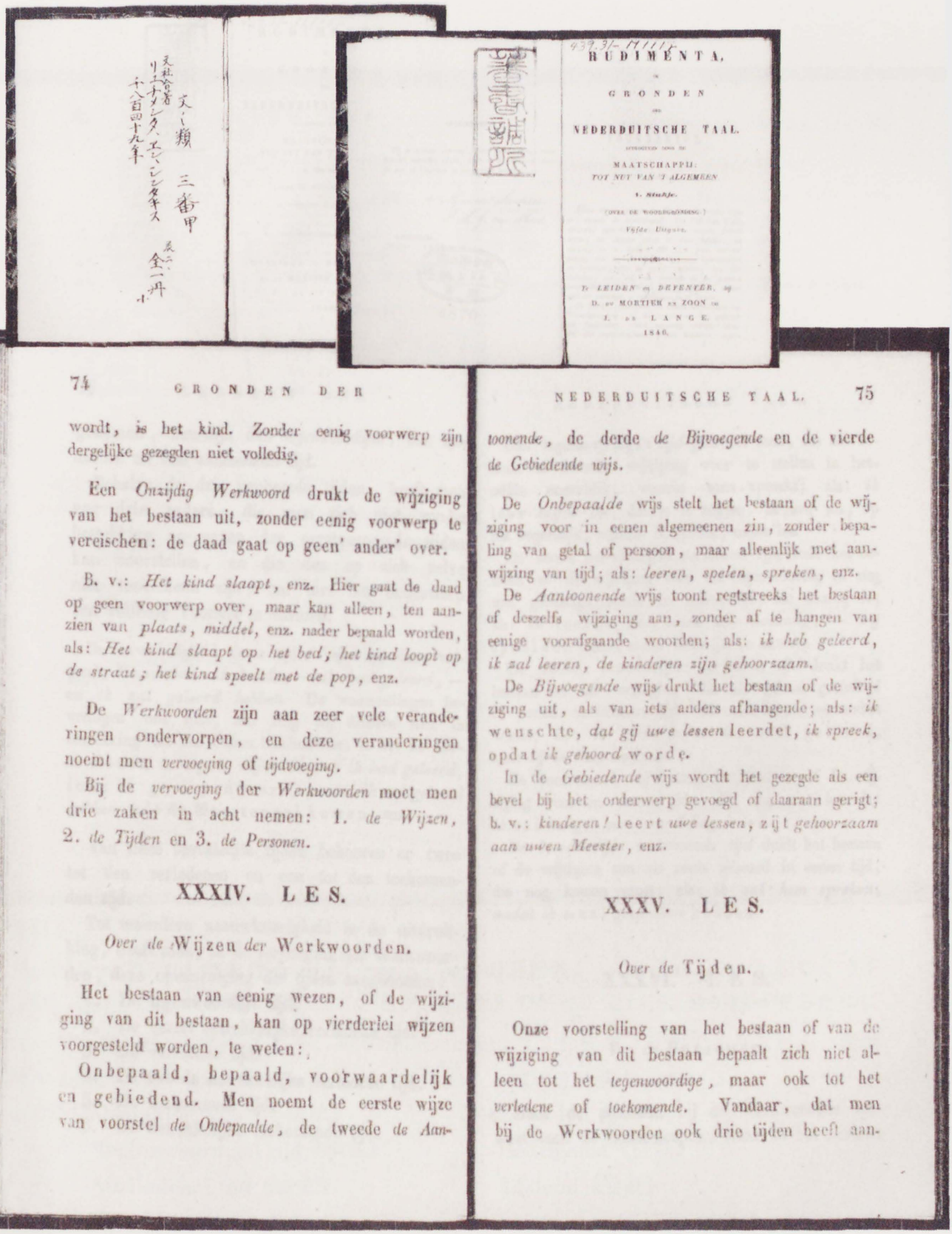
2.Aantoonende wijze 《直説法》（続き）

Toekomende tijd《未来》

Tweede toekomende tijd《第二未来》

3.Gebiedende wijze《命令法》：二人称代名詞の gij が付けられている。

4.Aanvoegende wijze《接続法》："Dat ik zij"（＝Daß ich sei；that I am）のように、すべての活用が＜dat＞から始まっている。時制は Aantoonende wijze《直説法》に同じ。



RUDIMENTA,
OF
GRONDEN
DER
NEDERDUITSCHE TAAL.
UITGEGEVEN DOOR DE
MAATSCHAPPIJ:
TOT NUT VAN 'T ALGEMEEN
1. Stukje.
(OVER DE WOORDBIGONDING.)
Vijfde Uitgave.

Te LEIDEN en DEVENTER, bij
D. en MORTIER en ZOON en
L. en LANGE.
1846.

74 GRONDEN DER

wordt, is het kind. Zonder eenig voorwerp zijn dergelijke gezegden niet volledig.

Een *Onzijdig Werkwoord* drukt de wijziging van het bestaan uit, zonder eenig voorwerp te vereischen: de daad gaat op geen' ander' over.

B. v.: *Het kind slaapt*, enz. Hier gaat de daad op geen voorwerp over, maar kan alleen, ten aanzien van *plaats*, *middel*, enz. nader bepaald worden, als: *Het kind slaapt op het bed; het kind loopt op de straat; het kind speelt met de pop*, enz.

De *Werkwoorden* zijn aan zeer vele veranderingen onderworpen, en deze veranderingen noemt men *vervoeging* of *tijdvoeging*.

Bij de *vervoeging* der *Werkwoorden* moet men drie zaken in acht nemen: 1. *de Wijzen*, 2. *de Tijden* en 3. *de Personen*.

XXXIV. LES.

Over de Wijzen *der* Werkwoorden.

Het bestaan van eenig wezen, of de wijziging van dit bestaan, kan op vierderlei wijzen voorgesteld worden, te weten:

Onbepaald, bepaald, voorwaardelijk en gebiedend. Men noemt de eerste wijze van voorstel *de Onbepaalde*, de tweede *de Aantoonende*, de derde *de Bijvoegende* en de vierde *de Gebiedende wijs*.

NEDERDUITSCHE TAAL. 75

De *Onbepaalde* wijs stelt het bestaan of de wijziging voor in eenen algemeenen zin, zonder bepaling van getal of persoon, maar alleenlijk met aanwijzing van tijd; als: *leeren*, *spelen*, *spreken*, enz.

De *Aantoonende* wijs toont regtstreeks het bestaan of deszelfs wijziging aan, zonder af te hangen van eenige voorafgaande woorden; als: *ik heb geleerd*, *ik zal leeren*, *de kinderen zijn gehoorzaam*.

De *Bijvoegende* wijs drukt het bestaan of de wijziging uit, als van iets anders afhangende; als: *ik* wenschte, *dat gij uwe lessen* leerdet, *ik spreek*, opdat *ik gehoord* worde.

In de *Gebiedende* wijs wordt het gezegde als een bevel bij het onderwerp gevoegd of daaraan gerigt; b. v.: *kinderen!* leert *uwe lessen*, zijt *gehoorzaam aan uwen Meester*, enz.

XXXV. LES.

Over de Tijden.

Onze voorstelling van het bestaan of van de wijziging van dit bestaan bepaalt zich niet alleen tot het *tegenwoordige*, maar ook tot het *verledene* of *toekomende*. Vandaar, dat men bij de Werkwoorden ook drie tijden heeft aan-

資料８.

同じ Maatschappij＜文社先生＞版 *Rudimenta*（1846）における Wijze（話法）の説明箇所。
国会図書館所蔵の江戸幕府旧蔵洋書で、中表紙に「蕃書調書」の朱印が押されている。
Wijze は《不定法》から始まり、《直説法》《接続法》《命令法》と続く。後二者の順番が *Grammatica*（1822）と入れ替わっている。

82 GRONDEN DER

Betrekkelijke toekomende tijd.

Enk	Enk.
Ik *zal*	Dat ik *zoude*
gij *zult*	dat gij *zoudet*
hij, zij, men *zal*	dat hij, zij, men *zoude*
Meerv.	Meerv.
Wij *zullen*	Dat wij *zouden*
gij *zult*	dat gij *zoudet*
zij *zullen*	dat zij *zouden*

gehad hebben. / *gehad hebben.*

Gebiedende wijze.

Enk. *heb*
Meerv. *hebt.*

Vervoeging van het Hulpwoord zijn.

Onbepaalde wijs.	Deelwoorden.
Teg. tijd, *zijn.*	Bedrijvend, *zijnde.*
Verl. tijd, *geweest zijn.*	Lijdend, *geweest.*
Toek. tijd, *zullen zijn.*	

Aantoonende wijze.	Bijvoegende wijze.
Tegenwoordige tijd.	
Enk.	Enk.
Ik *ben*	Dat ik *zij*
gij *zijt*	dat gij *zijt*
hij, zij, men *is.*	dat hij, zij, men *zij.*

NEDERDUITSCHE TAAL. 83

Meerv.	Meerv.
Wij *zijn*	Dat wij *zijn*
gij *zijt*	dat gij *zijt*
zij *zijn.*	dat zij *zijn*

Eerste betrekkelijke verledene tijd.

Enk.	Enk.
Ik *was*	Dat ik *ware*
gij *waart*	dat gij *waret*
hij, zij, men *was.*	dat hij, zij, men *ware.*
Meerv.	Meerv.
Wij *waren*	Dat wij *waren*
gij *waart*	dat gij *waret*
zij *waren.*	dat zij *waren.*

Verledene tijd.

Enk.	Enk.
Ik *ben*	Dat ik *zij*
gij *zijt*	dat gij *zijt*
hij, zij, men *is*	dat hij, zij, men *zij*
Meerv.	Meerv.
Wij *zijn*	Dat wij *zijn*
gij *zijt*	dat gij *zijt*
zij *zijn*	dat zij *zijn*

geweest. / *geweest.*

6*

資料９.

Rudimenta (1846[弘化3]) における zijn（＝sein；be）の活用表。 *Grammatica* と同じく《不定法》と《分詞》が最初に置かれているが、《分詞》の名称が変わり、数が減ってふたつになっている。続く時制の名称も、同じMaatschappij（マートシカッペイ）<文社先生>社版でありながら、変動期の 1830 年代を挟んで、*Grammatica*（1822[文政5]）とは大きく異なっている。

(p.82) Onbepaalde wijs《不定法》　　Deelwoorden《分詞》

Teg[enwoordige] tijd《現在》　　Bedrijvend《能動》

Verl[edene] tijd《過去》　　Lijdend《受動》

Toek[omende] tijd《未来》

zich ſchamen, *ik ſchaam mij*, &c., avoir honte, j'ai honte. — De même: *zich verwonderen*, *behelpen*, *beroemen*, étonner, s'accommoder, ſe vanter &c. Ainſi *zich waſſchen*, *branden*, ſe laver, ſe brûler. 5. Les verbes impersonnels ſont ceux, qui ne ſouffrent point devant eux, *ik*, *gij*, *hij* &c.: *het dondert*, *het regent*, *het berouwt mij*, il tonne, il pleut, je me repents.

Les verbes ont leurs modes et temps. Les *modes* ſont au nombre de quatre, *l'infinitif*, *l'indicatif*, *l'impératif*, et le *ſubjonctif*. 1. L'infinitif est le mode qui repréſente une action en général: *hooren*, *gehoord hebben*, écouter, avoir écouté, &c. Les participes qui y appartiennent ſont actifs et passifs; les premiers ſe terminent en *de*, les derniers en *d* ou *t*: *zeggende*, *gezegd*, *plukkende*, *geplukt*, disant, dit, cueillant, cueilli, &c. Quelques participes passifs ont *en*: *gelezen*, *geloopen*, lu, couru &c.; dans d'autres la jonction *ge* ſe perd, quand ils ont une des prépositions inſéparables, *be*, *ge*, *her*, ont, *ver*: *beklagen*, *beklaagd*, *hernemen*, *hernomen*, plaindre, plaint, reprendre, repris, &c. 2. *L'indicatif* est le mode par lequel l'opération est indiquée directement, *ik hoor*, *gij zult leezen* &c., j'entends, vous lirez &c. 3. *L'impératif* par lequel on commande et exhorte, n'a point de temps, et ſeule-

ſoon te rug voeren: *zich ſchamen*, *ik ſchaam mij* enz. Zoo ook: *zich verwonderen*, *behelpen*, *beroepen* enz. Insgelijks *zich waſſchen*, *branden* enz. 5. *Onperſoonlijke* werkwoorden zijn die, welke *ik*, *gij*, *hij* enz. niet voor zich dulden: *het dondert*, *het regent*, *het berouwt mij* enz.

De werkwoorden hebben hunne *wijzen* en *tijden*. De *wijzen* zijn vier in getal, de *onbepaalde*, *aantoonende*, *gebiedende*, en *aanvoegende wijs*.

1. De *onbepaalde* wijs is die, welke eene handeling algemeen voorſtelt: *hooren*, *gehoord hebben* enz. De hiertoe behoorende *deelwoorden* zijn bedrijvend en lijdend; de eerſte gaan uit op *de*, de laatſte op *d* of *t*: *zeggende*, *gezegd*, *plukkende*, *geplukt*, enz. Sommige lijdende deelwoorden hebben *en*: *gelezen*, *geloopen* enz.; bij andere valt het voorgevoegde *ge* weg, wanneer zij een der onſcheidbare voorſetſels *be*, *ge*, *her*, *ont*, *ver* hebben: *beklagen*, *beklaagd*, *hernemen*, *hernomen* enz. 2. De *aantoonende* wijs is die, waardoor de werking regtſtreeks aangetoond wordt: *ik hoor*, *gij zult lezen* enz. 3. De *gebiedende* wijs, waarmede men gebiedt en vermaant, heeft gee-

資料 10.

1806年版の Weiland 文典。 仏蘭対訳の蘭文典である。第 2 段落から wijs の説明が始まるが、この文典以降 wijs の列挙順位が変わり、《不定法》が筆頭に立つことになる。《不定法》《直説法》《命令法》《接続法》の順で、これは *Grammatica* と同じである。

国会図書館には Weiland の1846年版もあり、これは仏文の部分が削られ、新たに文論が付け加えられている。

INDICATIF. SUBJONCTIF.

Wij *zullen*, nous devons, Wij *zouden*, nous devions,
Gij *zult*, vous devez, Gij *zoudet*, vous deviez,
Zij *zullen*, ils doivent. Zij *zouden*, ils devoient.

L'auxiliaire *zijn*, être.

INDICATIF, PARTICIPES.

Présent, *zijn*, of *wezen*, être, Présent, *zijnde* of *wezende*, étant,
Passé, *geweest zijn*, avoir été, Passé, *geweest zijnde*, ayant été,
Futur, *te zullen zijn*, of *wezen*, devoir être. Futur, *zullende zijn* of *wezen*, devant être.

INDICATIF. SUBJONCTIF.

PRÉSENT.

Ik *ben*, je suis, Dat ik *zij*, que je sois,
Gij *zijt*, tu es, Dat gij *zijt*, que tu sois,
Hij *is*, il est. Dat hij *zij*, qu'il soit.

Wij *zijn*, nous sommes, Dat wij *zijn*, que nous soyons,
Gij *zijt*, vous êtes, Dat gij *zijt*, que vous soyez,
Zij *zijn*, ils sont. Dat zij *zijn*, qu'ils soient.

PASSÉ IMPARFAIT.

Ik *was*, j'étois ou fus, &c. Dat ik *ware*, que je fusse,
Gij *waart*, tu étois, Dat gij *waret*, que tu fusses,
Hij *was*, il étoit. Dat hij *ware*, qu'il fut.

Wij

AANTOON. WIJS. AANVOEG. WIJS

Wij *zullen*, Wij *zouden*,
Gij *zult*, Gij *zoudet*,
Zij *zullen*. Zij *zouden*.

Het hulpwoord *zijn*.

ONBEPAALDE WIJS. DEELWOORDEN.

Tegenw: *zijn*, of *wezen*, Tegenw: *zijnde*, of *wezende*,
Verled: *geweest zijn*. Verled: *geweest zijnde*.
Toekom: *te zullen zijn*, of *wezen*. Toekom: *zullende zijn*, of *wezen*.

AANTOON. WIJS. AANVOEG. WIJS.

TEGENW. TIJD.

Ik *ben*, Dat ik *zij*,
Gij *zijt*, Dat gij *zijt*,
Hij *is*. Dat hij *zij*.

Wij *zijn*, Dat wij *zijn*,
Gij *zijt*, Dat gij *zijt*,
Zij *zijn*. Dat zij *zijn*.

ONVOLM. VERL. TIJD.

Ik *was*, Dat ik *ware*,
Gij *waart*, Dat gij *waret*,
Hij *was*. Dat hij *ware*.

E 5. Wij

仏蘭対訳の部分（拡大）

L'auxiliaire *zijn*, être.

INDICATIF, PARTICIPES.

Présent, *zijn*, of *wezen*, être, Présent, *zijnde* of *wezende*, étant,
Passé, *geweest zijn*, avoir été, Passé, *geweest zijnde*, ayant été,
Futur, *te zullen zijn*, of *wezen*, devoir être. Futur, *zullende zijn* of *wezen*, devant être.

⇦ このINDICATIFはINFINITIFの間違い

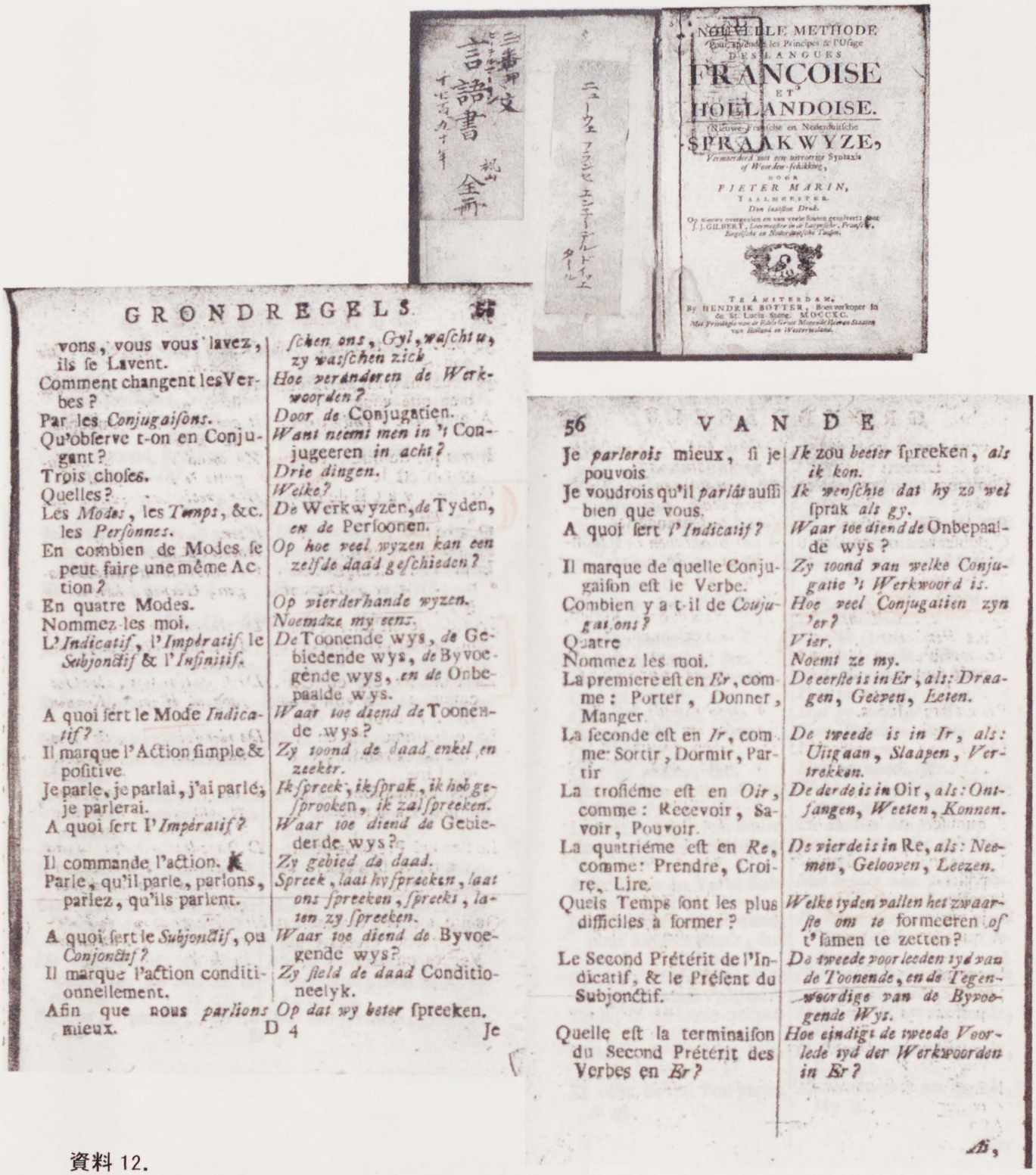
蘭語の部分（拡大）

Het hulpwoord *zijn*.

ONBEPAALDE WIJS. DEELWOORDEN.

Tegenw: *zijn*, of *wezen*, Tegenw: *zijnde*, of *wezende*,
Verled: *geweest zijn*. Verled: *geweest zijnde*.
Toekom: *te zullen zijn*, of *wezen*. Toekom: *zullende zijn*, of *wezen*.

資料 11.
(文化3)
1806年版の Weiland 文典における zijn の動詞活用表。その最初に《不定法》と《分詞》が並置されている。種類は《現在》《過去》《未来》の三種類である。表は、《直説法》と《接続法》を並置してそれぞれの 6 時制を示し、《命令法》で終わっている。(弘化3) 1846年の ***Rudimenta*** はこの形式を踏襲している。



NOUVELLE METHODE
Pour apprendre les Principes & l'Usage
DES LANGUES
FRANÇOISE
ET
HOLLANDOISE.
(Nieuwe Fransche en Nederduitsche
SPRAAKWYZE,
Vermeerderd met een uitvoerige Syntaxis
of Woorden-schikking,
DOOR
PIETER MARIN,
TAALMEESTER.
Den laatsten Druk.
Op nieuws overgezien en van veele fouten gezuiverd: door
J. J. GILBERT, Leermeester in de Latynsche, Fransche,
Engelsche en Nederduitsche Taalen.
TE AMSTERDAM,
By HENDRIK BOTTER, Boekverkoper in
de St. Luchs-Steeg. MDCCXC.
Met Privilegie van de Edele Groot Mogende Heeren Staaten
van Holland en Westvrieland.

GRONDREGELS.

vons, vous vous lavez, ils se Lavent.
Comment changent les Verbes?
Par les *Conjugaisons*.
Qu'observe t-on en Conjugant?
Trois choses.
Quelles?
Les *Modes*, les *Temps*, &c. les *Personnes*.
En combien de Modes se peut faire une même Action?
En quatre Modes.
Nommez-les moi.
L'*Indicatif*, l'*Impératif* le *Subjonctif* & l'*Infinitif*.

A quoi sert le Mode *Indicatif*?
Il marque l'Action simple & positive.
Je parle, je parlai, j'ai parlé, je parlerai.
A quoi sert l'*Impératif*?
Il commande l'action.
Parle, qu'il parle, parlons, parlez, qu'ils parlent.
A quoi sert le *Subjonctif*, ou *Conjonctif*?
Il marque l'action conditionnellement.
Afin que nous *parlions* mieux.

schen ons, Gyl, waschtu, zy waschen zich
Hoe veranderen de Werkwoorden?
Door de Conjugatien.
Want neemt men in 't Conjugeeren *in acht?*
Drie dingen.
Welke?
De Werkwyzen, *de* Tyden, *en de* Persoonen.
Op hoe veel wyzen kan een zelfde daad geschieden?
Op vierderhande wyzen.
Noemdze my eens.
De Toonende wys, *de* Gebiedende wys, *de* Byvoegende wys, *en de* Onbepaalde wys.
Waar toe diend de Toonende wys?
Zy toond de daad enkel en zeeker.
Ik spreek, ik sprak, ik hob gesprooken, ik zal spreeken.
Waar toe diend de Gebiedende wys?
Zy gebied de daad.
Spreek, laat hy spreeken, laat ons spreeken, spreeks, laten zy spreeken.
Waar toe diend de Byvoegende wys?
Zy stelt de daad Conditioneelyk.
Op dat wy beter spreeken.

D 4 Je

56 VAN DE

Je *parlerois* mieux, si je pouvois.
Je voudrois qu'il *parlât* aussi bien que vous.
A quoi sert l'*Indicatif*?
Il marque de quelle Conjugaison est le Verbe.
Combien y a t-il de *Conjugaisons*?
Quatre.
Nommez les moi.
La premiere est en *Er*, comme: Porter, Donner, Manger.
La seconde est en *Ir*, comme: Sortir, Dormir, Partir.
La troisiéme est en *Oir*, comme: Recevoir, Savoir, Pouvoir.
La quatriéme est en *Re*, comme: Prendre, Croire, Lire.
Quels Temps sont les plus difficiles à former?
Le Second Prétérit de l'Indicatif, & le Présent du Subjonctif.
Quelle est la terminaison du Second Prétérit des Verbes en *Er*?

Ik zou beeter spreeken, *als ik kon.*
Ik wenschte dat hy zo wel sprak *als gy.*
Waar toe diend de Onbepaalde wys?
Zy toond van welke Conjugatie 't Werkwoord is.
Hoe veel Conjugatien zyn 'er?
Vier.
Noemt ze my.
De eerste is in Er, als: Draagen, Geeven, Eeten.
De tweede is in Ir, als: Uitgaan, Slaapen, Vertrekken.
De derde is in Oir, *als: Ontfangen, Weeten, Konnen.*
De vierde is in Re, *als: Neemen, Gelooven, Leezen.*
Welke tyden vallen het zwaarste om te formeeren *of t'samen te zetten?*
De tweede voor leeden tyd van de Toonende, en de Tegenwoordige van de Byvoegende Wys.
Hoe eindigt de tweede Voorlede tyd der Werkwoorden in Er?

B,

資料 12.

(宮城2)
1790年の P. Marin の文典。　1頁を半分に割った仏蘭対訳の二か国語文典である。各話法は《直説法》《命令法》《接続法》《不定法》の順に並べられ、《不定法》は最後になっている。

「話法」は wys という古い綴りで以って綴られている。和蘭語の話法名も Maatschappij や Weiland のものと異なり、《直説法》は de Toonende wys、《接続法》は de Byvoegende wys となっている。

CONJUGAISON	CONJUGATIE.
Du Verbe	*Van het*
Substantif.	Zelfstandig Werkwoord
Etre.	*Weezen* of *Zyn.*
L'INDICATIF.	TOONENDER WYS.
Le Présent.	De Tegenwoordige Tyd.
Je suis.	*Ik ben.*
Tu es.	*Gy zyt.*
Il est.	*Hy is.*
Nous sommes.	*Wy zyn.*
Vous êtes.	*Gy-lieden zyt.*
Ils sont.	*Zy zyn.*
Le 1. Prétérit.	De eerste voorlede Tyd.
J'étois.	*Ik was.*
Tu étois.	*Gy waart.*
Il étoit.	*Hy was.*
Nous étions.	*Wy waaren.*
Vous étiez.	*Gy-lieden waart.*
Ils étoient.	*Zy waaren.*
Le 2. Prétérit.	De tweede voorlede Tyd.
Je fus.	*Ik was.*
Tu fus.	*Gy waart.*
Il fut.	*Hy was.*
Nous fumes.	*Wy waaren.*
Vous futes.	*Gy-lieden waart.*
Ils furent.	*Zy waaren.*
Le Parfait.	De Volmaakte Tyd.
J'ai été.	*Ik heb geweest.*

Tu as été.	*Gy hebt geweest.*
Il a été.	*Hy heeft geweest.*
Nous avons été.	*Wy hebben geweest.*
Vous avez été.	*Gy-lieden hebt geweest.*
Ils ont été.	*Zy hebben geweest.*
Le Plusque Parfait.	Meer als volmaakte Tyd.
J'avois été.	*Ik had geweest.*
Tu avois été.	*Gy had geweest.*
Il avoit été.	*Hy had geweest.*
Nous avions été.	*Wy hadden geweest.*
Vous aviez été.	*Gy-lieden had geweest.*
Ils avoient été.	*Zy hadden geweest.*
Le Futur.	De toekomende Tyd.
Je serai.	*Ik zal zyn.*
Tu seras.	*Gy zult zyn.*
Il sera.	*Hy zal zyn.*
Nous serons.	*Wy zullen zyn.*
Vous serez.	*Gy-lieden zult zyn.*
Ils seront.	*Zy zullen zyn.*
L'IMPERATIF.	GEBIEDENDER WYS.
Sois.	*Zyn.*
Qu'ils soit.	*Laat hy zyn.*
Soyons.	*Laat ons zyn.*
Soyez.	*Zyt gy-lieden.*
Qu'ils soient.	*Laaten zy zyn.*
LE SUBJONCTIF.	BYVOEGENDER WYS.
Le Présent.	De Tegenwoordige Tyd.
Afin que je sois.	*Op dat ik zy.*
Afin que tu sois.	*Op dat gy zyt.*
Afin qu'il soit.	*Op dat hy zy.*
Afin que nous soyons.	*Op dat wy zyn.*
Afin que vous soyez.	*Op dat gy-lieden zyt.*
Afin qu'ils soyent.	*Op dat zy zyn.*

L'Imparfait.	De Onvolmaakte Tyd.
Je serois.	*Ik zou zyn.*
Tu serois.	*Gy zoud zyn.*
Il seroit.	*Hy zou zyn.*
Nous serions.	*Wy zouden zyn.*
Vous seriez.	*Gy-lieden zoud zyn.*
Ils seroient.	*Zy zouden zyn.*
L'Optatif.	De Wenschende Tyd.
Je voudrois que je fusses.	*Ik wenschte dat ik was.*
Je voudrois que tu fusses.	*Ik wenschte dat gy waart.*
Je voudrois qu'il fût.	*Ik wenschte dat hy was.*
Que nous fussions.	*Ik wenschte dat wy waaren.*
Que vous fussiez.	*Ik wenschte dat gyl. waart.*
Qu'ils fussent.	*Ik wenschte dat zy waaren.*
Les Participes.	De Deelwoorden.
Etant.	*Zynde.*
Eté.	*Geweest.*
CONJUGAISON	CONJUGATIE
Du Verbe	*Van het*
Auxiliaire	Behulpzaam Werkwoord
Avoir.	*Hebben.*
L'INDICATIF.	TOONENDER WYS.
Le Présent.	De Tegenwoordige Tyd.
J'Ai.	*Ik heb.*
Tu as.	*Gy hebt.*

資料 13.

P. Marin の文典：zyn の活用表。

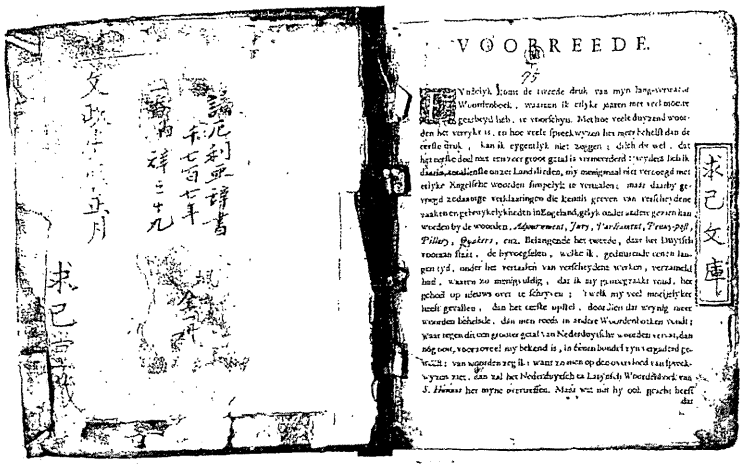
《不定法》は表に含まれず、２個の《分詞》のみが最後に置かれている。

Toonender wys《直説法》の時制は５個で《第二未来》が欠落。

Byvoegender wys《接続法》の時制は現在時・未完了時・希望時の３種しかなく、しかも現代なら《仮定法》となる後２者が《接続法》の時制になっている。

55 頁の wys の説明箇所（拡大）

Op vierderhande wyzen.
Noemdze my eens.
De Toonende wys, *de* Gebiedende wys, *de* Byvoegende wys, *en de* Onbepaalde wys.



資料 14.

1708年の Sewel の蘭英–英蘭辞書中に収載された蘭語英文典。

動詞活用表は、《直説法》から始まって、《不定法》と《分詞》が最後になっている。話法や時制に関する説明は特になく、活用表を見て理解しなければならない。

64 *A Brief and compendious*

The *Conjugation* of the Verb Substantive *Zyn* or *Weezen* to be; which is chiefly used to signify the *Passive*.

The INDICATIVE MOOD.

The *Present Tense.*

Singular.	*Plural.*
Ik ben I Am.	*We zyn* We are.
Gy bent or *zyt* Thou art.	*Gylieden zyt* Ye are.
Hy is He is.	*Zy zyn* They are.

The *Preter-Imperfect.*

Sing.	*Plur.*
Ik was I was.	*Wy waaren* We were.
Gy waart Thou wast.	*Gylieden waart* Ye were.
Hy was He was.	*Zy waaren* They were.

The *Preter-perfect.*

Sing.	*Plur.*
Ik ben or *heb geweest* I have been.	*Wy zyn* or *hebben geweest* We have been.
Gy bent or *hebt geweest* Thou hast been.	*Gylieden zyt* or *hebt geweest* Ye have been.
Hy is or *heeft geweest* He has been.	*Zy zyn* or *hebben geweest* They have been.

The *Preter-pluperfect.*

Sing.	*Plur.*
Ik was or *had geweest* I had been.	*Wy waaren* or *hadden geweest* We had been.
Gy waart or *hadt geweest* Thou hadst been.	*Gylieden waart* or *hadt geweest* Ye had been.
Hy was or *had geweest* He had been.	*Zy waaren* or *hadden geweest* They had been.

The *Future.*

Sing.	*Plur.*
Ik zal zyn or *weezen* I shall *or* will be.	*Wy zullen zyn* or *weezen* We shall *or* will be.
Gy zult zyn or *weezen* Thou shalt *or* wilt be.	*Gylieden zult zyn* or *weezen* Ye shall *or* will be.
Hy zal zyn or *weezen* He shall *or* will be.	*Zy zullen zyn* or *weezen* They shall *or* will be.

The IMPERATIVE MOOD.

Sing.	*Plur.*
Wees gy Be thou.	*Zyn we* or *laaten wy zyn* Be we *or* let us be.
Dat hy zy Let him be.	*Weest* or *zyt gylieden* Be ye.
	Laat ze zyn Let them be.

The OPTATIVE or SUBJUNCTIVE MOOD.

The *Present Tense.*

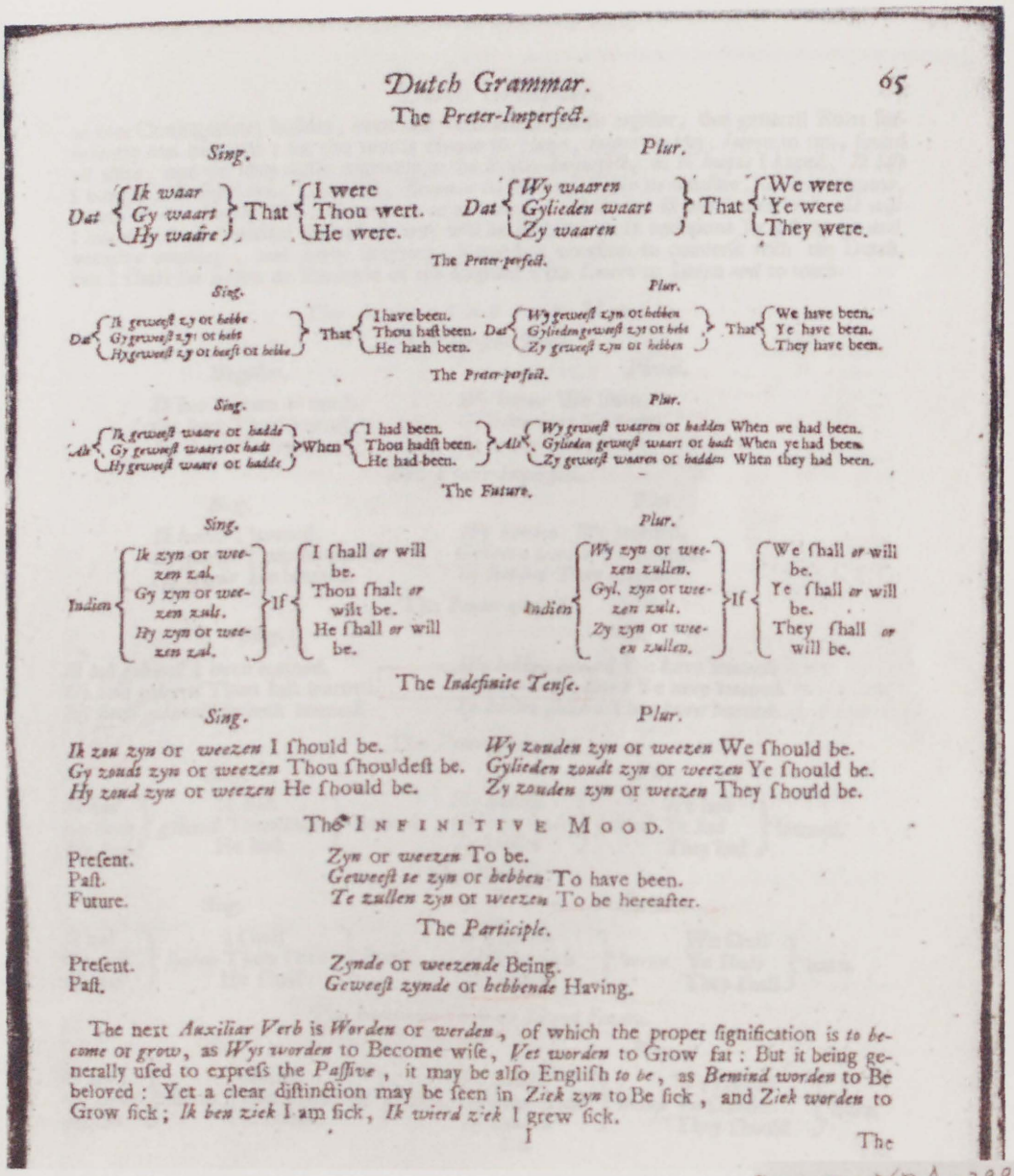
Sing.

Dat { *Ik zy* / *Gy zyt* / *Hy zy* } That { I be. / Thou beest. / He be. }

Plur.

Dat { *Wy zyn* / *Gylieden zyt* / *Zy zyn* } That { We be. / Ye be. / They be. }

The



Dutch Grammar. 65

The *Preter-Imperfect.*

Sing.		*Plur.*	
Dat { *Ik waar* / *Gy waart* / *Hy waare* }	That { I were / Thou wert. / He were.	*Dat* { *Wy waaren* / *Gylieden waart* / *Zy waaren* }	That { We were / Ye were / They were.

The *Preter-perfect.*

Sing.		*Plur.*	
Dat { *Ik geweest zy* or *hebbe* / *Gy geweest zyt* or *hebt* / *Hy geweest zy* or *heeft* or *hebbe* }	That { I have been. / Thou haſt been. / He hath been.	*Dat* { *Wy geweest zyn* or *hebben* / *Gylieden geweest zyt* or *hebt* / *Zy geweest zyn* or *hebben* }	That { We have been. / Ye have been. / They have been.

The *Preter-pafect.*

Sing.		*Plur.*	
Als { *Ik geweest waare* or *hadde* / *Gy geweest waart* or *hadt* / *Hy geweest waare* or *hadde* }	When { I had been. / Thou haſt been. / He had been. }	*Als* { *Wy geweest waaren* or *hadden* / *Gylieden geweest waart* or *hadt* / *Zy geweest waaren* or *hadden* }	When we had been. / When ye had been. / When they had been.

The *Future.*

Sing.		*Plur.*	
Indien { *Ik zyn* or *weezen zal.* / *Gy zyn* or *weezen zult.* / *Hy zyn* or *weezen zal.* }	If { I ſhall *or* will be. / Thou ſhalt *or* wilt be. / He ſhall *or* will be.	*Indien* { *Wy zyn* or *weezen zullen.* / *Gyl. zyn* or *weezen zult.* / *Zy zyn* or *weezen zullen.* }	If { We ſhall *or* will be. / Ye ſhall *or* will be. / They ſhall *or* will be.

The *Indefinite Tenſe.*

Sing.	*Plur.*
Ik zou zyn or *weezen* I ſhould be.	*Wy zouden zyn* or *weezen* We ſhould be.
Gy zoudt zyn or *weezen* Thou ſhouldeſt be.	*Gylieden zoudt zyn* or *weezen* Ye ſhould be.
Hy zoud zyn or *weezen* He ſhould be.	*Zy zouden zyn* or *weezen* They ſhould be.

The INFINITIVE MOOD.

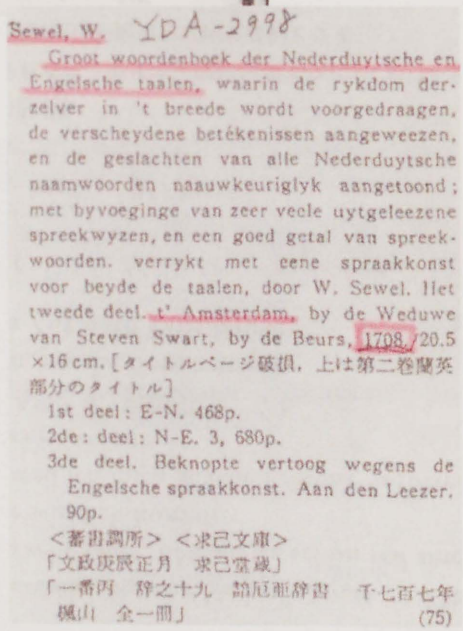
Preſent.	*Zyn* or *weezen* To be.
Paſt.	*Geweest te zyn* or *hebben* To have been.
Future.	*Te zullen zyn* or *weezen* To be hereafter.

The *Participle.*

Preſent.	*Zynde* or *weezende* Being.
Paſt.	*Geweest zynde* or *hebbende* Having.

The next *Auxiliar Verb* is *Worden* or *werden*, of which the proper ſignification is *to become* or *grow*, as *Wys worden* to Become wiſe, *Vet worden* to Grow fat: But it being generally uſed to expreſs the *Paſſive*, it may be alſo Engliſh *to be*, as *Bemind worden* to Be beloved: Yet a clear diſtinction may be ſeen in *Ziek zyn* to Be ſick, and *Ziek worden* to Grow ſick; *Ik ben ziek* I am ſick, *Ik wierd ziek* I grew ſick.

I The



Sewel, W. YDA-2998

Groot woordenboek der Nederduytsche en Engelsche taalen, waarin de rykdom derzelver in 't breede wordt voorgedraagen, de verscheydene betékenissen aangeweezen, en de geslachten van alle Nederduytsche naamwoorden naauwkeuriglyk aangetoond; met byvoeginge van zeer veele uytgeleezene spreekwyzen, en een goed getal van spreekwoorden. verrykt met eene spraakkonst voor beyde de taalen, door W. Sewel. Het tweede deel. t' Amsterdam, by de Weduwe van Steven Swart, by de Beurs, 1708. 20.5 ×16 cm. [タイトルページ破損，上は第二巻蘭英部分のタイトル]

1st deel: E-N. 468p.

2de: deel: N-E. 3, 680p.

3de deel. Beknopte vertoog wegens de Engelsche spraakkonst. Aan den Leezer. 90p.

<蔵書調所> <求己文庫>

「文政庚辰正月　求己堂蔵」

「一番丙　辞之十九　語厄亜辞書　千七百七年　楓山　全一冊」

(75)

資料 15.

(宝永5)
1708年の Sewel の蘭語英文典の続き。　《直説法》は《第二未来》を欠き、《仮定法》または《接続法》の第六の時制は《不定時》である。その後に《不定法》3 個と《分詞》2 個が来て、この表を締め括っている。

I was が Preter-Imperfekt【未完成過去】、I have been が Preter-Perfekt【完成過去】と呼ばれていることに注意。

この文典が出版された 1708 年は宝永 5 年。元禄の次の年号で、1703（元禄 16）年の赤穂浪士討ち入りから 5 年後である。

(延享6)　(明和3)
Sewel には1749年版と1766年版があり、いずれも文典の内容は同じである。モンテスキューと産業革命の時代の、旧文法の文典である。

Neuter, as appears in the use of our *Adjectives* and *Particles*, for we say, *Een groot man*, a great man, *eene groote vrouw*, a great woman, *een groot kind*, a great child; and yet we must acknowledge, that this rule in regard of the *Adjectives* is defective; because we say *Een goede* (and not *goed*) *Broeder* a good brother, *een goede Zuster* a good sister, and *een goed Wyf* a good wife; so that oftentimes it is somewhat hard to determine whether those *Nouns*, that require the Particles *De*, *die*, or *deeze*, be of the *Masculine* or *Feminine gender*; but most certain it is, that the Nouns to which the Particles *Het*, *dat*, or *dit* are added, are of the *Neuter gender*; and therefore the final *E* in the *Adjectives*, when joined wich such words, is generally rejected; for because we say *Het*, *dat* or *dit Paerd Het*, *dat*, or *dit Huys*; *Het*, *dat* or *dit Schip*, *Het*, *dat* or *dit Kind*; we also say *Een sterk paerd* a strong horse, *een hoog huys* a high house, *een groot schip* a great ship, *een mooi kind* a fine child, and not *sterke paerd*, *hooge huys*, *groote schip*, *mooije kind*: and because we say *De*, *die* or *deeze vogel De*, *die* or *deeze pen*, we never say *een snel vogel* or *een styf pen*, but *een snelle vogel* a swift bird, *een styve pen* a stif penn. However this rule admits of an exception, for we say *het platte land*, *het groene kussen* &c. yet *een groene kussen* is not good, but it must be *een groen kussen*. And when the *Adjective* is placed behind a *Substantive* of the Feminine gender, the final *e* is left off, as if the Substantive was a Neuter, thus, *Eene vrouw groot van vermoogen*, a woman of great ability.

Of NOUNS.

NOuns are words where with all things and qualities are named and distinguish'ed, as *een Mensch* a man, *een kind* a child, *een beest* a beast, *een kruyd* a herb, *toorn* anger, *heerlykheyd* glory, *quaad* bad, *zwart* black, *kleyn* little, small, &c.

These *Nouns* are divided into *Substantives* and *Adjectives*.

Substantives are *Nouns* subsisting of themselves, as de *Hemel* the Heaven, *de Zon* the sun, *een gelf* a wave, *een Hertog* a Duke, *koude* cold, *goedheyd* goodness, *haat* hatred, *nyd* envy.

Adjectives cannot be used alone, as having no perfect signification, unless joined to *Substantives*, whose form and quality they express, as *Sterk* strong, *zwak* weak, *schoon* clean, *vuyl* foul, *droog* dry, *koud* cold, *hoog* high, *laag* low. But sometimes two *Substantives* are, join'd together, one of which serves for an *Adjective*, as *een Water-molen* a Water-mill, *een Kerk-dief* a Church-robber, *een Dief-henker* a Hang-man, *een Dienst-knecht* a Man-servant, *regen-water* rain-water, *een Dood-kist* a Coffin, *een Koorn-zolder* a Corn-loft, *een Koorn-kooper* a Corn-merchant. But before I say more of the *Adjectives* I'll first treat

Of the SUBSTANTIVES a part.

There are severall *Substantives* that may be called *Primitives* or *Original*, from which other *Substantives* are formed, as

Visch Fish.	*Visscher* Fisher.	*Tuyn* Garden.	*Tuynier* Gardener.
Trompét Trumpet.	*Trompetter* Trumpeter.	*Vogel* Bird.	*Vogelaar* Fowler.
Vraag Question.	*Vraager* Asker, querist.	*Koppel* Couple.	*Koppelaar* Pander.
Holland.	*Hollander* a Hollander, Dutchman.	*Amsterdam*,	*Amsterdammer* One born at Amsterdam.

Some there are which end in *schap*, as

Meester Master.	*Meesterschap* Mastership.	*Schout* Sheriff.	*Schoutschap* Sheriffalty.
Vrind Friend.	*Vrindschap* Friendship.	*Maag* Kingsman.	*Maagschap* Relation.
Ridder Knight.	*Ridderschap* Knighthood.	*Broeder* Brother.	*Broederschap* Brotherhood.

F Some

名詞の原形（拡大）

Of the SUBSTANTIVES a part.

There are severall *Substantives* that may be called *Primitives* or *Original*, from which other *Substantives* are formed, as

Visch Fish.	*Visscher* Fisher.	*Tuyn* Garden.	*Tuynier* Gardener.
Trompét Trumpet.	*Trompetter* Trumpeter.	*Vogel* Bird.	*Vogelaar* Fowler.
Vraag Question.	*Vraager* Asker, querist.	*Koppel* Couple.	*Koppelaar* Pander.
Holland.	*Hollander* a Hollander, Dutchman.	*Amsterdam*,	*Amsterdammer* One born at Amsterdam.

資料 16.

(宝永5)
1708年の Sewel **の蘭語英文典**にある＜名詞の原形＞の部分。 この＜Primitives＞または＜Original＞から他の実名詞が作られる。

100 GRONDEN DER

7. De *Ongelijkvloeijende* en *Onregelmatige* Werkwoorden, in derzelver vervoeging, geene bepaalde regelen volgende, heeft men alleen te letten op derzelver *betrekkelijken verledenen tijd* en op het *Lijdend Deelwoord;* deze bekend zijnde, volgen zij in de aanwijzing der personen meestal de Gelijkvloeijende Werkwoorden, als:

1e. b. v. tijd.		Lijd. Deelw.
spreken	*sprak*	*gesproken*
geven	*gaf*	*gegeven*
doen	*deed*	*gedaan*
breken,	*brak,*	*gebroken,*
enz.	enz.	enz.

8. Sommige Werkwoorden worden als *Gelijkvloeijende*, en ook als *Ongelijkvloeijende* vervoegd, als:

bewegen	*bewoog* / *beweegde*	*bewogen* / *beweegd*
jagen	*joeg* / *jaagde*	*gejaagd*
schenden	*schond* / *schendde*	*geschonden* / *geschend.*

Dus ook *vragen*, *lachen*, *waaijen*, enz. Vele goede Schrijvers volgen de *Gelijkvloeijende* vervoeging.

9. De tijd van de Gebiedende wijze is alleen de *tegenwoordige*, omdat men alleen in eenen *tegenwoordigen tijd* iets *gebiedt*, *verzoekt*, of tot iets *aanmaant*.

資料 17.

Rudimenta (1846[弘化3]) における三要形。"spreken" が Infinitief《不定法》、"sprak" が de eerste betrekkelijke verledene tijd= Imperf.【第一関係過去】、"gespropken" が het Lijdend Deelwoord【受動分詞】

資料 18.

Sewel, W. *Groot woordenboek der Nederdeytsche en Englische taalen* 所収の Dutch Grammar

⇩

Dutch Grammar. 71

The INFINITIVE MOOD.

Geleerd worden to Be taught, to become learned.
Geleerd geworden Become learned.
Geleerd te zullen worden To be taught hereafter.

The *Participles.*

Present. *Geleerd*, Taught, learned. *Geleerd wordende* Being taught.
Past. *Geleerd geworden zynde* Having been taught *or* being become learned.
Future. *Zullende geleerd worden* Being to be taught *or* to become learned hereafter.

According to this *Conjugation* all other *Verbs* may be conjugated; if it be but obſerved that the *Preter-Imperfect Tenſe* of ſeverall Verbs differs variously: for thô the adding of the termination [*de*] to the *Preſent tenſe* ſeems to be the moſt regular way of forming the *Preter-Imperfect*, as *Ik leer*, I learn *or* teach, *Ik leerde* I learned *or* taught; yet a great many *Verbs* form the *Preter-Imperfect* otherwiſe, as will be ſhewn with examples. And the *Preſent tenſe* is formed from the *Infinitive* by omitting the termination *en* or *n*, as *Hooren* to Hear,; *Ik hoor* I hear; *Deelen* to divide, *Ik deel* I divide; *Gelooven* to believe, *Ik geloof* I believe *Leeven* to live, *Ik leef* I live; *Leezen* to read, *Ik lees* I read; *Beminnen* to love, *Ik bemin* I love; *Klóppen* to knock, *Ik klóp* I knock; *Vatten* to take, *ik vat* I take; *Verrótten* to rot, *ik verrót* I rot; *Snyden* to cut, *ik snyd* or *sny* I cut; *Doen* to do, *ik doe* I do; *Gaan* to go, *ik gaa* I go; *Staan* to ſtand, *ik staa* I ſtand, &c.

I. The moſt Regular way of forming the *Preter-Imperfect Tenſe* is, as has been ſaid already, by adding *de* to the *Preſent Tenſe*, as

Ik adem I breath.	*Ik ademde* I breathed.	*Geademd* Breathed.	*Ademen* to Breath.
Ik anker I anchor.	*Ik ankerde* I anchored.	*Geankerd* Anchored.	*Ankeren* to Anchor.
Ik baar I bear.	*Ik baarde* I brought forth.	*Gebaard* Born.	*Baaren* to Bear, bring forth.
Ik bouw I build.	*Ik bouwde* I builded.	*Gebouwd* Builded.	*Bouwen* to Build.
Ik cyfer I cipher.	*Ik cyferde* I did cipher.	*Gecyferd* Ciphered.	*Cyferen* to Cipher.
Ik daal I deſcend.	*Ik daalde* I deſcended.	*Gedaald* Deſcended.	*Daalen* to Deſcend.
Ik derf I want.	*Ik derfde* I wanted.	*Gederfd* Wanted.	*Derven* to Want.
Ik dien I ſerve.	*Ik diende* I ſerved.	*Gedient* Served.	*Dienen* to Serve.
Ik eer I honour.	*Ik eerde* I honoured.	*Geëerd* Honoured.	*Eeren* to Honour.
Ik eyndig I finiſh.	*Ik eyndigde* I finiſhed.	*Geëyndigd* Finiſhed.	*Eyndigen* to Finiſh.
Ik erf I inherit.	*Ik erfde* I inherited.	*Geërfd* Inherited.	*Erven* to Inherit.
Ik faamroof I defame.	*Ik faamroofde* I defamed.	*Gefaamroofd* Defamed.	*Faamroofen* to Defame.

1708年の[宝永5] Sewel の英語蘭文典における四要形の提示。

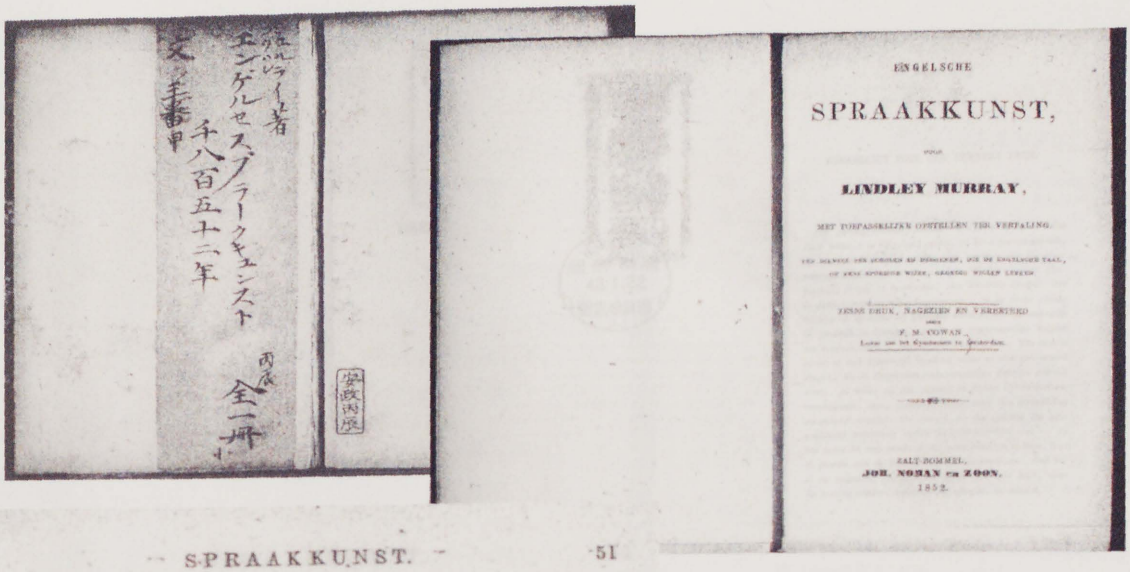
筆頭の基本形が一人称単数になっている。

次が the Preter-Imperfekt（現代の過去形）と the Past Participle で、最後が Infinitive《不定法》である。

Sewel の四要形（拡大）

I. The moſt Regular way of forming the *Preter-Imperfect Tenſe* is, as has been ſaid already, by adding *de* to the *Preſens Tenſe*, as

Ik adem I breath.	*Ik ademde* I breathed.	*Geademd* Breathed.	*Ademen* to Breath.
Ik anker I anchor.	*Ik ankerde* I anchored.	*Geankerd* Anchored.	*Ankeren* to Anchor.
Ik baar I bear.	*Ik baarde* I brought forth.	*Gebaard* Born.	*Baaren* to Bear, bring forth.
Ik bouw I build.	*Ik bouwde* I builded.	*Gebouwd* Builded.	*Bouwen* to Build.



ENGELSCHE

SPRAAKKUNST,

door

LINDLEY MURRAY,

MET TOEPASSELIJKE OPSTELLEN TER VERPALING.

TIENDE DRUK, NAGEZIEN EN VERBETERD

door

F. M. COWAN,

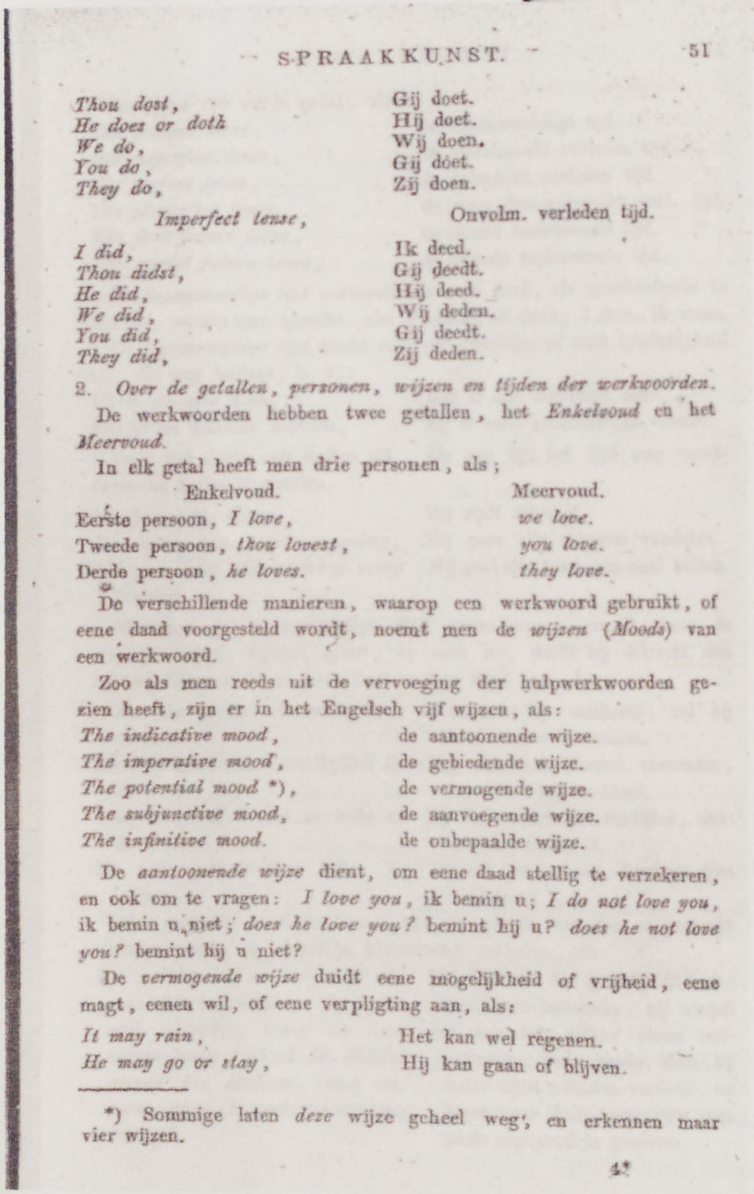
Leeraar aan het Kweekhuis te Amsterdam.

ZALT-BOMMEL,

JOH. NOMAN en ZOON.

1852.

資料 19. 『英文鑑(かがみ)』の原本になった、蘭訳された L. Murray の英文典。1852 年は嘉永 5 年、ペリー来航の前年である。Wijze は 5 種で、和蘭語にはない Potential mood《許可法》が入っている。



SPRAAKKUNST. 51

Thou dost,	Gij doet.
He does or doth	Hij doet.
We do,	Wij doen.
You do,	Gij doet.
They do,	Zij doen.
Imperfect tense,	Onvolm. verleden tijd.
I did,	Ik deed.
Thou didst,	Gij deedt.
He did,	Hij deed.
We did,	Wij deden.
You did,	Gij deedt.
They did,	Zij deden.

2. *Over de getallen, personen, wijzen en tijden der werkwoorden.*

De werkwoorden hebben twee getallen, het *Enkelvoud* en het *Meervoud.*

In elk getal heeft men drie personen, als;

	Enkelvoud.	Meervoud.
Eerste persoon,	*I love,*	*we love.*
Tweede persoon,	*thou lovest,*	*you love.*
Derde persoon,	*he loves.*	*they love.*

De verschillende manieren, waarop een werkwoord gebruikt, of eene daad voorgesteld wordt, noemt men de *wijzen* (*Moods*) van een werkwoord.

Zoo als men reeds uit de vervoeging der hulpwerkwoorden gezien heeft, zijn er in het Engelsch vijf wijzen, als:

The indicative mood,	de aantoonende wijze.
The imperative mood,	de gebiedende wijze.
The potential mood *),	de vermogende wijze.
The subjunctive mood,	de aanvoegende wijze.
The infinitive mood.	de onbepaalde wijze.

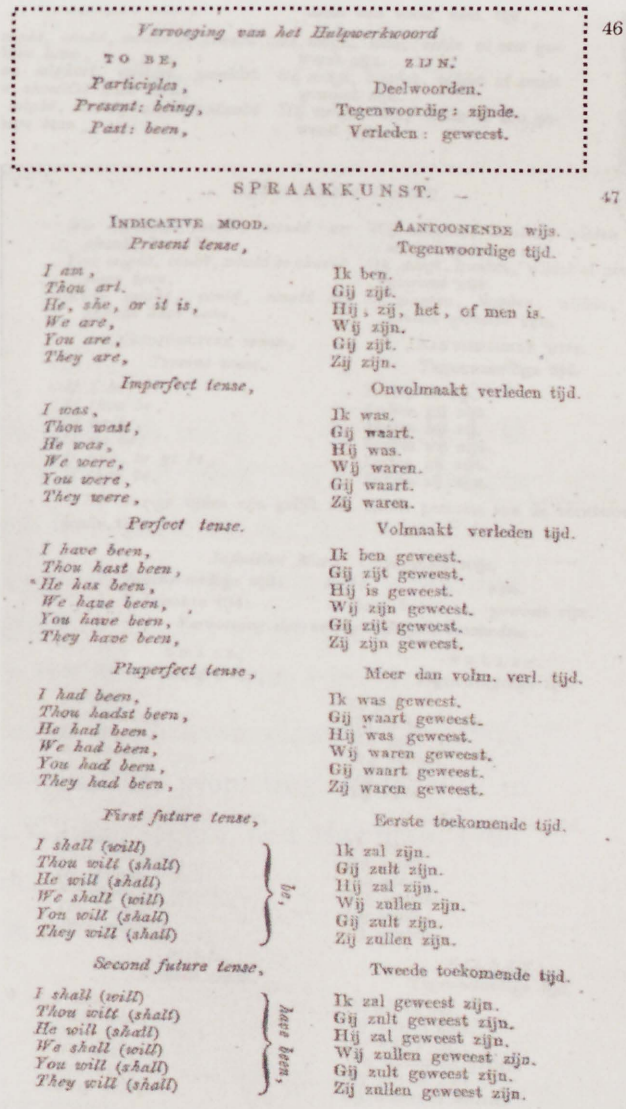
De *aantoonende wijze* dient, om eene daad stellig te verzekeren, en ook om te vragen: *I love you*, ik bemin u; *I do not love you*, ik bemin u niet; *does he love you?* bemint hij u? *does he not love you?* bemint hij u niet?

De *vermogende wijze* duidt eene mogelijkheid of vrijheid, eene magt, eenen wil, of eene verpligting aan, als:

It may rain,	Het kan wel regenen.
He may go or stay,	Hij kan gaan of blijven.

*) Sommige laten *deze* wijze geheel weg, en erkennen maar vier wijzen.

4*



Vervoeging van het Hulpwerkwoord 46

TO BE,	ZIJN.
Participles,	Deelwoorden.
Present: being,	Tegenwoordig: zijnde.
Past: been,	Verleden: geweest.

SPRAAKKUNST. 47

INDICATIVE MOOD.	AANTOONENDE wijs.
Present tense,	Tegenwoordige tijd.
I am,	Ik ben.
Thou art.	Gij zijt.
He, she, or it is,	Hij, zij, het, of men is.
We are,	Wij zijn.
You are,	Gij zijt.
They are,	Zij zijn.
Imperfect tense,	Onvolmaakt verleden tijd.
I was,	Ik was.
Thou wast,	Gij waart.
He was,	Hij was.
We were,	Wij waren.
You were,	Gij waart.
They were,	Zij waren.
Perfect tense.	Volmaakt verleden tijd.
I have been,	Ik ben geweest.
Thou hast been,	Gij zijt geweest.
He has been,	Hij is geweest.
We have been,	Wij zijn geweest.
You have been,	Gij zijt geweest.
They have been,	Zij zijn geweest.
Pluperfect tense,	Meer dan volm. verl. tijd.
I had been,	Ik was geweest.
Thou hadst been,	Gij waart geweest.
He had been,	Hij was geweest.
We had been,	Wij waren geweest.
You had been,	Gij waart geweest.
They had been,	Zij waren geweest.
First future tense,	Eerste toekomende tijd.
I shall (will)	Ik zal zijn.
Thou will (shalt)	Gij zult zijn.
He will (shall)	Hij zal zijn.
We shall (will)	Wij zullen zijn.
You will (shall)	Gij zult zijn.
They will (shall)	Zij zullen zijn.
be,	
Second future tense,	Tweede toekomende tijd.
I shall (will)	Ik zal geweest zijn.
Thou will (shalt)	Gij zult geweest zijn.
He will (shall)	Hij zal geweest zijn.
We shall (will)	Wij zullen geweest zijn.
You will (shall)	Gij zult geweest zijn.
They will (shall)	Zij zullen geweest zijn.
have been,	

『英文鑑(かがみ)』の原本は<文政(1822)五年補正再鐫乃書>であるから、これは 30 年後の異本ということになる。

第一章《原形》と

IMPERATIVE MOOD,	GEBIEDENDE WIJS.
Let me be,	Laat mij zijn.
Be, be thou, or do thou, be,	Wees.
Let him be,	Laat hem zijn.
Let us be,	Laat ons zijn.
Be, be you, or ye, or do you be,	Zijt.
Let them be,	Laat hen zijn.

POTENTIAL MOOD,	VERMOGENDE WIJS.
Present tense,	Tegenwoordige tijd.
I may or can be,	Ik mag of kan zijn.
Thou mayst or canst be,	Gij moogt of kunt zijn.
He may or can be,	Hij mag of kan zijn.
We may or can be,	Wij mogen of kunnen zijn.
You may, or can be,	Gij moogt of kunt zijn.
They may or can be,	Zij mogen of kunnen zijn.
Imperfect tense,	Onvolmaakt verleden tijd.
I might, could, would or should be,	Ik mogt, kon, wilde of zou zijn.
Thou mightst, couldst, wouldst or shouldst be,	Gij mogt, kondet, wildet of zoudt zijn.
He might, could, would or should be,	Hij mogt, kon, wilde of zou zijn.
We might, could, would or should be,	Wij mogten, konden, wilden of zouden zijn.
You might, could, would or should be,	Gij mogt, kondet, wildet of zoudt zijn.
They might, could, would or should be,	Zij mogten, konden, wilden of zouden zijn.
Perfect tense,	Volmaakt verleden tijd.
I may or can have been,	Ik mag of kan geweest zijn.
Thou mayst or canst have been,	Gij moogt of kunt geweest zijn.
He may or can have been,	Hij mag of kan geweest zijn.
We may or can have been,	Wij mogen of kunnen geweest zijn.
You may or can have been,	Gij moogt of kunt geweest zijn.
They may or can have been,	Zij mogen of kunnen geweest zijn.
Pluperfect tense,	Meer dan volm. verl. tijd.
I might, could, would or should have been,	Ik mogt, kon, wilde of zou geweest zijn.
Thou mightst, couldst, wouldst or shouldst have been,	Gij mogt, kondet, wildet of zoudt geweest zijn.
He might, could, would or should have been,	Hij mogt, kon, wilde of zou geweest zijn.

We might, could, would or should have been,	Wij mogten, konden, wilden of zouden geweest zijn.
You might, could, would or should have been,	Gij mogt, kondet, wildet of zoudt geweest zijn.
They might, could, would or should have been,	Zij mogten, konden, wilden, of zouden geweest zijn.

SUBJUNCTIVE MOOD,	AANVOEGENDE WIJS.
Present tense,	Tegenwoordige tijd.
If I be,	Indien ik zij.
If thou be,	Indien gij zijt.
If he be,	Indien hij zij.
If we be,	Indien wij zijn.
If you, or ye be,	Indien gij zijt.
If they be,	Indien zij zijn.

De overige tijden zijn gelijk aan eerste persoon van de beantwoordende tijd.

Infinitive Mood, Onbepaalde wijs.

Tegenwoordige tijd:	*to be,*	zijn.
Volmaakte tijd:	*to have been,*	geweest zijn.

Vervoeging der overige Hulpwerkwoorden.

SHALL,	ZULLEN.
Present tense,	Tegenwoordige tijd.
I shall,	Ik zal.
Thou shalt,	Gij zult.
He shall,	Hij zal.
We shall,	Wij zullen.
You shall,	Gij zult.
They shall,	Zij zullen.
Imperfect tense,	Onvolm. verleden tijd.
I should,	Ik zou.
Thou shouldst,	Gij zoudt.
He should,	Hij zou.
We should,	Wij zouden.
You should,	Gij zoudt.
They should,	Zij zouden.

WILL,	WILLEN.
Present tense,	Tegenwoordige tijd.
I will,	Ik wil of zal.
Thou wilt,	Gij wilt of zult.
He will,	Hij wil of zal.
We will,	Wij willen of zullen.
You will,	Gij wilt of zult.
They will,	Zij willen of zullen.

資料 20.

『英文鑑』の原本になった、**蘭訳された L. Murray の英文典（続）。** この Murray の蘭訳本では、動詞の活用表の最初に Infinitive mood《不定法》が（前頁）、最後に Participle《分詞》が、別々に分かれて置かれている（前頁と本頁の点線で囲まれた部分）。過去分詞の名前は《完了分詞》になっている。1795（寛政７）年の Murray の初版では、勿論表の最後に両者を一緒に収めている。蘭訳本の1852（嘉永５）年版は、《不定法》と《分詞》が表の頭に移動した新文法の年代の訳書であるから、蘭訳関係者が原本との折衷を図ったものと思われる。

Murray 原本の書名は、*English Grammar,* adapted to the different classes of learners, with an appendix, containing rules and observations for promoting perspicuity in speaking and writing. York. Printed and sold by Wilton, Spence, and Mawman. 1795.（The Scolar Press Limited から Facsimile reprint.が出ている）。

蘭訳本には、英語版の原本にはない工夫が随所に施されている。

Vraag 38.

Hoe worden de werkwoorden verbogen?

Er is tweeërlei verbuiging der werkwoorden: de *sterke* of *ongelijkvloeijende* en de *zwakke* of *gelijkvloeijende verbuiging*.

Door sterke of ongelijkvloeijende werkwoorden verstaat men de zoodanige, die in den onvolmaakt verleden tijd, of in het lijdend deelwoord, of in beide vormen te gelijk, een anderen klinker dan in den tegenwoordigen tijd vertoonen. — De gelijkvloeijende werkwoorden hebben deze klankverwisseling niet.

De derde persoon enkelvoud van den tegenwoordigen tijd en de tweede persoon zoo van den tegenw. als van den onvolmaakten verleden tijd eindigen op *t*. Deze *t* wordt ook dan achter den stam gevoegd, als hij op eene *d* eindigt, en deze *d* onmiddellijk met de *t* diens uitgangs in aanraking komt; bij voorbeeld: *hij bindt*, *gij bindt*, *gij bondt*; *hij aardt*, *gij aardt*. Doch als de stam op *t* eindigt, smelt de *t* van den stam met die *t* zamen: *hij* of *gij acht*; *hij* of *gij vergeet*, *gij vergaat* of *vergat* (voor *achtet* enz.).

Eindigt de stamvorm eens werkwoords op eene vokaal, als *doe*, *ga*, *sla*, zoo smelt de klinker van den uitgang des eersten en des derden persoons meervoud (*en*) daarmede zamen: *wij doen*, *zij gaan*, *zij slaan* (voor *doeën* enz.), even als de toonlooze *e* van den tegenwoordigen tijd enkelvoud der aanvoegende wijze: *ik doe*, *ga*, *sla* (voor *ik doeë* enz.).

Het lijdend deelw. zoo der sterke als der zwakke werkwoorden is gekenmerkt door het voorvoegsel *ge*, bij voorbeeld: *gebroken*, *gehoord*. Dit voorvoegsel ontbreekt bij de deelwoorden van die werkwoorden, welke van voorvoegsels voorzien of onscheidbaar met partikels zijn zamengesteld; bij v.: *verheugd*, *bedorven*, *ontwoekerd*, *geleken*, *overleden*, *doordrongen*, *aanschouwd*, *wederstreefd*, *ommuurd*, *ondermijnd*.

De ongelijkvloeijende werkwoorden zijn in tien klassen te onderscheiden:

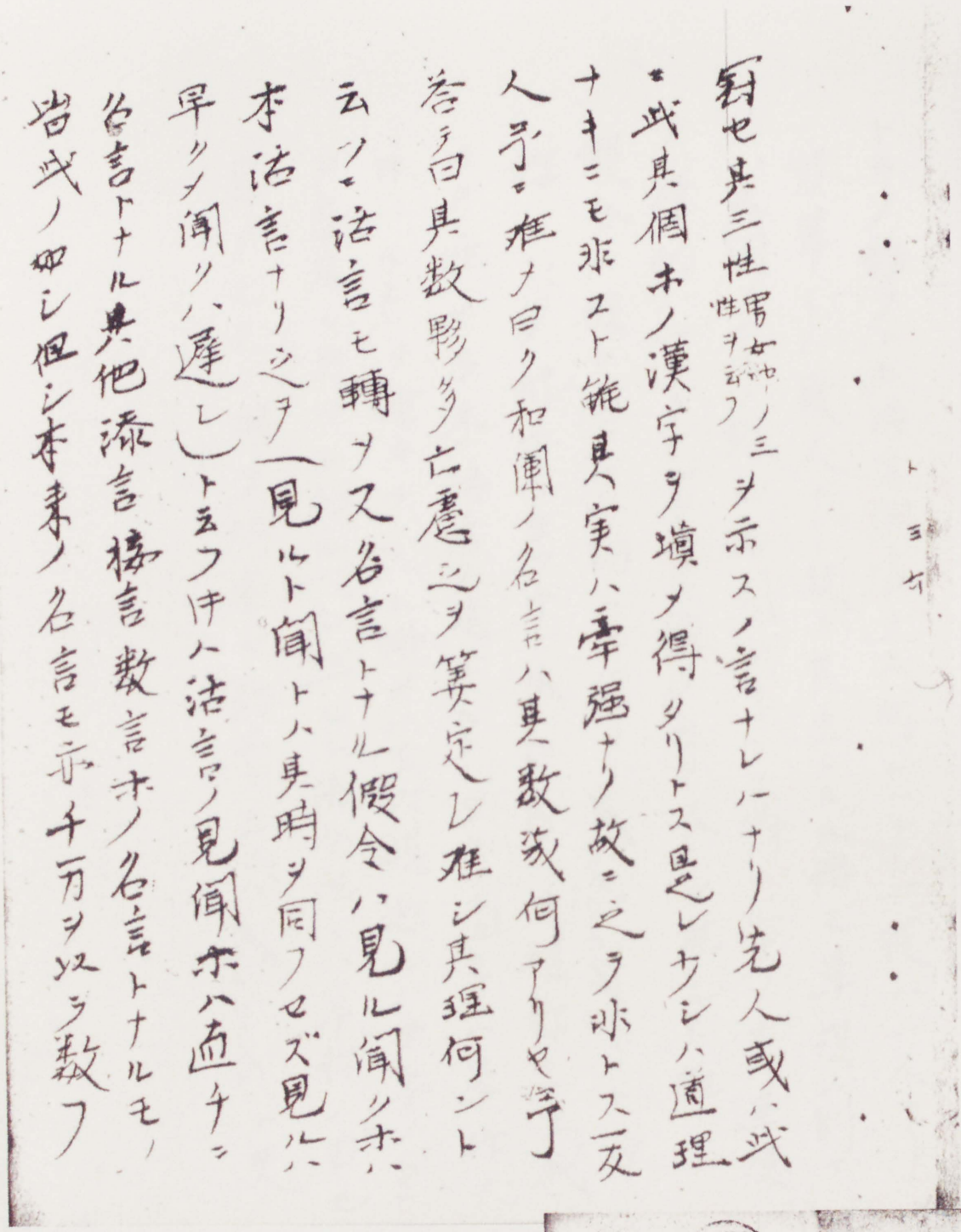
NEDERLANDSCHE SPRAAKLEER,
TEN GEBRUIKE
BIJ HET ONDERWIJS IN DE LAGERE SCHOLEN;
DOOR
Dr. W. G. BRILL.

LEYDEN,
E. J. BRILL.
1855.

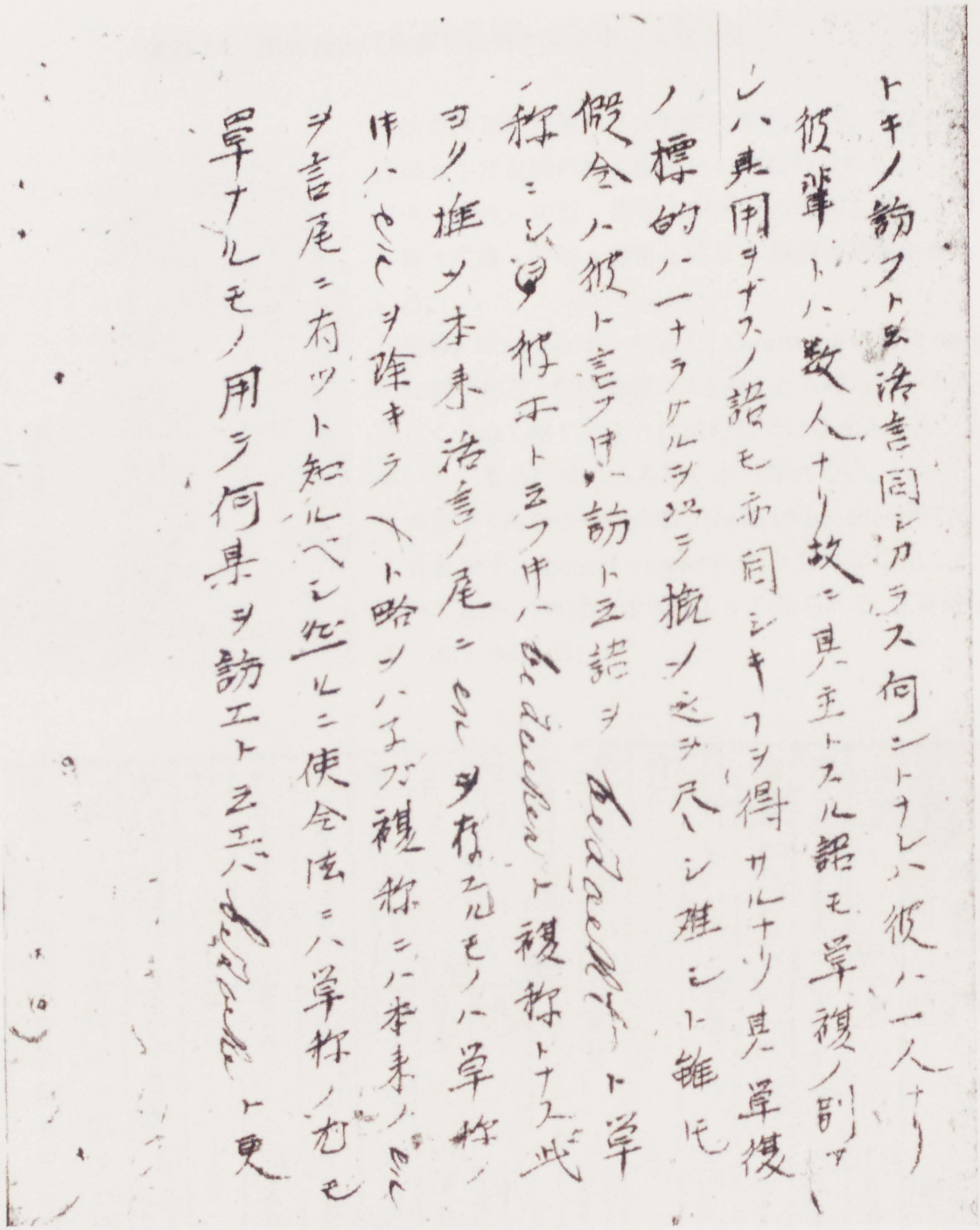
資料 21.

Brill (嘉永6 1853) の<stam><stamvorm>。

<grondvorm>はすべての変化詞の原形であるが、動詞の箇所には、それとは別に<stam>（根幹形）がある。二人称と三人称の単数現在はこの<stam>の後ろに<－t>を付けるとできあがる。



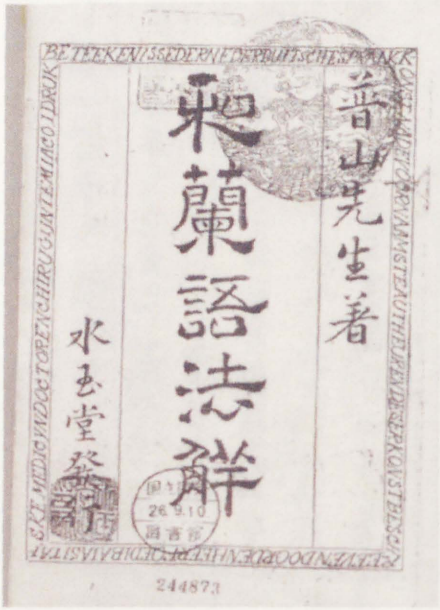
資料 22.
高野長英《繙巻得師草稿》（国会図書館本）の、《不定法》の説明箇所と思われる部分。



資料 23.

高野長英《繙巻得師草稿》（国会図書館本）の最終頁。　最後の二行に＜使令法ニハ単称ノ尤モ単ナルモノ用テ＞とある。

資料 24. 藤林普山『和蘭語法解』巻之中（文化 12）

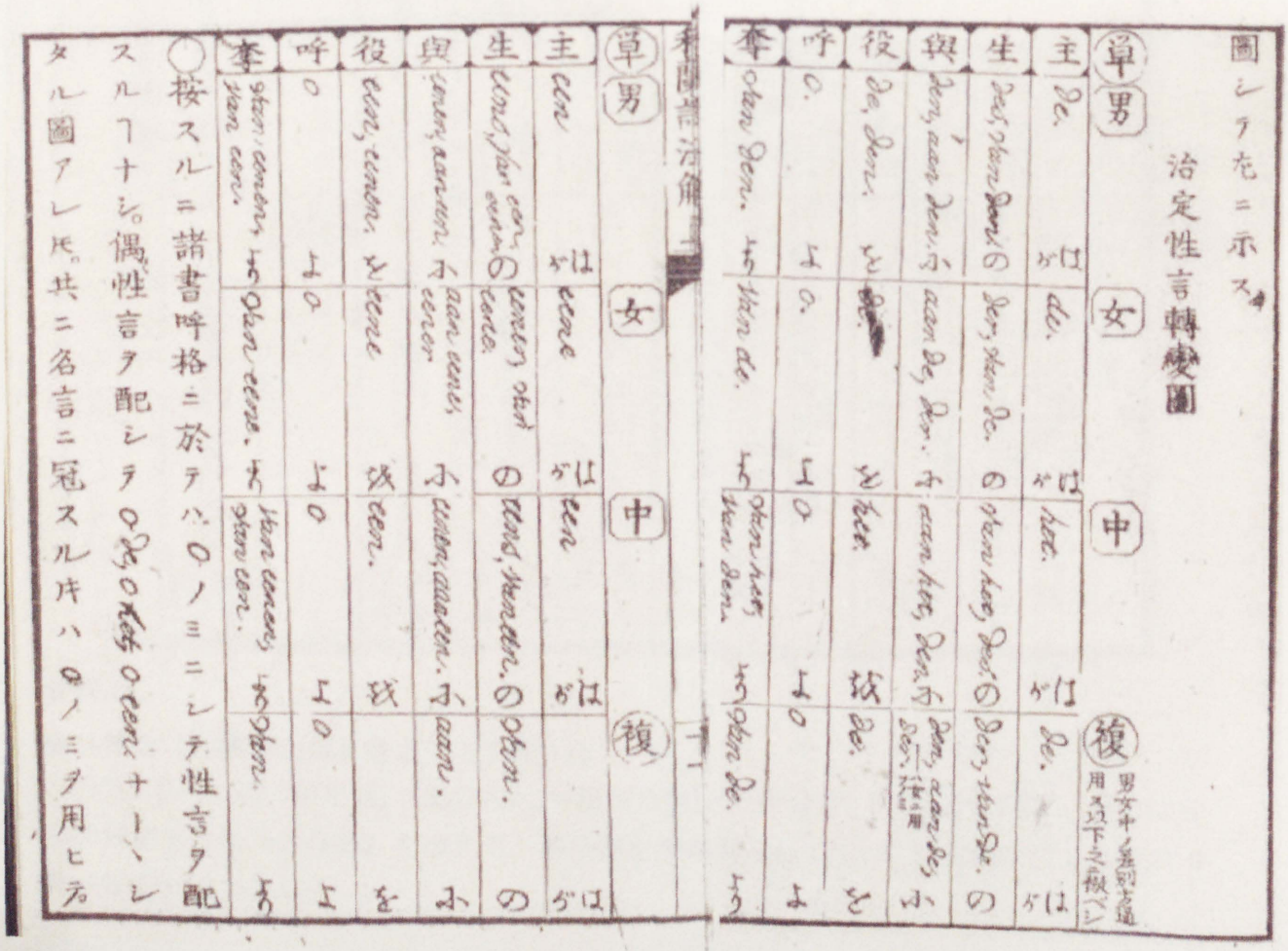


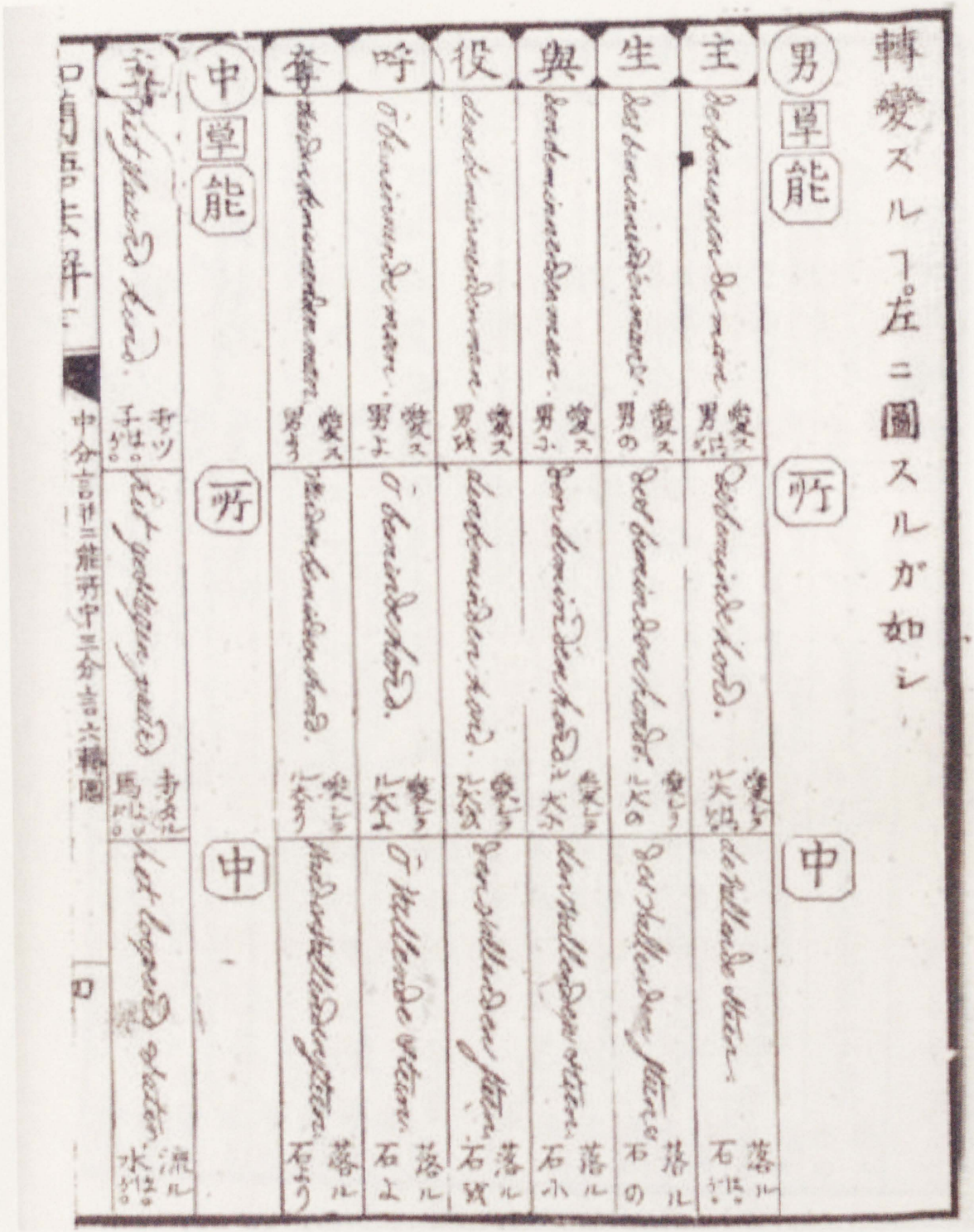
《治定性言転変図》と《不定性言転変図》、すなわち定冠詞と不定冠詞の格変化を示したものである。

男性・女性・中性・複数名詞がそれぞれ主格・生格・与格・役格・呼格・奪格という 6 種類の格変化をしている。

《生格》は＜生み手＞の意で、Genitivus の蘭語 teeler の和訳である。中野柳圃は《主格》とも呼んでいるが、恐らく「ぬし格」のように読むのではなかろうか。《生格》も、あるいは「うみ格」かも知れない。

その弟子・馬場佐十郎の頃、teeler(＝breeder)から、所有者を表す eigener(＝owner) へと意味が変化したらしいことが、『和蘭文学問答』から知られる（『蘭語学』Ⅰ、631～634 頁）

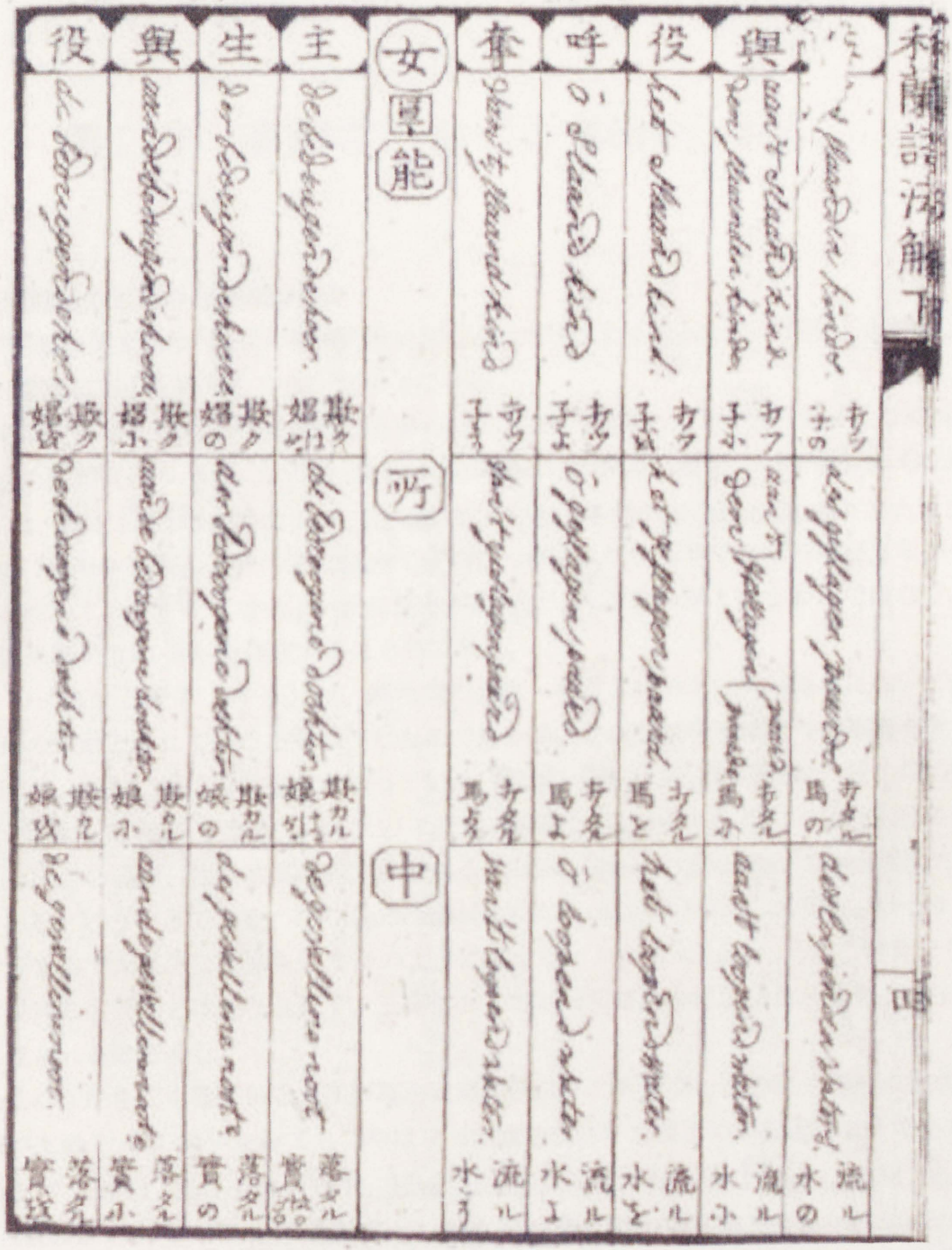




資料 25.

藤林普山『和蘭語法解』巻之下（文化 12）

《分言》[＝分詞]の活用表。《能分言》[＝現在分詞]と《所分言》[＝過去分詞]に、普山は自らの独創である《中分言》を加えた。各分詞を形容詞として用い、定冠詞を付した時の 6 格《転変》図である。



資料 26.

藤林普山『和蘭語法解』巻之下（文化 12）　《分言》[＝分詞]の活用表（続）

第二節　英語学における Root と Inf.

1. 英語動詞の三要形の筆頭は何か

では、明治の英文典は「動詞の種種の変化形のもとの形」を＜Root＞に一般化したのか。三要形の筆頭に Inf.を据えることはなかったのか。

明治期に使用された主要な英文典の著者のひとりで、前節 1.4.1.（34 頁）にて＜Inf.はあらゆる動詞変化の Root なので Modus の筆頭におかれるべきだ＞と主張した Goold Brown は、同じ1851(嘉永4)年の英文典で、近世の英文法家で動詞の＜Chief Parts＞または＜Principal Parts＞に関心を持つ者は極めて少なく、言及している者でもその呼び方を誤っていると述べている[注28]。しかし、いかに関心が薄いといえども皆無というわけではなく、調査の結果**表７**（84 頁）を作成することができた。

表６（79 頁）と**表７**（84 頁）は、明治期の翻訳・著述文典および英語原典において何が三要形の筆頭とされているかを調べたものであるが、この調査結果は意外な事実を我々に提示する。即ち、現代では誰もが知っている《原形》という英文法用語は、明治期の英文典では極めて稀にしか使われないこと、筆頭に＜Root＞を用いている原典は Quackenbos のみで、他の主要直訳文典である Pinneo, Brown, Swinton は皆《直説法現在》であるということである。この Quackenbos の＜Root＞はいかにも唐突で、ひとり孤立して、まるで大海原に孤影を映す舟のように見える。しかも＜Root＞がある場合でも、それは動詞の主要部とは見なされず、三要形としては《現在》を採る傾向が**表６**（79 頁）全体に見られるのである。

to-Inf.の採用もごく稀である。江戸幕府旧蔵洋書以外の英文典も含めて三要形の構成要素を調べた**表７**（84 頁）をみても、やはり《直説法現在》を採るのが普通のようである。to-Inf.とするのは Harrison(1777(安永6)), Hamelberg(1845(弘化2)), Murray(1852(嘉永5)), Beek(1854(安政1)), Curme(1935(昭和10)) のわずか５人に過ぎず、しかも明治期までの英文典で＜to＞がないのは Murray の蘭訳英文典のみである。**表３**（39 頁）を参照しても、Murray 以外の蘭語英文典は皆＜to＞を持っている。Inf.を「動詞の変化形のもとの形」とする傾向を強く示した和蘭語と異なり、英語におけるそれは、伝統文法を踏襲した《直説法現在》なのである。

このことは、Mood の配列順序からも窺い知ることができる。Inf.を動詞の変化形の原形と見なした和蘭語は、Inf.に Mood の筆頭の地位を与えた。G.Brown も同様に考えたが（**本章第一節 1.4.1.**）、しかし、《直説法現在》にその地位を与える傾向の強い英文典の場合、５個の Mood の配列順序の大多数が、和蘭文典とは逆に Inf.ではなく Ind.から始まって

表 6. 英文典における ROOT の訳語

年号	書名	root	三要形の筆頭	活用形 (Finite verb)	Infinite verb
1811(文化 8)	和仏蘭対訳語林				
1815(文化 12)	和蘭語語法解(オランダごほうげ) (Peyton の英文典？)				
？	繻巻得師草稿 (全集本)				
1828～29？ (文政 11～12)	同 (国会図書館本)	単称ノ尤モ単ナルモノ			
1840(天保 11)	英文鑑(かがみ) (Murray の英文典)				
1861(文久 1)	英語箋				
1866(慶応 2)	英吉利文典字類	※「一般形」(形容詞の原級の意)			
1868(明治 1)	洋学指針・蘭学部	根言	不定（te 付）		
1870(明治 3)	格賢勃斯英文典直譯 [大学南校]	根言	根言	定働詞	不定法 (Inf.mood)
1871(明治 4)	洋(英)学階梯				
	英文典獨学（格賢勃斯氏 [戸田忠厚]				
	洋学指針・英学部（二編）	根言現在 根言ナル現在ノ詞 一人称ノ根言 現在ノ本体ナル詞 本体詞 本体		定動詞	不定動詞（to 付）
1872(明治 5)	ピ子ヲ氏通俗英文典 [訳者不明]		現在		
	ピ子ヲ氏著挿訳英文典(初編)[樋木寛則]				
(刊年不明)	格賢勃斯英文典挿譯(初編) [桂潭・島一徳]				
1873 (明治 6？)	英学新式(巻一)				
1875(明治 8)	語学獨案内 [ブリンクリ]	固有形(おりがたち) (形容詞の原級も兼ねる)	現在	※「定法」は Ind.の訳語	不定法 不定法働詞
1879(明治 12)	英語変格一覧 [チャムブレン]		不限法現在		
1883(明治 16)	克屈文典直譯(上下)	働詞ノ根語 根本ノ働詞 根詞 ※「原語」は名詞の場合も含む	現在不定 起本働詞 起本詞	定働詞	不定働詞 (Inf., Part. 及び Gerund)
	ピネヲ氏文典獨学字書 [清水房之助]		現在		
	ピネヲ氏原著英文典獨案内[渡辺五一郎]		現在		
	英語獨学便法		不定法（to 付） 現在		
1884(明治 17)	英国文典獨案内(クワケンボス氏) [垣上 緑]	働詞ノ根本	働詞ノ根本	定働詞	不定法働詞
	ブラウン氏英文典直譯 [中西 範]	根元ノ動詞	現在（四要形の筆頭）	有限動詞	
	文典和解英文指針	原動詞 radical verb	現在 原動詞 (合則・不合則動詞の分類で)		
1884(明治 17)	スウキントン氏英語学新式直譯 [斎藤秀三郎]	根 働詞ノ根 (不定詞ノ根＝前置詞ナシノ不定詞) 働詞ノ原形 ①	現在直説 根 (規則・不規則働詞の分類で)		
1885(明治 18)	英学五書獨案内				
	クワッケンボス氏英文典獨案内 [高宮直太]	働詞ノ根元	根元	定働詞	不定法
	無類捷径英学童子解(初編)				
	英文手引草 [島田奚疑]				
1886(明治 19)	ブラウン氏英文典文法詳解獨案内 [近藤堅三]				
	ピネヲ氏英文典獨稽古 [伊藤一郎]				
	ピネヲ氏英文典獨案内 [萩原孫三郎]				

(表 6－1)

年　号	書　名	root	三要形の筆頭	活用形 (Finite verb)	Infinite verb
1886(明治 19)	文法詳解ブラウン氏英文典釈義 ［澤田重遠］	動詞ノ原形 ② 根動詞	現在（四要形の筆頭）	定動詞	
	ブラウン氏英文典直譯(全)［源　綱紀］	元来ノ働詞 原語働詞 現体ノ verb	現在（四要形の筆頭）	定限働詞 定働詞	
	クワツケンボス氏英文典直譯［栗野忠雄］	根元		定働詞	
	文法詳解ピネヲ氏英文典獨案内 ［生駒　蕃］				
	ピネヲ氏英文典獨学(全)［玉井靖三郎］		現在		
1886～7 (明治 19～20)	ブロヲン氏英吉利文典講義(前後編) ［長野一枝］	verb ノ原体 原体ノ verb 原語 (present ノ体) ※primitive word は名詞の単数	現在（四要形の筆頭）	定法動詞	
1887(明治 20)	スウヰントン氏英文典直譯 ［蘆田束雄］	根本 根 働詞ノ根 (不定詞ノ根)	現在 現在叙述 現在直説法 根本 (規則・不規則働詞の分類で)	人称働詞 (「確定働詞」は predicate の意)	
	容易獨修英文典直譯(ブラウン氏) ［戸代光大］	根元ノ動詞	現在（四要形の筆頭）	有限動詞	
	ソンメール氏佛文典直譯　［平山直道］	語根	不定法ノ現在 (語根＋語尾)		
	容易獨修スヰントン氏英文典直譯 ［大島国千代］	根 (不定詞ノ根)	現在直説 根 (働詞ノ変法の箇所で)		
	英語学大全		現在(?)		
	ピネヲ氏英文典直譯 ［栗野忠雄］		現在		
	スウヰントン氏英文典直譯(全) ［栗野忠雄］	動詞ノ根 (不定詞ノ根)	現在 現在直説		
	ディクソン英文典直譯				
	正則挿譯ピネヲ氏英文典獨案内［佐藤雄治］		現在		
	ソンメール氏佛文典直譯　［中村秀穂］	語根	不定法ノ現在 (語根＋語尾)		
	イングリッシ文法主眼	働詞ノ根基	現在（四要形の筆頭）	定法動詞 示定言動詞	不定法動詞
	クワツケンボス氏英文典直譯 ［水澤　郁］	根元	根元	定動詞	不定法
	クワツケンボス氏英文典直譯(全) ［山本栄太郎］	根元		定働詞	不定法
	スウ井ントン氏英文典直譯　［斎藤桂堂］	働詞ノ根基 (不定法ノ根基)	現在直説		
	和解纂註英文軌範(完)	※原詞(動詞だけでない) ※primitive word「本詞」は別物	現在 原動詞(不規則動詞の三要形の場合)	定動詞	不定動詞
1888(明治 21)	スウ井ントン氏英文典直譯　［太田次郎］	働詞ノ根元 (根元不定)	現在直説 根元 (規則・不規則働詞の分類で)		
	クアツケンボス氏英文典獨案内 ［外川秀次郎］	根元	根元	定働詞	不定法
	スヰントン氏ニューランゲージレッソンズ直譯 ［石川録太郎］	根	現在 現在叙述 根 (規則・不規則働詞の分類で)		
	六月卒業英学自在(全)(オレンドルフ) ［紅林員方］		尋常ノ動詞即チ現在動詞ノ本体		
	文法詳解英文典講義(ブラウン氏) ［別所富貴］	動詞ノ原形 ③ 根動詞	現在（四要形の筆頭）	定動詞	
	スウヰントン氏英文典直譯(全) ［伴野乙弥］	動詞ノ根語 (不定ノ語根)	現在ノ直説法 根語 (規則・不規則働詞の分類で)		
	クワツケンボス氏小文典獨案内 ［梅木正衛］	働詞ノ根本	根本	定働詞	不定法

(表６－２)

年　号	書　名	root	三要形の筆頭	活用形 (Finite verb)	Infinite verb
1888(明治 21)	スウ井ントン氏英文典獨案内 ［朝野儀三郎］	根 根ノ不定			
	スウキントン氏英文典直譯 ［渡辺松茂］	動詞ノ根本 (不定根本)	現在直接法 根本 (規則・不規則働詞の分類で)		
	須因頓氏大文典解釈 ［田中達三郎］	動詞ノ根元 (動詞ノ不定ノ根元) 基礎 ※「原詞」「本詞」は変化形のもとの形	現在直接法現在ノ形作り	定動詞	不定動詞
	すういんとん小文典獨学自在 ［桜田源治］	動詞(ノ)根 (不定詞ノ根)	現在直説 根 (規則・不規則働詞の分類で)		
1889(明治 22)	和譯英小文典(完)	根源 根	根源（四要形の筆頭） 根	有限動辞	不定法動辞
	須因頓氏大文典講義 ［平井広五郎］	働詞ノ根語 根語 根語不定辞 不定働詞ノ語根 働詞ノ不定語根 ※root word / primitive word 「根語」「原語」は別物	直説法現在 根語 (規則・不規則働詞の分類で)	定法働詞 定働詞	不定辞
1890(明治 23)	原書全譯スウキントン氏英文典直譯講義 ［渡辺松茂］	働詞ノ根本 (不定ノ根本) 原語	現在直説法 原語 (規則・不規則働詞の分類で)		
	スウキントン英文典獨案内 ［癸疑・島田　豊］				
	容易獨修スウキントン氏英文典直譯講義 ［川田鶴洋］	働詞ノ根元 (根元不定詞)	現在 現在直説 根元 (規則・不規則働詞の分類で)		
1891(明治 24)	斯因頓大文典講義(上下)［山形　閑］	働詞ノ根原 (原初不定詞) 根原働詞 根元語 原初語 ※root word「原詞」は別物	現在直説法ノ時ノ形成 根元 (規則・不規則働詞の分類で)	限定サルゝ働詞 定働詞	不定法
	須因頓氏小英文典講義 ［湯浅/関］	動詞ノ根 根元 (根不定詞)	現在直接法 根元 (規則・不規則働詞の分類で)		
	英文法講義(完)	単純ナル verb verb ノ語原	直説法現在 Present 語原 (規則・不規則働詞の分類で)		
1892(明治 25)	簡明英文典		Present	Finite verb	
1893(明治 26)	英語教授書	幹辞	原辞(to 付) 不定法(to 付)	定法働詞	不定法(ノ) 働詞
	英文典 ［チャムブレン］		不定法 不定法現在 不限法現在([ ]付の to)		不定動詞
1894(明治 27)	初等英文典	Root	Present 又ハ Pres.Ind. Root（規則・不規則働詞の分類で）		
	教科書獨修用　新英語学	原働詞 働詞ノ根語　根働詞	Infinitive(to 付)		
	英文法学(上編)				
	実験英文典教科書				
1895(明治 28)	英文法詳解(ス井ントン氏)［酒巻/金子］	根基不定法			
1896(明治 29)	英文法教科書 ［共益商社］	動詞ノ根			verbal noun
	英語初歩教授書(全)		未定働詞(to 付)		
	英文典問答(全)		現在 (原動詞)		
1897(明治 30)	英語学捷径(バッター氏)				
	スーイントン小文典直譯意解［元木貞雄］	動詞ノ語原 (不定法語原)	現在直説法 現在(不規則動詞一覧表で)		

(表６－３)

年　号	書　名	root	三要形の筆頭	活用形 (Finite verb)	Infinite verb
1897(明治 30)	新式英文法軌範	Root of the verb	Root of the verb	有限動詞	不定動詞
	英文法神髄	基本不定詞　又ハ 働詞ノ根 (Root Inf.)	現在 現在直説法 原働詞 (弱変化働詞の場合) 現在働詞(不規則働詞の場合)		
1898(明治 31)	新式実用　英文法講義			有限動詞	不定動詞
	邦語英文典 [畔柳都太郎]	語根	現在 語根(Conjugation の場合)		
	英語学大全(前後篇)	語根	不定法(to 付) 現在(I 付)	人称法	不定法動詞
	邦文英文典(全) [嶋　文次郎譯補]			定動詞 定限動詞	定限ナラザル動詞 (Inf.Mood; Part.; Gerund)
	通俗英語案内		現在		
	邦文英文法講義		現在		
	中等英文典 [井上十吉]	動詞ノ原形 ④	現在	定動詞	不定動詞
	新編　中等英文典 (前・下編)			定動詞	
1899(明治 32)	英文典教科書 [チャムブレン]	※primitive word は 名詞の原形	現在 現在直説法		
	教科摘要　新式英語学獨修（一名六ヶ月間達成）	原働詞 働詞ノ語根 根原ノ本形	現在(Conjugation の場合) 原働詞		不定法働詞
	邦文涅氏英文典 [内海弘蔵]		現在	定働詞 定限働詞 ※定法働詞は (Ind.; Imp.; Subj. のこと)	不定法働詞 (Inf.;Gerund)
1900(明治 33)	意解挿入ねすふいーると英文典第二獨案内 [栗野忠雄]		現在	定動詞	不定法動詞 (Inf.;Gerund)
	子スフィールド氏第二英文典講義 [鶴田久作]		現在	定動詞 一定動詞	不定法動詞 (Inf.;Gerund)
	ねすふいーると英文典第三巻講義 [喜内芳樹]	to be‥‥be‥‥being‥‥having been [不定法] [命令]　[現在分詞]　[完了分詞]	不定法(to 付)	定動詞	
	新案教科書　英語教授初歩				
	ネスフ井ルド氏英文典巻弐直譯註解 [畔田　到]		現在	定限働詞	不定法ノ働詞
	子スフィールド氏第三英文典講義録 [奈倉次郎]		現在	定動詞	不定法 (不定動詞；分詞；動名詞)
	英語全課卒業書	根原 働詞ノ根原 根原働詞	現在 根原	定働詞	不定法働詞
	英文法初歩 [斎藤秀三郎]	働詞ノ原形 ⑤ Root-Form		有限働詞	無限働詞 Verb not finite
1901(明治 34)	文法大意(全)	※語根（働詞だけでない）	現在		
	新編　英文典問答	詞根	直接法現在 詞根 (規則・不規則働詞の分類で)		verbals (動詞形のこと＝不定法動詞と分詞[Gerund])
	子スフィールド氏第二英文典直譯注釈 [葛西又次郎]		現在		
1902(明治 35)	英文典術語集	基語(Primitive word ＝根言語(Root word)		定動詞	
	英語提要				
1904(明治 37)	文法会話作文　英語新編	働詞の根 根 原形 原働詞	根 原形	完全なる働詞	不定の働詞 (Inf.; Part.)
	英文法講義	働詞の原形 ⑥	現在	定法 定働詞	働詞ノ本源ノ形 (to の付きたる形)
1906(明治 39)	英語獨(ひとり)案内				
	英文典ダイヤグラム			有限動詞	無限動詞 Not-finite verb

(表６－４)

年　号	書　　名	root	三要形の筆頭	活用形 (Finite verb)	Infinite verb
1906(明治 39)	英語文法品詞論	root	root	制限動詞	不制限動詞 (不定動詞；分詞；動詞的名詞)
	教科用獨修用世界語(エスペラント) ［二葉亭四迷］	語根			
1907(明治 40)	表説　英文典(全)	字書ニ現ハレタル働詞			
	英語学捷径				
	新式英語熟達法	根本体			
1908(明治 41)	最新問答全書　英文典(ネスフィールド) ［嶋村東洋］			定動詞	
	中学英文法講義	根形 根源 働詞の原形 ⑦	根形 現在(不規則働詞の場合)	定限的働詞 定限働詞	※<Root Inf.>は根形的不定働詞
1911(明治 44)	教科書用参考　中等英文法通解（全）	語根			
	中等英語自修新書		現在		

(表 6 − 5)

表７．英語原典における動詞の三基本形

年　号	著　者	三基本形の筆頭	過去形	過去分詞
1549 (ザビエル来日)	Lily and Colet			
1593	Salesbury			
1632	Wedderburn			
1654 (４代家綱)	Wharton	Present Tens *speak*	Imperfekt Tens *spake*	Another of the perfekt Tens *spoken* or *spoke*
1688	Miege			
1690	Clare			
1693(元禄 6)	Aickin	Present tense *am*	Preter tense (Imperf.) *was*	Preter tense of the Second *been*
1711(宝永 8)	Gildon and Brightland	Present Time *I burn*	Time imperfektiy past or passing *I burned*	
1726(享保 11)	Shirley			
1731(享保 16)	Duncan	Present *fall*	Preterperfekt definite *fell*	Passive participle *faln*
1735(享保 20)	Collyer	Present Time *write*	Past Time *wrote* or *writ*	Verbal Quality *written*
1745(延享 2)	Kirkby	Present Time *sit*	Past Time *sat*	Latter Participle *sit, sitten*
1753(宝暦 3)	Port Royal grammar	見出し語形：Etre, to be		
1754(宝暦 4)	Gough	Present Time	Past Time	Past or passive participle
1761(宝暦 11)	White	the principal parts		
		Present Tense *I come*	First Past Tense of the Ind. Mood *I came*	Second Past Tense of the Ind. Mood (= Passive Part.) *I have come*
1762(宝暦 12)	Priestley			
	Lowth	Present Time *Am,* or be	Past Time *was*	Part. Perfekt or Passive *been*
1763(宝暦 13)	Ash	Present	Preter	Passive Part.
1765(明和 2)	Ward	見出し語形：to be, to have, to call		
		1) the root of the verb... the first persons of the three first tenses of the Indicative mood aktive.		
		[Present] *I name*	[First preterite] *I named*	[Second preterite] *I have maned*
		2) Imperfekt root (the first root) *build*	Indefinite root (the second root) *built*	Perfekt root (the third root) *built*
		3) *call*	*called*	*called*……*calling*
1771(明和 8)	Fennig	Present Tense *am*	Preter·Imperfekt Tense *was*	Part. Perfekt or Passive *been*
1776(安永 6)	Peyton	Infinitive Infinitif *To love*	Preter·perfekt Prétérit Simple *I loved*	Passive pariciple Participe Passé *Loved*
1777(安永 7)	Harrison	To~[術語なし] *Abide*	Preterite Tense *abode*	Part. Preterite *abode*
1784(天明 4)	Fell	Present *am*	Past *was*	Past Part. *been*
	Webster	three heads		
		present tense *be*	past tense *been*)	participle *been*
1785(天明 5)	Ussher	Present Tense *am*	Imperfekt Tense *was*	Perfekt or Passive Part. *been*
1795(寛政 7)	Murry	見出し語形：to be, to have...		
		Present Tense *Am*	Preterimperfekt Tense *was*	Perfekt Part. *been*
1798(寛政 10)	Sedger	見出し語形：to be, to have...		
		Grammarians in speaking of verbs generally use the word To as the indefinite article, and say the verb To have, To be, To do,...&c.		
1801(享和 1)	Locke	tegenwoordige tyd *Abide*	voorledene daadelyke tyd *abode*	volmaakt deelwoord *abode*
1845(弘化 2)	Hamelberg	Onbepaalde wijs Infinitive *To abide*	Onvolmaakt verledene tijd *abode*	Verledene of lijdende deelwoord Perfect, past or passive participle *abode*
1851(嘉永 4)	Brown	Four principal parts		
		Present *Love*	Preterit *Loved*	Imperfect Part. *Loving* / Perfect Part. *Loved*

（表７－１）

年　号	著　者	三基本形の筆頭	過去形	過去分詞
1852(嘉永 5)	Murray（蘭訳英文典）	Onbepaalde wijs *Abide, wonen*	Onvolmaakt verleden' tijd *abode, woonde*	Verledene deelwoord *abode, gewoond*
1854(安政 1)	Beek	Onbepaalde wijs *To abide*	Verledene tijd *abode*	Verledene deelwoord *abode*
1855(安政 2)	Lloyd	Tegenwoordige tijd Present *I abide*	Verledene tijd Imperfekt *abode*	Verledene deelwoord Past Part. *abode*
1861(文久 1)	Murray	Present *I love*	Imperfekt *I loved*	Perfekt Part. *loved*
1866(慶応 2)	Baily	Present *Am,* or *be*	Imperfect *was*	Perfect Part. *been*
1867(慶応 3)	Quackenbos	the three Chief Parts of the verb		
		Root *Abide*	Imperfect *abode*	Perfect Part. *abode*
	江戸版英吉利文典 (The Elementary Catechism)	Present Tense *Advise*	Past Tanse *Advised*	Perfect Perticiple *Advised*
1869(明治 2)	Pinneo	見出し語形：to + Inf.		
		Present *Love*	1st Past Indicative *loved*	2nd Past Part. *loved*
1874(明治 7)	Hart	Present Tense *Am·····Is*	Past Tense *was*	Past Part. *been*
1876(明治 9)	Swinton	principal parts		
		Present *Break*	Past *broke*	Past Part. *broken*
1898(明治 31)	Davenport	the principal parts		
		Present form	Past form	Past Part.
1935(昭和 10)	Curme	Present Infinitive *be, bee*※	Past Tense *was, been*	Past Part. *been, bene*※, *bin*※, *ben*※, *be*※

（表７－２）

表8．明治期の英文典における Mood の訳語

年　号	書　名	Mood	Inf.	Ind.	Pot.	Subj.	Imp.	Inf.	その他
1815(文化 12)	和蘭語語法解(オランダごほうげ) (Peyton の英文典？)	活言法		1. 直説法	2. 許可法	3. 附説法 4. 第二附説法	5. 使令法	6. 不定法	7. 疑問法 8. 不無法 9. 不有法
1815～22 (文化 12～文政 5)の間？	和仏蘭対訳語林	法		1. 直説法		3. 分註法	2. 使令法	4. 普通法	
？	繙巻得師草稿 (全集本)	四法		1. 直説法		2. 附説法 附接法	3. 使令法		4. 疑問法
1828～29 (文政 11～12)？	同 (国会図書館本)	四法		1. 直説法		2. 附説法 (分註法＝関係文を含む)	3. 使令法		4. 疑問法
1840(天保 11)	英文鑑(かがみ)	五様		1. 明説様	3. 許可様	4. 虚構様	2. 分付様	5. 寛説様	
1861 (文久 1)	英語箋								
1867(慶応 3)	江戸版英吉利文典 第 6 版 (木の葉文典)	Mood		Ind.	Pot.	Subj.		Inf.(the verb in its simple form)	
	英吉利文典字類	法		1. 直説法	4. 可成法	2. 疑問法	3. 命令法	5. 不定法	
1870(明治 3)	格賢勃斯英文典直譯 [大学南校]	法		1. 直説法	2. 許可法	3. 附属法	4. 使令法	5. 不定法	
1871(明治 4)	洋(英)学階梯	諸法		1. 直説		2. 疑問	3. 命令	4. 不定	
	英文典獨学 (格賢勃斯氏　[戸田忠厚]	法		1. 直説法	2. 許可法	3. 附属法	4. 使令法	5. 不定法	
	洋学指針・英学部 (二編)	法		1. 直説法	3. 可成法 約束法	2. 接続法 附説法	4. 使令法 命令法	5. 不定法	
1872(明治 5)	ピ子ヲ氏通俗英文典 [訳者不明]	法		1. 直説法	2. 成就法	3. 疑問法	4. 命令法	5. 不定法	6. 分詞法 又ハ分詞
	ピ子ヲ氏著挿訳英文典(初編)[榧木寛則]								
(刊年不明)	格賢勃斯英文典挿譯(初編) [桂潭・島一徳]								
1873 (明治 6？)	英学新式(巻一)								
1875(明治 8)	語学獨案内 [ブリンクリ]	法		1. 定法	4. 可能法	2. 接続法	3. 命令法	5. 不定法	
1879(明治 12)	英語変格一覧 [チャムブレン]	法	1. 不限法	2. 直説法	4. 許可法	5. 附属法	3. 命令法		
1883(明治 16)	克屈文典直譯(上下)	法		1. 直接法		2. 接合法	3. 命令法	4. 不定法	
	ピネヲ氏文典獨学字書　[清水房之助]	法		1. 直説法	2. 可成法	3. 疑問法	4. 命令法	5. 不定法	6. 分詞法
	ピネヲ氏原著英文典獨案内[渡辺五一郎]	法		1. 直説法	2. 成就法	3. 疑問法	4. 命令法	5. 不定法	6. 分詞法
	英語獨学便法	法		1. 直説法	3. 可成法	4. 接続法	2. 命令法	5. 不定法	
1884(明治 17)	英国文典獨案内(クワケンボス氏) [垣上　緑]	法		1. 直説法	2. 許可法	3. 附属法	4. 命令法	5. 不定法	
	ブラウン氏英文典直譯　[中西　範]	法	1. 不定	2. 直説 直接	3. 成就	4. 接続	5. 命令		
	文典和解英文指針	法		1. 直説法	2. 可能法	3. 接続法	4. 命令法	5. 不定法	

(表８－１)

年　号	書　　名	Mood	Inf.	Ind.	Pot.	Subj.	Imp.	Inf.	その他
1884(明治 17)	スウヰントン氏英語学新式直譯［斎藤秀三郎］	法		1. 直説法	2. 可能法	3. 接続法	4. 使令法		
1885(明治 18)	英学五書獨案内	法		1. 直説法	2. 許可法	3. 附属法	4. 指令法	5. 不定法	
	クワッケンボス氏英文典獨案内［高宮直太］	法		1. 直説法	2. 可成法	3. 附属法	4. 命令法	5. 不定法	
	無類捷径英学童子解(初編)	法		1. 直説法	2. 許可法	3. 附属法	4. 指令法	5. 不定法	6. 分詞法
	英文手引草［島田奚疑］			?	?	?	?	?	
1886(明治 19)	ピネヲ氏英文典獨稽古　［伊藤一郎］	法							
	ピ子ヲ氏英文典獨学(全)［玉井靖三郎］	法		1. 直接法	2. 威勢法	3. 不定法（サブジャンクティブ）	4. 命令法	5. 無限法 無定法	6. 分辞法
	ブラウン氏英文典文法詳解獨案内［近藤堅三］								
	ピネヲ氏英文典獨案内　［萩原孫三郎］								
	文法詳解ブラウン氏英文典釈義［澤田重遠］	法	1. 不定法	2. 顕示法(直説法)	3. 可成法	4. 附属法	5. 命令法		
	ブラウン氏英文典直譯(全)［源　綱紀］	法	1. 不定	2. 直接	3. 可成	4. 接続	5. 命令		
	クワツケンボス氏英文典直譯［栗野忠雄］								
	文法詳解ピネヲ氏英文典獨案内［生駒　蕃］								
1886～7(明治 19～20)	ブロヲン氏英吉利文典講義(前後編)［長野一枝］	法	1. 不定法	2. 直説法	3. 成就法	4. 接続法	5. 命令法		
1887(明治 20)	スウヰントン氏英文典直譯［蘆田東雄］	法		1. 直説	2. 可能	3. 接続	4. 命令		
	容易獨修英文典直譯(ブラウン氏)［戸代光大］	法	1. 不定	2. 直説	3. 成就	4. 接続	5. 命令		
	ソンメール氏佛文典直譯　［平山直道］	法		1. 直説法		3. 附属法	2. 命令法	4. 不定法	5. 分詞
	容易獨修スヰントン氏英文典直譯［大島国千代］	法		1. 直説	2. 許可	3. 附属	4. 使令		
	英語学大全					接続法	命令法		假定法
	ピネヲ氏英文典直譯［栗野忠雄］	法		1. 直説法	2. 可能法	3. 附属法	4. 命令法	5. 不定法	6. 分詞法
	スウヰントン氏英文典直譯(全)［栗野忠雄］	法		1. 直説法	2. 許可法	3. 附属法	4. 命令法		
	ディクソン英文典直譯			1. 直接法		疑問法	命令法		
	正則挿譯ピ子ヲ氏英文典獨案内［佐藤雄治］	法		1. 直接法	2. 成就法	3. 接続法	4. 命令法		

(表８－２)

年号	書名	Mood	Inf.	Ind.	Pot.	Subj.	Imp.	Inf.	その他
1887(明治20)	ソンメール氏佛文典直譯 ［中村秀穂］	法		人称法				非人称法	
				1. 直説法		3. 附属法	2. 命令法	4. 不定法	5. 分詞法
	イングリッシ文法主眼	法		1. 直説法	2. 可燃法	4. 接続法	3. 命令法	5. 不定法	
	クワツケンボス氏英文典直譯 ［水澤　郁］	法		1. 直説法	2. 許可法	3. 附属法	4. 命令法	5. 不定法	
	クワツケンボス氏英文典直譯(全) ［山本栄太郎］	法		1. 直説法	2. 可成法	3. 接続法	4. 命令法	5. 不定法	
	スウ井ントン氏英文典直譯 ［斎藤桂堂］	法		1. 直説法	2. 許可法	3. 附属法	4. 命令法		
	和解纂註英文軌範(完)	法		1. 直説法	2. 可成法	3. 疑義法 (接続法)	4. 命令法	5. 不定法	
1888(明治21)	スウ井ントン氏英文典直譯 ［太田次郎］	法		1. 直説	2. 可能	3. 接続	4. 命令		
	クアツケンボス氏英文典獨案内 ［外川秀次郎］	法		1. 直説法	2. 許可法 可成法	3. 附属法	4. 命令法	5. 不定法	
	スキントン氏ニューランゲージレッソンズ直譯 ［石川録太郎］	法		1. 叙述法	2. 可成法	3. 仮定法	4. 命令法		
	六月卒業英学自在(全)(オレンドルフ) ［紅林員方］	法		1. 定説法	2. 可能法	3. 接続法	4. 命令法	5. 不定法	
	文法詳解英文典講義(ブラウン氏) ［別所富貴］	法	1. 不定法	2. 顕示法 (直説法)	3. 可成法	4. 附属法	5. 命令法		
	スウキントン氏英文典直譯(全) ［伴野乙弥］	法		1. 直説法	3. 有力法	2. 疑問法	4. 命令法		
	クワツケンボス氏小文典獨案内 ［梅木正衛］	法		1. 直説法	2. Pot.	3. Subj.	4. Imp.	5. 不定法	
	スウ井ントン氏英文典獨案内 ［朝野儀三郎］	法		1. 直説	2. 許可	3. 疑問	4. 命令		
	スウキントン氏英文典直譯 ［渡辺松茂］	法		1. 直説 ● 直接	2. 可能	3. 接続	4. 命令		
	須因頓氏大文典解釈 ［田中達三郎］			● 1. 直接法	2. 可成法	3. 疑問法	4. 命令法		
	すういんとん小文典獨学自在 ［桜田源治］			1. 直説法	2. 可成法	3. 仮説法	4. 命令法		
1889(明治22)	和譯英小文典(完)	法		1. 直説法	2. 可成法	3. 接続法	4. 命令法	5. 不定法	
	須因頓氏大文典講義 ［平井広五郎］	法		1. 直説法	2. 可成法	3. 接続法	4. 命令法		
1890(明治23)	原書全譯スウキントン氏英文典直譯講義 ［渡辺松茂］	法		1. 直説 ● 直接	2. 可能	3. 接続	4. 命令		
	スウキントン英文典獨案内 ［奚疑・島田　豊］								

(表8－3)

年　号	書　　名	Mood	Inf.	Ind.	Pot.	Subj.	Imp.	Inf.	その他
1890(明治 23)	容易獨修スウ井ントン氏英文典直譯講義［川田駕洋］	法		1. 直説	2. 可能	3. 附属	4. 命令		
1891(明治 24)	斯因頓大文典講義(上下)［山形　閑］	法		1. 直説法	2. 可成法	3. 接続法	4. 命令法		
	須因頓氏小英文典講義　［湯浅/関］			1. 直接法	2. 可成法	3. 接続法	4. 命令法		
	英文法講義(完)								
1892(明治 25)	簡明英文典	Mood	1.Inf.	2.Ind.	3.Pot.	4.Subj.			
1893(明治 26)	英語教授書	法				約束法	命令法	不定法(?)	
	英文典［チャムブレン］	法	1. 不定法 不限法	2. 直説法 平常法	4. 可成法	5. 接続法	3. 命令法		
1894(明治 27)	初等英文典	法		1.Ind.	2.Pot.	3.接続法	4.Imp.	5.Inf.	
	教科書獨修用新英語学	法		1. 直説法		3. 接続法	2. 命令法		第一假設法 第二假設法
	英文法学(上編)	法							(直説法の時制で Conditional tense)
	実験英文典教科書	法		1. 直説法	2. 可能法	3. 接続法	4. 命令法		
1895(明治 28)	英文法詳解(ス井ントン氏)［酒巻/金子］	法		直接法	可成法	接続法	命令法		約束法 (Subjunctive sentence のこと)
1896(明治 29)	英文法教科書	法		1. 指示法	2. 可成法	3. 接続法	4. 命令法		
	英語初歩教授書(全)								
	英文典問答(全)	法		1. 直説法	2. 可能法	3. 接続法	4. 命令法	5. 不定法	
1897(明治 30)	英語学捷径(バッター氏)								
	スーイントン小文典直譯意解［元木貞雄］	法		1. 直説法	2. 可成法	3. 仮定法	4. 命令法		
	新式英文法軌範	法		1. 指示法	2. 可成法	3. 接続法	4. 命令法		
1898(明治 31)	新式実用英文法講義	法		1. 指示法	2. 可成法	3. 接続法	4. 命令法		
	邦語英文典［畔柳都太郎］	法		1. 直説法		3. 接続法	2. 命令法	4. 不定法	
	英語学大全(前後篇)	法		人　称　法					約束体　設若体
				1. 直説法		2. 接続法	3. 命令法	4. 不定法	(直説法の時制で Conditional tense)
	邦文英文典(全)［嶋　文次郎譯補］	法		1. 直説法 直接法		2. 接続法	3. 命令法	4. 不定法	
	通俗英語案内								
1899(明治 32)	英文典教科書［チャムブレン］	法		1. 直説法 直接法	3. 可成法	4. 接続法	2. 命令法		
	教科書摘要新式英語学獨修(一名六ヶ月間達成)	法		1. 直説法	2. 可能法	3. 接続法	4. 命令法		

(表８－４)

年号	書名	Mood	Inf.	Ind.	Pot.	Subj.	Imp.	Inf.	その他
1899(明治32)	邦文涅氏英文典 [内海弘藏]	法		定法 1. 直説法●直接法		3. 接続法	2. 命令法	4. 不定法	
1900(明治33)	意解挿入ねすふいーるど英文典第二獨案内 [栗野忠雄]	法		定法 1. 直説法		3. 接続法	2. 命令法	4. 不定法	
	子スフィールド氏第二英文典講義 [鶴田久作]			定法 1. 直説法●直接法		3. 接続法	2. 命令法	4. 不定法	
	ねすふいーるど英文典第三巻講義 [喜内芳樹]	法		1. 直接法●		3. 接続法	2. 命令法	4. 不定法	
	新案教科書英語教授初歩								
	ネスフ井ルド氏英文典巻弐直譯註解 [畔田 到]	法		定限法 1. 直説法		3. 接続法	2. 命令法	4. 不定法	
	子スフィールド氏第三英文典講義録 [奈倉次郎]	法		1. 直接法●		3. 接続法	2. 命令法	4. 不定法	
	英語全課卒業書	法		1. 直説法	2. 可成法	3. 接続法	4. 命令法	5. 不定法	
	英文法初歩 [斎藤秀三郎]	法		1. 直説法	4. 可能法	2. 附属法	5. 命令法		3. 條件法 Conditional mood
1901(明治34)	文法大意(全)								
	新編英文典問答	法		1. 直説法●直接法	2. 可能法	3. 接続法	4. 命令法	5. 不定法	
	子スフィールド氏第二英文典直譯注釈 [葛西又次郎]	法		定法 1. 直説法		3. 接続法	2. 命令法	4. 不定法	
1902(明治35)	英文典術語集	法		1. 直説法	3. 可成法 含勢法	2. 接続法 疑問法	4. 命令法		
	英語提要	法		説示法		接続法			
1904(明治37)	文法会話作文 英語新編	法		1. 直説法	2. 可成法	3. 接続法	4. 命令法		
1906(明治39)	英語獨案内								
	英文典ダイヤグラム			1. 直説法●直接法	5. 可能法	3. 假定法	2. 命令法		4. 條件法 Conditional mood
	英語文法品詞論	法		1. 直説	2. 可成	3. 仮定	4. 命令		
	教科用獨修用世界語(エスペラント) [二葉亭四迷]								
1907(明治40)	表説 英文典(全)			1. 直説法●直接法	2. 可能法	3. 仮定法 仮設法	4. 命令法		
	英語学捷径	法		1. 直説法	2. 可能法	3. 仮定法	4. 命令法		
	新式英語熟達法	法		1. 直説法	3. 可能法	2. 仮定法	4. 命令法	5. 不定法 不定語法	

(表8－5)

年　号	書　　名	Mood	Inf.		Ind. Pot.	Subj.	Imp.	Inf.	その他
1908(明治41)	最新問答全書　英文典(ネスフィールド) [嶋村東洋]	法		定　　法					
				1. 直説法 直接法		2. 接続法	3. 命令法		
	中学英文法講義	法		1. 直説法	3. 可能法	2. 仮設法 仮定法 (接続法)	4. 命令法		
1911(明治44)	教科書用参考　中等英文法通解(全)	法		1. 表示法	3. 可能法	2. 仮定法	4. 命令法		

(表8－6)

いる。実際**表2**（37頁）の5書はそうである。**表8**（86頁）の116冊の英文典においても、Inf.から始まるのはわずか9冊に過ぎない。明治期の主な英文典における Mood は、Quackenbos が五法、Pinneo が六法、Swinton が四法, Brown が五法、Nesfield が三つの人称法と不定法の四法であるが、前三者は、数こそ異なるものの、Ind.を Mood の筆頭に置いている。Inf.を第一位とするのは Brown のみで、Swinton においては Inf.は Mood に入ってさえいない。その Swinton の三要形の筆頭は《直説法現在》である。Nesfield も同じく《直説法現在》で、不定法を持つものの、その内容は最早 Verbals の総称である。

この点で興味深いのはチヤムブレンの英文典である。<チヤムブレン>とは、すなわち東京帝国大学の和文ならびに博言学科で教授を務めたあの Basil Hall Chamberlain のことで、現代ではチェンバレンとよばれるが、当時の記録は、たとえば『海軍兵学校沿革』も、岡倉由三郎の Chamberlain の追悼文も、皆<チヤムブレン>と記している。

チヤムブレンは、『英語変格一覧』(明治12)、『英文典』(明治26)、『英文典教科書』(明治32)という三冊の文法書を著しているが、前二者と後者とではその内容が大きく違っている。その相違は「動詞」の部に最も端的に現れ、前二者の三要形は不定法現在［<to>は括弧つき］・半過去［=現代文法の過去形］・過去分詞、時制構成は伝統的な三過去形式の叉角的五分法である。対する『英文典教科書』では、三要形の筆頭が《現在直説法》に変わり、Nesfield 風の二分法による6時制方式が取られている（チヤムブレンの時制に関しては第二章第三節6.［239頁］参照）[注29]。

つまり、チヤムブレンの英文法は、前二者の三要形は新説で時制構成は旧説のまま、第三番目の三要形は逆に旧説に返り、時制構成は新説を採用したことになる。この三要形の動きは時代に逆行しているように見える。しかしこれは、チヤムブレンが全面的に新文法に従って改訂した結果であると考えられるのである。

明治の英文典に大きな影響を与えたのは、Mood の筆頭に Inf.を据えた Brown, Inf.を Mood から外した Swinton, 三要形に<Root>を導入した Quackenbos、そして《現在完了》という時制の用語を生み出した Nesfield ということになる。

2. 明治期の英語学における Inf.と<Root>

2.1. Inf.の Modus からの脱落

明治期の英文典における Mood の訳語は、**表8**（86頁）によると、蘭語学から受け継いだ《不定法》でほぼ一定している。ただしその読み方は、当時の文典の振り仮名を見るに、幕末から明治前半期頃までは<フジャウハウ>であったらしい。その他の訳語としては、蘭語学系統の《不限法》、および新しい訳語である《無限法》《無定法》がある。

この新訳語を Inf.に与えた玉井靖三郎(『ピネヲ氏英文典獨学』（明治19）は、Subj.を《不定法》としているが、これは勿論誤りではない。“zoude”(should)を用いた仮定推量未来（Conditionalis）を《不定時》と表現した蘭語学同様、この話法が何時何時と時を限

定できない仮定的内容を表す故であろうと考えられる。当時、英語の Subj.の内容はほぼ "if" に限定されていたので、この訳者は、"that"・"though" 等をも含む呼称である《接続法》《附属法》ではなく、不定の未来——即ち仮定推量未来を表わす《不定法》(即ち《仮定法》の意) を採用したのであろう。その結果、Inf.の呼称が《無限法》《無定法》となったのである。

この意味で、明治17年(1884)『スウキントン氏英語学新式直譯』は、明治の洋語学にとって画期的な文法書である。それまで英語の Mood は Ind.・Pot.・Subj.・Imp.・Inf.の五法が普通であったが、この明治 17 年を境にして、Ind.・Pot.・Subj.・Imp.の四法になる[注30]。チヤムブレンも、明治32年(1899)の『英文典教科書』では四法としている。

しかし**表8** (86 頁) では、明治 18〜20 年の間は《不定法》は存続している。《不定法》の欄が空欄になるのは主に明治 20〜24 年であり、その原因が夥しい数の Swinton 文典の翻訳にあることは、書名欄を見れば一目瞭然である。著者別に見た明治期の直訳文典の出版数を**表23**(218 頁)としてまとめたが、これを見ると、明治 10 年代後半の 5 年間が Pinneo, Quackenbos, Brown の時代であり、20 年代前半の 5 年間が Swinton の時代であったことがよくわかる。前三者の時制構成と Mood は、旧文法に従った三過去を有する叉角的五分法と五法であるのに対し、Swinton のそれは完了・非完了の二分法と四法である。従って、明治 20〜24 年の五年間で《不定法》を持っているのは、旧時制を採る Quackenbos, Ollendorff, Brown の直訳本であり、また『和解纂註英文規範』と『和譯小英文典』という 2 冊の著述文典である[注31]。

ところが、20 年代に一時消えた Inf.が、明治 30 年代に入って Nesfield が流行したことから再び Mood に復帰する。Nesfield は Mood を<Finite mood>と<Infinite mood>に二分し、Ind.,Imp.,Subj.の三法は前者に属する。

しかし、後者の内容はもはや単純な to-Inf.ではない。それは Infinitive, Participle, Gerund (=verbal noun) を包括する総合的な概念である[注32]。そして、明治の最後の 10 年間は、基本的には二種類の<四法>——Inf.を持たない Swinton 流の四法と、Pot.の抜けた Nesfield の四法とが並立することになる。

表8 (86 頁) を見る限りでは Swinton の方が優勢なようである。ともあれ、このようにして動詞ではないということで Mood から外された Inf.が、「動詞の種種の変化形のもとの形」として三要形の筆頭に立つことは、英語ではなくなった。チヤムブレンの『英語変格一覧』(明治12(1879))と『英文典』(明治25(1892))に現れた三要形の筆頭としての不定法現在[<to>は括弧つき] は、蘭語学の末期に Inf.が Mood の筆頭に移行し始めてから Swinton によって Mood から追われるまでの短期間の動きを捉えたということになる。

ここでふたつの疑問が考えられなければならない。まず、何故この時 Inf.が Modus から脱落することになったのか。このきっかけを作ったのは Bopp であると Delbrück は言う。F. Bopp (寛政3(1791)〜慶応3(1867)) はベルリン大学で教鞭を取った著名な歴史比較言語学者であるが、この Bopp が、Inf.は名詞であって、動詞に備わっているところの aussagen (アオス・ザーゲン) (叙述) の力

がないと言ったことが、それ以後、Inf.をModusでなくすることに決定的に作用したのである[注33]。

では何故、一時的にもせよInf.が伝統的な《直説法現在》に代って三要形の筆頭に立つことになったのか。これについては、次節で独逸語におけるInf.の動向を踏まえたあと、まとめの節にて改めて考えることとする。

2.2. 《定動詞》《不定動詞》《不定詞》

表6（79頁）は、<Root>の訳語と、三要形の筆頭に位置するものは何かを調べて一覧表にしたものである。ここでまず注目されるべきは《定動詞》という用語である。これは、現代の文法では、英語ではなくドイツ語の教科書の第1課で必ず出会う文法用語である。ところが、**表13**（112頁）を見ると、意外なことに、独逸語にこれが現れるのはやっと大正も終わらんとする時期まで遅れ、《定動詞》という術語は明治期を通じて英文法のものであった。何故かと言えば、この時代の英文典は、「三単現のs」以外にも、直説法現在及び過去の二人称単数がまだしばしば<Thou～st>という語形を保存していたので、《定動詞》《不定動詞》の概念が通用したからである[注34]。

明治4(1871)年『洋学指針 英学部』には、次のようにある。

> 定動詞ハ人称及単複ノ数ニ依テ変化ノ定リタル詞ナリ　不定動詞ハ変化ナク何レモ通用シテ人称単複ノ数ニ定メナク用フル詞ニテ advise 又 to advise ノ類ノ如シ都テ to ト云フ辞ヲ前ニ置タル詞ハ皆不定動詞ナリ　如何トナレハ to have to rud to look to sing 等ノ如キ前後ノ詞ノ数ニモ格ニモ拘ハラズ如何ナル場所ニテモ用フル故ニ不定ト名ツクルナリ

《不定動詞》の例に<advise>という動詞を用いているところを見ると、この著者である柴田清凞はきっと、中浜万次郎がアメリカより持ち帰った『英吉利文典』（The Elementary Catechism. English Grammar.）で英語教育を受けた人ではないかと思われてならない。なぜなら、『英吉利文典』の第三十三課は<the verb to advise>の活用表であり、その末尾にはまさしく、Inf.として<to advise>が挙げられているからである。

さて、ここで言う《定動詞》《不定動詞》という用語であるが、まず《定動詞》は、概念的に言えば、**表5**（42頁）の安政3(1856)年『和蘭文語凡例 後編』における《変格活辞》がその訳出の最初であり、その原語は、Maatschappij（マートシカッペイ）の<het vervoegde werkwoord>［活用された動詞］である。日本人の目から見れば、動詞の<人称及単複ノ数ニ依テ変化ノ定リタル>形は文字通り「変化形」であるから、《変格活辞》の方がより適切であるように思われる。これが変化の<定リタル詞>であるというのは理解しにくい表現で、実際、現代のドイツ語履修学生が人称変化形である《定形》を原形と誤解する理由もここにある。

一方、後者の《不定動詞》であるが、明治(1871)4年のこれは、<to>がある場合とない場合とが分離していない、《原形》登場前夜の《不定動詞》である。用語的には、蘭語学にその用例が存在している。宇田川玄真の『検麓韻符』中に見られるのが、その最も早いものであろう注35。

（1～6まで省略）

用ユ 一ノ —不定動詞 ニ 事キマラヌ時ニ用ユ動詞也 ヶ後ニ用ユ— —実— 名詞ノ ヶ 干 一ノ
7.te. voor een onbepaalde werkwoord na een zelfstandige naam in een
被動詞ノ 意
lijdende zin.

被動詞ヲ不定法ト為スナリ te doen hebben.

干ヶ 一ノ —不定詞 ヶ之ヶ — —動詞 係ル
8. te. voor een onbepaald van een werkwoord afhangende.

此ニテ動他詞ニ用テ不定法トナス te kennen geeven.

用ユ 一ノ 不定詞 ニ ヶ後ニ用ルヶ 一ノ —前ノ ——動詞ノ
9. te. voor een onbepaald na een voorgaande werkwoord.

— 始メル ヶ事ヲ ヶ習フ
動他詞ノ間ニ用テ不定法トナス Ik beginne te leeren.

用ユヶ 一ノ 不 定 動 詞 ニ ヶ 後ニ用 承名辞ノ ヶ—ノ
10.te. voor een onbepaalde werkwoord na het voorzetsel om.

(タメ)
ヘキカ為ト訳スラムヲ加 不定法 ヲ示ス bekwaam om te leeren.
宣シ ヶ為メニ ヶベキヶ 読

ここには《不定動詞》《不定法》《不定詞》という三種の用語が見られるが、これは皆同じではない。第一の《不定動詞》は、まさに<een onbepaalde werkwoord>の直訳である。<事キマラヌ時>というのは、恐らく主語・数・法・時制・態が決定されない場合という意味であろうが、これが、語尾を定める《定動詞》と対になるものである注36。

この《不定動詞》に<te>という《承名辞》（前置詞）を付けると、第二の《不定法》となる。この箇所には「コト」「ベキ」「為ニ」という対訳和語が見られ、現代の受験参考書に必ず登場する定番の表現が江戸時代から連綿と引き継がれたものであることが分かって誠に感慨深いが、ここでの《不定法》は、このように<te+Inf.>（英 to+Inf.；独 zu+Inf.）のことである。が、すこし後になると、P. Marin(嘉永4 1851) や Brill(安政2 1855) のように Part. までを含める場合も出てくる注37。

第三の《不定詞》は、<werkwoord>[動詞] が抜けて<een onbepaald>だけの時に対する訳語のようで、内容的には《不定動詞》と同じものである。この《不定詞》・《不定動詞》が、<te>も附かず分詞も含まない場合の、いわゆる「動詞の原形」のことである。このように三種の用語（内容的には二種）を的確に訳し分けていることから、江戸期の蘭語学全体としては困難であったとされるこの方面の理解が、玄真においてはかなり精密であっ

たことが窺われる。

2.3. 《根言》

2.3. 1. 動詞の「原形」にならない<Root>

玄真が訳したこの<een onbepaalde werkwoord>《不定動詞》あるいは<een onbepaald van een werkwoord>「動詞の《不定詞》」こそ、現在ならば当然《原形》として動詞の三基本形の筆頭に置かれるべきものである。**表3**（39頁）でもほとんどの文典が Inf.を原形と見做している。<Present>を採るのは4例で、しかも、それらは皆英文典である。

ところが**表7**（84頁）を見ると、英語では、動詞の三要形の筆頭部分のほとんどが<Present>——正確には直説法能動態現在一人称単数——であり、Inf.は逆に少数派なのである。ましてや<Root>は、1867(慶応3)年の Quackenbos まで登場せず、しかも後続例もなく孤立的存在になっている。**表7**で<Infinitive mood>を採るのは、Harrison, Hamelberg, Beek, Murray(1852), Curme のわずか5名に過ぎず、前4者では動詞に<to>が付けられていて、これは現代から見るといかにも邪魔で不自然に思われる。しかし、

> De onbepaalde wijs heeft in het Engelsch gewoonlijk het teeken *to* voor zich,…
> 英語の不定法は、動詞の前に to が付くのが普通である。
>
> (Hamelberg, 1845(弘化2). 102頁)

と言われるように、動詞の語尾変化を喪失した英語においては、この<to>という<the indefinite article>を付してこその<Infinitive mood>である[注38]。さもないと、英語では、直説法現在二・三人称単数以外は《原形》と全く同形であるため、<to>を付さない限り何らかの活用形になってしまうからである[注39]。

この点、江戸幕府旧蔵洋書中の和蘭語で書かれた英文法書は、自ずと蘭・英比較文法になっている点で誠に興味深い。例えば、**表15**（154頁）中には L.Murray の文法書は三冊あるが、英語版(1795(寛政7)；1861(文久1)) と和蘭語の翻訳版(1852(嘉永5)) とでは、不規則動詞の三基本形一覧表における見出し語部分の名称が異なっている。前者は<Present>、後者は<Onbepaalde wijs>なのである。 Inf.を動詞変化の原形と考える傾向の強い自国の文法を鑑みて、訳者の Cowan が、蘭訳する際このように変更したのであろうか。あるいはその当時の新たな動きに従ったのであろうか。しかも、この Cowan の<Onbepaalde wijs>には<to>が付いていない（資料27・28[102-103頁]参照)。これは全く珍しい事例で、英語の<Infinitive mood>は、次頁に挙げる Beek(1854(安政1)) の動詞活用表のように、<to>を伴っているのが普通である。

(蘭)	"Hebben"	(英)	"to have"
	Onbepaalde wijs		Infinitive mood
	Tegenwoordige tijd		Present tense
	Hebben		*to have*
	Verleden Tijd		Perfect tense
	Gehad hebben		*to have had*

(Beek, 1854 p.141)

文化11年成立の日本初の英和辞典『暗厄利亜語林大成』でも、見出し語の動詞には皆<to>が付けられており、これが、<Root>が登場する以前の、動詞をひとつの単語として提示する場合の手段であった。しかし、それが為に、can・will・shall 等の助動詞を提示する場合には、英語ではこれらが Inf.を欠く<Defective verb>(欠如動詞)であるため、助動詞を列挙する際、"to have, to be, shall, will, to do..." のように、<to>の有無という記載上のアンバランスを生じさせてしまうことにもなるのである。

再び**表6**(79頁)を見ると、明治期の英文典においても三要形の筆頭に「原形」が立たない場合がかなり多いことに気付く。<Root>がないわけではない。それにも拘らず、動詞活用の三要形に<Root>が入れられず、直説法一人称単数現在になっているケースがままあるのである。Swinton 文典はその典型である。

Swinton 文典での<Root>の理解には注意が必要である。我々は Swinton の中に<Primitive word>または<Root word>いう言い方を見い出すが、これは、例えば"help"と"helpful"の<help·>、"teach"と"teacher"の<teach>の部分を指すところの、いわゆる派生語の「原語」である。これに対して<the root of a verb>と言えば、これが「動詞の根語」を意味する表現である(ただし Swinton の三要形の筆頭は Pres.であって、Root ではない)。当時の訳者も、<Root>を《根原動詞》、《原働詞》等に訳して、これが動詞に関するものである事を明示し、一方の派生語の基本語である<Root word>は《原詞》と訳して、両者の質的相違を際立たせている(**表6**[79頁])。Brill(1853)が変化詞全般の原形として<grondvorm>を用い、Lulofs(1831)が、直訳すれば「原動詞」とならざるを得ない<primitief werkwoord>を分離・非分離動詞の基礎動詞としていたように、現代英文法の《原形》から類推して、当時の文法用語を単純に現代と同じものと判断するわけにはいかないのである。

Quackenbos は<Root>の提唱者であるから、三要形の筆頭に当然<Root>を充てている。明治維新の一年前に出版された彼の文典(1867)によると、<Root>とは次のようなものである。

What do we mean by the Root of a verb?

——The Present infinitive without the sign to ; as *rule*.

What are the three Chief Parts of the verb?

——The root, the imperfect indicative, and the perfect participle ; *rule, ruled, ruled.* (75 頁)

ここにおける<Root>は、<to>のない現在不定法のことである。"root" ——即ち語根とは、ある単語家族に共通する最も基本的な意味（the common radical meaning）を担った一音節の単語であるとされるのが普通であるのに[注40]、この Quackenbos の定義は、それと全く違っている。しかし、この<to なしの現在不定法>を《不定動詞》ではなく<Root>と捉えることによって、英語は to なしでも動詞の単独表示が可能となったのである。Inf.か Pres.を動詞の基本形——1935(昭和10)年の Curme でさえ<Present Infinitive>である——とするのが一般の中にあって、この Quackenbos の<Root>は新説中の新説である。

2.3. 2. 形容詞の「原級」でもあった《根語》

この Quackenbos は、明治3(1870)年初夏、蛮書調書の後身にして東京帝国大学の前身である大学南校の、当時「助教」であった人の手によって翻訳がなされ、『格賢勃斯英文典直譯』として出版された[注41]。この書における<Root>の訳語は《根言》であって、《原形》ではない。**表6**（79 頁）に示したとおり、明治期における<Root>の訳語は、そのほとんどが《根言》とか《根語》とかの《根—》系統のものが主流を占め、《原形》という訳語は、全く驚くほど少ないのである。

《根言》は、柳川春三の『洋学指針 蘭学部』に見られる用語である。ところがこの最後の蘭文典では、この術語は、動詞である<活言>の「語根」のみならず、

形言ノ階級　：根言—相比—摘出　[他に<×‥比‥最><大‥更大‥極大>の用語有り]
活言 lachen　：**根言**　lach、　**不定**　lachen

のように、<形言>、即ち形容詞の「原級」の意でも用いられている[注42]。**表6**（79 頁）の『語学獨(ひとり)案内』（ブリンクリ、明治8(1875)）における《固有形(ありがたち)》も、同様に形容詞の原級を兼ねる。その理由は、19 世紀前半の 50 年間、ヨーロッパ本国の文法から原級の消えた時期があったからである。即ち、原級は比較の階級ではなく、単なる<the simple form>に過ぎないと考えられたのである[注43]。

この形容詞の比較変化をまとめたものが、次頁の**表9**（99 頁）である。柳圃の文法研究の基礎となった Sewel（宝永1(1708)；延享3(1746)；明和3(1766)）と Marin(寛政2(1790))では、原級は<Positivus>（蘭：stellig）として存在するが、日本では徳川 11 代将軍家斉治世の下、寛政の元号が享

表９．和蘭語と英語原典における比較の階級

年号	著者	原級	比較級	最上級
1708	Sewel (蘭語英文典)	Stellig (Positivus)	vergelyking (Comparativus)	overtreffend (Superlativus)
1746	Sewel			
1766	Sewel (英語蘭文典)	Positive	Comparative	Superlative
1776	Peyton (仏語対訳英文典)	Positive	Comparative	Superlative
1790	Marin (蘭語対訳仏文典)			
1795	Murray	positive	comparative	superlative
1801(享和 1)	Locke (蘭語英文典)	――	vergelykend	overtreffend
1806(文化 3)	Weiland (仏語対訳蘭文典)	――	vergrootend	overtreffend
1819(文政 2)	van der Pyl (英語対訳蘭文典)	positive hellend	comparative	superlative
1822(文政 5)	Maatschappij (*Grammatica*)	――	eerst or vergrootend	tweed or overtreffend
1826(文政 9)	Bilderdijk	――	vergelijkend (Comparativus)	overtreffend (Superlativus)
1831(天保 2)	Lulofs	――	vergrootend comparativus	overtreffend superlativus
1836(天保 7)	Wilde	――	vergrootend	overtreffend
1845(弘化 2)	Hamelberg (蘭語英文典)	――	vergelijkend comparatief	overtreffend superlatief
1846(弘化 3)	Maatschappij (*Rudimenta*)	――	vergelijkend	overtreffend
	Weiland (仏語対訳蘭文典)	――	vergrootend	overtreffend
1851(嘉永 4)	Hagoort	――	vergrootend	overtreffend
	Marin (蘭語対訳仏文典)			
1852(嘉永 5)	Murray (蘭訳英文典)	stellend	vergelijkend	overtreffend
1853(嘉永 6)	Beijer			
	Backer	――	vergrootend	overtreffend
	Brill	stellend (grondvorm)	vergrootend	overtreffend
1854(安政 1)	Beek (蘭語英文典)	――	vergrootend	overtreffend
	Pijl / Schuld (蘭語対訳仏文典)			
	Weiland	――	vergrootend	overtreffend
	Beijer	――	vergrootend	overtreffend
1855(安政 2)	Spijkerman	――	vergrootend	overtreffend
	Gerdes (蘭語英文典)			
	van der Maas Jr.	――	vergrootend	overtreffend
	Lloyd (蘭語英文典)	――	vergrootend	overtreffend
	Sandwijk	――	vergrootend	overtreffend
1856(安政 3)	Mulder	stellend	vergrootend	overtreffend
	Kuijper (英)	――	vergrootend	overtreffend
1857 (安政 4)	van Wees	stellend	vergrootend	overtreffend
1861(文久 1)	Murray (英)	positive (the simple word)	comparative	superlative
1862(文久 2)	Noel / Chapsel(仏)			
1866(慶応 2)	Baily (英)	positive	comparative	superlative
1867(慶応 3)	Quackenbos (英)	positive	comparative	superlative
	江戸版英吉利文典 (The Elementary Catechisms)	positive	comparative	superlative
1876(明治 9)	Swinton (英)	positive	comparative	superlative
1907(明治 40)	Valette (獨語蘭文典)	Positiv stellend	Komparativ vergelijkend	Superlativ overtreffend
1913(大正 2)	Valette (英語蘭文典)	Positive stellend	Comparative vergelijkend	Superlative overtreffend

年　号	書　　名	形容詞の名称	比較級の名称	原級	比較級	最上級
(安政期頃)	四格十品弁解 (江馬玄齢)	属詞 附属詞、	比較階	×	比較階	最勝階
安政2(1855)	和蘭文語凡例・前編 (大庭雪斎)	陪辞	−−	×	大級	最大級 最上級
安政3(1856)	挿譯俄蘭磨智科 (小原竹堂)	形容詞	比較之階級	×	為大級	最勝級
	蘭学獨案内 (可野　亮)	形容詞	比較スル階級	×	～er	～est
安政4(1857)	和蘭文典便蒙 (香処閑人)	添名辞、	階級	×	大級	最大級 最上級
慶応2(1866)	洋学須知 (伊東朴斎)	形容詞	−−	×	er ノ階級	～est ノ階級 大階級 最大階級 最階級

表 10. 幕末の蘭文典に見る比較の階級

和に改まった 1801 年、Locke の英文典からそれは姿を消し、以後 50 年原級のない時期が続く。従って、高野長英が<勿以郎度ノ語法解>としてその名を挙げた、日本の蘭学者には馴染み深い P. Weiland(1806(文化3)；1846(弘化3)；1854(安政1))にも、幕末の和蘭語の "*the* Grammar" たる Maatschappij(マートシカッペイ) の二種の文法書 *Grammatica*(1822(文政5)) と *Rudimenta*(1846(弘化3)) にも、原級はないのである[注44]。

それが漸く復活するのは、現調査段階ではペリー来航直前の1852(嘉永5)年、和蘭語に翻訳された L.Murray の英文典においてである。しかし、この時はまだ、他の文法書には原級はない。が、それから 3～4 年を経た 1855～6 年、即ち安政年間に入ると、比較の三階級が再び各書に出揃うようになる[注45]。Weiland も Maatschappij の *Grammatica* も、この原級の消滅した時期の蘭文典である。よって、日本の蘭文典も、この時期の書に依拠して書かれたものは、前頁の**表 10**(100 頁)のようにいずれも原級を持っていないのである[注46]。《根言》という訳語は、幕末に柳川春三によって、このように原級が消滅した時期において、《原級》という用語の代わりとして用いられた。一方、「動詞の根幹部」としての《根言》——年代的に見てその原語は<wortel>あるいは<wortelwoord>であろうかと推測されるが、特定できない——の方は、柳川を経て更に、明治3(1870)年の『格賢勃斯英文典直譯』における<Root>の訳語となって受け継がれたのである。

2.4. 《根言》《不定法》から《原形》《不定詞》へ

現調査段階では、**表 6**(79 頁)の明治17(1884)年『スウキントン氏英語学新式直譯』における《働詞ノ原形》という訳語こそ、現在我が国の英語で用いられている《原形》の始まりである。しかるに、現代英文法の定番たるこの文法用語の、その訳例の少なさはどうであろうか。《原形》という訳語を持つのは、明治3(1870)年『格賢勃斯英文典直譯』以下 114 冊中わずか8例にすぎない。類似の用語を探しても《原働詞》《原動詞》《原語》が数例あるの

みである。先にも触れたが、明治期における＜Root＞の訳語は《根》の付く系統であり、《原形》という訳語は、明治期の英語においては一般化しなかったのであった。**表 13**（112 頁）を見ると、現代ではこの術語を用いない独逸語の方が、当時においてはむしろ好んで《原形》《元形》を用いているようで、現状と逆転している感を抱かせる。

Quackenbos のこの＜Root＞の導入によって、to-Inf.は、結局、短期間ではあったが持っていた動詞の原形としての地位を喪失することになり、Swinton と Nesfield により Mood から脱落する。ここにおいて英語では＜Root＞と to-Inf.が分離し、後者は名詞の一種として理解され、＜Verbal noun＞という名称で呼ばれるようになる。

> 其形態ノ動詞ニ似テ否ラザルモノ二種有リ　一ハ Infinitives 不定詞ト云ヒ一ハ之ヲ Participles 分詞ト云フ　第一ノモノハ全ク名詞ニシテ第二ノモノハ形容詞ニ類スルモノナリ　第一ノモノヲ Verbal noun ト云フ…
>
> （井上歌郎『新式実用英文典講義』後凋閣　明治 31（1898）. 161 頁）

> 本来此種類ノモノハ 動詞ノ一種トシテ Infinitive mood ナルモノサヘ作ラルヽ位ニシテ全ク動詞ト為サレタルモノナリ　然レドモ其性質ハ決シテ動詞ノモノニ非ズ此ノ不定詞ナル名称モ全ク之ヲ動詞ト為セシヨリ造為セラレタルモノニシテ…
>
> （共益商社著・藏版『英文典教科書』明治 29（1896）. 108 頁）

実に、幕末期の和蘭文典や Murray の英文典を知る者をして隔世の感を抱かせずにはおかない Inf.の定義である。しかし、こう言いながらも、Maatschappij（マートシカッペイ）という語の意味を、時を隔てて社名に戴く後者の文典は、119 頁から始まる動詞の活用表の最後に Inf.と Part.を置いているのであるから、伝統文法からの脱却、即ち、Inf.を＜動詞ニ似テ否ラザルモノ＞と考えることの難しさを物語るものである。

だが、ここでひとつ判明したのは、《不定詞》という言葉は、Inf.が Mood から脱落して最早《不定法》ではなくなったことを示す用語だということである。

> 不定詞は数、人称に拘はらず一般に動詞の動作若しくは有様を示し、動詞的名詞とも称すべきものなり。……
>
> （注意）不定詞は Infinitive mood 不定法とて法の一種とするもの多し。
>
> （東京帝国大学文科大学名誉教師　英国王堂シャムブレン著『英文典教科書』第四章、大阪・三木書店、明治 32（1899）.）

現代のドイツ語とフランス語文法の《不定法》は、Inf.がまだ Modus であった時代の残存物なのである。明治の英語学は＜法＞を＜詞＞に変えることによって、この Inf.の質的変化に機敏に対応し得たのであった[注47]。

Onbep. wijs.	Onvolm. verl. tijd.	Verl. deelw.
Abide, wonen,	*abode*, woonde,	*abode*, gewoond.

100 ENGELSCHE

Lijst der Onregelmatige Werkwoorden. *)

Die, welke met een *r* geteekend zijn, kunnen ook regelmatig gebruikt worden.

Onbep. wijs.	Onvolm. verl. tijd.	Verl. deelw.
Abide, wonen,	*abode*, woonde,	*abode*, gewoond.
Arise, opstaan,	*arose*, stond op,	*arisen*, opgestaan.
Awake, ontwaken,	*awoke*, ontwaakte, *r*.	*awaked*, ontwaakt.
Be, zijn,	*was*, was,	*been*, geweest.
Bear, voortbrengen,	*bare*, bragt voort,	*born*, voortgebragt, geboren.
Bear, dragen,	*bore*, droeg,	*borne*, gedragen.
Beat, slaan,	*beat*, sloeg,	*beaten*, *beat*, geslagen.
Begin, beginnen,	*began*, begon,	*begun*, begonnen.
Bend, buigen,	*bent*, boog,	*bent*, gebogen.
Bereave, berooven,	*bereft*, beroofde, *r*.	*bereft*, beroofd, *r*.
Beseech, smeeken,	*besought*, smeekte,	*besought*, gesmeekt.
Bid, bevelen,	*bid*, *bade*, beval,	*bidden*, *bid*, bevolen.
Bind, binden,	*bound*, bond,	*bound*, gebonden.
Bite, bijten,	*bit*, beet,	*bitten*, *bit*, gebeten.
Bleed, bloeden,	*bled*, bloedde.	*bled*, gebloed.
Blow, blazen,	*blew*, blies,	*blown*, geblazen.
Break, breken,	*broke*, brak,	*broken*, gebroken.
Breed, opvoeden,	*bred*, voedde op,	*bred*, opgevoed.
Bring, brengen,	*brought*, bragt,	*brought*, gebragt.
Build, bouwen,	*built*, bouwde,	*built*, gebouwd.
Burst, bersten,	*burst*, borst,	*burst*, geborsten.
Buy, koopen,	*bought*, kocht,	*bought*, gekocht.
Cast, werpen,	*cast*, wierp,	*cast*, geworpen.
Catch, vangen,	*caught*, ving, *r*.	*caught*, gevangen, *r*.
Chide, berispen,	*chid*, berispte,	*chidden*, *chid*, berispt.
Choose, uitkiezen,	*chose*, koos uit,	*chosen*, uitgekozen.
Cleave †), klieven,	*clove*, *cleft*, kloof,	*cleft*, *cloven*, gekloven.

*) Waar twee of meer vormen van het werkwoord worden opgegeven, schijnt de eerstgenoemde als de verkieslijkste te moeten worden aangemerkt.

†) Dit woord, in de beteekenis van *kleven*, *vasthechten*, gebezigd, is regelmatig.

資料 28.

（左）（上）1852年（嘉永5）の Murray **蘭訳本における三要形。** 筆頭は《不定法》で、Murray の《現在》と食い違っている。新旧文法の違いをここに見ることができる。
第二が【不完全過去】（＝現代の「過去」）、第三が《過去分詞》で、この第三番目の名称も Murray の原本と食い違っている。

資料 29.

（下）『モルレイ氏著英吉利小文典』（南雲堂版）の三要形。 維新直前の慶応２～３年頃に翻刻された Murray の英文典である。三要形の筆頭は《現在》のままであるが、同時期の慶応（1867）３年には Quackenbos の＜Root＞が現れている。ところが、過去分詞の箇所には、【完全分詞】と並んで【受動分詞】という名称が付け加えられている。英語は「動詞の基本形」よりも過去分詞の方を気にしたのであろうか。

ABRIDGMENT OF MURRAY'S ENGLISH GRAMMAR

モルレイ氏著

英吉利小文典

東京 南雲堂

3. Such as have the imperfect tense, and perfect participle, different: as,

PRESENT.	IMPERFECT.	PERFECT PART.
arise,	arose,	arisen.
blow,	blew,	blown.

The following list of the irregular verbs will, it is presumed, be found both comprehensive and accurate.

PRESENT.	IMPERFECT.	PERF. or PASS. PART.
abide,	abode,	abode.
am,	was,	been.
arise,	arose,	arisen.
awake,	awoke, R.	awaked.
bear, *to bring forth*,	bare,	born.
bear, *to carry*,	bore,	borne.

六 have.

不　限　法

現在　(to) have (持ツコト)

去過　(to) have had (持チシコト)

分　詞

現在　having (持チ居アル / 持ツ所ノ)

過去　had (持タレタル)

組立　having had (持チシ所ノ)

直　説　法

		現在	半過去
單數	一人稱	I have (我ガ持ツ)	I had (我ガ持チキ)
	二人稱	thou hast (汝ガ持ツ)	thou hadst (汝ガ持チキ)
	三人稱	he has (彼レガ持ツ) (古語ニテハ has ノ代リニ hath ヲ用ヰルコト多シ)	he had (彼レガ持チキ)
複數	一人稱	we have (我等ガ持ツ)	we had (我等ガ持チキ)
	二人稱	you have (汝等ガ持ツ)	you had (汝等ガ持チキ)
	三人稱	they have (彼等ガ持ツ)	they had (彼等ガ持チキ)

		充過去 (現過去分詞ニ直説法ヲ附シタル)	大過去 (半過去分詞ニ直説法ヲ附シタル)
單數	一人稱	I have had (我ガ持チキ)	I had had (我ガ持チキ)
	二人稱	thou hast had (汝ガ持チキ)	thou hadst had (汝ガ持チキ)
	三人稱	he has had (彼ガ持チキ)	he had had (彼ガ持チキ)
複數	一人稱	we have had (我等ガ持チキ)	we had had (我等ガ持チキ)
	二人稱	you have had (汝等ガ持チキ)	you had had (汝等ガ持チキ)
	三人稱	they have had (彼等ガ持チキ)	they had had (彼等ガ持チキ)

		第一未來 (不定詞ノ現在ニ shall ヲ第一人稱ニ will ヲ第二第三人稱ニ附シタル助動詞)	第二未來 (第一未來ニ附シタル)
單數	一人稱	I shall have (我ガ持タントス)	I shall have had (我ガ持タントス)
	二人稱	thou wilt have (汝ガ持タントス)	thou wilt have had (汝ガ持タントス)
	三人稱	he will have (彼レガ持タントス)	he will have had (彼ガ持タントス)

資料 30.

チヤムブレン『英語變格一覧』(明治12[1879])の動詞活用表。 “have”の活用表が《不限法》より始まっているが、<to>が括弧に入れられている。これは、明治26[1893]年『英文典』でも同様である。《第一未来》I shall have の<have>は《不限法現在》として説明されている。《不限法》は前後・同時期の用語と連続性を持っていない。

《直説法》として、《現在》《半過去》《過去》《大過去》《第一未来》《第二未来》の活用が示されている。本書では Tense のことを《時化》と呼んでいる。典型的な三過去時制で、Swinton が翻訳されて Perf.が《過去》から《半過去》に変わってすでに10年が経過しているにも拘らず、明治26[1893]年版でもこの構成は全く変化が無い。チヤムブレンの時制に関しては第二章第三節6．を参照。

六 have.　　不　　限　　法

現在	去過（現在去分詞ニ不限法ヲ前置スルナリ）
(to) have（持ツコト）	(to) have had（持チシコト）

分　　詞

現在	過去	組立（過去分詞ニ現在ヲ前置スルナリ）
having（持チ来アル／持ツ所ヲ）	had（持ツレタル）	having had（持チシ所ヲ）

直　　説　　法

		現在	半過去
單數	一人稱	I have（我ガ持ツ）	I had（我ガ持チキ）
	二人稱	thou hast（汝ガ持ツ）	thou hadst（汝ガ持チキ）
	三人稱	he has（彼レガ持ツ）（古文體ニ has ノ代リニ hath ヲ用ユルコト多シ）	he had（彼レガ持チキ）
複數	一人稱	we have（我等ガ持ツ）	we had（我等ガ持チキ）
	二人稱	you have（汝等ガ持ツ）	you had（汝等ガ持チキ）
	三人稱	they have（彼等ガ持ツ）	they had（彼等ガ持チキ）

		完過去（現在去分詞ニ直説法ヲ前置スルナリ）	大過去（現半過去分詞ニ直説法ヲ前置スルナリ）
單數	一人稱	I have had（我ガ持チキ）	I had had（我ガ持チキ）
	二人稱	thou hast had（汝ガ持チキ）	thou hadst had（汝ガ持チキ）
	三人稱	he has had（彼ガ持チキ）	he had had（彼ガ持チキ）
複數	一人稱	we have had（我等ガ持チキ）	we had had（我等ガ持チキ）
	二人稱	you have had（汝等ガ持チキ）	you had had（汝等ガ持チキ）
	三人稱	they have had（彼等ガ持チキ）	they had had（彼等ガ持チキ）

		第一未來（第一人稱ニ現在ヲ前置シ shall ヲ、第三人稱ニ現在ヲ前置シ will ヲ前置スルナリ。補助動詞ノ第二詞ノ原形ヲ用ユ）	第二未來（現在ヲ前置スルナリ。未來ヲ表ハス）
單數	一人稱	I shall have（我ガ持タントス）	I shall have had（我ガ持タントス）
	二人稱	thou wilt have（汝ガ持タントス）	thou wilt have had（汝ガ持タントス）
	三人稱	he will have（彼レガ持タントス）	he will have had（彼ガ持タントス）

資料 30.

チヤムブレン『英語變格一覧』（明治12[1879]）の動詞活用表。　“have”の活用表が《不限法》より始まっているが、<to>が括弧に入れられている。これは、明治26[1893]年『英文典』でも同様である。《第一未来》I shall have の<have>は《不限法現在》として説明されている。《不限法》は前後・同時期の用語と連続性を持っていない。

《直説法》として、《現在》《半過去》《過去》《大過去》《第一未来》《第二未来》の活用が示されている。本書では Tense のことを《時化》と呼んでいる。典型的な三過去時制で、Swinton が翻訳されて Perf.が《過去》から《半過去》に変わってすでに 10 年が経過しているにも拘らず、明治26[1893]年版でもこの構成は全く変化が無い。チヤムブレンの時制に関しては第二章第三節５．を参照。

夫レ I call ノ換リニ I am calling, I must call ノ換リニ I must be calling, I was called ノ換リニ I was being called 等ノ延語往々用ユル事アリ且有樣働等ノ延續スルヲ云ハンノ時ニノミ用ユベケレドモ本表ニ掲グル變化ノ旨意ト些違而已ナレバ共ニ濫用スル事少カラス但件ノ動詞ノ現在分詞ニ be ナル助動詞ノ適當ナル轉形ヲ前置シテ製スルナリ且表ニ掲グル變化ニ比較セバ延ビタルヲ以テ如斯變化ヲ號シテ組立變化 (Compound Conjugation) ト云フ

夫レ所謂不規則動詞ハ其數多キノミナラズ平常ニ用ユル事モ許多ナレバ左ニ錄スルヲ逐一暗誦セズンバ有ベカラズサテ知覺ニ便ナラシメンガ爲左ニ五種ヲ分ツ

一 不限法、半過去、過去分詞、皆各相異ル

不限法	半過去	過去分詞
arise (昇ル、又ハ蘇生スル)	arose	arisen

資料 31.

（右）チャムブレン『英語變格一覧』(明治 12 (1879)) の不規則動詞の三要形の部分。

筆頭の《不限法》から<to>が消えている。

(註) 表中ノ三人稱單數ハ he ノミニ限ラズ she, it ニモ適用スベシ又主格タル單數名詞ニハ皆之レヲ用フルナリ

(例) she can (彼女ガ能フ)　it can (彼カ能フ)
my friend can (我ガ朋友ガ能フ)

又三人稱複數ハ主格タル複數名詞ニ用フベシ

(例) my friends can (我ガ朋友等ガ能フ)

以下皆之ニ准ズ

(註) 單數二人稱ノ穩當ナラザルヿ人代名詞ノ條ニ云ヘルガ如シ尙ホ 31 丁ヲ見合スベシ

以上ノ五助動詞ハ時法等ノ變化他ノモノヨリ少ナキヲ以テ之レヲ稱シテ不足助動詞又ハ不具助動詞 (Defective Auxiliary Verbs) ト云フ

(六) have

不定法

現在	過去 (過去分詞ニ不限法現在ヲ前置シテ製スルナリ)
[to] have (持ツコト)	[to] have had

分詞

現在	過去	組立 (過去分詞ニ現在分詞ヲ前置シテ製スルナリ)
having (持チ所アル / 持ツ所デ)	had (持タレタル)	having had (持チシ所デ)

助動詞變化表

資料 32.

（左）（下）明治 26年 (1893) のチャムブレンの『英文典』

<to>が括弧に入れられているのは同じだが、名称が《不定法》に変わっている。不規則動詞の三要形では<to>がはずれている（89 頁）。

(一) 不定法、半過去、過去分詞トモ其詞形皆相異ナルモノ

不定法		半過去	過去分詞
arise	(昇ル、又ハ蘇生スル)	arose	arisen
bear	(持ツ、又ハ産フル)	bore	borne

第三節　独逸語における Infinitiv と＜Grundform＞

1.《話法》でない《不定法》

表 11（107 頁）に拠ると、明治の独語学における Inf.の訳語は《不定法》である。そして、日本ではこれが動詞の種種の変化形のもとの形として理解された。ところが、**表 26**（334 頁）の独逸語原典では Bauer(1830) 以降 Inf.が Modus から脱落して《話法》でなくなり、**表 12**（111 頁）で Inf.を三要形の筆頭に用いている文典も極めて少ないのである。

蘭語学の時代では、品詞でなくなった Deelwoord（Part.）とこの Inf.とを併せて＜Onbepaalde wijs＞とすることはあっても、＜Onbepaalde wijs＞自体が Modus でなくなるというようなことはなかった。明治の英語学でも、Inf.欠落の最初は明治 17年の斎藤秀三郎訳『スウキントン氏英語学新式直譯』であり、日本の英文典から一般に《不定法》が消え始めるのは漸く明治 20 年代になってからである。

これに対して独逸語では、はやくもその半世紀前頃から Inf.が Modus でなくなるのがむしろ普通になっていく。Oelinger(1517) から Adelung(1782) までは Inf.は確かに Modus に所属しているが、19 世紀の Schmitthenner（1828）になると、Inf.は＜Nennform＞[名称形]である。それは＜Mittelwort＞[分詞]と共に＜Nennform＞の構成要素の一員とされ、Inf.はその＜Hauptform＞[名詞形]、＜Mittelwort＞は＜Beiform＞[形容詞形] と呼ばれている。以後、独逸語の Modus は、和蘭語の四法、英語の五法に対して、基本的には Ind., Imp., Konj.の三法しかなく、Inf.はずっと Modus 外であり続けることになる[注48]。

従って、明治期の日本に導入された独文典では、Inf.と Part.はその最初から和蘭語とも英語とも違う扱われ方をされることになった。即ち《副法》である。

全編独逸語で書かれた平塚定二郎編『獨逸文法楷梯』(前篇；明治 16)は、前者に対して＜Hauptmodus＞、後者に対して＜Nebenmodus＞の用語を充て、明治 19年、これを和訳した『獨逸文法楷梯説明』において、両者をそれぞれ《主法》・《副法》と訳している[注49]。

○ Modi oder Aussageweise der Zeitwörter
話法　または　　動詞の 叙述法

3. Hauptmodi
主 法

1) Indicativ od.der Modus der Wirklichkeit
直説法　　または　　現実 の 話法

表 11. 明治期の独文典における Modus の訳語

年号	書名	Modus	Indikativ	Konjunktiv	Konditionalis	Imperativ	その他
1846(弘化 3)	Bohnhoff / Zoon の蘭獨辞書						
明治初年(?)	獨逸初学必携（全）						
1871(明治 4)	獨逸学入門						
	普語箋（上・下）						
1872(明治 5)	カドリー氏原著獨逸文典直譯（上・二）						
	獨逸語学初歩（初歩）[カドリー氏文典直譯]						
	獨逸作文階梯（巻一）				疑問法（約束法）		
1880（明治 13）	セーフェル氏文典直譯 [多賀貫一郎]	説話法（古式）	1.直説法 現在法	2.綴話法 接続法 可成法 （疑問法）		3.命令法	
		（新式）	1.直説法	2.綴話法 接続法 可成法 （疑問法）	3.約束法 希望法 期約法	4.命令法	
1882（明治 15）	獨逸作文要略（第一之部）						
1883（明治 16）	セーフェル氏原著獨逸文典直譯（文章論）[小山篤叙]	話法	1.直接法	2.接続法	3.約束法（希望法）	4.命令法	5.不定法 6.分詞
	獨逸文法楷梯（前篇）[平塚定二郎]	Aussage-weise Modus	1.Indicativ der Modus der Wirklichkeit	2.Conjunctiv der Modus der Möglichkeit	Conditionalis Ⅰ、Ⅱ Bedingungsform	3.Imperativ der Modus des Befehls	Nebenmodi 1.Particip (Eigenschaftsform) 2.Infinitiv (Dingform)
1884（明治 17）	獨逸文法獨稽古				疑問法		
	獨逸文法楷梯（後篇：文章学）[平塚定二郎]	発言法	1.確固タルコト(Wirklichkeit)ヲ発現スルノ法	2.為シ得ベキコト(die Möglichkeit)ヲ発現スルノ法		3.命令法 必要ナルコト(die Notwendigkeit)ヲ発現スルノ法	
1885（明治 18）	シェーフェル氏獨逸文法獨学 [平塚定二郎]	説話法（旧説）	1.直説法 表真法	2.接続法		3.命令法	
		（新説）	1.直説法	2.接続法	3.約束法 希望法	4.命令法	
1886（明治 19）	挿譯訓解獨逸文典指針（セーフェル氏）[的場素一]						分詞法
	獨逸文法楷梯説明（前篇之部）[平塚定二郎]	法	1.直説法	2.接続法	約束法（第一、第二）	3.命令法	副法 2 ヶ 1.分詞(形容詞状ノ動詞) 2.不定詞(実名詞状ノ動詞)
	邦語獨逸文典（第一篇）						
1887（明治 20	獨逸学方針（完）	発話法	主 法 3 ヶ				4.不定法 5.分詞
			1.直説法	2.接続法		3.命令法	
	獨文組立法	発言法	主 法 3 ヶ				副法
			1.直説法	2.接続法	約束法（第一、第二）	3.命令法	1.分詞(形容詞状ノ動詞) 2.不定法(実名詞状ノ動詞)

（表 11－1）

年　号	書　名	Modus	Indikativ	Konjunktiv	Konditionalis	Imperativ	その他
1888（明治 21）	英獨両語雙学自在（全）	Mood	1.Ind.	2.Subj.		4.Imp.	3.Potential 5.Inf. 6.Part
	挿譯注釈シェーフェル氏獨逸文典（後編）［馬島　珪］	説話法（旧説）	1.直説法 直接法 表真法	2.接続法		3.命令法	
		（新説）	1.直接法	2.接続法 （可成法）	3.約束法 希望法 冀望法	4.命令法	
1889（明治 22）	改正増補　獨逸小文典						
1890（明治 23）	改正増補　獨逸小文典譯解						
1891（明治 24）	獨逸学捷径（全）	——	直説法 直接法	接続法 （仮定法）	約束法 （第一、第二）		
1894（明治 27）	獨逸文法教科書（全）	説話法	1.直説法 直接法	2.可能法 接続法		3.命令法	
	シェーフェル文典解釈（上下）　［嶋約　翰］	話方（従来ノ所見）	1.直説法 直接法	2.接続法		3.命令法	
		（新シキ所見）	1.直説法 直接法	2.接続法	3.約束法 希望法　条件法	4.命令法	
	獨逸文典（詞論）	語法	1.直説法 直接法 顕示法	2.接続法 疑示法 不定語法	3.約束法 希望法	4.命令法	
1895（明治 28）	獨逸作文の枝折						
1897（明治 30）	新撰獨修　獨逸文法指針						
	三谷獨逸文典（詞学・文章学）	説話法	1.直接法	2.接続法	約束法	3.命令法	
	獨逸作文錦嚢（完）	説話法	1.直説法	2.可能法 接続法		3.命令法	
	獨逸語学階梯案内	Modus	Ind.	Konj.		Imp.	
1898（明治 31）	新編　獨逸語獨修	——	1.叙事法 （直説法）	2.仮定法	3.許可断法	4.命令法	
	新式　獨逸文法詳解	説話法	1.直説法	2.接続法	3.約束法	4.命令法	
1899（明治 32）	実用獨逸語学	——	直説法	可能法			
1900（明治 33）	和文獨譯　獨逸作文獨修						
	獨逸作文早わかり（第一）						
901（明治 34）	獨逸文法詳解	説話形	1.直接法	2.接続法		3.命令法	
	簡明獨逸文典	——		可能法		命令法	

（表 11－2）

年号	書名	Modus	Indikativ	Konjunktiv	Konditionalis	Imperativ	その他
1901（明治34）	邦語獨逸文典	話法	1.直説法	2.接続法	3.約束法	4.命令法	
	和文獨譯練習	——	直説法	可能法		命令法	
	高等獨逸文法析義（前編一）						
1903（明治36）	獨逸語獨修書	説話法	1.直接法	2.接続法 第一列(Präsensform) 第二列(Präteritalform)	4.仮設法 仮定法 （第一、第二）	3.命令法	
	受験応用　獨逸作文詳解						
	獨逸文法屈曲変化一覧表	Modus	1.Ind.	2.Konj.	3.Kond.	4.Imp.	
	初学自修　獨逸語速成	——	1.直説法 直接法	2.添句法	(3.事情法)		事情法は「時」の一種
	獨逸作文教科書(前)			接続法			
1904（明治37）	獨逸文法詞学詳論	説話法	1.直説法	2.可能法	約束法	3.命令法	
	日本学生用　実用獨逸文法書	説話法	1.直説法 直接法 確定法	2.可能法 接続法		3.命令法	副説話法 1.不定法 2.分詞
	新撰　獨逸文典問答	説話法	1.直説法	2.可能法 接続法	3.約束法	4.命令法	
1905（明治38）	和文獨譯之基礎	話法	直説法 直接法	接続法	(約束法)	命令法	約束法は「時」でもある
	獨逸文章学	——	1.直説法 直接法	2.接続法 現在形式 過去形式		3.命令法	
	獨逸語必携(第一輯)						
	獨逸語学獨（ひとり）案内				事情法		
1907（明治40）	獨逸文法講義	——	1.直説法	2.附属法 接続法　仮定法	條件法 (現在・過去)	3.命令法	
	実用獨逸文典(上下)	話法	1.直接法	2.接続法	約束法 （第一、第二）	4.命令法	
	獨逸語獨（ひとり）案内		1.直説法 直接法	2.添句法	(3.事情法)	4.命令法	事情法は「時」の一種
	和文獨譯法						
1909（明治42）	系統的獨逸語学（第一巻）	説話形					
	獨逸文法要綱（前編）	説話法	1.直説法	2.接続法	4.約束法	3.命令法	
1910（明治43）	獨逸新文典（上中下）	説話法	1.直説法 実際法	2.可能法 接続法	約束法 仮定法	3.命令法	
	獨逸文法原理	話態	1.叙実態	2.可能態		3.命令態	

（表 11－3）

年　号	書　　名	Modus	Indikativ	Konjunktiv	Konditionalis	Imperativ	その他
1913（大正２）	獨修用教科用　獨逸語入門	法	1.直説法	2.可能法	3.約束法	4.命令法	
1916（大正５）	獨逸文法辞典		1.直接法	2.接続法	3.約束法 （第一、第二）	4.命令法	
1919（大正８）	獨逸語教科書（第一輯）						
1924（大正 13）	粕谷獨逸自修文典	説話法	直説法	可能法		命令法	
1931（昭和６）	自修新ドイツ文典	話法	1.直説法	3.接続法　又ハ　可能法 （.約束法　又ハ　条件法）		2.命令法	
1932（昭和７）	新ドイツ語文法教程	話法	1.直接法	2.接続法 （間接法）　（可能法）	約束話法 非現実話法　条件法	3.命令法	
1968（昭和 43）	改訂ドイツ広文典	話法	1.直接法	2.接続法	4.条件法	3.命令法	

（表 11－４）

表 12. 独逸語原典における動詞の三基本形

年　号	著　者	三　基　本　形		
1574(信長の頃)	Oelinger	praesens 【活用表の見出し語は Inf.Praes.】	praeteritum imperfektum	Participium praeterite tempus
1618(三代家光治世)	Kromayer	Praesens *Ich liebe*	Imperfectum *Ich liebte*	Perfectum *Ich habe geliebet*
1641(和蘭人出島に)	Gueintz	gegenwärtige Zeit *Ich liebe*	fastvergangene Zeit *Ich liebte*	vergangene Zeit *Ich habe geliebt*
1672(四代家綱治世)	Pudor	*Ich bin*	――	――
1754(九代家重治世)	Aichinger			
1762(平賀源内の頃)	Gottsched	die erste Person der gegenwärtigen Zeit (一人称現在)	die jüngstvergangene Zeit	die völlig vergangene Zeit
1782(天明 2)	Adelung	Infinitiv(?)	Imperfectum	1.Participium präteriti 2. Participium vergangene Zeit
1828(文政 11)	Schmitthenner			
1830(天保 1)	Bauer			
1838(天保 9)	Heyse(第 5 版)	Präsens *Ich gebe*	Präteritum *Ich gab*	das zweite Particip *gegeben*
		【動詞活用表の構成】 Infinitiv (Präs. / Imp.)	Präteritum (Ind. und Conj.)	Particip
1864(元治 1)	Becker			
1870(明治 3)	Gurke	Präsens	Imperfectum	Perfect Particip
1871(明治 4)	Adler (英語独文典)	Infinitive	Imperfect	Past participle
1878(明治 11)	Heyse(第 23 版)	Präsens *Ich gebe*	Präteritum *Ich gab*	das zweite Particip *gegeben*
		【動詞活用表の構成】 Infinitiv (Präs. / Imp.)	Präteritum (Ind. und Conj.)	Particip
	Kaderly	Grundform(=Inf.)	Imperfectum	Participium präteritum
1882(明治 15)	Schäfer	*denken*	*dachte*	*gedacht*
1883(明治 16)	Lehmann	Gegenwart	Mitvergangenheit	Mittelwort der Vergangenheit
1885(明治 18)	Wilmanns	*verderben*	*verdarb*	*verdorben*
1886(明治 19)	Engelien (Ⅱ.Teil)	Präsens	Imperfect	Mittelwort
1903(明治 36)	Lyon und Polack	Gegenwart	Mitvergangenheit	zweites Mittelwort
? (購入日：昭和 7)	Hugo (英語独文典)	Infinitive	Past Tense	Past participle

表 13. 日本の英・独文典における《原形》

年号	著者	原形		変化形	
		独逸語	英語	独逸語	英語
1871(明治4)	洋(英)学階梯				定動詞
1883(明治16)	克屈文典直譯(上下)				定働詞
1884(明治17)	獨逸文法階梯(後篇・文章学) [平塚定二郎]	Aussagewort 動詞単形 動詞ノ称数人称ヲ表ハス所ノ単形			
	スウヰントン氏英語学新式直譯 [斎藤秀三郎]		働詞ノ原形		
1886(明治19)	獨逸文法階梯説明(前篇之部) [平塚定二郎]	現在不定法(=原形)			
	文法詳解ブラウン氏英文典釈義 [澤田重遠]		動詞ノ原形		
1887(明治20)	獨逸学方針(完)	現在不定法(=原形)			
	イングリッシ文法主眼				定法動詞 示定限動詞
	和解纂註英文軌範(完)		(原詞)		定動詞
1888(明治21)	クアツケンボス氏英文典獨案内 [戸川秀次郎]				定働詞
	クワツケンボス氏小文典獨案内 [梅木正衛]				定働詞
	須因頓氏大文典解釈 [田中達三郎]				定動詞
1889(明治22)	和譯英小文典(完)				有限動辞
	須因頓氏大文典講義 [平井広五郎]				定法働詞
1891(明治24)	獨逸学捷径(全)	未定働詞		何人称ノ単複数変化	
	斯因頓大文典講義(下) [山形 閑]				限定サルゝ動詞
1892(明治25)	簡明英文典				finite verb
1894(明治27)	獨逸文法教科書(全)	不定法			
	教科書獨修用 新英語学		(原働詞)		
	実験英文典教科書		動詞ノ原形 原形		
1896(明治29)	英文典問答(全)		(原働詞)		
1897(明治30)	新撰獨修 獨逸文法指針	不定法現在 (=働詞ノ原形)			
1898(明治31)	新編 中等英文典(前・下篇)				定働詞
1899(明治32)	教科摘要 新式英語学獨修(一名六ヶ月間達成)		(原働詞)		
	邦文涅氏英文典 [内海弘蔵]				定働詞 定限働詞
1900(明治33)	意解挿入ねすふいーるど英文典第二獨案内 [栗野忠雄]				定動詞
	ネスフ井ルド氏英文典巻弐直譯註解 [畔田 到]				定限動詞
	英語全課卒業書				定働詞
	子スフィールド氏第三英文典講義録 [奈倉次郎]				定動詞
	英文典初歩[斎藤秀三郎]		Root-form 働詞ノ原形		有限働詞
1902(明治35)	英文典術語集				定動詞
1904(明治37)	文法会話作文 英語新編		原形 (原働詞)		
	英文法講義		働詞の原形		
1906(明治39)	英文典ダイヤグラム				有限動詞
	英語文法品詞論				Finite verb
1907(明治40)	英語学捷径				Finite verb
	獨逸文法講義	不定法			
1908(明治41)	中学英文法講義		働詞ノ原形		
1910(明治43)	獨逸文法原理	作用言ノ不定形 現在持続形ノ不定形 作用言ノ原形		作用言ノ連主形	
1913(大正2)	教科用獨修用 獨逸語入門	不定法現在 ※「原形」は三要形の意			

(表 13－1)

年号	著者	原形		変化形	
		独逸語	英語	独逸語	英語
1916（大正5）	獨逸文法辞典	現在不定法 （＝動詞の根本形）			
1924（大正13）	粕谷獨逸自修文典	元形＝不定法		定動詞	
1931（昭和6）	自修新ドイツ文典	不定形		定動詞	
1932（昭和7）	新ドイツ語文法教程	不定形 不定法		定形 定形動詞	
1968（昭和43）	改訂ドイツ広文典	現在不定詞 名詞形			

（表13－2）

2) Conjunctiv od.der Modus der Möglichkeit,Ungewißheit,Vorstellung
接続法　　可能・不確実・想像の話法
3) Imperativ od.Modus des Befehls.
命令法　　命令の話法

Außerdem giebt es noch zwei Nebenmodi.
更に、　まだふたつの《副法》がある
1) das Particip (Eigenschaftsform)
分詞　　形容詞形
a. Das Particip der Gegenwart (oder das erste Particip)
現在の分詞　　または　　第一分詞
b. Das Particip der Vergangenheit (oder das zweite Particip)
過去の分詞　　第二分詞
2) der Infinitiv (Dingform)
不定法　　名詞形
a. der Infinitiv der Gegenwart
現在の不定法
b. der Infinitiv der Vergangenheit
過去の不定法
Häufig wird "zu" dem Infinitiv hinzugefügt.
不定法には、しばしば zu が付けられる

(『獨逸文法楷梯』前篇§11　[和訳は筆者])

表 11（107 頁）で、多賀貫一郎訳『セーフェル氏文典直譯』(明治13(1880)) はあたかも訳語の見本市のような観を呈しているが、そこに現れている《名称法》《名乗法》——恐らく「なのりほう」と読んだか——が、羅典語の術語 Infinitivus の独逸語訳＜Nennform＞に対する新しい日本語の訳語である。独逸語ではいち早く Inf.が Modus でなくなったのに、明治期の訳語が、英語のように《不定詞》（**表 11** では一例しかない）に替わらず《不定法》のままなのは、この《副法》の存在が影響したのかも知れない。

注意第一．形作(かたちつくり)夫レハ動詞若シモ夫レカ名付ケラルゝトキニ持ツ所ノ《形作》夫レヲ人ガ夫レ故ニ又名乗法ト名ツクル所ノ《形作》カ彼レノ意味ノ普通ノワケデ（彼カ羅甸ニ於テ不定法委シク云ヘバ不定ナル説話法ト名ツケラルゝハ夫レナリ）説話法トシテ経験サレ能ワヌ」彼レカ或ハ主言或ハ適言トシテ立ツ，夫レ故ニ名詞ノ本体ヲ持ツ故ニ我等ガ彼レヲ不定法ト名ツク

Anmerkung 1.　Die Form, welche das Zeitwort hat, wenn es bloß genannt wird, die man deshalb auch Nennform nennt, kann wegen der Allgemeinheit ihrer Bedeutung (weshalb sie auch im Lateinischen "modus infinitivus", d.i. "unbegrenzte Redeweise" genannt wird) nicht als Redeweise betrachtet werden. Weil sie entweder als Subjekt oder Objekt steht, also das Wesen eines Dingwortes hat, so nennen wir sie Dingform.　(§28)

（ただ単に［「〇〇する」というその動作の］名前だけを言う場合の動詞の形は、それ故にまた「名称形」＜Nennform＞とも呼ばれ、その意味の「一般性」——これが為にラテ

ン語でも“modus infinitivus”、即ち「非限定法」と言われる――の故に話法とは見做されない。何故なら、この形は主語か目的語になるので、その本質は名詞＜Dingwort＞のそれだからである。よって、我々はこれを「名詞形」＜Dingform＞と呼ぶのである）

ところが、第28節におけるこのような説明の後で次のような第68節の記述を見ると、人はInf.とPart.をやはりModusの一種かと思わないわけにはいかないであろう。《副法》の所以である［和訳は筆者］。

Eine Thätigkeit kann also dargestellt werden als：
行為はまた以下のようなものとして表わされる。即ち、
a. wirklich …… Indikativ
現実のものとして
b. nicht wirklich
現実でないものとして
aa. möglich
実際になし得ることとして
bb. wirklich angenommen
現実であると仮定して
} Konjunktiv { im engeren Sinne；als
狭義の 接続法
Optativ und Konditionalis
即ち 要求話法 と 非現実話法
cc. notwendig …… Imperativ
する必要のあることとして
c. Substantiv …… Infinitiv
名詞として
d. Adjektiv …… Partizipium
形容詞として

このように、明治の最初からすでにModusでなくなっていた独逸語のInf.であるのに、ところが、明治期の独語学は、訳語を英語の《不定詞》のように改めることもなく、保守的にも《不定法》を用い続けたのであった。

2. Inf.と＜Grundform（グルントゥ・フォルム）＞

では、こうして早々とModusではなくなった独逸語のInf.は、動詞の「原形」としての役割はどの程度担ったのであろうか。

表12（111頁）は、原書における動詞の三基本形を比較したものである。独逸語においても、英語と同様Inf.とPräs.の双方が動詞変化の基本形として用いられている。しかし、ここでも英語同様、従来の文法に忠実にPräs.を用いるほうが圧倒的に多い。1800年代に入ると、確かにInf.が三基本形の筆頭に挙げられるようにはなる。しかし、そのInf.の定義が問題である。Inf.は動詞に本来備わっている叙述（aussagen）の力を持たない＜Nennform＞［名詞形］としてModusから外されており[注50]、Inf.を動詞活用の原形として把握する傾向は、独逸語原典では決して高いとは言えないのである。

表 12（111 頁）の Kaderly(1878) の Inf.も Modus ではない。しかも彼は、Inf.を＜Grundform＞と明記している。

> Die einfache Formen der regelmäßigen Zeitwörter werden von Grundform (Infinitiv) des Zeitwortes gebildet, welche sich immer auf e n, n endigt....
> 規則動詞の基本形は常に -en か -n の語尾を持つ動詞の原形（不定法）から作られる。（§107）

この＜Grundform＞は文字通り原形であるが、しかし、Kaderly は更に＜Grundform der Vergangenheit＞[過去の原形] と＜Grundform des Zukunft＞[未来の原形] というふたつの副次的な＜Grundform＞を認めている（§108）。つまり、和蘭文法において Brill(1855) の＜grondvorm＞が変化詞全般の原形であったように、Kaderly の＜Grundform＞は現代文法の動詞の《原形》よりもその用途が広い。

ところが、**表 13**（112 頁）を見ると、明治期の日本人の著した独文典では、しばしば Inf.が、動詞の名詞形であると同時に動詞活用の基本形とも見做されている。しかも、現在の英語とまったく同じ《原形》という用語が、副称ながらも用いられているのである。

> 不定法ハ働詞ノ意ヲ顕ハスニ実名詞ノ形ヲ以テス而其形ハ働詞ヲ種々ニ変化スルノ原形ナリ　（『獨逸学方針』完、明治 20. 136 頁）

> …それから前に述べた bin, bist, hast, habt 等が夫々 sein, haben といふ形から出て居るやうに独逸語の動詞には変化した形の外に皆元形があるのであります。本課題の Schläft, siest, liebe, schreibst の如きも 夫々 schlafen, sehen, lieben, schreiben といふ元形を持ってゐるのであります。
> かやうに動詞変化の元となってゐる動詞の元形を文法上「不定詞」と申します。
> （『獨逸語獨修文典』大正 13、44 頁）

このように、明治期の独文典は、不定法＝原形という理解を明確に示しており、副称ではあるが、英語と同じ用語を持っているのである。

3. Bauer と Heyseの＜Grundform＞

それでは、Kaderly の文典に登場した、現代の《原形》より用途の広い＜Grundform＞は一体どのようなものであるか。

表 12（111 頁）収載の原典では Bauer（1830）と Heyse第 5 版（1838）が＜Grundform＞という術語を用いている。後者をわざわざ「第 5 版」と断るのは、父親の初版（1814）

――これは Adelung と並ぶ伝統的規範文法の双璧である――を息子 Karl が当時流行の歴史比較言語学的方法論に従って全編にわたって改定を施したため、内容が一変しているからである。

言語学は、J. Grimm の *Deutsche Grammatik* 第一巻が世に出た1819(文政2)年を以って、歴史比較言語学の時代に入る。19 世紀初めの 40 年は、古代オリエント諸語のいくつかが解読されていく熱気の中、Wilhelm von Humboldt の言語哲学と、この J. Grimm の歴史比較文法を支柱に据えた言語研究が、Karl W. L. Heyse(ハイゼ)をして "gewaltig"(ゲヴァルティッヒ) [劇的] と言わしめたほどの急激な展開を見せ、その中心思想が、"organisch"(オルガーニッシュ) [有機的]という、言語を生物学的生成・発展の相のもとに捉えるというものであった注51。亭々たる大樹も一粒の種子から育つ。同様に多彩な語形変化は「ただひとつの元の形」から発するものである。

Bauer と Karl Heyse 以降の Inf.と＜Grundform＞の背後には、この新潮流の淘淘たる流れがある。まず Bauer であるが、彼は、名詞・形容詞・動詞の＜Grundform＞に言及し、動詞に関しては、＜Infinitiv (,z.B.lieben, grünen) ist die Grundform des deutschen Verbums oder das Zeitwort selbst＞[Inf. はドイツ語の動詞の基本形である] と言う注52。

Heyse 第 5 版 (1838(天保9)) もまた、動詞のこの＜die reine Grundform＞[純粋基本形]を Inf. とする。彼は名詞・形容詞・動詞についてこの＜die reine Grundform＞を認め、＜die abgeleitete Beziehungsform＞[これから派生する種種の活用形] に対置させている注53。

両者の＜Grundform＞の共通点は、これが動詞のみならず、名詞・形容詞にも適応されることである。日本の独語学では、前述の Kaderly の直訳本である明治5(1872)年の『カドリー氏原著獨逸文典直譯』で、名詞の主格が＜Grundform＞――《根原ノ形》と呼ばれている。これは和蘭語においても類似例を持ち、第一節にて述べたように、Brill(1853(嘉永6))の＜grondvorm＞は変化詞全般の原形であった。また Mulder(1856(安政3)) の＜grondvorm＞と＜betrekkingsvorm＞(§94)は、Heyse の＜die reine Grundform＞と＜die abgeleitete Beziehungsform＞に対応する考え方である。ここに到って、これら和蘭語の例が 19 世紀言語学の新潮流の中での動きだったことにようやく思い至る。

ただし、三要形に関しては、Bauer がその筆頭を何に求めているかは不明である。Heyse のそれは Präsens—Präteritum—das zweite Particip [第二分詞＝過去分詞] で、その筆頭は Inf.ではなく、伝統文法に従い Präs.である。が、その一方で、不規則動詞活用表での主要部表示は Inf.—Prät.—Part.としており、この二者の筆頭が一致しない。英語では Swinton がそうである。

Heyse 第 5 版 において注目すべきは、この「原形」は飽くまでも＜grammatisch(グラマーティッシュ)＞なものであって、＜etymologische Stammform(シュタンム・フォルム)＞と間違わないように、という注釈である。

Anmerk. Man verwechsele nicht diese grammatische Grundform des Wortes mit der etymologischen Stammform oder dem Stamm desselben. ....Der etymologische Stamm der Verba ferner ist nicht der Infinitiv, sondern in den

starken Verben meistens die einsilbige Form der Vergangenheit (z.B. brach, band), in andern der Imperativ(z.B. leb,lieb(e) ec. ——Verschieden vom Stamm ist noch, wenigstens dem Begriffe nach, die Wurzel.... (1. Band .293-294 頁)

この文法上の＜Grundform＞を、その単語の語源的＜Stammform＞ないしは＜Stamm＞と取り違えないように。 ……更に、動詞の語源的＜Stamm＞というのは Inf.ではなく、不規則動詞においては、大抵の場合 brach（brechen の過去）, band (binden の過去）のような一音節の過去形であり、その他の動詞の場合は leb（leben の命令形）,lieb(e)（lieben の命令形）のような命令形である。 ——なお＜Wurzel＞［語根］は、少なくとも概念的には＜Stamm＞と異なるものである。

Aussagen（陳述）という動詞の力を欠くが故に Modus から外された Inf.が動詞変化の原形とされたのは、このように＜grammatisch＞な理由からだったのである。これを派生語の基礎語である＜Stammform＞と混同しないよう Karl Heyse は言うのであるが、＜Grundform＞と＜Stammform＞がこのような関係であるならば、Swinton の＜Root word＞と＜Primitive word＞、Sewel の蘭語英文典における＜Primitives or Original＞(1708/1766. 44 頁；1749. 35 頁）はいずれも＜Stamm＞の意味である。そして、第一節で取り上げた馬場佐十郎の＜本詞＞は、正しくこのような性質のものであった。

また、上述の Kaderly が、＜Grundform＞とは別に＜Stammform＞という用語を分離・非分離動詞の基礎動詞の意味で用いている理由も肯かれる。例えば、geben という基礎動詞から angeben, aufgeben, ausgeben, ergeben, umgeben, vergeben 等の様々な分離・非分離動詞が形成される。これらの複合動詞は確かに geben の派生形で、この場合の geben は、まさしくこれらの諸動詞の＜Stamm＞である。和蘭語にもこの並行例が見出され、Lulofs(1831)の＜primitief werkwoord＞(§97)は、Kaderly の＜Stammform＞と同じ分離・非分離動詞の基礎動詞のことである。

明治の独語学においても、類似の例を見出すことは難しくない。明治30年『三谷獨逸文典』の《原動詞》は、Kaderly の＜Stammform＞、Lulofs の＜primitief werkwoord＞と同じ使われ方がされている。これに対し、動詞の三要形の筆頭は《不定法》である。

一方、三谷の《原形》は、『和蘭語法解』の《言ノ本質》と同じく名詞の格変化の基本形のことで、男性単数一格を指している。＜…而して単数第一格に名詞の来るときには毫も其名詞変ずる事なし 故に名詞が単数の第一格に於て顕す所の形を原形 (Stamm) と名称す＞と言っているように、この《原形》は、動詞ではなく名詞の基本形のことである。(この人は、動詞の法、時制、活用等の用語を見るに、Heyseを参照しているように思われる。)

明治31年『新編獨逸語獨修』の《原働詞》は《組立働詞》(＝《分離》・《不分離》動詞)の、明治36年『獨逸語獨修書』の《原動詞》も、《集合動詞》(＝《分離》・《非分離》動詞)の基礎動詞のことである。

表 14. 明治期の独文典における三基本形の構成要素

年　号	書　　名	三基本形の名称	構　成　要　素
明治 19(1886)	獨逸文法階梯説明 (前篇之部)	働詞ノ幹ノ時	現在 ・半過去 ・過去分詞
明治 20(1887)	獨文組立法	動詞ノ主時	現在 ・半過去 ・過去分詞
明治 21(1889)	英獨両語雙学自在	-------	Inf. ・Imperf. ・Past Part.
明治 24(1891)	獨逸学捷径(全)	-------	未定働詞 ・半過去 ・過去分詞
明治 27(1894)	獨逸文法教科書(全)	Grundform 動詞ノ変化本形	(Inf.) ・Präs. ・Imperf. ・ Part. (不定法) ・現在 ・ 過 去 ・ 過去分詞
明治 27～28 (1894～95)	獨逸文典 (詞論・文論)	-------	不定法 ・単数一人称ノ過去 ・過去分詞
明治 30(1897)	新撰獨修　獨逸文法指針	-------	不定法 ・過去 ・過去分詞
明治 34(1901)	邦語獨逸文典	Conjugationsform 主要ナル配合ノ時	Präs. Ind. ・Imperf. ・Part. Perf. 直説法現在 ・半過去 ・過去分詞
	獨逸文法詳解	Averbo des Zeitworts 働詞ノ変化本形	Inf. ・Präs. ・Imperf. ・Part. 不定法 ・現在 ・半過去 ・過去分詞
	簡明獨逸文典	Grundform 変化本体	Inf. ・Imperf. ・Part. 不定法 ・過去 ・過去分詞
明治 37(1904)	日本学生用　実用獨逸文法書	Averbo 三態に於ける変化	現在 ・過去 ・過去分詞
	新撰獨逸文典問答	Averbo Grundformen der Conjugation 動詞の変化本形	Präs. ・Imperf. ・Zweites Part. 動詞一人称 ・過去 ・過去分詞
	獨逸文法詞学詳論	Grundform Stammform 変化ノ基本形	Inf. ・Imperf ・Part. Perf. der Verg. (Zweites Part.) 不定法 ・半過去 ・過去分詞 (又ハ第二分詞)
明治 40(1907)	実用獨逸文典	------	Inf. ・Imperf. ・Part. Perf. 不定法 ・ × ・過去分詞
	獨逸文法講義	------	不定法 ・過去 ・過去分詞
明治 42(1909)	獨逸文法要綱(前編)	------	Inf. ・Imperf. ・Part.
明治 43(1910)	系統的獨逸語学 (第一巻)	------	不定形 ・継続過去 ・完成分詞
	獨逸文法原理	Grundformen des Verbums 作用言ノ連主形	Inf. ・Präteritum ・Zweites Part. 不定形 ・過去持続体 ・第二続体形
	獨逸新文典	Stammform Grundform 変化ノ基本形	現在 ・半過去 ・過去分詞/ (Imperfekt) 第二分詞 [<働詞ノ弱変化>の箇所で] 不定法 ・半過去 ・過去分詞
大正 2 (1913)	獨修用教科用　獨逸語入門	動詞活用の三原形	不定法現在 ・過去 ・過去分詞
大正 13(1924)	粕谷獨逸自修文典	動詞の変化本形	現在 ・過去 ・過去分詞
昭和 6 (1930)	自修新ドイツ文典	Grundformen der Konjugation drei Hauptformen 動詞の変化原形 三要形	不定法 ・過去 ・過去分詞

要するに、独逸語で《原形》《原動詞》等という時、それは、動詞の活用形の原形ではなく、むしろ＜Stamm＞を意味する傾向が強いのであり、対する動詞の活用形の原形は《不定法》でほぼ一貫しているのである。これは、＜grammatische Grundform＞と＜etymologische Stammform＞という上述の原書の新学説に極めて忠実な態度であり、むしろ**表 11**（107 頁）の原書の方が、三要形の筆頭を Inf.にせず Präs. にするというねじれ現象を見せていることになる。

4．《三要形》としての＜Grundformen＞

ところが、明治期の独文典では、この＜Grundform＞という用語は確かに＜Grundform des Zeitwortes＞[動詞の原形] の意で使われてはいるのだが、それは、Bauer と Heyse（ハイゼ）の＜変化詞全体の基本形＞でも現代英文法の《原形》でもなく、動詞の三基本形――当時の訳語では《動詞の変化本形》《三要形》のように呼ばれている――を指すのが普通なのである。例えば**表 12**（111 頁）の Gurke（明治3 1870）、Lehmann（明治16 1883）及び Engelien（明治19 1886）が、**表 13**（112 頁）では『獨逸文法教科書 全』(大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎合著、明治27 1894)、『獨修用教科用 獨逸語入門』(高木敏雄編、大正2 1913)、『獨逸自修文典』(粕谷眞洋著、大正13 1924)等がそうである。名詞・形容詞・動詞という変化詞の基本形としての＜Grundform＞が、一体いつ、動詞の《三要形》の意に変わったのであろうか。

そして、この、三つの《動詞の変化本形》――即ち＜Grundformen des Zeitwortes＞の筆頭が《不定法》ではなく直説法単数現在形となることは、**表 13**（112 頁）の明治・大正時代の独文典においてもまだ見られるところである。が、**表 12**（111 頁）の原典の結果とは逆に、日本の著述独文典では、すでに《話法》でない《不定法》を＜grammatische Grundform＞として動詞変化の基本形とすることの方が多いのである。**表 14**（118 頁）にまとめたとおりである。英語では《現在》を筆頭とすることが多かったので、三要形の筆頭語形に関しては英語と独逸語とでは逆の傾向を示している。

明治期の原典で Inf.=＜Grundform＞であるのは Kaderly ひとりである。それにもかかわらず、日本で書かれた明治期の独文典は、同時期の原典で専ら

> Der Infinitiv nennt die selbständig gedachte Thätigkeit oder den Zustand, welcher den Inhalt des Verbums ausmacht, an sich und ganz im Allgemeinen, ist also das Verbum in substantiver Gestalt....
>
> Inf.は、動詞で言い表される行為または状態を、[人称・数等の関係なしに] 自立的かつ全く一般的に表現するものである。故に、それは名詞的形態をとった動詞である。
>
> (Heyse,（明治11）1878. 177 頁)

のようにしか説明されない Inf.を「動詞の活用形の原形」として良く理解した。が、このような名詞形としての Inf.の解釈が、《定動詞》と対をなす、動詞活用の基本形としての Inf.

にまで持ち込まれると、時として次のような、ドイツ語を学ぶ日本人の初学者には矛盾としか映らないような説明にもなり得るのである。

> 動詞の一つ一つを名詞の如くに見なしてそれを呼ぶ時の名称を不定法(Infinitiv)といふ。反之、主語の人称・数などに応じて変化(konjugieren) したる一定の形の動詞を定動詞（finite verb）と云ふ。
>
> （山田幸三郎著『自修新ドイツ文典』昭和(1931)6、100頁）

日本人に対して説く場合、変化形である《定動詞》の反対が「主語の人称・数などに応じて変化しない形」では何故いけないのであろうか。「変化」する「定」動詞とは、次章で問題となる＜十分過ギ去リタル《半過去》＞と＜マダ十分過ギ去ラヌ《過去》＞同様、日本語として矛盾を含んだ表現である。蘭語学の時代のように、Konjugation を《変換》《転変》と解して、語形変化する「活用形」と語形変化しない《原形》では、何故いけないのであろうか。

《定動詞》という文法用語も、独逸語に現れるのは比較的遅い。**表 13**（112 頁）を見ると、大正(1924)13年『粕谷獨逸自修文典』が初出である。前節（2.2.）で述べたように、英語ではすでに明治(1871)4年には見られるのに、独逸語では明治(1910)43年の《作用言の連主形》以前は、まともな用語らしいものすらないのである。その理由は、独逸語の原書のほうに《定動詞》に相当する用語がないからであろう。この用語の前身が安政(1855)3年『和蘭文語凡例』で訳出された《変格活字》であることはすでに述べたとおりであるが（**表 5**［42 頁］）、その原典である Maatschappij（マートシカッペイ）の文法書には ＜het vervoegde werkwoord＞［活用された動詞］という表現が存在している(**表 3**［39 頁］)。ところが、これに相当する言葉を 19 世紀の独文典で探してもなかなか見つからず、**表 13**（112 頁）ではかろうじて＜finite verb＞を見るのみなのである。

しかし、Heyse（ハイゼ）第 5 版には、＜Redeform＞と並んで＜Biegungsform＞という言い方が見出される（天保(1838)9、1.Band. 651 頁）。これこそは、文字通り「活用形」という意味で、「活用形」と言うならば、これが最も相応しい用語であろう。Heyse は “Verbum” のことを、当時盛んに行われた羅典語の文法用語に対する独逸語の意訳名称を用いて＜Aussagewort od. einfache Verbalform＞［叙述語または単純なる動詞の形］と呼んでいるが、「活用形」とは即ち、何ら叙述せず、形態を変えることもない＜einfache Verbalform＞＜Grundform＞に対する＜Redeform＞［叙述形］であり、＜Biegungsform＞［屈曲形］なのである。

結局、「活用形」を表わす術語は、Heyse 第 5 版 のこの＜Biegungsform＞の外には、Wilmanns(明治18 1885)が、＜Die Formen des Verbums, an denen Person und Nummerus bezeichnet wird, nennt man bestimmtes Verbum oder Verbum finitum.＞［人称と数を表わす動詞の形を定動詞と言う］（2.Buch §66）と定義した所の、＜bestimmtes Verbum od.Verbum finitum＞のみであった。

116

gangenheit). des zu conjugirenden Zeitwortes, z. B. gelobt haben, ich werde gelobt haben.

5) die beiden Zeiten der Bedingungsform (Conditionale präsens und Conditionale perfectum), wie die beiden Futura, aber statt ich werde, gebraucht man ich würde z. B. ich würde loben, ich würde gelobt haben.

6) die Grundform der Vergangenheit (Infinitiv präteritum), aus dem Mittelwort der Vergangenheit, mit Hinzufügung von haben, z. B. gelobt haben.

7) die Zeiten der Leideform (Passiv) aus den Zeiten des Hülfszeitwortes werden und dem Mittelwort der Vergangenheit des zu conjugirenden Zeitwortes, z. B. ich werde gelobt, ich wurde gelobt, u. s. w.

Anm. Von den Grundformen des Zeitwortes, Infinitiv präsens, können noch zwei Nebenformen abgeleitet und gebildet werden, nämlich:

a) die Grundform der Vergangenheit, (Infinitiv präteritum) mit dem Mittelwort der Vergangenheit des zu conjugirenden Zeitwortes und einem der Hülfszeitwörter sein oder haben z. B. gelobt haben, gelobt sein.

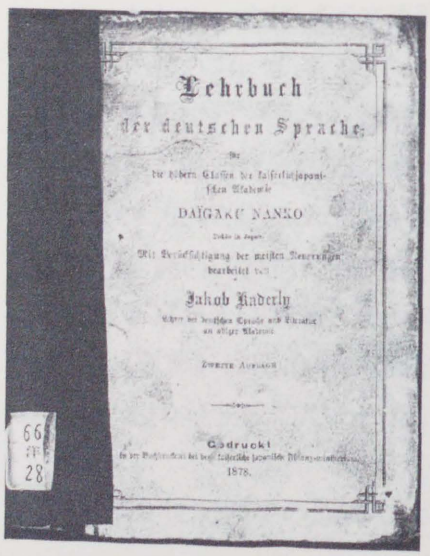
b) Die Grundform der Zukunft (Infinitiv futurum) mit dem Mittelwort der Vergangenheit des zu conjugirenden Zeitwortes und dem Hülfszeitwort werden z. B. gelobt werden.

Die Hauptform und die beiden Nebenformen zusammen bilden die Nennform des Zeitwortes einiger Grammatiker.

動詞の原形
（現在不定詞）
loben
これからふたつの「派生形」Nebenfor が導き出される

未来の原形
（未来不定詞）
gelobt werden（ママ）

過去の原形
（過去不定詞）
gelobt haben



第一章

資料 33.

Kaderly の "Grundform"
（明治11）(1878)

動詞自体の原形は＜現在不定詞＞であるが、更に＜過去の原形＞（＝過去不定詞）と＜未来の原形＞（＝未来不定詞）がある。ところが、この＜未来の原形＞の内容は、どうしたわけか未来形ではなく受動態になっている。＜未来の原形＞は loben werden でなければならない。

動詞活用表には、＜過去の原形＞（＝過去不定詞）が＜現在不定詞＞と並んで表の最初に置かれている。

117

§ 109

Die ziellosen Zeitwörter nehmen im Perfectum, Plusquamperfectum, und im Infinitiv präteritum das Hülfszeitwort sein, statt haben an, wenn sie bedeuten:

1) den Übergang aus einem Zustand in einen andern, z. B. erwachen, ich bin erwacht; verblühen, die Blume ist verblüht.

2) die Bewegung nach einem bestimmten Ziele, z. B. fahren, ich bin in die Stadt gefahren.

Anm. Einige Zeitwörter nehmen haben an, wenn sie eine selbstthätige Handlung ausdrucken, und sein, wenn sie einen Zustand ausdrücken, z. B. der Tiger ist auf seine Beute gesprungen; die Violinsaite ist gesprungen.

§ 110

Beispiele der Conjugation des regelmäßigen zielenden Zeitwortes:

Fragen.

a) Thätigkeitsform.

(Active Form)

Infinitiv präsens: fragen.	Infinitiv präteritum: gefragt haben.
Partizip präsens: fragend.	Partizip präteritum: gefragt.

第四節　まとめ

——<Root>再考——

この章のテーマは、英語とドイツ語で動詞の基本形を表わす文法用語が異なっていることから、英語の《原形》と独逸語の《不定法》という用語が、いつ、どのように成立したのかを追求することであった。その原因は、江戸期の蘭語学から現代に至るまでの西洋語学受容の過程の中に、特に明治期にあるのではないかと考えて、江戸期の和蘭語および明治期の英・独両語における Inf.の用法を、当時の文法書の記述を手がかりに考察してみたわけである。

各節で得られた結果をここにまとめると、次のようになる。

○和蘭語の Inf.は、<Onbepaalde wijs>=<grondvorm>という理解を明確に示していたが、動詞の原形を表わす特別な術語は見出すことができなかった。しかし、当時の歴史比較言語学の激流を背景に、独逸語の<Grundform>と同じく、動詞だけでなく名詞・形容詞等も含めた変化詞全体に関する<grondvorm>という考え方が 1853～6 年頃の原典に現れたが、その当時の嘉永(1853)6～安政(1856)3年頃の日本では、この新たな言語学以前の伝統的規範文法に則った *Grammatica* が全盛であったので、江戸期の蘭語学においては、「動詞の原形」の概念はなかなか明確化しなかった。だが、冠詞・名詞に関しては<本詞><本質(うぶ)><原語>という概念が知られていた。

江戸時代の Inf.は、当時の和蘭語の<Onbepaalde wijs>が当時 Modus [話法] に属していたため、主に《不定法》《不限法》と訳され、前者が次の時代に引き継がれていく。

○英語では、明治前期頃までは to-Inf.は Modus であり、かつ、旧文法における動詞の原形であったところの一人称単数現在とともに、一時動詞の原形の位置を占めたが、19 世紀後半、Quackenbos によって<Root>が導入されたことから、<Root>が《根言》、即ち動詞の《原形》、to-Inf.が動詞的名詞である《不定詞》となり、両者は分離した。

《不定法》・《根言》ともに、訳語は蘭語学から受け継いだ。<Root>の訳語に関しては、《原形》は明治期の英語ではあまり用いられず、《根言》《根語》のような《根—》系統のものが一般的であった。《原形》を好んで用いたのはむしろ独逸語の方であった。

○19 世紀前半の原典では、当時ドイツで盛んになった歴史比較言語学という新たな激

流の中で、Inf.の Modus からの脱落が蘭・英よりはるかに早く起こり、独逸語の Inf.は明治期の最初からすでに《話法》ではなく＜Nennform＞[名詞形] であった。ところが、訳語は蘭語学以来の《不定法》がそのまま用いられた。また、動詞だけでなく名詞・形容詞等も含めた変化詞全体の「原形」＜Grundform＞が求められ、動詞の場合は、＜Nennform＞となった Inf.が「文法上の原形」＜grammatische Grundform＞とされ、語源的原形である＜Stamm＞と区別された。しかし、独逸語原典における三要形の筆頭は、明治期の原典においても、Inf.ではなく伝統的な Präs. であることが珍しくなかった。

逆に明治期の日本の独語学では、原典の新説に忠実に、「文法上の原形」である《不定法》がほぼ一貫して動詞変化の基本形とされ、《原形》《元形》という呼称が英語以上によく用いられた。しかし、独逸語の《原形》は、《原動詞》等と合わせて、変化形と派生形の基本語＜Stamm＞の訳語である場合も多い。

そして大正期以後、《原形》はむしろ英語のものとなり、独逸語は《不定法》のみとなった。

これらを通観して言えるのは、まず「原形」という概念は決して古いものではなく、しかもその始めは＜Grundform＞であって、歴史比較言語学によって求められた語源的な＜Wurzel＞＜Root＞ではなかったということ、次に、日本の洋語学で《原形》と《不定法》が分離したのは、19 世紀後半に英語の分野で起こった＜Root＞（＝the Present Infinitive without the sign *to*）と to-Inf.の分離にその原因があるということである。幕末の蘭語学より《根言》という訳語を引き継いだ時から、日本の英語学では to-Inf.と＜Root＞が概念的に訳し分けられた。そして＜Grundform＞が「文法上の動詞の原形」ではなく《三要形》の総称となり、動詞の原形が Inf.となった独逸語との間に、《原形》と《不定法》という用語的相違を生むことになったのである。

最初に《原形》という術語を専ら用いたのが、現在ではそれを用いていない独逸語の方であって、原書に＜Root＞の用語を持つ英語ではなかったという逆転現象は、意外であり、かつ興味深い。ただし、独逸語の《原形》は派生語の原語としての＜Stamm＞の意味も兼ねていた。独逸語の考察を経た今、本章の結びとして、この観点から英語の＜Root＞の訳語を改めて見直すとどうなるであろうか。

表6（79 頁）で、名詞等の変化形・派生語の基礎語に関する表現はわずか 6 例に過ぎないが、名詞単数を表わす、訳語のない＜primitive word＞――興味深いことに、明治(1899)32年のチヤムブレンがこれを用いている――が 2 例、動詞の＜Root＞に対する最も一般的な訳語である《根語》1 例の他に見られるのは、《原語》《原詞》《本詞》の 3 種である。《原語》は《本言》とともに『和蘭語法解(オランダごほうげ)』に冠詞の男性単数 1 格として、《本詞》は馬場佐十郎の『和蘭文学問答』に名詞と形容詞の基本形として、また可野亮の『蘭語獨(ひとり)案内』では動詞の基本形として、それぞれ用いられている。明治期を通じて《原形》がなかなか普及しな

かったのは、あるいは《原―》系の用語は、名詞・冠詞等の変化形ないしは派生語の基礎語――即ち<Stamm>に対するものだという意識が存在したからではなかろうか。更に附言すれば、馬場佐十郎の用途の広い《本詞》は、Sewel の<Primitives or Original>のようなものから来ているという可能性もなくはないと思われる。

このような事情を考えると、Quackenbos が<Root>を「動詞の原形」に限ったことのほうが、むしろ画期的な考え方ということになろう。しかし、名詞の格変化も動詞の活用語尾もほぼ喪失した英語では、むしろそれが自然な志向であろう。英語が《原形》で独逸語が《不定法》となったのも、結局は前者が動詞の活用語尾をほぼ喪失し、後者がそれを保持していることに起因しているからである。

更に画期的なのは、このアメリカ人文法家の<Root>が、当時の歴史比較言語学で言うところの<Wurzel>[語根] とも異なり、<the Present Infinitive without the sign *to*>だということである。Heyse(ハイゼ)第5版(1838(天保9)) にあっては、<Wurzel>はまだ<...unter keine bestimmte Vorstellungsform gefasst ist>[何ら特定の概念形式として把握されていない] (1. Band. 294 頁) という状態であったが、元来ヘブライ文法に発するこの<Wurzel>に関して、<einsilbige Wurzel>[一音節の語根] という考えを本格的に展開したのは、Rask, J.Grimm と並ぶ著名な歴史比較言語学者 Franz Bopp であると Delbrück は言う[注54]。その契機は印度からもたらされた。ヨーロッパのサンスクリット語学者たちの触れた印度の文法――特に Panini のそれは、徹底して経験的であり、分析的であった。Panini は、希臘のような、言語の起源や普遍原理に関する哲学的思索とは無縁であったため、サンスクリット語の個々の単語は全く即物的に解剖され、活用語尾・種々の派生形形成要素を伴った<Stamm>・<Wurzel>に分解された。Bopp はこれを彼の比較言語学に導入し、活用し、<einsilbige Wurzel>[一音節の語根] という考えを展開して、新たな言語学の路をヨーロッパのために用意したのである[注55]。

しかし、この<Wurzel>――即ち<Root>は、動詞活用 (Conjugation) の原形を意味しない。しかも、これを Conjugation の原形とした場合、「語根は一音節である」という定義に従うと、"recognize"や、「木の葉文典」で《不定動詞》の例として挙げられた"advise"のような多音節の動詞は、その基本形を<Root>として提示できないことになり、その基本形表示は to-Inf. か直説法能動態現在一人称単数とならざるを得ない。この意味で、明治維新直前の年に出現した Quackenbos の<Root>は、画期的にして合理的である。

Bopp はまた、Inf.は名詞であるからいかなる叙述も自ら為すことはできないと言った人でもある[注56]。即ち、前節において見てきたところの、Inf.が<Nennform>となって Modus から脱落する道筋がここにつけられたのである。英語の to-Inf.が、一時期三要形の筆頭に立ちながら、やがて<verbal-noun>として Modus から脱落するのも、その端緒はこの新たな言語学的潮流がもたらしたものである。

1830(天保1)年以前を旧文法、以後を新文法と仮称すると、この時期、欧州本国の文法はその内容を劇的 (gewaltig) に変化させつつあった。そしてその変化は、日本の洋語学の中にも

確実に反映された。ただその時期が、ちょうど江戸期の和蘭語から、新文法に移行しつつあった明治の英語に切り替る時に当たったため、江戸の旧弊を厭い明治の先進性を自負する歴史意識と相俟って、旧文法に基づいた蘭語学の解釈が＜誤解＞＜錯覚＞であると、まさに誤解されることになったのであろうと思われる。次章において扱われる《半過去》と《過去》はその典型的な例である。

現代の日本人にとっては当然のものであるが、江戸期の蘭語学者にとっては全く当然でなかった＜Root＞は、まさにこの端境期に現れた新説であった。それに対する訳語《原形》は、明治17年(1884)、斎藤秀三郎の『スウキントン氏英語学新式直譯』から発したものの、明治期にこの用語を好んで用いたのは、むしろ独逸語学者たちであった。しかし現代のドイツ語では、この《原形》という用語は、《不定法》《不定形》にとって代わられ、教科書から姿を消してしまう。これにより、辞書における動詞の見出し語形は、英語では《原形》、ドイツ語では《不定法》(あるいは《不定詞》・《不定形》）となり、最も基本的な文法用語が英独間で食い違うことになってしまったのである。そして、このような基本的概念の不統一によって学習者が受ける不利益は、あの著名な英文法家 L. Murray の次の言を引くまでもないであろう。

> This difference of opinion amongst grammarians of such eminence, may have contributed to that diversity of practice, so observable in the use of the subjunctive mood. Uniformity in this point is highly desirable. It would materially assist both teachers and learners : and would constitute a considerable improvement in our language. (*English Grammar.* 1861(文久1). 103 頁)

注

1）『蘭語学』Ⅰ、444 頁。他に 482, 489, 543 頁など。

2）＜root＞は、当時の文典では Quackenbos のような意味では使われないのが一般である。

L. Murray の1861(文久1)年版には root という言葉が一箇所だけ出てくるが、それは

> The Greeks and Latins distinguish them [tenses and moods] ... by varying the termination, or otherwise changing the form of the word ; retaining however, those radical letters, which prove the inflection to be of the same kindred with its root. (119 頁)

のような意味であり、三要形の筆頭にはなっていない。本書の三要形は Pres.—Imperf.—Perf. Part.であって、動詞変化の原形は root でも Inf.でもないのである。

3）主なものは①*Grammatica, of Nederduitsche Spraakkunst.*②*Rudimenta, of*

gronden der Nederduitsche taal. ③*Syntaxis, of woordvoeging der Nederduitsche taal.* の三点で、幕末期の日本では特に①が用いられた。＜鶯鸞麻知加＞＜窩蘭麻知加＞等の音譯訳で知られている。国会図書館には①の第二版（Te Leyden, Deventer en Groningen, 1822（文政5））の翻刻版である『和蘭文典前編』(作州箕作氏蔵版、天保十三（1842）年壬寅九月稟准)が所蔵されている。また、②③の合綴じされた文庫本大のもの（Te Deventer en Groningen, 1864（元治1））もあり、その背表紙には *Rudimenta en Syntaxis* とある。

ただし、同じ Maatschappij（マートシカッペイ）社版といえども、*Grammatica* と *Rudimenta* の間には内容的に大きく異なる部分がある。殊に時制の用語において著しく相違し、*Rudimenta* ＜留地棉多＞からの用語と思われるものは、日本の蘭語学最後の著作『洋学指針 蘭学部』（柳川春三、安政（1857）4年成立；明治（1868）1年出版）にかろうじて現れるのみである。

＜要するに ＜和蘭文典＞ とあっても、一般的にオランダ語の文典という普通名詞ではなく、固有名詞としての ＜和蘭文典＞ がおこなわれた…。したがってこの時代に、たとえば『和蘭文典前(後)編』とか『和蘭文典字類』とあれば、このマートシカッペイの Grammatica と Syntaxis を指すのである＞(『蘭語学』Ⅱ、1150-1151 頁)。

4） ＜een bloote vorm＞は Bilderdijk(1826（文政9）) の、＜stamvorm＞は Brill（1853（嘉永6））の用語である。Brill は、強変化と弱変化動詞の過去および過去分詞の形成に際して、＜de stamvorm eens werkwoords＞とともに、単に＜stam＞という用語も用いている。
＜Eindigt de stamvorm eens werkwoords op eene vokaal...＞［動詞の基本部分が母音で終わる場合は…］、＜Dese t wordt ook dan achter den stam gevoegd＞[この t は基本部分の後に付けられる]、のようにである（Vraag 38)。

朝倉純孝『オランダ語文典（大学書林、昭和 58）ではこの＜stam＞が《根》と呼ばれ、動詞活用の基本形とされている。

不定詞	根	過去単数	過去複数	過去分詞
roven(奪う)	roof	roofde	roofden	geroofd
lezen(読む)	lees	las	lazen	gelezen

Backer（刊年不明、序文の日付は 1853.4.27（嘉永6））と Beijer(1853（嘉永6）) では、語根は＜wortel＞である。『譯鍵』の和訳も《根》である（ちなみに＜stam＞は《宗家》《苗裔》《素成》《樹幹》と訳されている)。 Beijer は、現在人称変化の単数の基礎を＜wortel＞に、複数のそれを＜het werkwoord zelf＞［動詞そのもの］に置き、＜wortel＞を *Grammatica* と同じ＜het zakelijke deel des werkwoords＞であると言っている（§140)。

5）『蘭語学』Ⅱ、1288 頁。

6）『蘭語学』Ⅱ、1283 頁。

7）*Rudimenta*（1864（元治1））は、＜関係時＞を導入することにより時制の組織とその名称を一新した。柳川春三の『洋学指針 蘭学部』は、単独の過去形である Imperf.を《関係過去》、未来完了を《関係未来》とも呼称しているので、《関係過去》は＜de eerste betrekkelijke verledene tijd＞[第一関係過去時] から、《関係未来》は＜de betrekkelijke toekomende tijd

＞[関係未来時]から採った訳語ではないかと考えられる。この＜関係○○＞という時制は、伝統文法の五時制を踏襲する *Grammatica* には見られないものである。*Grammatica* と *Rudimenta* の時制構成については**第二章注３**を参照のこと。

8） Brill（嘉永6 1853）の＜grondvorm＞は、

De woorden van de eerste zes dezer soorten zijn vatbaar voor verbuiging, dat is, zij kunnen door vormverandering de betrekking uitdrukken, waarin zij tot andere woorden staan. De onverbogen vorm eens verbuigbaren woords heet zijn grondvorm. (Vraag 7)

この最初の６種類の品詞は語形変化を起こしやすい。これらは、語形を変えることによって他の単語に対する関係を表現するからである。変化詞の変化しない時の形が「原形」＜grondvorm＞と呼ばれるものである。

のように、名詞・形容詞・代名詞・冠詞・数詞・動詞という、いわゆる「変化詞」の変化しない部分のことで、「動詞の変化形のもとの形」よりも用途が広い。

この広義の＜grondvorm＞の並行例が 1820～30 年代の独逸に＜Grundform＞として見出され、これを文法上の動詞の原形、即ち Inf.とするという考えも、**表 19**（208 頁）の Bauer と Karl W. L. Heyse（ハイゼ）が採用している。この動きは当時独逸で盛んになった歴史比較言語学から生じたものと考えられる。これの詳細は**第三節**に譲る。

9） Weiland（弘化3 1846）の説明が＜De bedrijvende deelwoorden hebben den uitgang *de* achter de onbepaalde wijs....＞[能動分詞（＝現在分詞）は不定法の後に de を持っている]である（§290）。Sandwijk（安政2 1855）も＜Het tegenwoordige deelwoord wordt gevormd van de onbepaalde wijs eens werkwoords, met achtervoeging van *de* ....＞[現在分詞は動詞の不定から作られ、その後ろに de が付けられている]となっている（32 頁）。Wees（安政4 1857）では＜achter *de* onbepaalde wijs＞が＜achter het onveranderde werkwoord＞［語形変化しないままの動詞］に変えられているが（32 頁）、意味する所は Inf.と同じである。

10） 『蘭語学』Ⅰ、637 頁。

11） 刊年は文化（1815）12年なのであるが、堤碌桂樹の序文の日付が＜文化九年壬申季春＞、小森啓・彦良のそれが＜文化壬申秋九月＞なので、その成立時期は『和蘭文学問答』とほぼ同じであると考えられる。

12） 蘭学資料叢書５　藤林普山『譯鍵 附蘭学逕』青土社、1981。＜taal＞は language、＜woord＞は word である。

13） Sewel の英語蘭文典である *Dutch Grammar*（1708）の＜Primitives or Original＞とは、＜There are several Substantives that may be called Primitives or Original（41 頁）と言っているように、Fish と Fisher のような、名詞の派生語の基礎になる単語のことである。

同様に、明治 20 年代に一世を風靡した Swinton 文典でも我々は＜Primitive word＞または＜Root word＞いう言い方を見出すが、これも動詞の原形を意味しない。動詞の場合

は<the root of a verb>というが、しかし、これは決して三要形の筆頭に位置する「原形」ではないのである（**本章第二節 2. 3. 1.** [96 頁]）。

一方、同じ<primitief>という用語が、Lulofs(天保2 1831)の蘭文典 においては<primitief werkwoord>として、分離・非分離動詞の基礎動詞の意に用いられている(§97)。この並行例は明治期の独文典において少なからず見ることができる（**本章第三節 3.** [115 頁]）。

このように、現代英文法の《原形》から類推して、当時の文法用語を、その定義内容を知ることなく単純に現代と同じものと判断するわけにはいかないので、注意が必要である。

14) 『蘭語学』Ⅰ、543 頁。<laten> を用いた文を《命令法》とすることは、18 世紀当時の文典ではよく見られるところで、Sewel(1708) に <Laat zy hebben.> <Laat zy zyn.> 等がある。原意が「～であらんことを」となる <Dat hy worde.> <Dat zy leeren.> もまた、<Let him become.><Let them learn.> のように英訳されている。Marin(1790)の<Gebiedende Wys>にも<Laat hy zyn><Laat ons zyn.><Laaten zy zyn.>が含まれている。

15) 『蘭語学』Ⅰ、482 頁。蘭文の意味は「私は彼を来させた」「私は言いに行くであろう」である。第一の文をどく訳すると <Ich habe ihn kommen lassen.>となり、和蘭語と同じく <habe...lassen> が完了形を形成する。<lassen> は、現代の解釈では原形ではなく、不定法過去分詞である。van der Pyl(文政2 1819) はこれを

> The verb, attended by the infinitive without *te*, have in the perfect and pluperfect tense the form of the infinitive mood ; Ik heb hem helpen schrijven....
> (337 頁)

とし、Kuijper(安政3 1856) も<de onbepaalde wijs>と解している(§306)。

16) 『蘭語学』Ⅰ、680 頁。

17) 『蘭語学』Ⅰ、662 頁。

18) その活用例は Ik antwoord—Ik antwoordde or antwoordede—Geantwoord [規則動詞の場合]、Ik byt—Ik beet—Gebeeten—byten [不規則動詞の場合] のように、現在形から始まる(73 頁)。不規則動詞には第四形として不定法が添えられている。

斎藤 信『日本におけるオランダ語研究の歴史』によると、*Nederduytsche Spraakkonst* (1708) でも、Sewel は動詞の四要形(1 人称現在・過去・完了分詞・不定詞)を掲げている（103-104 頁）。

ところが、同じ辞書所収の英文典では、<英語動詞の不定法と直説法現在一人称は同形であり、その語形は、前者には <to> を、後者には代名詞 <I> を添えることによってのみ示される（to Love ; Love)。また、過去一人称と過去分詞とは同形であることがほとんどである（I Loved ; Loved）>と言い、to Boast—Boasted [規則動詞の場合]、to Arise—I Arose—Arisen のように、不定法を原形としている（27-30 頁）。

19) Robins に拠ると、<名詞・動詞・その他の語形を形態論的に記述するにあたり、プリスキアーヌスは、基準となるべき基本形を設定して、これを体系化した。すなわち、名詞では主格単数が、動詞では一人称単数現在直説法能動態が基本形である>（中村完・後

藤斉訳『言語学史』研究社、1992、68 頁)。

明治の英語学においてさえ、幕末にすでに Quackenbos の文法書が学習されて＜Root＞が知られていたにもかかわらず、Swinton 等の影響で、動詞の三要形の筆頭は＜一人称単数現在直説法能動態＞である（**表 6** [76 頁])。

20) ＜本詞＞は、動詞に関しては 2 種類の用いられ方をされている。ひとつは動詞変化の基本形であるが、馬場は、文化(1805)2 年の『蘭語首尾接詞考』と『蘭語冠履字考』において、分離・非分離動詞の基礎動詞のことを＜本詞＞と呼んでいる。『蘭語冠履字考』では＜本語＞＜本言＞も使われている。

21) 『蘭語学』II、1064 頁。

22) 『和蘭文語凡例』の例は『蘭語学』II、1178 頁の記述を私的に図示した。*Grammatica* のこの部分の説明は、前編の § 131 と § 132 にある（資料 2 [54 頁])。また Weiland (安政1 1854) においても、三要形の筆頭の名称は、恐らく Inf.であろうと考えられるのであるが、そうと明記されていない。

23) 原書名は、Kolnelis van der Palm, *Nederduitsche voor den jungd*, 1774.（『蘭語学』I、617 頁)。Palm の名は、Weiland, *Nederduitsche spraakkunst* (Dordrecht, 弘化3 1846. 国会図書館蔵)の序文にも見える。

24) 例えば Beijer(嘉永6 1853) は、＜Enkelvoud. De 1e person is de wortel van het werkwoord.... Meervoud. De 1e person is gelijk aan het werkwoord.＞［一人称単数は動詞の根で、一人称複数は動詞そのものと同形］というように説明している（§ 140)。

25) 「疑問文を作る法」としての《疑問法》は、本来 Modus とは別の＜四法＞に含まれるものである。この作文法とでも言うべき＜四法＞については**表 25** (305 頁) に示した。『和蘭語法解(おらんだごほうげ)』の著者・藤林普山は、Modus の＜四法＞に、《附説法》から非現実仮定・認容表現を独立させた《第二附説法》を加え、更にこの作文法＜四法＞を合わせた《活言法》9 法を示している。普山の《活言法》については巻末の「附録」(397 頁) 参照。

26) 『蘭語学』II、1064 頁。

27) 『繙巻得師草稿』には、昭和 6 年発行の「高野長英全集」所収のものと、杉本つとむによって紹介された国会図書館所蔵「海外事類雑纂・第四巻目録」に収められたものとの二種類があって、国会図書館本は全集本の二倍以上の分量がある。

実際に国会図書館にて閲覧した後者の文法は、次の 5 点において新要素を持っている。即ち a) 「語根」に相当する考え方が見られる、b) Inf.が Modus に含まれていない、c)＜de man is gestorven＞（=Perf.) が現在時制である、d) 形容詞が一品詞として独立している、e) 分詞の代わりに数詞が一品詞になっているのである。これらはいずれも現代文法では当然であるが、本書が成立したと考えられている文政(1828~29) 11～12年当時(『蘭語学』II、1051-1052 頁)においては、日本の蘭語学においても、欧州においてさえも当然ではない。独逸を中心とした歴史比較言語学の興隆によって旧文法から新文法への変化と混乱のただなかにあった欧州において、この 5 点は 1830 年当時の最先端の動きである。

28) G. Brown, *The grammar of English Grammars*. New York, 1851(嘉永4). 860頁脚注。

29)『英語変格一覧』では《不限法》または《不限法現在》、『英文典』では、《不定法》《不定法現在》《不限法現在》を併用している。“to”が［ ］に入れて示され、『英文典』では、

不定法現在	直説法半過去	過去分詞
[to] fall	[I] fell	fallen

のように、三要形が提示されている。だが、『英語変格一覧』の不規則動詞の変化表では、《不限法》として“to”なしの形になっている(21-28頁の一覧表)。

また、《第一未来》を形成する際には＜不限法現在ニ shall ナル助動詞ノ現在ヲ前置＞するよう言っているので(『英語変格一覧』4頁 表(おもて)。『英文典』[65-66頁] もほとんど同文)、《不限法》は基本的に“to”の付かないものを念頭に置いているように思われる。この、チャムブレンが《不限法現在》とするものを Swinton は＜Root-infinitive＞と呼び、例えば山形閑はこれを《原初不定法》と訳している(『斯因頓大文典講義』上巻、117頁)。

ところで、『英語変格一覧』(明治12(1879)) の《不限法》は、同時期およびその前後の時代の中にも類例を持たない孤立的な用語であるが、チャムブレン自身の考案なのであろうか。本書は最初から日本語で出版されたのであるが、チャムブレン自身が日本語で書いたのか、あるいはチャムブレンが英語で書いたものを誰かが翻訳したのか、はっきりしない。『日本事物史1』の序文で、＜同じころ私は**日本語**で『英語変格一覧』という小さな本を出版しました＞[原文は英文] と言っているが、「自分で日本語で書いた」とは言っていないからである。

チャムブレンの日本語力に関しては当時からすでに伝説的であったわけだが、しかし、太田雄三氏が＜チェンバレンの詩篇の訳にしろ、発表前にそれに目を通した日本人がいたことは、ローマ字表記の日本語訳の外に、それを立派な筆跡で漢字と仮名を使って書いたものが添えられていることからも分かる＞(『B・H・チェンバレン』118頁) と言うように、その日本語に目を通す日本人の協力者は、当然いたであろう。『英語変格一覧』の場合なら、この書は海軍兵学校時代の著作なので、海軍兵学校の同僚――たとえば、明治13年当時の職員として『海軍兵学校沿革』に名前の見える、英学担当の長峯秀樹、白藤道恕などが日本語の文法用語を検討し、《不限法》という用語を独自に考案したことは、大いに考えられるところである。

『英語変格一覧』の4年前の明治8(1875)年には、同じく海軍兵学校のお雇教師ブリンクリが『英語獨案内』を出している。英文法に限らず当時の日本の習俗――たとえば日本式時刻の数え方のような事柄までが、実に流暢な「当時の」日本語で全書にわたって説明されている書物であるが、これも＜英国砲隊仕官ブリンクリ氏著＞であって、誰々訳とはなっていない。『海軍兵学校沿革』明治10(1877)年の項(252頁)には、＜「ブリンクリー」氏ハ…(略)…其後専語学教師トシテ従事セリ　氏ハ我国語ニ精通シ其著ハス所語学獨案内ハ今ニ至テ尚語学界ノ珍重スル所タリ　氏ハ此後横浜メール新聞朱筆トナリ頗ル名声アリ＞と記され、

日本語が非常に堪能だったこともチャムブレンと共通している。ブリンクリもまた、同僚その他の人たちの助力を得ながら、彼の文法書を書いたのであろう。

なお、この『英語変格一覧』(明治12)は勝海舟の直筆による墨書の序文を持つ。墨痕凛々とまではいかぬが、福沢諭吉と違い、勝の語学体験はそれほど関心を持たれてはいない。専ら政治的人間として知られる勝の語学――それも和蘭語ではなく英語――とのつながりを実際に垣間見ることができて興味深い。

30) 山形閑は、明治27年『斯因頓大文典講義』(上巻)で、＜世ノ文法家ハ大抵不定法ヲ此法ノ中ニ加ヘテ五法（或ハ分詞ヲ加ヘテ六法トスルモノアリ）ト雖斯氏ハ前ニ論ジタル如ク不定法ハ法ニアラスト云フ論者ナレハ特ニ本文ニ於テ不定法ヲ外ニシテ曰フタルナリ…＞(118頁)と補注している。

31) 明治22年の『和譯英小文典』という長崎・翠柳堂出版の英文法書は、その「凡例」に、＜此書は［クワツケンボス氏］［ブラウン氏］［スミス氏］等ノ諸文典中ヨリ纂譯編輯セル者ナリ＞とあるように、伝統文法の原書に依拠している（ただし［スミス氏］は未見）。よって、時制は 1.現在・2.半過去・3.過去・4.大過去・5.第一未来・6.第二未来であり、Modus は 1.直説・2.可成・3.接続・4.命令・5.不定である。

明治20年の『和解纂註英文規範』は坪内逍遥の「はしがき」を持つが（資料 101［395頁］）、その参考書は＜故ニ今モリス氏クアケンボス氏スウキントン氏コツクス氏等ノ諸文典ヲ参考シテ其説ノ簡要ニシテ解シ易キ者ヲ取リ臆説ヲ加ヘテ此編ヲ筆シ…＞と「凡例」にある。

モリス氏は未見であるが、『克屈文典直譯』は明治16年に出ている。この書の Modus は四法であるが、これは Inf.ではなく Pot.が抜け落ちた結果、1.直接・2.接合(Subj.)・3.命令・4.不定 となったものである。これは明治 30 年代に流行する Nesfield の完全なる先取りであり、Nesfield も Pot.を認めていない。時制も Nesfield に先立つ所の、3時＜現在・過去・未来＞×仕方4種＜不定・不充分・充分・充分引続＞の計 12 時制である。

動詞の原形は《起本働詞》《起本詞》であり、＜Root＞ の《働詞ノ根語》《根本ノ働詞》《根詞》《根語》と区別されている。＜重モナル強キ働詞ノ屈曲＞は、現在不定・過去不定・分詞不定（または 不定分詞。即ち過去分詞のこと）となっている。

『和解纂註英文規範』は《原動詞》――即ち＜未ダ詞形ヲ變ゼズ単純ノ動詞(root)ニシテ直説法現在ノ詞形＞(125頁) を持つ。これは Quackenbos, Swinton, Cox いずれにも在る。＜動詞ノ三要部＞は、現在(原動詞)・過去(直説法)・過去分詞 、不規則動詞の三要部は、原動詞・過去・過去分詞［127 頁。ただし 152 頁から始まる＜不規則動詞ノ表＞では 現在（原動詞）・過去(直説法)・過去分詞］である。 Swinton も Cox も、動詞の三要部の筆頭は Pres.であるが、不規則動詞の場合にはそれが＜Root＞になる。 更に『和解纂註英文規範』の時制は 1.Pres.《現在》, 2.Pres.Perf.《充分現在》, 3.Past《過去》, 4.Past.Perf.《充分過去》, 5.Fut.《未来》, 6.Fut.Perf.《充分未来》であるから、この著述文典は主に Swinton の影響下にあることになる。

ところが、Mood に関しては Quackenbos に従って、従来の 1.直説・2.可成・3.疑義ま

たは接続・4.命令・5.不定 という五法を採用している。

32) Nesfield の Mood の構成は次のようなものである。

- Finite mood : 1.Ind., 2.Imp., 3.Subj.
- Infinite mood :
  - 1.Infinitive a)Noun-Inf.または Simple Inf. [～こと]
    - b)Qualifying Inf.または Gerundial Inf.[～べき/ために]
  - 2.Participle または Verbal adjective
  - 3.Gerund または Verbal noun

奈倉次郎（明治(1900)33）――この訳書の評価はすばらしいものであった――は、Finite mood《定法》に対し、Infinite mood を《不定法》、Infinitive を《不定動詞》と訳し分け、a)を《名詞的不定法》、b)を《形容不定法》と呼ぶ。Participle は《分詞》、Gerund は《動名詞》、Verbal noun は《動出名詞》である。

この人は Gerundial と Gerund について、<Gerundial なる名称は、不幸にして現今十分確定され居れども、之れ人をして誤解せしむる名称なり。即ち 此名称に因れば Qualifying Infinitive は吾人が現今 Gerund 即ち Verbal Noun（動名詞）なるものと何等かの関係を有する意を含蓄す。而も事実に於て是とは歴史的亦語法上更に何等の関係をも有せざるなり。……故に二者は共通の働を有せざるなり。彼の ing を附したる所謂 Gerund（動名詞）なるものは決して不定法にあらざりき、而して是を不定法と呼ぶは大なる誤なり>(§234)と「再講註」している。

Nesfleld は、しかし、Gerund と Verbal noun は実は全く同一ではないと言い[§252]、定冠詞を戴き前置詞 of を従えた <I am engaged in the reading of a book.>を Verbal noun《動出名詞》、それがない<I am engaged in reading book.>を Gerund《動名詞》としている。

この部分の訳語は、例えば Nesfield の翻訳書が初めて世に出た明治(1901)31年の三書では、

嶋文次郎：Inf.＝名詞体不定言、Part.＝分詞・動形容詞、Gerund＝名動詞、Verbal noun＝動名詞

松島剛・星野久成：Inf.＝不定法；to ヲ附シタル不定法（働詞体ノ名詞）、Part.＝分詞（働詞体ノ形容詞）、Gerund＝働詞上(ママ)名詞（現在分詞ト同形ヲ有スレトモ不定法ニ属スルモノ）

畔柳都太郎：Inf.＝不定法、Part.＝分詞、Gerund＝名動詞、Verbal noun＝動名詞

である。Gerund が《名動詞》、Verbal noun が《動名詞》である点が注目される。奈倉においては Gerund が《動名詞》であったが、最初は逆だったのである。この嶋・畔柳の訳語を用いると、<動名詞(Verbal noun)ハ名動詞(Gerund)ト全ク異ナリ．動名詞(Verbal noun)ハ冠詞ヲ前ニ具エテ of ナル前置詞ヲ随フルモ名動詞(Gerund)ニハカヽルコトナシ>(畔柳 §343)という言い方になり、全く紛らわしいことになってしまう。

栗野忠雄はGerund《動詞状名詞》と Verbal noun《名動詞》、鶴田久作は《動名詞》(Verbal noun は訳語なし)、畔田 到は《名働詞》と《働名詞》である。

嶋文次郎は《重品詞》――<二種ノ品詞ガ結合シテートナレ(ママ)モノ>――の項で、<名動詞ハカツテ動名詞トモ名ケラレシコトアリ>と言っている(§18)。ただし、Nesfield の<Verbal noun>と<Gerund>の相違に従えば、《名動詞》は不都合なのではないか。奈倉の《動出名詞》と《動名詞》の方が正鵠を射ているように思う。

このように、同じ《不定法》でも Nesfield 以前と以後とではその内容が大きく様変わりしているのであるが、この《動名詞》か《名動詞》かで参考になる見解は、むしろ国文典の分野に見出される。松下大三郎は、昭和5年『増補校訂標準日本口語法』第二章第七節において、《名詞性動詞》と《動詞性名詞》というものを説く。<紳士です> は前者の、<御立ち> は後者の例で、それぞれについて<「紳士です」の上部には名詞的性能が含まれては居るけれど、全体を代表する性能としては動詞的である。だから「紳士です」は動詞である。動詞であるが、名詞性動詞である。「御立ち」の内部には動詞的性能が含まれては居るけれども代表的性能としては名詞的である。だから「お(ママ)立ち」は名詞である。名詞ではあるが動詞性名詞である>(61頁)のように言う。松下は、その「緒言」にて<この書は形式的には日本流を経とし西洋流を緯としたが、実際に収める効果に於ては両主義を折り合わせて統一し得たつもりである>と述べている。この《名詞性動詞》と《動詞性名詞》という<変態品詞>の扱い方は、前者が Nesfield 文法の Gerund《名動詞》、後者が Verbal noun《動名詞》の、国文典への反映ではないだろうか。

33) B. Delbrück, *Einleitung in das Studium der Indogermanischen Sprachen.* 6te, durchgesehene Auflage. Leipzig, 1919. 10頁。

34) 《定動詞》《不定動詞》は、明治20年代――即ち Swinton 文典の流行期に一時姿を消すが、30年代に入って Nesfield が使用されるようになると再びその姿を現わす。

Nesfield に拠ると、両者の定義は次のようなものである。

> §86. The number and person of a Finite verb depend upon the nature of its Subject....
>
> Hence arises the following rule : ···A Finite verb must be in the same number and person as its Subject.
>
> §107. The Infinitive mood is not preceded by any Subject, and therefore it has no number and person.

これは栗野忠雄(明治(1900)33)の直訳から引用したものであるが、栗野は<A Finite verb>を《定動詞》、<Infinitives>(Nesfield では to-Inf.と Gerund=Verbal noun のこと)を《不定法動詞》と呼ぶ。

ところが内海弘蔵(明治(1899)32)は、同じ§86において、直説・命令・接続法、即ち《定法》の動詞のうちのいずれかの活用形を《定法働詞》とし、<其ノ主辞ト同一ノ数及ビ人称ヲ有セザルベカラ>ざるものである<A Finite verb>は《定働詞》《定限働詞》と呼ぶ。

《定法働詞》と《定働詞》《定限働詞》とは違うものを指しているので注意を要する。同様に＜Infinitive Mood＞と＜Infinitives＞も訳語が異なり、前者が《不定法》、後者が《不定詞》である。

これらの点は、当文典の初訳者である嶋文次郎（明治31(1898)）がすでに区別しているので（§16）、内海はそれに従ったのかも知れない（ただし嶋の場合は、漢字が《定動詞》《定限動詞》である）。同様に＜Infinitive Mood＞は《不定法》であるが、＜Infinitives＞は《不定言》としている（§191及び§194）。

35）『検麓韻符』の引用は『蘭語学』Ⅰ、858頁から。玄真の生没年は1769(明和6)～1834(天保5)。

36）**表2**（37頁）では、玄真と同時代のBilderdijk(1826 文政9)が＜Onbepaalde wijze＞と＜Bepaalde wijze＞という分類を行ない、前者の動詞を＜verbum infinitum＞、後者のそれを＜verbum finitum＞と呼ぶ（137頁）。

しかしその一方で、Bilderdijkと同時代の独逸の文法家H. Bauer(1830 天保1)は、aussagen（アオス・ザーゲン）[叙述]の力を持たないが故に正真のModusとは認め難いInfinitiv――即ち「何のModusも表わさないModus」というInfinitivの定義を、矛盾していると批判し、このように動詞自体を＜verbum infinitum＞と＜verbum finitum＞とに二分することの問題点を指摘している（*Vollständige Grammatik der neuhochdeutschen Sprache.* 3.Band. 22-23頁）。

37）この『検麓韻符』の例では“te”を伴わない動詞そのものの場合を《不定動詞》と呼称し、“te”を伴うものを《不定法》として区別している。が、Bilderdijk(1826 文政9)は“te”のあるものとないものとの両方を＜Infinitivus＞とし、ある場合を名詞的用法、ない場合を形容詞的（Gerundium）用法と呼ぶ。

Van der Pyl(1819 文政2)とLulofs(1831 天保2)も同様である。Lulofsでは“te”を伴わないものが【正格不定法】、伴うものが【変格不定法】と呼ばれる（§88）。

Weiland(1806 文化3)のInf.は基本的には“te”のない不定法である。しかし、動詞活用一覧表ではPart.も並置され、しかも、現在・過去・未来三時制を備えたInf.のうち、なぜか【不定法未来時】の“te”が添えられている(Tegenw. Tijd《現在時》; *hebben* / Verl. Tijd《過去時》; *gehad hebben* / Teok. Tijd《未来時》; *te zullen hebben.* 65頁)。

Maatschappijの*Grammatica*(1822 文政5)もInf.・Part.ともに現在・過去・未来の三時制であるが、未来時の“te”がなくなっている(§151～§155)。一方*Rudimenta*(1849 嘉永2)では、Inf.は*Grammatica*と変わらないが、Part.が＜Bedrijvend＞[能動]と＜Lijdend＞[受動]の2種になっている。これらMaatschappijの二書はともに、動詞活用一覧表においてPart.が並置されているが、Part.はInf.には含まれていない。この点はWeilandも同様である。

ところが、1850年代に入ると、分詞も不定法に加えられるようになる。Brill(1855 安政2)は＜Onbepaalde wijs＞という術語を使わずに、＜Naamwoordelijke vormen des werkwoords＞[動詞の名詞形]と呼ぶが、彼は、これに＜Onbepaalde werkwoord＞（[不定動詞]＝Inf.）のみならず＜Deelwoord＞(＝Part.)をも所属せしめている。が、《不定動詞》

の定義自体はやはり＜Het onbepaalde werkwoord wordt nu eens met, dan zonder het voorzetsel *te* gebruikt.＞(86 頁)——即ち“te”なしで用いるものとしている。

P. Marin(安政4 1857) においても、動詞活用一覧表の最初に位置する＜Infinitif＞の内容は、Présent(Avoir) および Participe présent(Ayant) と Participe passé (Eu)のように、Inf. と Part.の両方である(63 頁)。この書は蘭仏対訳であるが、＜Inf. Prés.＞の和蘭語形“te”を持っていない。

総じて蘭文典の動詞活用一覧表は Inf.と Part.の並置に始まり、その際、Inf.には“te”が附されないのが一般的である。

38) Grammarian in speaking of verbs generally use the word *To* as the indefinite article, and say the verb To have, To be, To do, To love, To walk,&c.(Sedger, 寛政10 1798. 46 頁)

Sedger は Inf.を＜Indefinite Mode＞と呼び、第一を Part.、第二を to-Inf.としている。下の表のように、両者ともに Pres.・Perf.・Past の三時制を持つ。この Perf.と Past は現代文法と逆になっているように見えるが、原本通りである。

	1st Indef.Mode.	2d Indef.Mode.
Present Time.	Having, or possessing	To have, or To posess
Perfect.	Had, or possessed	---------
Past.	Having had, or having possessed	To have had, or To have possessed

39) Sewel(1708) は＜英語動詞の不定法と直説法現在の差は<to>と<I>を付けることによってしか表わせない＞と言っている (27 頁)。

L.Murray(嘉永5 1852) の英文典を蘭訳した Cowan も、動詞の種類を例示する際<to love, beminnen>のように記し、＜To wordt altijd voor de onbepaalde wijs geplaatst en beteekent *te* of *om te*.＞ [to は常に不定法の前に置かれ、te または om te の意味である (43 頁)] と注釈している。

40) A. Engelien, *Leitfaden für den deutschen Sprachunterricht.* Berlin, 1886. 2.Theil. §45. ; J. E. King and C. Cookson, *An introduction to the comparative grammar of Greek and Latin.* Oxford, 1890. 91 頁 ; V. Thomsen, *Geschichte der Sprachwissenschaft bis zum Ausgang des 19. Jahrhunderts.* Halle(Saale), 1927. 55-56 頁等。

41) 江戸幕府旧蔵洋書には、学習者の手によって文法用語が書き込まれた Quackenbos (慶応3 1867) の原書がある。全 120 ページの三分の二位まで学習されているが、残念なことに、ちょうどこの＜Root＞の課から手つかずになっている。しかし、片仮名による書き込みは、当時の文法用語およびその読み方を知る好例なので、参考までにここに挙げておく。

Substantives ｼﾞﾂﾒｲｼ; Articles ｸﾜﾝｼ; Nominative 主ｶｸ; Possessive 領ｶｸ: Objective ﾌﾞﾂﾀｲｶｸ ; Positive ｻﾀﾒ ; Comparative ﾋｶｸ ; Superlative ｻｲｶｲｷｳ ; Transitive ｳﾂﾘｭｷ ; Intransitive [うつり] ｺｶｻﾙ ; Conjugation ﾊｲｺﾞﾌﾘﾌﾞﾝﾊﾞｲ ; Tense ﾄｷ ; Present ｹﾞﾝｻﾞｲ ; Imperfect ﾊﾝｸﾜｺ ; Perfect ｶｺ ; Pluperfect 大ｸﾜｺ ;

First future ﾀｲ一ﾐﾗｲ ; Second future 大(ママ) 二ﾐﾗｲ ; Mood ﾎﾌ ; Indicative ﾁｮｸｾﾂﾎﾌ ; Potential ｷｮｶﾎﾌ ; Subjunctive ﾌｿﾞｸ ; Imperative ｼﾚｲ ; Infinitive ﾌｼﾞｮｳ ; Participle ﾌﾞﾝｼ ; Compound ｸﾐﾀﾃ ; Voice ｼｶﾀ ; Active ｶｹ ; Passive ｳｹｶﾀ ; a/the finite verb ｻﾀﾞﾒ、定 ; the infinitive mood 不定 ; the auxiliary ｼﾞｮｼ ; the principal verb ﾇｼ ; the Progressive verb ｽｽﾐﾕｷ ; condition ﾔｸｿｸ; ; supposition ｶﾘｻﾀﾒ ; root ?

42) 『蘭語学』II、1286-1287 頁。

43) 引用の用語は Van der Pyl (1819(文政2), 63 頁) の注釈にある。Pyl 自身は＜positive＞＜comparative＞＜superlative＞を採るが、当時の＜positive＞を認めない文法家の説に対し、以下のようにコメントしている。

> Grammarians have generally enumerated these three degrees of comparison ; but the first of them has been thought by some writers to be improperly termed a degree of comparison ; as it seems to be nothing more than the simple form of the adjective, and not to imply either comparison or degree. This opinion may be well founded, unless the adjective be supposed to imply comparison or degree by containing a secret or general reference to other things....

この消滅時期は、日本では中野柳圃によって和蘭語研究が本格的に開始された時、即ち19 世紀の到来とともに始まる。馬場佐十郎の『和蘭文学問答』では、＜本詞＞という用語がすでに、名詞の基本形および形容詞の原級としても用いられている。

44) *Grammatica* (Leyden,1822(文政5)) の翻刻版である作州箕作(みつくり)氏藏版の『和蘭文典前編』(天保(1)(8)(4)(2)13) では、＜Dese trappen dragen den naam van den vergrootenden, en den overtreffenden trapp.＞（これら［比較］の階級の名称は、比較級・最上級と言う）［§69］のようになっている。

45) Brill (嘉永(6)1853)が 10 品詞を「変化詞」(名詞・形容詞・代名詞・冠詞・数詞・動詞) と「不変化詞」(副詞・前置詞・接続詞・間投詞) に大別し、前者の基本形をすべて＜grondvorm＞としている(Vraag 7)ことについては**本章注 8** にて述べたが、彼はここで、この＜grondvorm＞という用語を形容詞の「原形」として＜stellend＞と並置し、L.Murray も、1861(文久1)年版の *English Grammar* では、＜positive＞と共に＜the simple word＞という用語を併せて挙げている。

46) 逆に言えば、この前後の時代は当然「原級」を持っているわけで、藤林普山の『和蘭語法解(オランダごほうげ)』(文化(1)(8)(1)(5)12) には、＜附属名言比較三階＞として＜称階・比階・最階＞がある。この訳書の原本は V. J. Peyton の英文典ではないかと考えられるのであるが(附録参照)、それは、少なくとも原級が消滅する 1800 年以前に書かれたものでなければならない。

また、Cowan(「コウハン」)によって蘭訳された L.Murray(「ミュルレイ」) の英文典をその低本とする渋川敬直(よしなお)訳述

『英文鑑』(天保11)は、訳出年代的には原級のない時期に当たるが、Murray の原本（第26版 1822；初版 1795）に三階級があるので、＜添名辞三等＞として＜平等・較等・極等＞を含んでいる。

なお、高野長英には比較法は見当たらないようである。

47) すでに山形閑が、日清戦争が勃発した明治27年版の『斯因頓大文典講義』(上巻)において、＜本書ニ拠レハ「インフニチーブ」ヲ不定法ト譯スルハ穏当ナラズ何トナレハ下文ニモアルゴトク法ニアラサレハナリ然レトモ従来一般ニ不定法ト譯スルヲ以テ今之ヲ特更ニ改メス其通用ノ儘ニス学フ者其意ヲ諒シテ混雑スルコトナキヲ要ス＞と補注している（114頁)。Swinton では Inf.、Part および Gerund が《働詞様ノ言詞》(Verbals) とされているので、彼の説に従えば確かに《法》と訳すわけにはいかなくなるのである。山形の言は更に続く。

> Infinitive ヲ往々法（Mood）ト論ス 然レトモ斯クスル義ヲ分析スレハ不定法ハ充分働詞ナリト云フニ外ナラス然レトモ実際働詞ニアラサルナリ、何トナレハ「インフニチーブ」ハ働詞ノ殊別ナル徴候 即チ決定（Asserting）ノ職掌ヲ缺クモノナレハナリ……
>
> （補）世人ガ Infinitive ヲ以テ往々法トスルモ本文ニ曰フ如ク之ヲ働詞ナリト思惟スルヨリ来リタル者ナリ然レトモ能ク其職掌性質ヲ考フレハ其働詞ナラサルヤ明ナリ抑モ法ナル者ハ働詞特有ノ職掌ナリ然レトモ此不定法トハ働詞ノ職掌ヲ有セスシテ動作或ハ状態ヲ一ノ名トシタルモノニ外ナラス然リ而シテ不定法ハ働詞ノ職掌ハ有セサレトモ実ニ働詞ガ有スル諸特質ノ或ル物ヲ取ルナリ　即チ本文ノ例ニ於ケルカ如ク「良キ書ヲ読ムコトハ」ノ如キハ To read ガ一ノ目的 Book ヲ取リタル者ナリ 然レトモ「良キ書ヲ読ムコト」ノ一句ヲ以テ一名詞トシタルモノナリ　　(115頁)

この、Inf.と Part.が Modus から脱落する原因となった事情を、L.Murray (1861) の次の言によって知ることができる。

> In our definition of the verb, as a part of speech which signifies *to be, to do, or to suffer, &c.* we have included every thing, either expressly or by necessary consequence, that is essential to its nature, and nothing that is not essential to it.
>
> This definition is warranted by the authority of Dr. Lowth, and many other respectable writers on grammar.
>
> There are, however, some grammarians, who consider assertion as the essence of the verb. But, as the participle and the infinitive, if included in it, would prove insuperable objections to their scheme, they have, without hesitation, denied the former a place in the verb, and declared the latter to be merely an abstract noun.
>
> This appears to be going rather too far in support of an hypothesis. It seems

to be incumbent on these grammarians, to reject also the imperative mood. What part of speech would they make the verbs in the following sentence ? "Depart instantly : improve your time : forgive us our sins." will it be said, that the verbs in these phrases are assertions? (71 頁)

即ち、Modus の解釈が＜manner of action＞から ＜manner of assertion＞へと変化したために、＜assertion＞の力――独逸語で言えば＜Aussagekraft＞（叙述力）を持たない Inf.と Part.は動詞とは見做されなくなったというのである。

48) この間＜Infinitive mood＞を認めているのは Adler ただひとりである。これは、独逸語を外国語として学ぶ英国人のために書かれた、英語による独文法書である。すでに見たように、英語は Modus としての Inf.を 1800 年代の終盤まで長く保持し続けており、Adler が独逸語の＜Infinitive mood＞を認めたのは、あるいは英語の影響であろうか。

49) この＜Hauptmodus＞＜Nebenmodus＞の出典は現時点では不明である。平塚が「例言」に挙げた文法家のうち、Heyse, Becker, Gurke のいずれにもこの用語は見当たらない。Schäfer の時制に＜Hauptzeit＞＜Nebenzeit＞があるが、Modus の分類としては存在しない。ただ＜ハイデルベルク＞のみは原典を見出し得ず未見なので、あるいはこれかも知れない。

50) 例えば、Heyse（ハイゼ）第 5 版 1. Band, 300 頁及び 689 頁参照。689 頁では、aussagen の力、即ち叙述力を持たない Inf.と Part.を、Heyse は動詞から派生した名詞として＜Verbalform＞と呼んでいる。しかし、この＜Verbalform＞は彼の Biegung oder Conjugation der Verba のシステムから排除されたわけではなく、次のように位置付けられている（私的に図式化して示す）。

Biegungsformen des Verbums
- Nennformen (Inf. und Part.) .....ohne Kraft der Aussage
- Redeformen (Ind.,Imp. und Conj.) .....mit Kraft der Aussage

51) Karl Heyse の第 5 版序文（天保 9 1838）に拠ると、当時は＜... machte die Sprachwissenschaft überhaupt und die deutsche Grammatik insbesondere so gewaltige Fortschritte,＞[言語学と独逸文法は実に急激な進展を見せた] ため、彼の改訂作業が追いつかなくなったという。改訂に際し、彼は言語の＜lebendige Entwicklung＞[生きた発展の様] をとらえる事に努めた。＜Die Sprache ist nicht ein fertiges, ein für allemal geschlossenes Geisteserzeugniß, sondern eine fortwährende Erzeugung.＞[言語とはすっかり完成した精神の産物ではなく、生成発展するものである] (xviii 頁) や＜Ich habe daher..., die Entstehung der heutigen Laut= und Wortformen aus einem früheren, im Ganzen reineren, organischeren und lückenloseren Sprachstande nachzuweisen.....gesucht.＞[私は、今日の発音と語形の発生を、古い時代の、全体的により純粋で、より有機的で、より緻密な言語の状態から証明しようと試みた] (xvx 頁) 等の箇所に、Karl Heyse が W. von Humboldt に先んじて抱い

た——Steintal はそう言っている——共通の思想と J. Grimm から受けた大きな影響とを見て取ることができる。V. Thomsen は、新旧文法の相違点は「言語の生命」と「歴史的発展」という観念の有無にあると言い（*Geschichte der Sprachwissenschaft bis zum Ausgang des 19.Jahrhunnderts.* Halle. 1927. 43-44 頁）、W. Vesper は、Organismus は 19 世紀言語学の中心概念であると述べている（*Deutsche Schulgrammatik im 19. Jahrhundert.* Tübingen 1980. 100 頁）。

この Heyse 第 5 版序文については、更に**第二章序節**（141 頁）を参照されたい。

52) H. Bauer, *Vollständige Grammatik der neuhochdeutschen Sprache.* 3.Band. Berlin. 1830. § 505, 22-23 頁。

53) Heyse 第 5 版、1.Band、292-293 頁。

54) *Einleitung in der Studium der indogermanischen Sprache.* Leipzig, 1919. 26 頁及び 65 頁。また T. Benfey, *Geschichte der Sprachwissenschaft.* München. 1868. 483 頁。Bopp の＜Wurzel＞に関する考察は、*Vergleichende Grammatik des Sanskrit, Zend, Griechischen, Lateinischen, Litthauischen, Altslawischen, Gothischen und Deutschen.* Berlin. 1833. ; rpt. : Routledge, London and New York. 1999.Vol.10. § 105—111.にある。

55) V. Thomsen, *Geschichte der Sprachwissenschaft bis zum Ausgang des 19.Jahrhunderts.* Halle(Saale) 1927. 4-5 頁。

Heyse 第 5 版では未だ不明確であった＜Wurzel＞の概念規定も、言語の系統という点で言語学に多大な影響を与えた Darwin の進化論(安政6 1859)を挟んで、この Heyse 第 5 版から半世紀を経た Engelien(明治19 1886) になると、次のような明確な定義がなされるようになっている。

> Wurzel heißt derjenige Teil eines Wortes, welcher einer ganzen Familie von Wörtern zu Grunde liegt(§ 77), z.B. band ist die Wurzel von : Band, Bande, unbändig, bändigen, Binde, Bindfaden, Buchbinder, Bund, bündig, Bündel, Bündnis, bunt. ——Die abgelauteten Formen, z.B. bind(e), (ge)bund(en) auch die Wurzelformen selbst, nennt man Stämme, weil aus ihnen viele Wörter kommen. (2.Teil, § 45)
>
> ＜Wurzel＞とは、ある単語家族全体の根本をなすところの語の部分のことである。例えば"band"は Band… 以下の単語の＜Wurzel＞である。—— bind・(ge)bund(en)のような母音交替形と＜Wurzel＞自身とが ＜Stamm＞と呼ばれる。何故なら＜Stamm＞から多くの単語が派生するからである。

56) Delbrück, *Einleitung in der Studium der indogermanischen Sprache.* Leipzig, 1919. 10 頁。